

---

# ユメミルツルギ

LOREX

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ユメミルツルギ

### 【Nコード】

N3596N

### 【作者名】

LOREX

### 【あらすじ】

鬼に襲われ、貧困していた小さな小さな村に住む少女アイリス。彼女の両親は殺され、そのカタキの鬼を討つべく「ソルジャー」になるという願望を抱いていた。そんな彼女が連れてこられた”ギルド・リアン”。そこではソルジャーたちが集結し依頼をこなしていた。彼女に巻き起こる数々の出来事とは……？剣と魔法、2つの煌めきは人々に何をもたらすのか。悪夢が織り成すファンタジー！

\*\*\*\*\*

\*\*\*\*\*

**登場人物一覧** 【8/25 更新】（前書き）

・各メインキャラの画像を掲載（8/25）

本作の登場人物紹介です。

登場人物一覧 【8 / 25 更新】

ギルド・リアン

アイリス Iris 《?》

> i 2 4 3 5 5 — 1 4 2 3 <

イラスト : 【黒峰】様

歳 : 15

武器 : 夢想丸むそつまる (魔刀)

魔術 : ホウキ飛び

ランク : B

備考 : 赤い髪のお下げ / 丸い団栗目

初登場 : 第1章 - 1話

《ソルジャーになることを夢見る少女。両親を鬼に殺され、カタキを討つべく強くなるためにソルジャーを目指す。孤児みなしことなり、ウルお婆さんのもとで日常を送っていた。純粹で聞き分けの良い性格。期待の新人として名を上げられ、ハードルが高まり力は空回りしてしまうが……。》

〈夢想丸〉

《通称『悪夢の剣』。斬りつけた者を永遠の悪夢へ陥れるという悪魔の能力が刻み込まれた伝説の剣。刃部が紫色をしていて怪しげに光る。そして剣自体がその使い手を選び、やがて細胞ともリンクするようにならなる。》

ウエルト・アーリッチ      W e i t      U r l i c h  
《?》

> i 2 9 6 2 4 — 1 4 2 3 <

歳：19

武器：タイランズブレード（大剣）

魔術：アースクエイク / 腕力開化 / 透視能力 / 樹琳開封

ランク：S

備考：小柄 / 貧乳 / 銀髪のショートヘア

初登場：第1章 - 1話

《ソルジャーのギルドである、“リアン”の総長。小柄な見た目で、一見女の子らしい外見。しかしその身に似合わず、自分の背丈を越える大きさの大剣を背負っているソルジャー。年下扱いされるのがキライで、胸が小さいことを気にしている。他の上層部の3人とはかつての戦友。威厳有り、実績有りの尊敬される身。》

（タイランズブレード）

《ウエルトの背丈を遥かに越える大きさを持つ大剣。彼女自身の魔術でそれを片腕で操れるのだが、魔力が切れると持ち上げる事も出来なくなるほど重い。その重圧とした剣の破壊力は想像を絶する。》

コロナ・エミリア      C o r o n a      E m i l i a

?  
《

》

> i 2 5 8 1 9 — 1 4 2 3 <  
イラスト : 理兔 様

歳 : 1 8

武器 : 豪炎剣・水龍刀 (双剣) ・インペリアス (聖剣)

魔術 : 浮遊 , 魔力開放 他

ランク : A

備考 : 猫好き , 天然 , 二刀流

初登場 : 第 1 章 - 1 話

《ウエルトの同期で、仕事より猫と戯れるのが大好きな天然少女。どうしても猫を見ると構いたくなり、集合が掛かってもすぐに集まらなくて、ウエルトも手を焼いている。ウエルトに同期のくせに威厳が足りない、子供っぽいと言われている。しかし、ケン力を止めたり落ち込む人を慰めたりとしっかりした一面もある。》

↳ 豪炎剣・水龍刀

《炎と水の力を持つ双剣。2本の別々の剣なのだが、合わさった力は絶大。》

アフロディテ・パフィー Aphrodite Paffi

《?》

> i 2 9 6 2 2 — 1 4 2 3 <

歳 : 1 9

武器 : 村雨 (長剣)  
ムラサメ

魔術 : 波剣 他

ランク：S

備考：武家の娘、名前で呼ぶと怒る

初登場：第1章 - 2話

《長剣を腰に下げ、総長よりも威厳たつぷりの、武士心溢れる女性。男勝りの口調で、冷静な性格。同期のメンバーに”アフロ”と呼ばれてからかわれており、その度に怒っている。決してアフロヘアではなく、シュツと下ろしたストレートヘアだ。武士家の娘で、それあつてか常に武士心は忘れない。》

～村雨～

《細身で長い剣。振り回すような戦い方は出来なく、むしろ遠距離からの波剣をメインに使用して使う。魔力は秘められていなく厳選された鋼鉄でできている。》

エレノール・ソーニヤ Eleanor Sonja

《?》

> i 2 9 6 2 3 — 1 4 2 3 <

歳：19歳

武器：ロングレイピア（鋭剣）

魔術：神速、ハヤブサ斬り、他

ランク：S

備考：喫煙者、大らかな性格

初登場：第1章 - 3話

《ウェルトやコロナ、アフロディテと肩を並べるギルド・リアンの上層部の一人。何事もハイハイと頷くだけ頷いて聞いてないような、

大らかな性格。”エレナ”の愛称で親しまれていて、後輩からの信頼も厚い。剣も扱えるが、実は魔術や回避能力の方が優れている。ホウキで飛ぶスピードはハヤブサを超越する。》

↳ロングレイピア↳

《銀でできた長く鋭い剣。斬るといふよりは突き刺すように使う。移動速度を速めるために、その重さは極めて軽い。》

マイリー・シーワ・フレデリカ M h a i r i S i w a F  
r e d e r i c a 《?》

> i 2 9 8 4 8 — 1 4 2 3 <

歳：17

武器：カレントソード（電熱帯剣）

魔術：嗅覚／聴覚を最大活性化 超高温熱風

ランク：A

備考：マジメ、メガネ装備

初登場：第1章 - 4話

《遠征に行っていた、ギルド・リアンの構成員の一人。『』ですわ」が口癖。子供っぽくアイリスをからかうリーンに呆れている。ソルジャー暦は5年で、今は総長のウェルトの補佐役を任されている。剣技は優秀で、その武器には電熱装置が埋め込まれている。》

↳カレントソード↳

《電熱装置を埋め込んであり、魔力と織り交ざって超高温にまでなる剣。唯一機械仕掛けで、剣の帯びる温度は溶岩並みである。岩などを溶かすことも容易い。》



リーン・ラディカ Lean Radhika

《?》

> i 2 9 8 4 7 — 1 4 2 3 <

歳：16

武器：エフグリン（ブーメラン）

魔術：カナシバリ、冷風波

ランク：B

備考：猫嫌い、からかい好き

初登場：第1章 - 4話

《マイリーと共に遠征に行っていたリアンの構成員。気に入った人物は、とにかく手離さない。抱きつき癖があり、男女構わず親しい人にはハグをするほど人間関係の幅は広い。その過去には大きな痛みと傷跡があった。》

〜エフグリン〜

《三日月型のブーメラン。剣ではなく投げて使う。マイリーと対照的で、冷風をその身に集めて爆破させる。その衝撃で持ち主の元へちゃんと戻ってくる。》

ネイラ・ティラミス Neira Tiramisu

《?》

> i 2 9 8 4 9 — 1 4 2 3 <

歳：15

武器：蛇骨鋭刀だこつえいとう（毒刀）

魔術：治癒魔術、周囲探知魔術、炎球発射、召喚術（蟲など） 他

ランク：C

備考：口数が少ない、魔術豊富

初登場：第1章 - 8話

《旅商人の護衛依頼のため、遠征へ出向いていたリアンの構成員の一人。性格は至って物静かで、静寂を好む。リアンの中では影が薄く、だが依頼を一番こなす縁の下の力持ち的存在である。エレロワとは正反対だが、とても仲が良い。治癒、探知においてギルドの中でも最高峰の能力を持つ。それゆえ任務でも成功率が一番高い。アイリスにだけは態度を変えるが…?》

↳ 蛇骨鋭刀

《その名の通り、蛇のように曲がりくねった刃を持つ剣。常に毒が染み込んであり、それは斬ると同時に細胞を侵食していく強力な毒だ。》

a E l e r o v a B e s s i e M a r i n a 《?》

バーレンシア・エレロワ・ベッシー・マリナ Vallinssi

> i 2 9 8 5 0 — 1 4 2 3 <

歳：12

武器：ムーンダガー（短剣）

魔術：ムーンアサルト、月舞 他

ランク：D

備考：最年少、しつかり者

初登場：第1章 - 8話

《まだ12歳の元気な少女。ネイラと共に護衛依頼のために遠征に行っていた。歳若いが、剣も魔法もこなせる立派なソルジャーである。ウエルトのことを凄く尊敬していて、いつかは彼女のようにになりたいと願っている。愛称は”エレロワ”。名前が長くて自分でも面倒くさがっている。まだソルジャーになってそんなに経ってなく、アイリスとはほぼ同期のような接し方をする。》

くムーンダガーく

《小さく軽々しい短剣。一見ナイフのように見えるが、実は斬りつけて使う他に別の使い方がある。》

#### その他登場人物

ウイード・パーフィ Weed Pafi

《パーフィ家の近くでアイリスたちの前に突如現れた謎の少年。意地っ張りでキツイ口調の彼だが、夢想丸と何か関係が……？》

リミレット・クライヴ Remilet Crive

《ウエルトラ上層部と何か関係のある人物。どんな秘密があるのか、詳細は彼女らしか知らない。》

ミライ Mirai

《物語の中でギルドが保護する事になった少女。ネコ魔物の姿に変身することができる。》

リウニオン Reunion

《かつて世界を救った英雄と崇められる存在。有名な薬師でもあった。》

**登場人物一覧** 【8/25 更新】（後書き）

お気に召したキャラクターが出来たら光栄です。

## 第1話 見習いソルジャー・アイリス

ねえ、どうして空は青いの？

それが幼きころのアイリスの口癖だった。空は青いのに、どうして大地は青い色をしていないのか。草花や地面が空と異なる色をしているのは、どうしてなのか。ずっと彼女は疑問に思っていた。そんなの、星の原理だろうと簡単に言い切れてしまいが、アイリスはそれが嫌だった。

「ただいまあ」

アイリスは、殺された両親のカタキを討つ為に”ソルジャー”になることを目指していた。彼女は今年で15歳になる。両親はアイリスが6つの時に殺された。殺したのはこの村を毎月襲う”鬼”だ。月が回るたびに鬼は腹を空かせて村を訪れ、村人を襲って去っていく。

ソルジャーになれば、鬼を追い払うことが出来るかもしれない。アイリスはそう思って、ソルジャーになるための修行に励む純粋な女の子だ。

「今日もお疲れさん、アイリス」

「うん。お婆ちゃんも畑仕事、ご苦労様」

孤児みなしことなったアイリスは、村の知り合いのウル婆さんに引き取られた。それから彼女は、そこで日々を送っていた。

「もうすぐ、鬼がやってくる季節だねえ……」

鬼のやってくる周期はだいたい4ヶ月ごと。しかしそれは鬼の気まぐれで早まりも遅くもなる。いつ襲われるか分からないため、この村には家ごとに避難経路が掘られている。

「私、早くソルジャーにならないとね」

「そうじゃけど、そう簡単になれるモンじゃないんだろう？」

ソルジャーになるとは言うが、アイリスは、滝に向かって木刀を振り回すことを繰り返し練習するだけだった。ちなみに、ソルジャーというのは『魔剣士』のこと。魔剣士とは、“魔術を操る剣士”のこと。

今のままでは、ただチャンバラが強いだけの少女だ。

「はあっ……、はあっ」

次の日も、木刀を持って滝を切っていた。いつやって来るかも知れない”鬼”を退治するため。

鬼は若い血が好きらしいため、次に狙ってくるのはアイリスかもしれない。そう感じているため、こんなに必死に特訓しているということもある。そして、もう馴染み深き人を失わないため。

「今日も日が暮れるまでやるのかい、それ」

叔父のランマさんは分かってくれない。村の若い男たちは頼りに出来ないことをアイリスは知っていた。それだから彼女は自ら立ち上がり、ソルジャーになろうと努力を始めた。

「だって私がやらなきゃ、村は鬼に襲われ続けちゃうじゃないですかっ！」

我流で剣技を考え、重く重く流れ続ける滝を切ることで、負担は腕に来る。そのため、重い剣だって操れるようになると考えていた。彼女に剣技を教える者は、この村にいない。

\*\*\*\*\*

\*\*\*\*\*

その猫は高くて降りられない様だ。

「ほら、大丈夫だよ」

コロナがそう声を掛けても、猫は「にゃ〜」と怯えた声で鳴くだけ。猫は5メートルくらいの高さの上から降りられなくなってしまい、身動きが出来ないまま震えていた。猫好きのコロナにそれを見逃すことなど不可能だった。集合時間に間に合わなくなるが、それよりも猫を優先する。

「受け止めてあげるよ、ほら……」

両手をその方へ挙げて、安全な着地点を作ってあげるも猫は怯えたまま。ここは人通りも多い大通りだから、魔術を使って派手に騒ぎを起こすわけにもいかない。

(どうしようかなあ、このまま猫ちゃんに関わっていたら集合時間に遅れちゃうし)

ずっと見上げているから、だんだん首も痛くなってくる。仕方な



いので、コロナは近くにあった木に登って助けることにした。道に植えられていた、まだ若い木だ。

登りきると、ちょうど猫の高さに届くほどだった。コロナは手を伸ばして、猫の脇下を支えて持ち上げた。

「もう大丈夫だよ、今降ろしてあげるね？」

猫を抱えたまま木を降りようとするが、案の定それはかなり困難な事だった。木の上ならそんなに見られることもないと判断したコロナは、その位置から飛び上がり浮遊する魔術を使った。そのまま塀を超え、集合場所まで飛ぶことにした。

「つたく！ 何をしていた！」

「だ、だって猫ちゃんがあゝ……。そんなに怒らないでよう」

またウェルトに怒られた。同期のくせに、威厳が無いあのポケットとし過ぎだの言われているコロナ。”リアン”の総長であるウェルトは、コロナを始めとするソルジャーたちのギルドを束ねる人だ。

頭脳明晰、容姿端麗と言われている、ソルジャーたちの憧れの存在。

「とにかく良い人材は見つかったのか？」

「あゝ、収穫ゼロだよ」

「今は猫の手も借りたい状態なのに」

そのウェルトの言葉に、コロナは抱えていた猫の手を掴んで、ツンツンと触れさせた。

「……ケンカ売ってんのか？ コロナ」  
「ひうっ！ な、なんでもないよお」

今は、ギルドのメンバーも遠征中で本部にいる面子メンツが少ない。上層部のこの2人で、優秀な人材を求めてこの街にやってきたのだったが、そう簡単にいくわけも無く。

「仕方ない、コロナは本部へ戻れ。私が他を当たる」

そう言つて、ウエルトはその大剣を背負ったまま飛び上がった。あの大剣は15キログラムほどあり、普通のソルジャーでもまず扱えないほど。

コロナの手からピョンと跳ねて、猫は草原の方へ走って行ってしまった。

（ギルドに戻ろうかな。エレナちゃんの手料理食べたいし！）

ウエルトが飛んでいった方向は、多くの木々が生い茂る森林。大きな滝も流れている。

「こんなところではソルジャー候補など見つからないな……」

そう呟いていたその時だ、滝の近くで女の子が何か棒切れをもつて剣技のようなものを練習しているではないか。「あの子だ、私が探していた人材……！」そう言い、その方へ急降下した。

ドボ                      ンッ！！

「わあっ!?!」

アイリスは驚き、持っていた木刀を反射的に構え始めた。もしか

して、鬼が現れたんじゃないかと、ジッと目を凝らして水しぶきが止むのを待つ。

「わ、私としたことが……。着地失敗なんて、疲れてるのかな。うん、そうだ。そうだな」

「……………」

滝つぼに落ちてきたのは、見たことも無い大きな剣を下げた女の子だった。銀髪でショートカットの、少し背が低く胸も小さい女の子。

「き、キミ！ 滝を切って修行をしていたよな!？」

「えっ、え……………？ あなたは誰？」

「1つ喉鳴らしを「ゴホン!」と入れ、

「私の名はウエルト・アーリッチ。ソルジャー専門のギルド・リアンの総長である」

ソルジャー。

その言葉に、早速アイリスの心は惹かれた。

「ソルジャー！ あなたはソルジャーなんですねっ!？」

「うわっ！ ま、まあそうだが」

するといきなり、アイリスはその場で頭を下げて、

「私、ソルジャーになりたいんですっ!」

「おお、これは好都合だな。私もキミのような人材を求めていたところなんだよ、はっはっは」

アイリスを見て、その女の子は高らかに笑って見せた。見た目は

女の子っぽいのだが口調は少し男勝りのような感じだ。

「キミ、名前は？」

「あ、アイリスと申しますっ！」

「アイリスか。よし、一度その剣技を見せてくれないか？ ソルジャーに相応しい身体をしているかどうか見てやるぞ」

「は、はいっ！」

アイリスの人生が急に変わった瞬間である。これを俗に運命の転機と言うのだろう。

その剣技は全てが我流。滝に向かって木刀を構え、いつもようにそれを斬り付ける。「やあっ！」と掛け声もたまに出して、重い滝の流れに負けること無い剣捌さばき。

「ほお、それは我流なのかい？」

「あ、はい！ 教わる人もいないですし……」

この村は田舎中の田舎だ。ソルジャーのウワサも偶然テレビで耳にした程度。

「素晴らしい、その剣技……。我流なのにキレがあり、敵にスキを与えない。気に入った！」

ウェルトは絶賛したようだ。アイリスの剣技は、確かに素早く軽快だった。

「リアンへ来ないか？ キミのような見習いがたくさんいるぞ。」

「わ、私が…見習いつ！？ あ、ありがとうございますっ！」

「ふふ純粹そうだな。うちのメンバーも喜ぶぞあ、『期待の新人到来！』ってな！」



## 第1話 見習いソルジャー・アイリス（後書き）

書くのが楽しみな新作でございます。

やっぱり僕はこういう系しか書けないのでしょうか、またファンタジー作品となりました。始めは恋愛小説を書こうと思ったんですが

（汗）

そんなに奥深く描いていくつもりもありませんので、難しいのが苦手な方もそうでない方も気軽に楽しめたらな、と思います。

## 第2話 名刀・夢想丸

「んじゃ、しつかり捕まってるよ」

ソルジャーは飛行手段に”ホウキ”を使うようだ。ウエルトはその上にバランス良く立って乗り、ホウキはフワツと宙に舞い上がった。アイリスはその後ろに跨またがって乗り、ウエルトの足にしがみ付く。

「たっ、高いっつ…！」

「これくらいで音を上げてはまだまだぞ〜？ ほらっ、飛ばすぞーっ！」

飛行するホウキは、さらに加速を始めて空気が切れていく音が耳をくすぐる。村からはあつという間に離れていき、ホウキはリアンの本部へと向かっていた。ウエルトのその小柄な身体で、本当にソルジャーなのか疑う気持ちも少しはあったアイリスだったが、その背負っている大剣がその気持ちを打ち破る。

村を離れてしばらく飛んで、森林を抜けると何か大きな建物を発見。

（あれがリアン…？ すごい……）

建物は横に長く、中央には立派な時計台も付いている。

「さ、着いたぞ。降りるからしつかり捕まってるよ」

その建物の入り口前にホウキは着陸した。アイリスはまだギルドに入るとは決めてなかった。ただ彼女はソルジャーになりたいだけで、ギルドで働くつもりは無い。

ギルドの建物の中へ足を進ませる。すると、高い吹き抜けのある

大きな部屋に出た。

「さて…、ここがリアン本部だ。もう何人が帰還しているはずなんだが」

すると奥の方から一人、長い髪の女の人が出てきた。

「あつ、ウエルトちゃんおかえりい」

「つたく…」期待の新人”を連れてきたつてのに、お前は何を食つてんだ。コロナ」

「えへへ…エレナちゃんのホットケーキだよっ」

期待の新人、アイリスはそう呼ばれたようだ。コロナと呼ばれたその女の子は、片手にホットケーキの乗ったお皿、もう片手にフォークを持ってやってきた。この人もソルジャーなのか、腕くらいの長さの剣を2本背中に下げている。

「へえ、キミが”期待の新人”さんね？」

「あつ、アイリスって言います！」

「よろしく」 私はコロナ・エミリアねっ」

アイリスには、この2人のように苗字が無い。ド田舎のあの村には、苗字で区別するほど人が多くないからだ。コロナというこの女の子は、背は同じくらいでどちらかと言うとカワイイ系の少女だ。ウエルトと仲が良いようで、ウエルトちゃんなんて呼んでいた。

「他にも何人がここにいるんだがなあ…。まだコロナとエレナ意外は帰ってないのか？」

「アツフーちゃんも帰ってるよお」

「おお、なら紹介しないとな。アイリス、案内しよう。ついておい



で

ウエルトの後をついて部屋を後にする。

その廊下も、何かたくさん鎧が飾ってあったり、磨かれた大剣が置かれていたりして、いかにもソルジャーだけのギルドという感じだ。

しばらく歩いてみると、1つだけ異質の雰囲気を漂わせる扉の前にウエルトが止まった。

「入るぞー」

ぎいっつという妙音を立て、その扉は両開きに開いた。するとその部屋の中に、胡坐あぐらをかいて座る女性がいるのが見えた。

「ウエルトか。ん、その子は？」

「期待の新人を連れてきたんだよ。アイリス、こいつは私の同僚である”アフロ”だ。」

アフロ…、しかしその女性の髪形はまっすぐ下ろしてありアフロヘアには程遠い気がしていた。

「だーっ！ アフロって言うなっのー！」

「はっはっは、まあそう怒るなって」

「ったく…、私はアフロディテ・パーフィだ。よろしくな、新米さん」

なるほど、それでアフロと呼ばれているのか。その差し出された手に、アイリスはそっと手を重ねて握手をした。

しかし見れば見るほど厳肅な部屋のような。畳で出来ている床に、『心剣闘魂』と書かれた掛け軸が飾られている。そしてその下に、

立派な刀のようなものが置かれている。

「お？ あの刀が気になるか？」

ウエルトはその刀を手に取り、アイリスに手渡した。ずしつと重たく、木刀のようにブンブン振り回せないほどの重さがある。綺麗な鞘さやにしまわれたその刀は、紫色に光る不思議な鉄の色をしている。

「それは、”名刀・夢想丸”という刀だ」  
「夢想丸……」

鞘から少しだけその刃を出してみると、部屋に差し込む日光で切き先が光る。

「そうだ、少しアフロに相手をしてもらおうといい。少しこの子の実力を見てやってくれ、アフロ」

「……次アフロって呼んだらその戯け口開かぬようにしてやるぞ？」

「新人ちゃんの前でそうカツカすんなって、……ア・フ・ロ」

「きつ、貴様ッ！ 覚悟しろっ、たたっ斬ってやる！」

下げていた長剣を瞬時に構え、逃げるウエルトを追い掛け回すアフロデイト。「あはは……」とアイリスも苦笑い。

その茶番もしばらく続き、やがて終結。

「……覚えておけ、次アフロなどと呼んだら」

「うっ、怖い怖いっ！ そ、それよりアイリスの腕を見てやってくれよ」

「そうだな……放つたらかしにしてみましたな、スマン」

そして彼女は押入れのような倉から、2本の案山子かかしを持ってきてその部屋に立たせた。アイリスは刀を鞘から抜き、その光る刃を案山子に向けて集中した。滝を切るように、その重々しい刀を操るのはそう困難なことでは無さそうだ。

「やあッ！」

我流で会得したその剣技は、認めるものも認めないものも無い。なんせ我流なのだから。アイリスは滝を切る修行のようにその並べ立てられた案山子を的確に、且つ軽快に切り裂いていく。それを見ている2人は時折、「おお……」という声を漏らし関心を抱く。

次々と細かく案山子は切り刻まれていく。刀を振り下ろす度に乱れていく髪を直さずに、案山子が崩れ倒れるまでアイリスはそれを切り刻んで見せた。

「……な？ 期待の新人の呼び名はダテじゃないだろ？」

「その呼び名、誰が付けたんだ？」

「私だが、何か？」

「……………」

息も乱れ、アイリスの実力をとくと見た2人はそつと近づき、

「その剣術は、誰かに教わったのかい？」

「あ、いえ……。村に教えられる人はいないので」

「我流でこれほどか……。これは確かに”期待の新人”と言わざるを得ないな。」

「良かったな、アイリス。アフロ……ディテに認められるって結構す

ごいぞ？」

「あ、ありがとうございます！」

(さりげなくアフロって言いそうになつてたような…)  
ぎこちなく鞘に刀をしまい、アイリスはそれをしばらく眺めていた。ここにいれば本当にソルジャーになれるのか、と少しだけ希望が芽生え始めていた。

「そろそろ日も暮れてきたな」

「んで、どうするんだ？ この子はやっぱり勧誘するの？」

「それは、アイリス次第さ。 どうする？ 君の実力なら、きつと立派なソルジャーになれるだろう。長年やってる私たちにはなんとなく分かる。」

長年…。

そんなに歳をとっているようには見えないし、まだ少女レベルの見た目だが、とアイリスは少し思った。

しかし、アイリスはまだ迷っていた。こんなに早く、本当に憧れのソルジャーになれてしまうのだろうか。そう考えていたのだった。

「……」

アイリスは黙ったまま俯いてしまった。それと並行するように夕日もだんだんと沈んでいく。

そんな彼女に、ウエルトがポンッと肩に手を置いた。

「アイリス、キミはどうしてソルジャーになりたい？」

その質問に少しだけ暖かみのある感情を感じ、アイリスは自分の目的を話すことにした。

鬼から村を守るため。それと殺された両親のカタキを討つため。そのために彼女はソルジャーを目指した。強くなりたい、大切なものを守りたい。そんな意思でいっぱいだった。

アイリスは、ウエルトとアフロディテにその事をゆっくりと話した。時々刀を握る手に力が込ったりもした。彼女の心の傷は完全には癒えていなかったのだった。6歳の時、目の前で自分をかばって殺された両親の事を思い出した。

「なるほどなあ…。鬼ねえ…」

「聞いたことがある、人型の身体と豪腕を持った妖怪の一種だ。」

その鬼は全ての根源なんだ。アイリスはその鬼が憎かった。こうしている間にも、鬼は村を襲っているかもしれない。もうこれ以上、親しみ深い人たちを失いたくなかったのだった。

「一晩、時間を下さい。私、考えて見ます…。」

「そうだな、さすがにすぐには決められないか。わかった、

とりあえず今日は村に帰そう。」

「はい、ありがとうございます…。」

滝のところまで送ってもらった。もうすっかり日も暮れ、辺りは薄暗くなってきた。

「じゃあ、明日ここでまた落ち合おう」

「はい。あ、あの…これ」

アイリスの持っていた名刀・夢想丸。彼女はそれをウエルトに返そうとした。

「それはキミが持っているといい。キミにならそれを扱えるだろう」「えっ…、で、でも！」

何か言おうとしたが、その前にウエルトはホウキで宙に飛び上がってしまっていた。夢想丸を持ったまま、アイリスは仕方なく、ウエルトに手を振って見送った。

「お婆ちゃん、ただいま」

「おや、お帰り。今日は少し遅かったねえ」

家に戻ると、ウルお婆さんは縁側でお茶を飲んでいた。手渡された夢想丸は、服の中に隠して自分の部屋に向かった。

「……はあ、これどうしようかなあ」

すっかり手に馴染んでしまった。寝転がりながら、左手でそれを掲げてみるとなんだか親しみが湧いて来てしまった。アイリスは一度目を瞑って、再び目を開ける。これは夢なんかじゃない、この刀は実際に手の中にある。

「アイリスやー、ご飯にするよ」

「あつ、はいー！」

§ §

「ちよつと避難経路を掃除してくるよ」  
「うん」

アイリスは再び部屋に戻った。やはりあの刀はちゃんとある。

夢想丸、夢のような名前だ。それに不思議な鉄の色をしている。何度も鞘から出したりしまったり、その度に鳴る金属の擦れる音が耳をくすぐってくる。本当に鋭い刃を持っていて、さっきの案山子もすんなり斬れてしまう程。ただ滝を木刀で斬る真似をしていただけの、我流のその剣技が認められた。そのことに少しだけ不安感を抱いていた。

こんなことで、本当にソルジャーになれるのだろうか。ただ剣を持っていただけでは、簡単になれるものじゃないと彼女は知っていた。

「ごーん…、ごーん…！」

あの鐘は…。

今一番聞きたくないものだった。鐘が鳴ったということは、

『隠れるッッ！！ 鬼だ、鬼がやってきたぞッッ！！』

男性の大きな声が村全体に広がる。こんな中途半端な時にやってくるなんて。

アイリスは夢想丸を持ちながら、急いで和室に降り、避難経路に向かおうとしていた。

「おばあちゃんっ！」

まだ避難経路に掃除に行っているようだ。運が良かった、ウルお婆さんはなんとか助かるだろう。

次の瞬間、自分のいる建物が鈍い音を立てるのが聞こえた。

『があああああ……ッ!』

鬼の声だ、本当に鬼は村にやってきたようだ。しかも、今襲っているのはアイリスのいる建物。

全身が震えだした、何かが身体の中から波を打って広がっていく。

「……夢想丸」

鬼の奇妙な低い声は、どんどん近づいてくる。

あと少し…、

あと少し……、

あと少し……。その姿は、どんどん近づいて来ていた。おぞましい、赤い肌をした化け物。

「コムスメだあ……、ひえっひえ、美味ソウだ」

「!」

遂に、家の壁を突き破ってアイリスの前に出てきてしまった。奇妙な笑みを浮かべ、”鬼”はゆっくりこちらに近づいてくる。一歩、また一歩…。

両親のカタキ、その言葉がアイリスの脳裏を過ぎ<sup>よ</sup>った。こんなところで死んではダメだ。大切なものを守るため、

「私は…、逃げないッ!」

鞘から勢いよく刀を抜き、我流の構えをする。右腕にその刀、左腕は肩後に開き鬼に向かって睨みを利かせる。「ひえっひえ」とま



た何度も笑う鬼に、その刀を向けてアイリスは震えを自力で止めて、睨んで鬼の進む足を止めた。

「ひえっひえ…、がああああ　　ッ！！」

「…そこだっ！」

滝を斬る修行のように…、殴られそうになった頭を瞬時に下げて、その腹部に勢い良く斬りかかった。すると鬼は変な呻き声を上げ、左手で斬りつけられた腹部を押さえる。

また右手で殴りかかろうとしてきた。これはさっきの案山子を斬る時と同じ、鋭く軽快に　　！

ザンツ…！　刀を振った感触は、何か切り裂かれる生々しい感触。しかしアイリスはそれにも怯まず、そのまま刀を押し込んだ。

「ぎゃあああッ！！」

「お父さんと、お母さんのカタキだあっ！」

そのまま勢いよく刀を引き抜き、とどめの居合い斬りを放つ。それが鬼の行動を完全に止めた。その場に倒れて鬼は動かなくなったのだ。その瞬間、アイリスの中に何か達成感が溢れたのだった。自分の手で、鬼を倒した。

「はあ…はあ…、や、やった…！」

「な、何の騒ぎだい、これは？」

すると、避難経路を掃除するために経路にいたお婆さんが戻ってきた。私の目の前に倒れる鬼を見て、「どひゃーっ！」と典型的に驚き、それをお婆さんは村長に報告しに行った。

鬼の血は濁った赤い色。少し夢想丸にこびり付いてしまったが、

それを拭いて鞘に戻す。

アイリスはまた震えだした。これは武者震いだった、嬉しさと、驚きと、自分に芽生えた達成感。それがアイリスの身体中を駆け巡っていた。

「だっ、大丈夫かいつ！ アイリスちゃん！」

「……、わ、私……っ！」

思わず泣き出してしまったのだった。どうしたらいいかよく分からない感情の中、零れたのは涙だけだった。

村を守り、両親のカタキも討った。そんな大きな達成感を、彼女は初めて感じた。

## § §

### 火送りの儀式。

悪しき魂も、聖なる炎に焼かれて天へ昇ればいつか報われるという言い伝えのあるお祭りだ。村の中心で、死んだ鬼を十字に縛りつけて皆が黙祷を続ける。

これから、たいまつに火を灯して鬼の足元に着火するのだ。この炎は、聖なる火打石から生まれた清き炎。これで鬼に食われた罪も無い人々も、共に天へ向かえる。

「突然襲った鬼を、救ったのはアイリスというこの少女。どこぞから持ってきたその鋭き刃で、鬼を撃退したのだ。」

村長さんのその言葉に、村人たちが「オオーッ！」という歓声を

上げる。アイリスは夢想丸を腰に下げ、たいまつを両手に手渡された。これで鬼を焼いてあげるんだ。

「救世主、アイリスに火送りをしてもらう。さあ、鬼に聖なる炎を。」

「は、はい。」

少し怖かった、まだ鬼が生きてるんじゃないかと。火を付けて目を覚まし、再び暴れだしたらどうしよう。そんなことを考えながら、ゆっくりゆっくり徐々に十字に縛り付けられた鬼に歩み寄っていく。持っているたいまつはパチパチと燃える音を何度も奏でている。

そして、アイリスは勢いで鬼に火を灯した。一瞬で全身に火が回り、その煙が天へ昇っていく。

「おお…、鬼の魂が天へ昇っていく。アイリスよ、よくやったぞ。」

「あ、ありがとうございます…。」

何度も拍手が起こった。救世主だとか、村の英雄だとか大げさな名前を付けられてそのお祭りの一夜を楽しく過ごした。全てはこの夢想丸のおかげ。両親のカタキを討つことも、村人を守ることも出来た。アイリスはコソツと夢想丸に向かって「ありがとうございます」と呟いた。

「私、立派なソルジャーになるね!」

「ああ、気をつけて行くんだよ。」

一晩眠り、遂に決心を固めた。アイリスは昨日の出来事もあつてか、リアンに身を置くことにしたのだった。この力を、色んな人のために使いたい。その思いを夢想丸に込めて、ソルジャーになる。そう決意した。

「辛くなつたらいつでも帰つておいで。いつでも待ってるぞ」

「うん！ ……じゃ、じゃあねっ！」

「気をつけるんじゃぞっ」

日が昇つてまもなく、滝のところでウェルトと落ち合う約束をしていた。急いでアイリスはその場へ走った。

その場所へ向かうと、すでにウェルトはその場で待っていた。滝の岩場に腰を下ろしていた。

「ふふ、聞いたぞ？ 何でもあの鬼を退治したとか…」

「えっ！ ど、どうして知ってるんですか？」

「この村の活気…。何事だと思つてここを通つた男性に問うたんだ。そしたら村の少女が鬼を退治したと言うではないか！ やはり昨日、その夢想丸を渡して正解だったな」

そして昨日のように「はっはっは」とおじさんっぽく笑い、アイリスの元へジャンプして近づいた。この刀よりも遥かに重そうな大剣を背負っているのに、こんなに飛べるものなのだろうか。

「で、どうする？ リアンに来るかい？」

「は、はい！ よろしく願ひします！」

「うん、キミならきつと、いや絶対、立派なソルジャーになれ

るような気がするぞ。 よーしっ、んじゃ早速向かうか!」

こうしてアイリスは鬼を退治し、晴れてソルジャーのギルド《リアン》に身を置く事になった。

果たしてこれから巻き起こるギルドの生活は、一体どうなるのだろうか？

## 第2話 名刀・夢想丸（後書き）

（ 。（ ）

ロアグスです。

第2話でした、いかがでしたでしょうか。1話に比べて長丁場になってしまいましたが、ここまでが一応のプロローグとなります。では、次話をお楽しみに。

### 第3話 天才肌の実力

ウエルトさんに連れられて、私アイリスはリアンの本部へやってきた。自分の腰には、授かった夢想丸を下げている。

「さあ、キミは今日から正真のうちのメンバーだ。気を引き締めてな！」

「は、はいっ！」

今日からこのギルドに身を置くこととなった私は、幾度と無く緊張していた。どんな人たちがここで働いているのか、不安が募っていた。そして私は本当に”ソルジャー”になれるのか。その不安もあつた。

ウエルトさんの後に付き、リアンの本部の建物へ足を踏み入る。

「…つたく、まだ寝てるようだな。」

そう言つと、ウエルトさんは重そうな剣を壁に立てかけてその部屋を出て行った。

今の時刻は午前8時30分。この人たちは起きるのがちよつとだけ遅いのかな…？ 私はどちらかと言つと早起きな方で、よくお婆ちゃんと朝早く畑仕事をしていた。今頃もおばあちゃんは鍛<sup>くわ</sup>持つて頑張つてるかな。ここでの生活に慣れたら時々様子を見に行こう。

しばらくすると、その大きな部屋に一人の女性が入ってきた。

「ふわあ…、眠いなあ」

と、タバコをくわえながらこちらに向かってきた。なんだか大人

つぼくて綺麗な人だ…。寝起きて跳ねた髪の毛に何かしらの色気を感じる。

「おっ、キミが新人ちゃんだよな？」

「は、はい！ アイリスつて言います…。お、お見知りおきを」

「あはは、そんなに畏かしこまらなくていいよ。アイリスだな、いい名前じゃん」

少しのタバコの匂い、それとその人の付けている香水の匂いが混じった香りが辺りを漂った。決して悪臭ではないが、いい匂いとも言えない匂いだ。

「あたしはエレノール・ソーニヤだ。みんなは”エレナ”つて呼ぶからアイリスもそう呼んでいいからな」

「えっと…、エレナさん？ あなたもやっぱりソルジャーなんですか…？」

そう質問すると、エレナさんはビシツと部屋の壁を指差した。あ、あそこに掛けられてる剣がこの人の…。

「あれがあたしの剣だ。つまり、あたしもソルジャーつてことさ。」

なんだかノリが面白い人だ。話をしていて楽しい。

そんな会話をしていると、ウエルトさんが部屋に戻ってきた。

「おう、ウエルト。おはよおさん」

「ったく…、何が”おはよおさん”だ。起床時間は7時だと言っただろう」

「へいへい、すみません」

「コロナとアフロも起きてこないし…、夜更かしするからそういっ



事になるんだ」

ウエルトさんも少し面白そうな人という印象だったが、その彼女にツッコませるほど他の人はだらしが無いのか…。ウエルトさんがしっかりしてるように見えてしまう。と、こんなことを言うと怒られちゃうかな…。

「あ、あの…。ここには何人くらいソルジャーがいるんですか？」

「そうだな、全員で8人といったところだ。そのうちの4人は遠征に行っている。残った4人が、私とこのエレナ、それにコロナとアフロ。まあそのうち起きてくるだろう」

「……あ、アフロ…。」

昨日も会ったが、アフロディテさんはそんなヘアスタイルしてないんだけどな…。まあ名前が名前だけあってからかわれてるのかもしれない。

「あゝ、コロナは夜遅くまで猫と遊んでたぞ？」

「そ、そうか…。あいつは仕事よりも猫を優先するやつだからな。」

コロナさんにも昨日会った。昨日はホットケーキを食べていたけど、あの人は猫が好きなのか…。私も猫は好きだから、もしかしたら仲良くなれるかな。なんだかフンワリしてそうな人だったし。

「ま、残った上層部4人で華やかに迎えてやろうよ。」期待の新人

「さん万歳！つてな」

「そうだな、このアイリスは我流の剣技だけで鬼を倒したほどの実力者だからな…」

「ええっ！ お、鬼って言えばあらゆる村を襲ってる魔物じゃんか…。」

鬼は私たちの村だけを襲っていたわけじゃなかったのか…。他にも鬼に襲われていた村があったんだ。でもその脅威も去ったんだ、心配事は無い。

「アイリス、少しエレナと模擬戦を試してみたらどうだ」

「えっ！ 模擬戦っ！？ そ、そんな、私はまだ…」

私はただ我流の剣技で鬼を倒せただけで…、見たところこのエレナさんもかなり強そうだし。

「あたしで良ければ相手するよ」

「うう…、私、まだソルジャーの基礎すら知らないのに…」

「攻撃するのはアイリスだけだ。エレナはそれを上手く受け流していればいい。」

「よしっ、徐々に肩慣らしも兼ねて行きますかねっ」

そう言つと、エレナさんはさっきの壁に掛けてあつた剣を手に取つてこちらに向けた。私も成り行きで仕方なく腰に下げていた夢想丸を、鞘から出して構える。切っ先に集中して、徐々にエレナさんに近づいてみる。

「アイリス、エレナのタバコを斬り落とせばキミの勝ちだ。

始めっ！」

ウエルトさんのその合図で、私はとつさに刀をそのタバコの方へ突き進めた。しかしその軌道は簡単に外されて、私の身体は刀の重さでよろめく。

「今の、早かつたなあ。アイリスはスピード系だな？ ウエルト」

「その通りだ。気をつけるよ？ 使っているのは夢想丸だからな？」  
「ええっ！ そ、それを早く言えよ！ ウェルト！ …おっと！」

その会話の最中にスキを見てタバコの先を斬りに掛かるも、背中を反って避けられてしまう。この人、すごく身軽な動きをする。そのため刀を簡単に弾かれたり、すぐに避けられたりしてしまう。

「すごいなあ、夢想丸を使ってるなんて…。」  
「はあっ…、はあっ…。」

私の息はもうすでに上がっていた。その場に一度刀を下ろし、一度体勢を立て直す。

「おっ、まだやるか？ その意気だよ、アイリス」  
「は、はい！」

続いて斬りかかろうとしても、やはりそれは簡単に退けられる。どうしたらいいのかな…。

「…！ そ、そうだ…。」  
「ん…？」

私はエレナさんの腕を狙った。当然それは剣で簡単に受け流されるが、それで上手く彼女のふところに出ることが出来た。

「…っ！？」  
「そこです、…やあっ！」

内側から外へ斬り裂いた。エレナさんのくわえていたタバコの火の付いた部分だけが、斬り落とすことが出来た…！ ポトツと火種

が落ち、それを3人で見つめながら沈黙……。

「…エレナ、油断したな。アイリスの勝ちだ。」

「あたしの負けだよ、受け流しを利用するなんてね…。しかもあの瞬時に思いつくなんて、大したモンだよ」

「あ、ありがとうございます…。あ、あの…タバコの火、消えちゃって」

すると、エレナさんはポケットからライターを取り出して、残ったタバコに再度火を着けた。

「アイリス、無駄の無いその動き。見事だったぞ」

「ありがとうございます…。」

「エレナ、お前は天井に止まっていた虫に気が向いていただろ」

「なっ、何で分かったんだ？」

「分かるさ、何年一緒に修行してきたと思ってる。」

そ、そうだったんだ…。その虫に気が散っていて私の攻撃を避けられなかったっていう事が。

私はその乱れたツインテールの髪を手で直して、夢想丸を鞘に戻した。

「うっ、あたし悔しいよおウエルト」

そう言ってエレナさんはウエルトさんにしがみ付いた。

「お前がこの模擬戦で負けるのは初めてだな…。ネイラもエレロワも、お前に勝てずに泣いてたし」

「やっぱりアイリスは天才肌なんだな。この身を持って理解したよ

…」

天才肌…。なんだか照れるな、その呼び名。もしかして、本当にソルジャーになれるかも…！

「朝から何の騒ぎだ…？」

「ん、アフ」

ボコツ！

突然部屋に現れたアフロディテさんが、「アフロ」と言い掛けた（？）ウエルトさんが叩かれた。

「痛あ…、叩くこと無いだろう？」

「アフロと言いつけたら？ パーフィと呼べとあれ程…」

「…パーフィ？ あー、確かそんな名前だったっけか…。」

アフロディテ・パーフィさんだ、確か。私もパーフィさんって呼んだほうがいいかな…。

「あー、ゴホン！ え、エレナはコロナを起こしてきてくれ。私はアイリスの歓迎会の準備をする」

「了解」と

「ええっ…、か、歓迎会？」

「そつだ、キミに華やかで有意義な時をここで送ってもらいたいのだな。その思いも込めてだ。」

§ §

その依頼の内容は、「行方不明になった猫を探して欲しい」との

事。その内容に、早速受けることに立候補したのは、

「はいっ、私がやるよっ！」

「…ん、そうだな。適任なのはお前だからな。」

コロナさんの周りには、数匹の猫が集まっている。やっぱり猫が大好きなんだね…。他の3人には無い、天然さがあつて可愛い人だなあ。

「アイリス、キミもコロナについて行くといい。」

「えっ、私が依頼を…？」

「ああ。この依頼はあまりソルジャーっぽくないが、依頼をこなす事に慣れて欲しいからな。コロナもそれでいいな？」

「うんっ、喜んでっっ」

コロナさんもやはりソルジャーのようだ。その背中に2本の剣を下げている。赤い剣と青い剣のようだけど、2本とも扱うのかな。だとしたらなんだかカッコイイ…。

「よし、では向かってくれ。」

「うん！ 行こ、アイちゃん！」

「あっ、アイちゃん…っ？」

とりあえず、歓迎会が終わった後すぐに依頼を受けることになった。大丈夫かな…私。

### 第3話 天才肌の実力（後書き）

（ ; ） ヽ

ロアグスです、こんにちわこんばんわ。

本編に入ったと言うことで、アイリス視点になりました。ご了承下さい。

簡単にまとめると、リアンに来て模擬戦を行い、猫搜索の依頼を受けた。ということですね。

では、また次話で。

## 第4話 センパイ

コロナさんと共に、ギリアル地方のノウスギリアルという街にやって来た。ここの住民からの依頼だったからだ。その依頼内容は、行方不明になった猫の搜索。

そこは大きな時計台の下。この街は大きな建物がたくさんあって、田舎育ちの私には少し居づらい空間でもあった。

「ん、どうしたの〜？」

「あ、えっと…、高い建物が多いなあって…」

私の住んでいたあの村は、超が付くほどの田舎。当然こんな建物も無いし、こんなに広くない。

「おや、貴女方ございますか？ 依頼を受けてくださったのは」

すると、眩しいほど光るアクセサリをたくさん身に付けた貴婦人のような人が声を掛けてきた。この人が依頼主の人かな…。なんだか高貴そうで、いかにもマダムという感じ。

「あつ、はい！ ギルド・リアンの、コロナ・エミリアです！」

「では早速搜索に当たってもらおうかしら。この子なんざますけど…。名前はアリスちゃんと言いますわ」

一枚の写真を渡された。そこには、三つ編みに毛を結ばれた可愛いらしい猫が写っている。

その写真を頼りに、私たちは街を練り歩くことにした。



「ん〜、いないねえ」

しばらく歩き回って、聞き込みもしながら搜索するも、手がかりはこの写真だけ。

「猫一匹見ないですね〜」

「そうだねえ…。猫ちゃんの匂いはするんだけどなあ」

くんくんと辺りを嗅ぎ回るコロナさん。匂いなんて分かるのかな…、なんだかコロナさん自身も猫みたいだ。私と同じツインテールの髪型で、何より仕草が可愛い。本当に自由気ままな猫のようだ。

「あつ！ コロナさん、あそこ！」

私が見たのは、写真の猫とは少し違うが数匹の猫。道路を越えたところにある家の窓から見えた。

「わあ〜っ、カワイイなあ…えへへ」

「あつ！ コロナさん危ないですよっ？」

そう言っただけでコロナさんは道路を横断してその家のほうへ歩いていった。車も通る道路だから危ないよ…！

すると次の瞬間、遠くから一台の車が走ってきた。私はとっさにコロナさんの腕を掴んでグッと引いた。

「わああつ!?!」

きぎい

ッ！！

豪快に急ブレーキを掛け、車は2回転ほどして道路の脇に止まった。コロナさんもびっくりして腰を抜かしている。

「危ねえだろっ！ 気をつけろい！ ったく…」

「す、すみませえん…。」

車は再びその軌道を戻し、走り去っていった。あ、危なかった…。私が腕を引いてなかったらコロナさん、完全に轢かれてたよ…。

「だ、大丈夫ですかっ？」

「うん…、ご、ゴメンね。心配掛けちゃった…」

その大きな音に驚いたのか、窓に見えていた猫たちも姿を消していた。あの猫たちが何か知ってたかもしれないのに…、惜しい情報源を逃したなあ。

その後、再び歩き始めると、コロナさんが呟いた。

「うう…私、頼りないセンパイだよね…。」

「え…っ？」

あ、あれ…？ コロナさんが俯いちゃった…。

「ウエルトちゃんたちみたいに…、しっかりしてないから、私。せっかく新しい新米さんが入ってきてくれたのに、こんなセンパイじゃダメだよね…。」

「そ、そんなことないですっ！」

「…アイちゃん」

「確かに他の3人とは雰囲気も何か違いますけど…、ダメだなんて

「言わないで下さい」

わかるんだ、コロナさんはきつとリアンの中を明るくしてくれるムードメーカーなんだ。まだ会って2日だけど、それくらいは私にだって分かる。きつとみんなの希望の光源、そんな存在なんだ。ダメなんかじゃない、とてもいいセンパイのはずなんだ。

「……ありがとう、アイちゃん。元気出たかも」

「はいっ！ さ、猫の捜索に戻りましょ？」

「うん、そうだね！」

良かった、元に戻った。

§ §

ギルド・リアン本部

ジリリリリリ…ジリリリリ、リ……

「はい、こちらリアンです」

2人が出掛けていった後、しばらくして一本の電話があった。エレナは出る気がないようなので、ウェルトが電話に答えた。

「……なんだって！？ マイリーが……」

「ん？ ……（何事だ？）」「

「 ああ、分かった。リーン、お前はそこで待機しろ。私が向かう！」

そう言っつて、ウエルトは荒々しく電話を切った。急いで部屋から大剣・タイランズブレードを持ち出して外に出向いた。

「ウエルト？ マイリーがどうしたって〜？」

その問いに、エレナに背を向けながら、

「…戦乱に巻き込まれたみたいなんだ。その相手にリーンが反撃してしまい、敵兵と間違われたようで」

「な、何か大変そうだなあ。あんた一人で平気か？ なんならあたしも」

「心配はいらん、エレナはコロナたちの帰りを待つてくれ。」

ホウキに魔力を込め、ウエルトはブワツと飛び上がった。その重々しい大剣を背に掛け、ホウキの上に立ち乗って飛び去っていった。

「……あたし、何しようかな。アフロは何してんだろ」

扉から入る風が、なんとも虚しかった。

\*\*\*\*\*

耳を引つかく、鋭い風の切れ音が立ち込める。飛ぶ速度はかなり加速した。10分くらいでリーンたちの隠れている小屋に辿り着けるだろう。

バランス良くホウキの上に立ち乗っているが、向かい風もなんのその。もうソルジャー暦は10年ほどになる。ウエルトはまだ9歳のころに真正正銘のソルジャーになった”天才肌”と呼ばれていた少女だった。その小柄な身の丈に細い腕で、身長を遥かに超えたタイルズブレードを自在に操る、若き最強のソルジャーという異名もあつた。

「……最強、か。」

あれから10年経った今でも、後輩に慕われ尊敬されるソルジャーである。ウエルトはそんな才能から、リアンの総長を任されることになったのだった。戦友であつたエレナ、コロナ、アフロディテと共にギルドを支えていくも、ソルジャー志願者は日に日に減っていき、ソルジャーを引退する者もあり、今の人数まで減ってしまった。アイリスを含めると9人。

期待の新人が入った。才能も十分、あとは魔術を覚えさえしてくれば凄腕のソルジャーに…。

「！」

山の中に、1つだけポツンと建つ小屋を発見した。そこにリーンたちがいるはずだと、ウエルトはその小屋へ飛び降りた。

「リーン、マイリー！ 無事かッ！」

「総長！」

その小屋には、足に包帯を巻き横たわるマイリーとリーンの姿だけがあった。ウェルトはすかさず2人に近づき、ホウキを床にそっと置く。

「マイリー、聞こえるか」

「は、はい……。聞こえますわ、総長……」

息絶え絶えだ。傷が痛むのか、何度も足の包帯の部分を押さえる仕草をするマイリー。遠征中にまさか戦乱に追われるとは、ウェルトも想定していなかった。見たところ傷口の形は、鋭角なもので斬りつけられたような跡。相手もソルジャーだと確信した。

「本部へ帰還するぞ。敵もそこまで深追いはして来ないはずだ」

「ま、まだ戦えますわ!」

「ダメだ、その傷で戦っても勝機は無いだろう。リーン、支度するんだ」

「はい!」

ここは身を引くのが得策だろう。無駄な戦闘は命取りだと考えたウェルトは、2人を引き連れて帰還することにした。

「出来ました、総長!」

「よし、では帰還するぞ」

その時だった、小屋の屋根を引き剥がす鈍い音が頭上からした。

「……っ! くそ、ここを気付かれたか……」

「そ、総長!」

「お前たちは隙を見て脱出しろ! ここは私がやる」

そう言い置き、ウエルトは大剣を片腕で持ち上げる。それを音のする方へ向け、敵が姿を現すのを待つ。

「……………」

ガガガッ…………ぎいいい バコツ！

屋根が剥がされた。見えた敵の頭数は4人。

「今だ！ リーン、脱出しろ！」

§ §

日もそろそろ暮れてくるころだ。私たちは街の中を練り歩きまわり、遂に目的の猫を見つけたのだった。

「まあ、良かったぞますわ〜」

「良かったあ…日が暮れる前に見つかって」

貴婦人のような依頼主さんは、笑顔たっぷりで猫を頬にすり寄せる。猫は少し嫌そうな表情をしてるけど…、気にしないほうがいいよね。

「では、失礼しますね」

そう言い、私たちは本部へ戻ることにした。私の初依頼…、上手くできたかな。

「ん〜っ…、風が気持ちいいねえ」

コロナさんの跨るまたがホウキに、私も真似て跨って乗っている。驚くほどフワツとした乗り心地で、ちっとも痛くない。

「ね〜、アイちゃん〜？」

「は、はい？ どうかされましたか…？」

「アイちゃんは、魔術って使えるの？」

魔術…、それがどんなものなのかも分からない。

「…使えないです」

「そっか…。ねえ、私が教えてあげてもいいよ？ 魔術！」

「えっ…？ コロナさんが？」

「うん！ 私の固有魔術は、コレ！」

そう言つと、コロナさんはホウキの上で立ち上がった。

「こ、コロナさんっ!？」

「それえ〜っ！」

いきなりそこから飛び降り、次の瞬間、彼女の身体はその場に浮かんでいた。フワフワと髪の毛と衣服が風に舞う。

「えへへ、驚いた？ これが私の魔術だよお」

「う、浮いてる…っ！」

私だけが乗るコロナさんのホウキは、変わらずに飛行を続けている。ホウキに乗らずに空を飛んでいる、信じられない光景を目の前



にしているんだ。ツインテールの髪がユラユラと曲線を描きながら揺れている。

「詳しくは後で教えるけど、ソルジャーはみんな固有の魔術を持っているんだよ？」

「そ、そうなんですか…。」

「大丈夫！ アイちゃんにもきつと何かあるよ！ 何か分かるんだ、長年の勘でね」

長年の勘…。ウエルトさんも同じようなことを言ってたなあ。上層部の4人はみんな凄腕そうなソルジャーばかりだ。きつとコロナさんもかなりの実力者。こんな浮遊する魔術も使えるんだし…。

その後もコロナさんは、浮遊したまま本部まで戻っていった。

## リアン本部

「ただいま… …… って!!」

ギルドの本部へ戻ってくると、エレナさんが何かを磨り潰していた。な、なんだろう…:すごい匂い。

「もう〜エレナちゃんっ！ どうして誰もいないのに治癒薬なんて作ってるの？」

「いや、リーンとマイリーが帰ってきてんだ。多少の傷を負ってね」「ふえ…?」

帰ってきてる、ってことは…:このメンバーの人かな。このすい

い匂いの正体は治癒薬のようだ。エレナさんは意外と繊細で器用な手つきをして、それを磨り潰してる。

「ほい出来た。コロナ、マイリーの所に届けてくれ。部屋に居るだろっからさ」

「う、うん。…うわぁこの匂いキライだよぉ」

そう言っただけでコロナさんは、薬の入った器をなるべく鼻から遠ざけながら運んでいった。

「ふいっ…、あたしもこの匂いだけはダメなんだよなぁ」

「お、お疲れ様、です」

「おっ、ありがとうアイリスっ！」

「あの…帰ってきた人って…？」

そう言っただけで、エレナさんは疲れたようにドカッとソファに腰を下ろした。

「あゝ、キミの”センパイ”たちさ　そうかあいつらもセンパイになったのか…、感心し難いなぁ」

「センパイ…」

「一応ソルジャーなんだけどさ、もしかしたらアイリスの方が強いかもなぁ」

「ええっ…、そ、そんな…私はっ」

「あっはっは、可愛いな　昔のコロナみたいだな」

それにしても、センパイか…。私は新米だから、ここに居る人たちはみんなセンパイになるんだよね。

「あ、あの…。アフロディテさんは？」

「アフロか？ あいつなら」

ビュンッ！！

「おおっとー！」

いきなり何かが飛んできて、それをエレナさんは剣で受け止めた。状況が把握できなくて、私はただ啞然としていた。

「……貴様、またその呼び名を」

「ったく、だからっていきなり波剣を使うかね。アフロちゃん？」

「だーっ！ 貴様のは一番悪質なんだ！一番バカにしてるように聞こえるんだ！ ええいそこに立て、二度と口が利かぬようにしてくれるッー！」

「……よくもまあそんな長いセリフを……。お疲れさん」

「きつ、貴様あ……」

「はははは、冗談冗談 ほら、アイリスも見てるわけだし、そんな怖い顔しなさんなって」

び、びっくりした……。アフロディテさん、本気で怒ってるもんなあ。エレナさんは楽しそうだったけど。

「あ、アフロディテさん……？」

「……なあアイリス？ 1つ相談なのだが、私のことは苗字で呼んでくれないか？」

た、確か……。アフロディテ・パーフィさん、だったよね。

「え、えっと……パーフィさん？」

「どうした？」

「え、えつと…今のつて…」

凄い風が巻き起こったのだけは覚えてる。それがエレナさん目掛けて飛んできたんだ。

「ああ、私の魔術だ。」

「や、やつぱり…」

「ん？ 波剣つてやつぱ魔術だったのか」

「……貴様は私と何年一緒にいる？ とにかく、次あの呼び名で呼んだら」

「わかってるよ、パーフィ」

ホントに楽しそうだ、エレナさん。実はパーフィさんも少しはこんな空気が楽しかったり…。昔から一緒にいるっぽいもんなあ。

「あゝ、おっかねえの。」

「でも、楽しそうじゃないですか。2人とも」

「へへ…そう見える？ アフロ…パーフィとは10年前くらいからの戦友でさ。」

「せ、戦友…」

つまり…一緒に戦った仲間、ということだよな。

## 第4話 センパイ（後書き）

（「。ロ。」）

ロアグスです、どうも。。

次々とキャラが出てきますね、混乱しなければいいんですけど…。

## 第5話 新入りアイリス大歓迎！

センパイに挨拶しに、その部屋へ向かった私はその途中でコロナさんに再び会った。

「アイちゃん、どこ行くの？」

「えっと…せ、センパイに挨拶を…」

「あゝ、リンちゃんとマイリーちゃんね？ その部屋に居るよ」

親切にも部屋を教えてもらい、そつとその部屋の扉をノックする。

「開いてますよ」

「し、失礼します…」

その扉を引き開けると、一人はベッドに横たわり、もう一人はその横で先程の治癒薬をぐるぐる混ぜていた。

「ん、キミは…？」

「え、えっと…新入りのアイリスと言います、そ、その…何卒お見知りおきを…」

「あつ、コロナさんが言ってた子だね！ へえゝ、中々可愛いのが来たねえ」

「リン、まずは自己紹介ですね。わたくしはマイリー・シーワ・フレデリカと申しますわ。」

ベッドで横たわっている人がマイリーさん。語尾に癖のある人で、しっかりしてそうだ。

じゃあこっちの人がリンさんかな。

「あぁっ、先に自己紹介するなんてするいぞお、マイリー……」

「貴女が”可愛いのが来たねえ”とか何とか言ってるからですわよ？ ほら、自己紹介なさい」

「むう……あたしはリーン・ラディカ。よろしくね、アイリス」  
「はい、よろしくお願ひします！」

そつと一礼して、再び顔を上げる。すると次の瞬間、リーンさんの顔がすぐ近くに。ぎゅっと肩を掴まれた。

「……後輩、かぁ。えへへ」

「ちょ、ちよつと……？」

「えいつ！」

リーンさんがパチンと指を鳴らすと、私の身体が身動き1つ取れなくなつた。

「か、身体が動かな」

「さあて、ちよつと確認ね？」

むぎゅ……っ！ 一瞬、何をされたのか思考回路が停止した状態に陥つた。

「ん、あたしの勝ちっつ！」

「……はぁ。ごめんなさいねアイリスさん、その子ちよつと変わつてて」

マイリーさんの言葉でなんとなく思考が回ってきて、何をされたのか分かつた。リーンさんの行動に、すごく恥ずかしくなつてきて……、

「なっ、何するんですかあっ…!?!」

「えへへ、サイズの”B”かな? “C”のあたしの勝ちってこと」

「…リーン、少しはセンパイらしくしたらどうですか? アイリスさんも呆然としてますわよ?」

と、またリーンさんが指を鳴らすと身体が再び動くようになった。これも魔術なのかな…、使い方が使い方だけだ。

「えへへ…、さて次はこっちの方も…」

「いつ、嫌ですっつ!」

私は猛ダツシユでその部屋から飛び出していった。いきなりあんなことされるなんて…、想定外もいいところだよ……。

向かった場所はエレナさんたちがいる中央室。

「お、どうだった?」

「……っ、疲れちゃいました…」

エレナさんは相変わらずタバコをくわえながら、不明瞭な声で笑っていた。

コロナさんもソファに座って猫たちを撫で回していた。

「あはは、リーンちゃんでしょ? あの子、気に入った子は手放さないタイプだからねえ」

「そうだな、アイリスは早速気に入られたか?」

「うう…」

「…っつかまえたっつ」

「わあっ!?!?」



急に背後から勢いよく抱きしめられた。やっぱりその行動主はリーンさん。

「えへへ、逃がさないぞお？ やつと出来たカワイイ後輩ちゃんだもんね」

「あはは…、が、頑張つてアイちゃん！」

「な、何をですかあ〜っ！」

リーンさんの腕が私を締め付けてくる。ま、またあんなことされちゃうのか…、それともそれ以上の。考えただけで、別の意味で恐怖だ。

すると、今度は私の足首にフワフワとした感触が。そっちの方に視線を送ると、

「にゃ〜…ごろごろ」

「っっ！」

その姿をリーンさんも確認したみたいで、とっさに私から離れた。足首に顔を擦り寄せていたのは、コロナさんが構っていた猫のようだ。

「あはは、ミーコがアイちゃんになついたね」

「ね、猫〜っっ！」

「えっ、り、リーンさんっ？」

バーツとリーンさんは部屋を飛び出していった。もしかして猫が嫌いなのかな…？ そしてこの猫は私になついてくれたようだ。

「ミーコ？ アイちゃんのこと気に入ったの〜？」

コロナさんがその猫に笑いながら問うと、心なしか「みゃ〜」と

答えたように聞こえた。私も猫は好きな方だ。

「み、ミーコ…ちゃん？」

「うん、アイちゃんになついたらみたいだよっ」

「……か、カワイイ…っ」

いや、大好きだ。その小さな身体を抱き上げてみた。驚くほど軽くて全然嫌がらない。本当になつてくれたみたいだ。おかげで（リンさんも逃げて行ったし…）。

まあ仲良くしてくれるなら嬉しいんだけど、ね。

§ §

成り行きで何故かコロナさんと模擬戦を行うことになった。監督はエレナさんとリンさん。

「ちょっと待て、コロナ」

と、コロナさんが剣を抜いた後すぐにエレナさんがそれを止める。

「何で止めるの？ エレナちゃん」

「アイリスが勝つためのポイントはどつするんだ？」

「え？ ん…、じゃあ私のスカートに傷ついたらアイちゃんの勝ち！」

「す、スカートにつ？ 脚に当たったら危ないですよ…？」

「大丈夫っ！ 私、負けないもんっ！」

「………新米相手に本気出すなよ？ コロナ」

とにかくコロナさんは、私が魔術を習得するための前置きとしてこの模擬戦をすることを提案した。とにかく、2本の剣を使うコロナさんがどれほどの実力者なのか、私も知りたかったし。一石二鳥だ。

「…行きますッ！」

「うん！」

夢想丸を右手に持ち、一気に彼女のふところへ入り込もうとした。2本の剣でそれを食い止められるが、その瞬間身を引き、足元を狙った。

「おっと！」

両手の剣を利用して、彼女の身体は浮かび上がった。夢想丸はそのまま片方の剣に当たり、キンツという音を立てた。

「うゝ、アイちゃん結構強いよぉ」

「ほらコロナ！ よそ見るな！」

隙を見て私は斬りかかろうとした。しかしそれも左手の剣に防がれてしまう。どうしてこつちを見てなかったのに防げたんだろう…？ 私は一度身を引いて態勢を立て直し、一度大きく息を吸い込んだ。

「へえゝ、アイリスって強いんだなあ　ますます気に入った！」

「頑張れゝっ！」

と、リンさんが手をわきわき動かしてこちらを見ている。…っ  
と、集中を切らしちゃダメだ。どうやってら攻撃を当てられるか…  
それを見極めなくちゃ。

「…アイちゃん、中々やるね。甘く見てたよ…」  
「まだまだです！」

そっだ、この力を利用すれば

「…っ！？」

ガンツ！！

私はコロナさんの右の剣を蹴った。するとそれはコロナさんの手から離れ、そこに隙が出来た。

「蹴り飛ばした…？ す、すごい…！」

「やあっ！」

夢想丸を突き刺すように前へ押し出した。するとそれはコロナさんのスカート裾ギリギリを射抜いたのだった。

脚力には自信があった。なんせ毎日村を15周走ってたから。

「……………！」

「わっ、アイリスが勝ったっっ！」

「あ、アイちゃん……………」

へたつとコロナさんはその場に腰を下ろしてしまった。持っていたもう一方の剣が床に倒れる。

「コロナ、油断したな？ 結構本気だっただろ」

「……………」

「こ、コロナさん…？」

「うわあああ〜んっ！！ うう〜……………っく、え〜ん……………」

コロナさんが泣き出してしまった…！ それに心配したのか、猫たちがコロナさんに群がる。

「コロナさんっ！？ あ、あの…」

「大丈夫だ、アイリス。」

「で、でも…！」

「コロナは負けず嫌いなところがあってな…、模擬戦とはいえ負けるとそうなっちゃうんだよ。」

「アイリスっつ センパイのあたしが祝ってやるぞっつ」

「わあっ！ ちょ、ちよっとリーンさんっ…！」

またリーンさんにぎゅっと抱きしめられる。こ、これはもう慣れるしかないかな…。コロナさんも宥めなきゃだし…、でも抱きつかれてるおかげで動けなかったり。

「うえっくん…、エレナちゃん」

「お、よしよし、泣くなよコロナ。リーンがアイリスのセンパイだったら、お前は先輩だぞ？」

「でもお…」

大先輩…、そのコロナさんを泣かせてしまった。後輩としてそこは空気を読むべきだったかな……。

第5話 新入りアイリス大歓迎！（後書き）

（ ）

どうも、ロアグスです。。

今回はそんなに進展なし、ですね。だんだんとアイリスが先輩後輩  
関係に慣れて行く、そんな過程回でした

## 第6話 満月の見下ろす夜に

「はあっ…、はあ…」

敵はかなりの強敵だった。こんな優秀な剣使い達を偵察班に当てるなんて、戦乱はかなり手数が少ないようだ。ウエルトは少しだけ身体に傷を負ってしまった。

大剣を操る際に生じるわずかな隙を狙ってくる、凄腕の敵を4人も相手にしていたからだ。結局その敵も打ち破ったのだが、残されたダメージは軽くは無い。

「…き、聞こえるか、私だ。直ちに迎えに来てくれないか、エレナ」

本部からは大分離れているが、エレナのスピードなら5分もあればここへ来られる。とりあえずウエルトは木陰に身を潜める事にした。追っ手が現れるかもしれない。

倒した4人のソルジャーたちは、共通して黒い宝玉を埋め込んだ剣を持っていた。そしてそれに斬りつけられる度に、酷く脱力してしまう。そのせいもあってなのか、大分苦戦してしまった。

「うっ…」

傷が痛む。止血はしておいたが、それでも痛みは癒えていない。何度も電流のように痛みが全身に走る。タイランズブレードを地面に寝かせ、ウエルトは木に身を倒した。

「……っ！…だ、誰だ！」

「ほう、この俺の気配に気付くとは…流石だな。」

突然、鋭い眼光を感じ取ったウェルトは反射的に立ち上がる。タ  
イルンズブレードを持ち上げようとするが、傷の痛みでよろけてし  
まう。

その瞬間、眼光の主がいきなり前に現れて大剣を蹴り飛ばした。  
重いその剣は5メートルほど飛ばされてしまう。

「答える。あの剣はどこだ　？」

「…！ 何のことを言っている…？」

「酔夢の地獄へ誘いし魔剣…。こう言えばわかるか」

「…！！」

斬った者をほぼ永久的に悪夢に陥れる、殺すより残酷な剣。あの  
剣のことが　。

「さあ、答える。10秒だけ待ってやる…」

「ふん……。その10秒間、お前の身体が持つならな！」

何度も斬りつけられるその男の肉体は、鈍い音を立てて倒れた。

「助かったぞ、エレナ…。」

「へへ、あたしのスピードはハヤブサにも負けないからな」

§ §

エレナさんが急に飛び出していった。そして私はと言つと……、

「むう〜っ……」



「フーツ!! シャーッ!」

右にリーンさん、左に猫のミーコちゃん。互いを睨み合いながら私を囲んでいた。キッチンでお皿を洗っているコロナさんも苦笑いでこっちを見守っていた。

「あっち行けーっ、ネコー!」

リーンさんがそう叫ぶとミーコちゃんはまた「フーツ!!」と威嚇し、これじゃ…融いたちごっこ状態だ。もうこれが何度続いているか…。

「お前にはコロナさんがいるだろー! その上アイリスまで取るなんてズルいんだぞー!」

「フシャーッ!!」

「あ、あの…そろそろ離して下さいよお」

と言っても…双方は睨み合いをやめず、また威嚇し合う。

「もう…、リーンちゃんもミーコもそれくらいに…。アイちゃんも疲れてるんだからさ」

「う…、コロナさんが言うなら…。」

「ミィ…」

しかしそれも、コロナさんの優しい一喝で収まった。やっぱり大先輩の威厳は無いようであるのかも…。

「…アイちゃんは私のだもん〜 ぎゅ〜っ」

「ああっ!? こ、コロナさん、ズル〜い!」

「フニヤッ!? ンニヤッ!!」

……前言撤回。いきなりキッチンの方から飛び出してきて、容赦なく飛び込んできた。

結局、2人と1匹に密着されてどうしたらいいか分からない状態。

「……お前たちは……。つたく、アイリスも抵抗したらどうだ？」

すると、アフロさ パーフィさんが部屋に来ていた。私たちの光景を見て呆然としてるようだ。恥ずかしいな……。

「で、でも……」

「コロナ、リーン！ いい加減離れてやれ、まだ馴染めてないアイリスにとってそれは拷問に等しいぞ」

「ええっ！ 拷問って……」

パーフィさんの鋭い言葉に、2人と1匹はそっと私から離れた。

「そろそろエレナがウェルトを連れて戻ってくる。コロナは治癒薬を練り、リーンとアイリスは空きのベッドを用意するんだ」

「う、うん！ わかったよアツフーちゃん！」

少し話は聞いた。リーンさんとマイリーさんを逃がすためにウェルトさんは一人で戦っていたらしい。大丈夫なのかな……、ウェルトさん。

「う……、パーフィさんに怒られちゃった」

と、リーンさんもなんだかしよぼくれてしまった。確かに少し怖かったりもしたけど……、でもパーフィさんの優しさあつての言葉だったと思うんだ。

そして私たちは、ウエルトさんの部屋へ向かいベッドを綺麗に仕上げた。

「ふう〜、これでよし」

「ウエルトさんの部屋って…、すごくキレイなんですね〜」

「あの人、結構キレイ好きだからね。虫とか入ると発狂するらしぞ〜」

「ええっ！ 発狂…、ウエルトさんが」

想像力を働かせて色々想像してみた。しかしなんだか変な気持ちになってきたのでそれは止め。

私たちは中央室に戻ってきた。コロナさんがあのすごい匂いの治療薬を一生懸命練っていた。

「あっ、アイちゃんたちお疲れ様〜」

「うわっ！ すごい匂いっすね〜…コロナさん」

「う、うん…私もこれ苦手だね…、うう目に染みるう」

コロナさん、目に染みる匂いと格闘しながら涙目で頑張っていた。そういえばよく見るとエプロンが非常に似合う気がした。家庭的なんだ、コロナさんは…。それに凄く可愛らしい人。…と、そんなことを考えてる場合じゃなかった。

「もうすぐ帰ってきますかね…、あの2人」

「うん、多分ね。大丈夫だよ、ウエルトちゃんは強いし。」

リーンさんとコロナさんのその会話に、少しホッとした。と、その時だった…。

「誰かッ！ 手伝ってくれ！！」

外からエレナさんらしき声が、慌ただしく響いているのが聞こえた。私たちは急いでその声のする方へ走り出した。

シヨックだった。

ウエルトさんの着替えを手伝う際に見てしまった、彼女の身体に残る傷跡…。

「…あはは、私、怖くなっちゃいました」

今回負ってしまった傷のほかにも、幾つか古傷の跡が残っていたんだ。どれも鋭く、やはり剣か何かで斬られた跡なのか。どれも凄く痛々しい傷だった。

今、ウエルトさんはぐっすり眠っている。彼女はここへ帰ってきたから、一言も言葉を発さずに部屋へ向かってしまったんだ。安否を心配しても声を掛けても、ただ柔らかく笑ってくれただけだった。

「心配するな。ソルジャーの私たちにはよくある事さ」

「……………」

パーフィさんに連れられ、私はギルド近くの浜辺に来ていた。大きく輝く満月を、肩を並べて眺めていた。

「怖くなった、か…。私も初めは怖かった。人を剣で斬るなど…私には出来なかった」

「…どうしてパーフィさんはソルジャーに？」

小さくなった私の声は、かろうじて届く程度だった。波の音に掻き消されそうな、小さな声で問うた。

「……私は」

風に揺れる髪は、潮の香り。パーフィさんはその口をそっと開いていった…。

じゃあ、夜までには帰るから…。父上と母上を頼んだよ。

両親の腕の中で、兄を見送った。その背中は父のように広く、母のように優しい。そしてその背には一本のたくまじき剣が下げられていた。

世の中に巢食う、人々を襲う魔物を亡命するべく兄は旅立って行ったのだ。正直なところ、夜までに帰ってくるほど簡単な仕事ではないこと。それは分かっていた。そんな予感がしていたのだ。

「帰ってくるよね？ お兄様…」

そう質問しても、両親はただ黙って撫でるだけだった。アフロデイテはこの日、7歳になる誕生日だった。両親と兄と自分で、みんなで祝ってもらいたい。彼女は強くそう思っていたのだ。

「お誕生日だもんね、帰ってくるよね？ 父上、母上……」

何も言わない。ただ2人は笑うだけ……。どうして、どうして何も言わないの？ なんで笑っていられるの？

予感も当たり、その日兄は帰ってこなかった。誕生日を祝ってくれたのは両親だけ。

「そろそろお前も、立派な剣豪を目指してもらわなくてはな」

「けんごー……？ 父上、けんごーって何？」

「ふふ……あなた、まだこの子は7歳じゃないですか。まだ早いですわよ？」

パーフィ家は、稀に見る武士家であった。彼女の兄は、10歳になる頃にもう立派なソルジャーになっていた。

しかし、彼女はソルジャーにするのではなく”剣豪”、つまり剣のエキスパートに育てられていた。

どうして兄は帰ってこないのか。

もしかして魔物に……いやそんなことは考えたくなかった。少しだけ手こずってるだけ、そう信じ込んでいた。アフロディテは兄の愛情に包まれて育ってきた。いつも手厳しい父親に対し、優しく接していたのが兄だったのだ。

そんなある日、事実が告げられた。

「うう……、あなたあ……っ！」

「泣くな。あいつは立派に戦った。戦士として立派に散っていったんだ……」

どうしてこども予感が当たるのか。昔からそうだった。嫌な予感ほどよく当たる。

そう……、兄は帰らぬ身となってしまうていたのだ。旅先にて魔物の大群に挑み、最後の一匹と相討ちになってしまったらしいのだ。それによって、魔物に襲われていたある集落が助かった。父と母はそんな兄を誇りに思いながら、目を潤ませていたのだった。

その頃のアフロディテは、人の死など理解できなかった。いつかフラッと帰ってくる。この嫌な予感を裏切って再び舞い戻ってくる。そう思っていた。

「お兄様は、帰って来るんだ。なんで泣くの？ 父上、母上……」

そして更にその数日後、彼女は事実を身を持って理解することになる。

それを見た母は、ショックのあまりに意識不明の重態に陥ってしまった。厳しいあの父ですら、拳を握り締めながら絶句するばかり。

「……アフロディテ、これが兄の姿だ」

「な、なんでお兄様……、動かないの？ こんなに冷えたまま寝てるの？」

「違う、違うんだ……！ お前の兄は……っ」

父は私に顔を見せないように向こうを向いてしまった。

……泣いていた。その拳の上に落ちる涙が、彼女には見えていた。

そこで初めて、死を理解した。そしてその時、胸の中にある兄の言葉が浮かんだのであった。

『父上と母上を頼んだよ。』

「そして私は、兄に代わってソルジャーを目指したんだ。結局、その父と母も守れなかったがな……」

「邪悪な魔物を討伐するべく、パーフィさんは今こうしてソルジャーとしてここにいます。」

「……そんなことがあったんですね」

「ああ……と、長く語ってしまったな。この事はウェルトたちにも話していないと言っのに……」

「えっ……?」

「お前だからかもな。自分の身内を失った痛みを知る者同士、分かり合えると思っただのかもしれない。」

「家族、か……。私も丁度7歳くらいの時だったかな。両親をあんなに殺されたのは。私も初めは人の死だなんて理解出来なかったんだ。そっだ、私がソルジャーを目指す理由とパーフィさんのその動機とは、何気に酷似している。」

「さて、月を見ながら風呂にでも入るか。」

「お風呂ですか?」

「ああ。うちのギルドは何故か、風呂だけは立派に仕上がっている。」



んだ。ウエルトが考えたそうだが…な。」

「お風呂、入りたいです…」

「じゃあ行くか。ここの風呂は源泉を引いている温泉だから、きつと身体も休まるだろう。」

この気持ち、初日からこんな暗くつちゃダメだよ。お風呂に浸かって心を休めないよ。

パーフィさんに連れられてお風呂へ向かう。

「わあ…！ な、なんだか本格的ですね…」

「ん…？ 誰か先に入ってるのか」

脱いだ服を折りたたんでカゴに入れ、パーフィさんの後に付いて風呂場の中に足を踏み入れた。そこは岩場を掘って作られた、かなり本格的な造りだった。

「あつ、おゝい！ アツフーちゃん、アイちゃん！」

この声と呼び名は…コロナさんとすぐに分かる。結んでいた髪を解いて、なんだか雰囲気の違いがコロナさんだ。

「えへへ、アツフーちゃんと入るのなんだか久しぶりだねえ」

「そうだな…。ここ最近は忙しかったからな」

「…ミィ〜」

お風呂の中には、猫のミーコちゃんも入っていた。小さな桶に入られてプカプカ浮かんでいる。

「どうしたの？ アイちゃんと一緒に入ってくるなんて」

「いや…なんでもないさ。たまたまそこで会っただけだ。」  
「ふん…そっか。アイちゃん、気持ちいいでしょ〜？」  
「はい…。しかもいい景色ですね〜…」  
「でしょでしょ〜？ 気に入ってもらえて良かった。」

浜辺から見えた満月が、湯気に混じってキレイに映える。ミーコちゃんを優しく撫でてあげながら、そんな景色をじっと見ていた。なんだかお婆ちゃんの作る草団子を思い出す。

「あたしも入れてくれ〜っ」

ザッパーン ツー！ 湯船が大きくしぶきを上げた。その声の主はエレナさんのものだった。

「お前…、正しく風呂に入る方法を知らんのか」  
「ありゃ、アフロもいたのか」  
「お前…っ！またその呼び名で…」  
「はっはっは、ここには剣無だから攻撃も出来ないぞ〜？」  
「うぐっ…、お、おのれ…」

2人とも、うつすらとだけ笑みが見えるんだ。きつとこんなやり取りも楽しみの一つなんだろう。…と、少し私は寛大に捉えてみた。

「も〜、ケンカしないのーっ！」  
「ミィ〜」  
「ちえーっ。 そうだ！ アフロ、たまには背中流してやるよ」  
「な、何っ！？ どういう風の吹き回しだ！ お前が背中を流すなど」  
「ほら、いいからいいから」

「何を企んでいるッ！ わ、私は騙されんぞっ！」

…と言いながら、結局エレナさんに連れて行かれるパーフィさん。

「あはは…、あの2人相変わらずだなあ」

「あ、あの、私もコロナさんのお背中…流しましょうか」

「えっ？ ホント、ありがとぉ。じゃあお願いしちゃうかな？

えへへ」

今日一日に、色んなことがあった。

ウエルトさんにここへ連れて来られ、歓迎会のあとすぐに依頼を受けた。そして帰ってくるとセンパイのリンさん、マイリーさんともご対面する。

帰ってきたウエルトさんの姿に、一度ソルジャーを指摘すことに折れそうになった。しかしそれもパーフィさんが支え直してくれたんだ。

今日というこの日に色んなことがあった。色合いの薄かった日々に、多くの色が染みていったような、そんな日だ。

「ったく、何のつもりだエレナ！ 武士が簡単に背を向けると思っ  
なよっ！」

「…あのなあ、あたしはただ普通に背中流そうと思っただけでさ」

「ええい、だったらさっさと流すがいい。私はお返しなどしないか  
らな！」

「へいへい」

どんな日々になるんだろうか。次にまた満月が昇る夜に、私はどうなっているんだろう。

「ミーカーもゴシゴシ洗おうね、んふふ」  
「ンミヤ〜…、ゴロゴロ」

よく分からないけど、なんとなく楽しい生活が待っていそうなのは感じられた。

お風呂から上がると、私は自分専用の部屋を用意してもらった。

「ここだ。あたしとコロナと同室な」

「えへへ、アイちゃんと一緒にだあ」

ベッドと机がそれぞれ3つずつ置かれていた。エレナさんとコロナさんと同室か…。なんだか少しだけホッとした自分がある。

「ふわあ…、私もう寝ようっ」と…」

「あ、じゃあ私も…」

「ん、そうか。んじゃお休みっ」

とにかく、どんな日々になるのかは私次第だよね。

精一杯に頑張ろう、見習いソルジャーの名に掛けて。

第6話 満月の見下ろす夜に（後書き）

／＼（ ）（ ）

ロアグスです、どうも。。

やっとアイリスの一日目が終わりました。描写にも少し凝ってみました。お分かりいただけたでしょうか（笑

## 第7話 九つ目の煌き

波が朝焼けに照らされ、私の立つ岬に飛沫を掛ける。

「…お父さん、お母さん」

聞こえてる？

私、頑張る…。これからどんな出来事が待ってるのか分からないけど、挫けずに進むよ。

あの時私に言ってくれた言葉、覚えてるよ。

『お前は父さんの子だ。だから挫けるな。』

『あなたは母さんの子。だから諦めないでね。』

うん、大丈夫だよ。

私は腰に掛けていた夢想丸を鞘から抜き、静かに掲げてみた。紫に光るこの刀は、朝日に照らされ光を増す。何度もその刀を振りかざしてみた。その度に改めて夢想丸の重みを感じ取る。

「……………」

グツとその刀を握る。手に馴染んでいるのがなんとなく分かる。鬼を倒す前に感じたものと同じだ。木刀を振るのとはわけが違う。これは本当の刀で、実際に鬼をも退治してしまった。カタキは討てただけ、私はただ大事な人を守りたいと言う理由がある。

立派なソルジャーになるんだ。大事な、かけがえの無い絆を守るため。

「はぁぁッ!!」

海岸の方で声がした。次の瞬間、あたりに凄い風が巻き起こって海の波が方向を変えた。

「……パーフィさん」

その長く女らしい髪と、それに等しいくらいに長い剣。彼女が剣を振り下ろすと、海の水が切れ上がって水平線の彼方まで衝撃波が飛んでいく。

「ん…、アイリスか」

「あ、あの…。おはようございます、パーフィさん」

§ §

総長のウェルトさんが、全員に集合を掛けた。中央室にメンバーが集結。

「…もう大丈夫なのか？ その傷は」

「ああ。治癒薬のおかげで回復が早い。マイリーも回復したようだしな」

「はい、わたくしの事なら心配無用ですわ」

そして相変わらず私の左右に居るのは、リーンさんとミーコちゃん。また互いを威嚇し合っている。

「アイリスから離れるーっ、強情なネコめー!」  
「ンニヤ! フーツ!!」

そして、上層部の人とマイリーさんは流石と言うべきか、凜としてそんな光景を見ている。

「さて、そろそろ話してもいいか」

…と、ウエルトさんが口を開き始めた。何を話すんだろう? あ、まだ帰ってないメンバーさんのことかな。私を含めてメンバーは9人らしいからね。

ここにいるのは7人。上層部4人に、昨日帰還したセンパイの2人、そして私。帰ってないのはあと2人いる。

「アイリス、こっちへ来てくれるか」

「えっ、あ、はい!」

不意に呼ばれたので、不覚にもびっくりしてしまった。私はウエルトさんの元へ歩み寄った。

「改めてみんなに紹介しておこう。      ギルドナンバー”?”、  
アイリスだ。」

ギルドナンバー…?。      9番目ってことが。

「専用武器は、名刀・夢想丸。」

「ええっ! 夢想丸使ってるのっ!? アイリス!」

「は、はい…」

「…そして、あと決めるべきなのはアイリスのギルドランクだ。」



ギルドランク…。それが何なのか、私には分からない。

「アイリス、キミにはそのマイリーと模擬戦を行って貰いたい」

「わ、わたくしと、ですか…？」

「ああ。模擬戦用のあの剣を使わせる。」

すると、部屋に居なかったエレナさんが何かを持って中央室へやって来た。

「アイリス、マイリー。これ使って」

手渡されたのは、何やら不思議な文字が書かれている”剣”のようだ。私とマイリーさんは一本ずつそれを受け取る。

「その剣は、相手を斬りつけても傷が付かない。ために」

と、いきなり私の持っていたこの剣を、ウエルトさんはその腕に思い切り突き立てた。

「ウエルトさんっ!？」

「なに、大丈夫だ。その剣には私の魔術が込められている。」

「へえ、やっとなんか完成したんだな。その剣」

「ああ。これから模擬戦に役立つだろう。」

斬りつけても、傷が付かない剣。こんなものが存在するなんて、やっぱり魔術は私の知識を遥かに裏切ってくれる。

そして全員が外へ移動した。この浜辺で、私はマイリーさんと模

擬戦を行う。夢想丸はウエルトさんに預け、先程の剣を同じように構えてみる。

「行きますわよ、アイリスさん！」

「は、はいっ！」

みんなが見守る中、模擬戦は始まった。大丈夫…この剣なら本気で斬りかかっても傷がつく事は無いんだ。全力でやろう…！

突っ込んでくるマイリーさんの剣を何度か受け、左に思い切り弾く。その隙を見て一気に突いた。

「…っ！ や、やりますわね」

「いいぞっつ、アイリスっ」

リーンさんたちも見ていてくれている。私は自分で出せる力を出すまでだよね。

「やあっ…！」

思い切ってマイリーさんの前に踏み込み、振り下ろされる剣を避けて足を狙う。

しかしマイリーさんもそう簡単にはやられなく、ジャンプしてそれを避けられる。

「今度はわたくしから行きますわよっ！ はあぁッ…！」

何度も剣と剣がぶつかる。その度にキンツという鋭い音が耳を引っかく。私も負けじと剣を振るが、だんだん身体が追いつかなくなってきた…。

「はあっ、はあっ…！　ま、まだまだ」

次の瞬間、隙が出来てしまった腹部を攻撃されてしまう。痛みこそ生じないが、その衝撃で吹き飛んでしまった。

「ううっ…」

「よし、そこまでだ！　お互い剣を収めるんだ」

こうして模擬戦は終了した。しかし何かやりきれなかったこの感じはなんだろう…。マイリーさんも、少しだけ息が上がってる様子だった。

「アイリス、こちらへ」

「は、はい！」

ウェルトさんに呼ばれ、その方へ歩み寄る。夢想丸を受け取り、再び腰にそれを掛けると、ウェルトさんが口を開いた。

「キミのギルドランクは…、”B”というところだな。」

「ええっ！　新人さんなのに、すごいね〜…」

B…、それがどれほどのものなのか。コロナさんも驚いてるから、そこそこのものかな。

「最下が”D”、最上がAを越し”S”だ。キミの实力はちょうどその5段階の中間というところだ。」

「は、はい…。ありがとございますっ！」

「すごいですわ…。見習いの段階でBを貰えるだなんて…」

「やっぱあたしが認めただけあるねーっ　アイリス〜っ！」

「わっ！　り、リンさん…！」

例に乗っ取り、リンさんが飛びついてくる。早くも慣れてきちゃったかな、これ…。

それにしても、5段階の中間か…。すごく嬉しかったりする自分がある。

「…アイリス、ついてきてくれ。他のみんなは解散だ」

§ §

「そこに座ってくれ」

「はい…」

真剣な表情のウエルトさん。何を言われるんだろうか…。

「キミには”B”のランクを渡したが、本当は”A”をあげたかった」

「えっ…？」

「キミがソルジャーになれば、”S”にだって簡単に辿り着ける」「そ、そんな…私はまだ」

「いや、キミの實力は認めざるを得ない。昨日、コロナとも模擬戦をしたそうだな」

コロナさんとの模擬戦は、彼女に私の實力を分かって欲しかったから行ったもの。それがどうしたんだろ…。もしかして泣かせちゃった事を怒るのかな？

「その模擬戦、コロナは剣技において本気だったそうだ。あいつの

ランクは”A”。それに打ち勝つキミが”B”というのも矛盾しているだろう」

「ほ、本気…？ あ、そっか…。魔術は使ってなかった…」

「そうだ。キミにはまだ魔術を使えない。それで一応一段落下げたおいたんだ。無理をしないように、とな。」

いきなり”A”ランクを貰って浮かれているのは、魔術の会得なんて出来ない。ウェルトさんはそう読んだのかもしれない。私もあえてそれを口に出さずにじつと話を聞く。

「コロナとエレナに魔術を教わるといい。あの2人は魔術のエキスパートだ」

「……そう簡単に、私に出来るでしょうか…。」

不安だった、無能だと思っていた私に…そんな飛躍しすぎたような話。無理だと、心に深い不安がこみ上げていた。

「頑張れば結果が実り、挫ければその実は枯れるだけだ。要はキミ次第ということさ。」

「私、次第……」

「キミの努力の実がいつか弾け、真の力となる日を…私は待っている。」

その言葉、すごく胸に染み込んだ。何かが私の中で広がっていったんだ。それが何かは分からないけど、暖かい気持ちになれる。深く深く染みていくそれは、私の胸の中で大きく羽を広げたような…そんな感覚だ。

「……さて、話は変わるが」

「は、はい」

「アイリス、夢想丸を鞘から出してみてくれ」

私は言われたとおりに、刀を鞘から抜き出して天井に切先を向けてみた。

「……その刀の事、詳しく話さなくてはな。」

## 第7話 九つ目の煌き（後書き）

ぐ（\*）

（\*）ノ

ロアグスです、こんにちわこんばんわ。

書いてるうちに、だんだんと設定をまとめられてきました。ますます他の作品の更新頻度が急下してしまいますね……。でも、これを書きながら他の執筆にも手を回しておりますので、首を長くしてお待ちいただけると有難いです。

## 第8話 特訓開始

「キミは選ばれたんだ、その刀にな」

夢想丸の事を詳しく話す、とウエルトさんは言った。選ばれたとは一体どういうことだろうか。

「試しに…少しその刀を貸してみてくれ」

「はい…」

そつと夢想丸を手渡す。ウエルトさんがそれを強く握り締めると、急に何か痛みはじめたのだった。「バチバチッ」という、まるで電流のような音を立てて刀がウエルトさんの手から離れてしまった。

「…！」

「夢想丸は私を認めていない。それゆえ私が持つ事をこの刀自身が拒絶しているんだ」

「そ、それって…まるでこの刀が生きてるような…」

「ああ、分かりやすく言うとそうなのかもしれない。夢想丸は持ち主を選ぶ。自身を扱える、強い者しか認めない。」

ということとは、この夢想丸は私を認めてくれたということ

？ これのおかげで鬼を打ち倒す事だって出来たし、何より手に馴染んでいくあの感覚が忘れられない。

よく考えれば、刀が持ち主を選ぶというのもおかしい話だと思った。

「……アイリス、夢想丸を守ってくれ。」

「えっ…？」



「私との約束だ」

そう言って、小指を絡めた。私には何の事か分からなかったけど…、その言葉のまま夢想丸を守ればいいんだよね。

「…約束」

「ありがとう、アイリス。この刀の事は頼んだぞ…」

そう言ってウェルトさんはその部屋を出て行った。結局この夢想丸がどんな刀なのか、詳しく聞けなかったけど…。

中央室へ戻つてくると、コロナさんとマイリーさんがエプロンを羽織ってキッチンに立っていた。なんだか甘い匂いが漂っている。

「あつ、アイちゃん！ お話は終わったの？」

「はい…。あの、何してるんですか？ 甘い匂いしますけど」

「シュークリームを作ってみましたのよ。アイリスさんの分もありますわ」

シュークリーム。それで甘い匂いが部屋中に…。

それにしても、2人ともエプロンがとてもよく似合う。足元でミィコちゃんが頬をすり寄せてきていた。

「あ、ありがとうございます」

「アイちゃん、ちょっとだけミィコの相手をお願いしてもいい？」

「あ、はい！」

ミィコちゃんを抱き上げてソファに腰を下ろす。ここにリーンさ

んがいたらきつとまた威嚇のし合いが勃発するんだろつな。ミーコちゃんも、何か不敵な勝利の笑みをしているように見えたりする。

「守る、か…。私に出来るのかな。」

「……？」

ぼそつと答えるはずも無いミーコちゃんに向かって言葉を投げかけてみる。案の定、きよとんとした表情だった。

「エレナさんたちは出掛けちゃったんですか？」

「新人に負けてられるかつ！」って、張り切って出掛けていったよ？ エレナちゃん、なんだか楽しそうだった」

「そうですわね…。あの方のあんな表情を見たの、久方ぶりな気がしますわ」

「……。」

ここへ来たときに、ウエルトさんが私を”期待の新人”と呼んでいたこと。嬉しい言葉ではあるけれど、私には荷が重くて少し息苦しい。私は決して強くなかないし、ここで生活出来るのだから現実感が持てなかつたりする。

ひよつとしたらこれは夢なんじゃないか…、鬼を倒せた事もそうだ。あんなに簡単に行くものなのだろうか？ 確かに努力は自分なりにしていた。毎日あの修行場に通って、重く流れ落ちる滝を半日以上斬っていたり、村の周りを走って体力を付けたり。

「ミイ…」

「…ん、ゴメンね。ボーつとしてたよ」

今の私の望みは、ソルジャーになって大切な人を守る事。大切な人、ウルお婆ちゃんやランマ叔父さん。村の人たち。

それだけ ？

私の大切な人って、それだけなのかな。きつとやがて、このギルドの人たちの事だって大切になるのかもしれない。

ねえ、”大切”って何？ 多用する度に、その言葉の重さって失ってしまうんじゃないかな。

「アイちゃん？ ど、どうかした？」

「えっ、あ！ な、なんでもないです…。」

「そう…。なんだか浮かない顔、してたからさ…。」

「ホントに大丈夫です、心配掛けてすいません」

今考えたって、答えが見つかるはずも無い。止めよう、すぐに答えを求めようとするのは。

「はい、シュークリーム。出来たてだよ」

「ありがとうございます…。」

ミーコちゃんをひざの上に置いて、コロナさんから1つ受け取って一口食べてみた。甘くて柔らかく、出来たてだから暖かい。

「おいしいです…。」

「そう？ 良かったあ〜」

「…アイリスさん？ ホントに平気？ なんだか気分が優れないみたいけど」

「大丈夫です、ちょっと色々考えてて」

ひざの上でミーコちゃんも、何か心配そうな顔をしてこっちを見ている。猫にまで心配掛けちゃったかな、反省。

「お世話になりました、ありがとうございます」

旅商人の一行を護衛。2人のその長期任務も終了した。

「えへっ、んじゃあたし達はここまでだね」

「……お元気で」

「はい、報酬の方は本部へお送りいたしますね」

遠征へ向かっていた、ギルド・リアンの構成員。彼女らの依頼も無事完了し、帰還していった。戦火の舞い散るこの辺り一帯で、旅商人だけの行動は危険極まりない。

山賊や盗賊集団に襲われる事も稀ではない。リアンに属す彼女たちのおかげでそれも阻止されたのであった。

「…エレロワ、本部へ連絡を」

「うん、そうだね！」

ホウキで飛行しながら、本部への帰還連絡を始める。

「あ、総長さん？ 今から帰還しますね？」

\*\*\*\*\*

シュークリームを味わった後、私はコロナさんに連れられて空散歩をすることになった。

「コロナさん？ どうして急に空散歩だなんて…」

「ん〜？ 秘密だよ」

と、後に乗る私に振り返り、ニコツと笑ってみせる。もしかしてさっきまで浮かない顔してたから…それを思っただけなのかな。だとしたらすごく嬉しい。

ホウキは緩やかに山脈の上を進んでいる。それにしても風が気持ちよく穏やかだ。

「よっ、と…」

「わっ！？ こ、コロナさん？」

するとコロナさんがいきなりホウキの上で立ち上がった。昨日もこれやってたなあ…、相変わらずバランスが良い。

「えへ、んじゃ”特訓”はじめだよ」

「と、特訓…？」

そう言い置いて、やはりコロナさんはホウキから飛び降りた。

…しかしその身体はやっぱり浮かび上がって、私の横に並んだ。

「アイちゃん、まずはホウキに乗れるようにならないと！」

「ええっ！」

「今からそのホウキに宿ってる、私の魔力を抜くからね〜？」

ガクツ…！ 今まで何もしてなかった重力が、いきなり働き始めたのだった。

「わあぁ〜ッ!」

「アイちゃん! ホウキを握って集中してっ!」

そんなこと言われても…、こんな状況で集中だなんて !

「んん〜……ッ!」

フワッ。

ほんの一瞬だ、その時だけ重力の動きに逆らってホウキは浮かんだ。しかし、その直後にまた落下を始める。

「わあぁ〜っ!」

それほど上空でも無かったため、茂みの中に落ちてしまった私は無事だった。

「ん〜、やっぱり…アイちゃんはすごいや」

「えっ、コロナさん…?」

「ゴメンね、痛かった?」

「え…、あ、いえ」

パツパツと私の服に付いた葉っぱを払ってくれた。その時にふと見えたコロナさんの表情は、いつにも増して穏やか。優しい、暖かいその手に私はついのもってしまった。

「……ねえ、アイちゃん。」

「は、はい…?」

コロナさんの顔が、私の左肩に乗せられた。その腕は私の後頭部をしっかりと抑えている。

そして、何かを耳元で何かを囁かれる。

「ちよつと、このままで…」

「……えっ？ こ、このままって…？」

茂みの中。同じくらいの高さのコロナさんが、私の顔の近くで目を瞑っている。何をしてるんだろう…？ 私は緊張して固まっ  
てしまっている。

「……………」

「コロナさん、どうしたんですか…？」

「うん、これでよし…。」

私から離れると、コロナさんは私にホウキを手渡した。

「アイちゃん、飛んでみて」

「えっ…、でも！ 今、派手に落ちたばかりで…」

「大丈夫！ このホウキなら飛べるよ！」

「こ、このホウキって…？」

さっきのコロナさんのと同じじゃない…？ 何か持ち手の部分に不思議な文字の羅列が書き綴られている。私はそつとそのホウキを受け取って、跨ってみた。

「……大丈夫、信じて。自分を」

一体コロナさんは私に何をしたんだろうか。それも分からぬままホウキに集中してみることにした。

ブワッ ……!!

急に身がすごく軽くなったんだ。衣服がバサバサと風で揺れながら、私の身体は徐々にホウキと共に浮かんでくる。

「えっ、え！ と、飛べてる…?」

「うんうん、やっぱりアイちゃんなら出来ると思ったよ」

……と、無邪気な笑顔でVサインをされる。

「私…ど、どうして飛べてるんですかーっ!」

「アイちゃんの才能だよお？ 少しだけそれを閉じ込めてたものを取り除いただけ!」

とにかく、ホウキに乗って自分で飛べてるんだ。ますます現実感が湧かなくなってきた。

「まずは1つ目、クリアーだよっ!」

「……?」

不思議な人だ…、本当に。



## 第8話 特訓開始（後書き）

．．．（ー＊）

ロアグスです、どうも。

読者の方々が増えて、とても光栄でございます。これからもこのLorexをどうぞよろしくです。

## 第9話 朝日の昇るころに

“ホウキで空を飛べるようになったんだよ、私。おかしな話だよね、信じられないよね。私だって未だに信じられないよ。でも、飛べた。飛べたんだよ。”

鳥と並んで、雲と並んで、風と並んで。そのまま2人のところへ行っちゃうのもいいかもしれないね。だって、会いたいんだもん。

わがままを聞いて欲しい。そして叱られたりもしてみたいな。私、小さかったから覚えてないんだ、もう。あ、そうそう…。

村を襲う鬼をやっつけたんだよ。すごく怖かったけど、退治する事が出来た。火送りの儀式だって、私がやったんだよ。嬉しかった。これでみんなが救われると思うと、何よりも嬉しいよ。大切な故郷を自分の手で守ったんだもん。

ねえ、1つだけ教えてほしいことがあるんだ。

大切ってどういうことなの？　　どういう物の事を、大切だっていうのかな。私、この言葉の意味…曖昧にしか分からない。ちゃんと説明するとしたら、どういう表現で説明できるんだろう。

聞いたって、すぐには答えられないよね。　　うん、また書

くね。お手紙…。

お父さんと

お母さんへ

アイリスより“

真っ暗な部屋の中で、私は机のライトを点けてこの手紙を書いていた。同室のコロナさんとエレナさんは、それぞれぐっすり眠っているようだ。時刻は深夜の3時に差し掛かるところ。私もそろそろ寝ようかな。

1つあくびをして、その手紙を机の中にしまつて自分のベッドへ向かった。思えばこんなに遅くまで起きている事が珍しい。それでも朝は早く起きてしまっただけ。

「……ミイミイ」

布団を被ろうとしたとき、猫のミーコちゃんが覚束ない足取りで部屋を出て行くのが見えた。どこへ行くんだろっ…、勝手に外出ちやったらコロナさんが困りそうなので、私は寝ることを棚に上げ、その後を追うことにした。

部屋の外も消灯されていて、決して真っ暗ではないものの、目が慣れるまで時間が掛かるほど暗い。ミーコちゃんはどこへ向かったのだろうか。

「ミーコちゃん……？」

その鳴き声だけを頼りに、後をなんとか追うことが出来る。やっと目が慣れてきたので、その姿も確認が出来た。その足取りは決して遅いものではなかった。私も一定の距離を取って後を追う。

やがてミーコちゃんは建物の外へ出てしまう。中々器用な手つきで窓のカギを開けて出て行ったのだった。

「ミーコちゃん…っ、ダメだよ、勝手に外出ちゃ…」  
「ンニヤ〜」

一応私がつけて来たのは気が付いたようだ。その足を止めてミーコちゃんは私の足元へ戻ってきた。

「コロナさんのところへ戻ろうね？」  
「じゃあ、にゃあーッ」

靴下を噛んで私を引っ張ろうとする。行きたい場所があるのか、それとも私をそこへ連れて行きたいのか。そんな事を言っている様にも見えたので、私はその小さな身を抱き上げて足を進めてみた。

「こっちに何かあるの…?」

しばらく進んでいくと、急に私の腕の中から飛び出して走って行ってしまった。私も急いでその後を追う。まるで誰か親しい人を見つけたような急ぎっぷりだ。

「あれ、ミーコちゃんだあ」  
「…!」

ミーコちゃんの走り寄った場所に、2人の人影を確認した。誰だろっ…。

「ミイミイ! んみやああ」  
「ミーコちゃん! そ、その人たちは…?」  
「……何奴」

2人の影は、どちらか女の子のようだ。その片方がこちらへ歩み寄ってきた。

「あの、ミーコちゃんを返してくださいっ!」

「……エレロワ、先に中へ!」

「うん!」

「あ、待って!」

もう一人の方がミーコちゃんを抱いたまま建物の中へ入っていく。漆黒の海岸、私の前にいるこの人も何者なのかは分からない。

「…答えて、あの猫とここで何をしていた……?」

「えっ? そ、外に出たら大変だからと思って!」

「……」

すると、その女の子はいきなり剣のようなものを抜き、こちらに突きつける。

「!」

「その手に握る刀…。夢想丸、でしょ。返さないと斬る」

「なっ!」

私も反射的に夢想丸を鞘から抜き取る。この人、私と戦う気味だ。いだ!」

刀を構えて、一気に距離を縮ませる。模擬戦での経験を活かして、打ち勝ってみせる!

「…っ!」

ガンッ!」

鉄と鉄が勢いよくぶつかり、不純音が辺りに響く。

「……夢想丸を、使える……？」

「たあぁっ！」

そのまま押し切り、相手をその場に倒れこませる。やるなら今だ

！

刀を振り下ろそうとしたその時、何かが私の腕を掴んでそれを止めた。

「……っ！？ ば、パーフィさん？」

「ネイラ、帰ってたのか。」

「……パーフィさん。その子は」

「説明は後だ。2人とも剣を収める」

\*\*\*\*\*

夜も遅かったと言う事で、事情説明は起床後となった。私はなんだか寝付けなかったなので、そのまま中央室で起きている事にした。

「……ねえ」

するとその部屋に、さつき襲い掛かってきた女の子がやってきたのだった。パーフィさんに聞くと、この人たちこそもう一方の遠征組だったようだ。

「あ…、さっきの…」

「うん…。パーフィさんに聞いた。君、新入りの子なんだよね」

私が座っていたソファの横に立って、その少女は言った。少し大人しそうな人だ。

「さ、さっきはゴメンなさい。私、てつきり…」

「……………大丈夫。私も勘違い、しちゃったから」

やはり腰には先程の刀を下げています。ここのソルジャーであることは間違いなさそう。

「あの、私、アイリスって言います。」

「うん、聞いたよ…。何でも、凄腕の新米さんみたいだね」

「えっ…。わ、私はそんな…」

するとその人は、そつと私の横に腰を下ろしてその刀を降ろした。この人も私のセンパイになるんだ、それらしい態度で応えなくちゃ。

「…私、ネイラ・ティラミス。」

「え、あ…はいつ。ね、ネイラさん…、でいいですか？」

その問いに1つ頷いて、ネイラさんはソファにより掛かった。何度が小さなため息を吐いて、こちらをチラッと見たりしている。

「……………私、アイリスの事、知りたい」

「えっ…?」

「急だけど、これから一緒に仕事する仲になるんだ。その仲間の事、少しでも知っておきたい」

「…わ、私もネイラさんの事知りたいです」

センパイのこと、少しは知っておかないと。まだ知らない事、多いけど…。

「…私に、敬語は使わなくて、いいから」

「え、でも…」

「私は、センパイなんて柄じゃないから…。」

とりあえず、ネイラさんには敬語を使って気を使わなくてもいいのかな。なんだか話せば話すほど不思議な人っぽさがよく分かってくる。

「じゃあ、私、寝るから…。」

「あ、はい…。」

そう言い残して、彼女は部屋を後にした。

なんだか寝付けないので、部屋でボーツとしてるのも無意義なのでお風呂で目を覚ますとしよう。そう考えた私は、少しおぼつかぬ足取りで風呂場へと向かった。

§ §

月が沈み、空の色もだんだんと青染みてきている。それを見るとなんだかあくびが自然に出てしまう。それに合わせて、温泉の湯気もユラユラと踊りだす。



「……………」

その湯舟は日の光のように暖かい。村にいるときに、畑仕事を手伝っているときに朝日はよく見ていた。お婆ちゃん、元気にしてるだろうか。お婆ちゃんにも手紙、書こうかな…。

さつき書いたあの手紙は、届くはずも無い両親へ宛てて書いたもの。きつとどこかで読んでくれてる、とそう信じて書き記したんだ。

「……………」

いや、どこかでじゃなくて…。いつも私の横に居る気がするんだ。単なる思い過ごしだと笑うかもしれない。でも、私にはそう感じるんだ。お父さんとお母さんは、常に私を見ていてくれる。それだけで自分を強く持てる。

「ん、アイリスか…」

「あ……………、ウエルトさん」

私よりも小さなその身をタオルで包み、ウエルトさんは眠そうに目を擦って湯舟の中に入ってきた。こうして見ると、何も喋らない人だったらかなり可愛らしい人なんだな、と改めて思ったりする。少し頬もピンク色をしてるし。

「朝風呂かい、アイリスも」

「あ、はい…。」

湯舟の中で目を閉じて、腕を組んだままウエルトさんはごくごく眠そうにしていた。やっぱり総長をやっているだけあって疲れてるのだろうか。その姿に似合わず、自分で肩揉みまでしてる。

「唐突だが、夢想丸の調子はどうだ？」

「えっ……？ ちょ、調子って……」

「その……なんだ。キミはあの刀に選ばれたという話をしただろう？」

「あ……」

「……あの時、色々考えててな。言えなかったことが幾つかあるんだ。」

ウェルトさん、腕組を解かないままそう言って話を続けるのであった。

「……私……。そんな刀を持って……」  
「使い方次第では、簡潔に言つと……魂そのものを地獄に落とすようなものだ。」

地獄に眠っていた名刀………？

第9話 朝日の昇るころに（後書き）

（・・・）

ロアグスです、どーもどーも。

学校が始まったということで、少しだけ更新が遅れ始めるかもしれませぬ。ご了承くださいませ。

第10話 Friends said .

全員が起床して、私たちは朝食を食べた後すぐに、大きなモニタのある部屋に集められた。その部屋は、まるで大きな講堂のよう  
でかなり広い。

「…みんな揃ったな。では始めるとしよう」

ウェルトさんがその中央に立ち、私たちはその周りを囲むように  
並ぶイスに着席した。

「ネイラ、それとエレロワも帰還した。2人が遠征中に、我がギル  
ドにも久方ぶりに新入りが入ったのを紹介しておこう」

「えーっ！ ネイラの言ってた事、ホントだったんだあ！」

「……信じてなかったの」

あの2人が、ネイラさんとエレロワさん。ネイラさんとは少しだ  
け話をした。

「アイリス、こっちへ来てくれるか」

「あっ、はい！」

その広い部屋は、その場所へ行くのにも大した距離感を感じる。  
やっとウェルトさんのところまで辿り着くと、みんなの方を向くよ  
うに立たされた。

「改めて、全員揃った中で紹介する。」

見渡すと、みんなそれぞれこちらを見ている。なんだか緊張する

な…、この感じ。

「リアンに所属することになった。ナンバー？、アイリスだ。ギルドランクはB、使用武器は夢想丸で…」

「ねえねえ総長さんっ」

「…なんだ、まだ話の途中」

「それは昨日ネイラに聞いたもん、だから知ってるよあ？」

「昨日会っていたのか？ それなら話が早い…」

それでも会ったのはネイラさんとだけだけど…。

すると、遠くからウェルトさんと対話していたエレロワさんがこちらへ向かってくる。

「あたし、エレロワって言うの！ よろしくねアイリスっ」

「えっ、あ…。よ、よろしくお願い…します」

こんなに小さく、そして誰よりも幼そうな顔立ちだ。いわゆる童顔、かな…。それとも元々若咲きなのか。

「んー、敬語はいいよあ？ あたし、きっとアイリスよりも年下だし」

昨日もネイラさんに言われた。私がかただ畏まり過ぎてるだけなのかな…。敬語や”さん”付けはそんなに受けが良くないようだ。

「…私も、だ」

「いつ…！」

突然背後から現れたネイラさん。変にゾクツとしてしまった。

「アイリス、何歳？」

「え、えつと…15歳」

「んじゃネイラと同じ年だねっ！良かったね、ネイラ！」

「…うん。だから、敬語、いらないよ。」

ネイラさんも15歳、か…。意外と年近い人が多いんだなあ。

「そうそう、あたしの事、呼び捨てで呼んでーっ？」

「…私の事も、だぞ」

「それくらいにしておけ、アイリスも急に言い寄られたら困るだろう？」

…と、ウエルトさんに止められた。とにかく、2人とも面白そうだなそうだ。ネイラちゃん、それとエレロワちゃんって呼んでいいのかな。でも出会ってすぐでそんなに簡単に馴染めない。もう少し一緒にいる間に自然と呼べるようになってくると思う。

「…さて、本題だ。これはアイリス、君に大きく関わって来る事だ。」

「えっ…？」

とりあえず、一旦席に戻ることにした。着席すると、ウエルトさんは何やら機械をいじってモニターに何かを表示させた。

「これがなんだか分かるな。」 夢想丸」だ」

「…夢想丸」

「まだみんなに話してなかったことがある。これを知ってるのは恐らくパーフィだけだろう。」

その言葉に、パーフィさんは1つ頷いた。そういえば、夢想丸は

パーフィさんの部屋に置いてあったものだった。何か知ってたのかな、彼女は。

「何なの？ そのことって」

「…夢想丸は、私たちの想像を遥かに超えた魔力の込められた魔剣。斬った者を、永遠の悪夢に落とすと言われる封魔剣なんだ」

「封魔剣……」

この話は、今朝ウエルトさんから直接聞いたんだ。斬った人を殺すことも出来るが、魂を死なさせずに永遠の悪夢に苦しめさせるというものだ。

私が鬼を倒した時には、まだこの魔力は表に出ていなかったらしい。けれど、私がこれを持つ様になってその力を徐々に取り戻しているみたいなんだ。

「アイリスはまだ完全にその刀をコントロールできない。そこで彼女に1人監視役を付けたいのだが」

「監視役って……」

エレナさんやリンさん、そんなもの必要ないと言わんばかりの表情をしている。

ジリリリリリ……ジリリリリリ……リリ……

話の途中のその時、話の腰を折るように電話の呼音が鳴り響いた。

「…はい、こちらリアンです」

なんだろう、みんなの話を聞くと朝は暇が多いって言ったんだけどな。電話のときは緊急任務がほとんどらしい。なんだか嫌な予感がする。

「 承知しました、こちらから3人向かわせます。 」  
「 ん、どうしたんだ〜? 」

ウエルトさんは電話を切ると、再び中央へ歩み戻った。エレナさんはそんな彼女に言葉を投げかけた。

「 ガリユルアートの兵士たちが事故を起こしたらしい。場所はセントガリアル砦だ 」

「 ええっ! ガリユルアートが事故って相当やばいんじゃないか? 」

ガリユルアート…、セントガリアル砦。聞いた事もない言葉だ。 組員、と言っていたから恐らくガリユルアートは何かの集団組織。そしてセントガリアル砦は、その名の通り砦なんだろう。

「 こちらに3人の救助小隊を任された。 治癒、戦闘回避、応戦の要素が必要だ 」

「 んじゃ、あたし行くよ。 」

「 エレナは決まりだな。あと治癒・応戦を頼めるのは…… 」

「 総長……、私、行く 」

「 拳手したのは ”ネイラちゃん” だ。そのか細い小さな声で、しっかりと言意見を述べる。 」

「 そうだな…、ではアイリス、キミにも頼めるか? 」

「 …ええっ! わ、私ですか…? しかも残ってるのって… 」

「 そう、『応戦』だ。もし敵に攻撃されたときにそれに応じて戦う係、というわけなんだが… 」

「 そ、そんなの…私に… 」



すると、また急に背後に現れたネイラちゃんに肩に手を置かれてこう言われた。

「私、アイリスの実力、信じるよ。誤解とはいえ、一度戦ったもんね」

「あ……」

「ん〜、決まりだな！ ウェルト、あたし達に任せなっ」

「ああ、頼んだぞ。エレナ、ネイラ、アイリス！」

エレナさんとネイラちゃん、か。ちよつと異色だけど頼もしい仲間だ。大丈夫、私には仲間とこの夢想丸が付いている。

§ §

私たちの住んでいる国は、『リウニオン』という名の国だ。山脈がとても多く、山岳地帯が広がっている国として有名ならしい。今飛んでいるところからでも、あらゆる方向に高くそびえ立つ山々が見える。

この救助任務で向かうセントガリアル砦は、このリウニオン国の国境にある巨大要塞。この国に入るための出入り口でもある。

「なんだ、アイリスも飛べるようになったんだな〜」

「あ、はい……。コロナさんに協力して貰って……」

突然始められた、秘密の特訓。「あたしも教えなかったのにーっ」とエレナさんがぼそつと呟いた。ホウキに乗りながらポケットに手をつっ込んで、タバコを取り出し火を着ける。ライターの中のオイルはユラユラと波打って揺れている。着いたタバコの煙も同じよう

にまた揺れている。

「エレナさん……」

「ん？ どうした？ ネイラ」

「…タバコ、けむい」

「あゝ、悪い悪いっ！ なるべくそっち行かないようにするからさ、煙」

そう言っつてパタパタと左手を左右に振って煙を掻き消す。タバコをくわえながら笑っているエレナさんは、やっぱり少し大人っぽいけれど笑顔はとても可愛らしくて愛くるしい。

「……アイリスはタバコ、吸っちゃダメだよ？」

「えっ…、す、吸わないよ…」

ネイラちゃんもなんだか他の人とは違う雰囲気かもを醸し出している。口数が少なくて、不思議な雰囲気。

そんな会話を繰り返していると、大きな山岳を抜けて派手に設立されている要塞が見えてきた。ここからでも大きさが一目で分かる。

「ほら、あれがセントガリアル砦だ。」

「想像してたのよりも大きい…」

「……戦乱は収まってるみたい、です」

「ん、分かるのか？ ネイラ」

「…例の怪我人さんは、建物の中、3階F室。状態は昏睡状態で止血済み」

ネイラちゃんは、両手を合わせてホウキに乗りながら目を瞑って  
そう言った。何をしてるんだろう、もしかしてこれも魔術マジックの1つな  
のかな。

「相変わらずだな、その探知魔術」

「いえ…。取り柄、それくらいしか、無いですから」

「……？」

\*\*\*\*\*

「あつ！ リアンの方々ですか！」

ネイラちゃんの案内でやってきたその部屋では、十数人の軍服を  
着た男性たちが横たわっていた。

「はい、状況の説明と怪我人の人数を」

エレナさんも、なんだか真剣になっている。やっぱり仕事に関し  
てはしっかりする、そんな人だ。

「敵軍は引き、怪我人はここに横たわる者々と他数名です」

「了解しました。ネイラ、治療の方頼んだよ」

「…はい」

そう言つと、ネイラさんは寝かされる男性たちの下へ駆け寄り、  
その包帯の巻かれた傷口に両手をかざす。すると、徐々に男性の苦  
しそつだった表情が和らいでいくように見えた。

「……エレナさん、南西の方角、敵軍が攻め入って来てる」  
「！ 追い返さないとな……。アイリス、ついてきてくれ」  
「は、はい！」

ネイラちゃん、あの状態で探知魔術まで……？ そして敵軍が攻め入ってる。戦う事になるのかな、その人たちと。

「残ってる兵士は避難させてください！ ここはあたしたちに任せ  
て！」

「し、しかしあなた方だけで」

「大丈夫だ、応戦する気はない。ただ追い払うだけさ」

「……！ 承知しました！」

そう言つて、その部屋に居た怪我人でない男性の人はその部屋を  
出て行った。

「アイリス、キミはその夢想丸を掲げていればいい。敵はその刀が  
怖いんだ」

「えっ……？」

「行くぞ。ネイラ、怪我人たちは任せた」

「……私も、終わったら追いつく」

エレナさんの後をつけて、要塞の外へ出た。南西の方角に敵軍、  
か……。怖いけど、エレナさんがいるからきつと大丈夫。それにし  
ても、夢想丸が怖いって……。やっぱりこれが”封魔剣”だから、なの  
かな？

しばらくその方向を飛んでいくと、ざっと30人くらいの黒い衣

を羽織った連中の姿があった。

「…アレかあ、考えてたのより多いな」

「だ、大丈夫なんですか…？」

「へへ、あたしのスピード、見てな！」

次の瞬間、私の目の前からエレナさんの姿がパツと消えた。と思うとすぐにその連中のいる場所の近くで何本も木々が倒れていく。…と、瞬きをしてる間にいつの間にか、エレナさんは私の横まで戻ってきていた。

「ふいふ、いつちよあがり！」

「ま、まだ15秒も経ってないですよ…」

「あはは、あたしのスピードはハヤブサを越えるんだ」

そう言っって私の肩を抱きVサインをする。

ずううううんんん……………！！

その時だった、要塞の方で妙な轟音が響き渡ってきた。

「な、何だ…？ アイリス、急いで向かうぞっ」

「はい！」

§ §

怪我人の手当ても終わり、ネイラの魔力もだんだんと底をついて

来ていた。

「……はあ、……はあ」

「た、助かりました……！ 貴女はリアンの方ですね」

「は、はい……。」

しばらくその魔術を多用していなかったため、感覚が鈍っていたのだった。探知魔術と治癒魔術を連続して使用し、一気に疲労が溜まってしまった。

「大丈夫ですか。我等のために、面目ない……」

「……………」

するとその時、建物内に煙の匂い。エレナのタバコの煙の匂いと、はまた違い、建物の焦げる匂い。

『 地下軍備室にて火災発生。直ちに避難せよ。繰り返す……』

建物内でサイレンと共に緊急アナウンスが流れる。

「か、火災……！ もしや奴らの」

「……………」

「こっしてはられない！」

そう言い置き、怪我の治った男性はネイラを置いて部屋を駆け出ていく。

「……………建物内に、敵のスパイ……？」

「その通りさ、お嬢ちゃん」

「……ッ！」

いきなり部屋の中に響く低い声。ネイラはバツと立ち上がり刀に手を置く。

「だ、誰……！」

「夢想丸はどこだ？ 吐けば逃がしてやる」

「ッ！ うっ……」

リーンのカナシバリとはまた違う。この動き封じの魔術はかなり高度の魔術。ネイラの動きは一瞬で止められてしまう。その足元にはまだ目が覚めない怪我人たちが寝転がっている。いつどうやってこの部屋に入ってきたのか。

「……さ、俺もそんなに時間があるわけじゃないんでな」

「……………」

「言え！ 夢想丸はどこだッ！」

ネイラはその状態でアイリスとエレナがこちらへ戻ってくるのを感じ取った。無駄に反抗せずにそのまま時間を稼ぐことにしたのだ。

しばらく敵の尋問は続いた。しかしネイラは全て黙ってやり過ぎる。

「……お前、意地でも喋らねえつもりか。だったら倒れてもらっ事にするか」

「倒れるのはお前の方だよっ」

「っ！？ ぐわああっ！」

さすが”光速の鳶”の異名を持つエレナ。気付かぬうちに敵の背後を突き、的確に射止める。

「…ふう〜、大丈夫か？ ネイラ」  
「ネイラちゃんっ！ だ、大丈夫…？」

遅れてアイリスも部屋へ戻ってきた。

「…アイリス、敬語無しで、呼んでくれた…」  
「あ…」  
「嬉しいよ、…ありがとうアイリス」

\*\*\*\*\*

結局、敵もエレナさんが追い払ってしまったし、ネイラさんも魔術の使いすぎですぐに眠ってしまった。私、何も出来なかったな…。

「お疲れ様っ、アイちゃん！」  
「あ…、コロナさん」

今日も夜月を見ながら、湯気の立ち込めるお風呂に浸かっていた。コロナさんは、桶の中にミーコちゃんを連れて湯舟の中へ。

「…今日も綺麗な月だねえ」

「みい〜」と静かに鳴くミーコちゃんも、何かこちらを見ている。湯気でへたれたそのフワフワする毛は夜風に流れている。

「今日は大変だったね、色々…」  
「…私、何も出来なかったです。ただついて行ってるだけで…」



「そんな事無いよ、エレナちゃんもアイちゃんの話ばかりしてたし」  
「……………」

ため息が湯気に混じる。そして風に流されてどこかへ消えていく。

「それに、ネイラともお友達になれたんでしょ？ 良かったじゃない」

「……………」お友達”。私…、村に住んでる頃は友達なんて数少なくて…。  
…。まだよく分からないんです…」

「ん〜、そんなに深く考えなくてもいいんじゃないかな？」

「えっ？」

「お友達って、一緒に笑い合えてれば友達じゃないかな？ ほら、私たちも！」

そう言っつて、コロナさんは私の手をそっと触る。お風呂に浸かっているせいなのか、はたまた元々なのかとても暖かい。

「……………」ネイラね、ここのギルドではそんなに目立つ子じゃなくてね。だからそんなに私達とも大きく関わる事は無かったの。でも、アイちゃんが友達になったんだったら、きつと明るくなれるはず。」

「私が……………。私に出来るでしょうか……………」

「うん。出来るよ、アイちゃんだもん。アイちゃんは、ただ剣の上手い子っただけじゃないんだよ。」

その言葉の意味、よく知りたいな。コロナさんの言葉、度々胸に染みるんだ。ちょっと天然で可愛いセンパイだけど、何度もその言葉たちに背中を押されるんだ。

夜は更けていき、また朝がやってくる。

明日はどんな日になるのかな。

明日も、頑張ろう

。

第10話 Friends said・(後書き)

(。・|・。)/

ロアグスです、ども！

今回はエレナとネイラとの絡みがメイン要素でした。そして幾つかの伏線も張りました！

そしてコロナは言葉の匠、だと…。ただの天然じゃないんですよッ  
(笑)

そしてそしてネイラは作者のお気に入り、と(爆)

## 第11話 年少組への試練

「おーい、エレロワ…?」

掛けてあつただろうその掛け布団は見事にベッドから転げ落ちており、枕と真逆の方向を向いて眠っている。私はリーンさんと共に彼女を起こしに行くよう命じられたのだった。

「お、起きませんね…」

「エレロワ…っ、朝ごはんだぞおーっ」

そう呼びかけても、エレロワちゃんの寝息は止まない。なんだか幸せそうに眠ってるから起こすのも気が引けるけど…、パーフィさんが呼んでたからちゃんと起こさないと。

「……ダメだよ、エレロワはこうしないと、起きないんだから」

「わっ！ ね、ネイラちゃん！」

ネイラちゃんはポケットに手をつ突っ込んで、何やら犬笛のような細い笛を取り出した。そして相変わらずリーンさんは私から離れない、と。

「ネイラ、それ何？」

「…笛、だよ。鳴らすね…。」

ピッ！

「わあッ！ 朝だあ！」

「あ、起きた」

必要以上に大きな音が鳴り響き、私もリンさんもビクッと飛び上がってしまった。そしてその音でエレロワちゃんも目が覚めたようだ。

「あ、おはよう〜みんな」

「……ね、起きたでしょ」

「あんだけ起こしたのに……、どんな耳してんだ？」

「えへへ、リンさんとアイリス仲良しだね」

「……話を聞けつての〜っ、このこの〜う」

「わあ！ きゃははっ、く、くすぐりたいよお〜っ！」

そのベッドの上は更にぐちゃぐちゃになってしまふ事に。リンさんとエレロワちゃんがくすぐり合ってるその横で、ネイラちゃんがこちらをチラッと見た。

「……お、おはよう、ネイラちゃん」

「……ふふっ、おはよ……」

なんだか不敵な笑みを浮かべていた。可愛らしくも、逆に怖かったりもするかも……。部屋はカーテンが閉まっただけで薄暗いし。

エレロワちゃんを連れて、私たちはパーフィさんの部屋へ向かった。

「パーフィさ〜ん、エレロワ連れて来たよん」

「ふにゃ……呼んだのってアフロさん？」

「わっ、ば、バカ！ アフロって言うなって……」

リンさんが慌ててエレロワちゃんの口を押さえる。見たところそんなに怒ってるようには見えないから安心。

「丁度いい、アイリスもここへ」  
「えっ、あ、はい!」

パーフィさんに手招きされ、エレロワちゃんと共に彼女の座る縁側のような場所へ腰を下ろした。畳の匂いが香っていて落ち着く空間だけあって、居心地のいい部屋だ。リンさんとネイラちゃんはいつの間にか部屋から出て行ってしまっていた。

「なんであたしとアイリスを呼んだの〜?」

「他に頼める連中がいなくて、お前たちに私から頼み事をしたいと思っただけ…」

「頼み事?」

「ああ、ウエルトたちにも頼めない大事なコトだ。」

\*\*\*\*\*

「じゃ、行って来るね〜っ!」

「い、行って来ます…」

私はエレロワちゃんと2人でその頼み事を引き受けることになった。

リアンの中で再年少の2人にしか頼めないという、パーフィさん直々の依頼だ。聞くとエレロワちゃんはまだ12歳! そんな彼女はいつもリアンの中でも”太陽のような存在(自称)”らしい。武器はダガーと呼ばれる短剣で、動きやすいようにと軽装備。

「気をつけてな。頼んだぞ」

パーフィさんに見送られ、私たちはそれぞれホウキにまたが跨り飛び上がる。エレロワちゃんもまだ完全に乗り切れてないのか、何度かフラつく。

「よっ、と…。ふう〜持ち直したあ」

「だ、大丈夫っ？」

「平気平気〜っ！ って、アイリス飛ぶの上手だね！」

あの時コロナさんが私に何をしたのか分からないままだけど、そのおかげあってかこんなにも早くホウキで空を舞えるようになったんだ。

§ §

アイリスとエレロワの出掛けていった後。

「なあマイリー？」

「いつ！ いきなり現れてなんですのっ？ びっくりした…！」

リーンは農民の娘として生まれ、マイリーは貴族の娘として生まれた身である。共にここリウニオン国で育ち、リーンが2年遅れてこのギルドへ属す事になった。その頃、一番年少であったマイリーがリーンの世話役として活動。後に結束力のある2人組として一目置かれるようになる。

「猫のエサ知らない？」

「エサ…？　なんで貴女がそんなものを？」  
「コロナさんが困ってるんだよ、助けてあげたいんだ」

ラディカ家は農家であり狩人ハンターでもある。リーンは10歳の頃までウサギやキジを狩って暮らしていた。狩りの方法は”ブーメラン”。弓は矢の消耗があり獲物の獲得確立も少ないため、投げたら返ってくるブーメランを使う。

「わかりませんわ、それにわたくしは今忙しくてよ？」  
「むう…、協力してくれたっていいじゃないかあ」

フレデリカ家のマイリーは幾つもの企業を手中に収める大富豪の娘である。厳格な両親の下に生まれたため、しっかりとした教育を受けてきた。箱入り娘とは違って、若くして人の上に立つ事のできる器の持ち主だった。

「仕方がない、ネイラに頼むかあ」

「　　知ってるよ。エサの置いてあるところ…」

「ッ！　び、びびびっくりするじゃんか…、急に出てこないでくれよあ」

「……リーンは意外と、臆病…？」

「んなっ、ち、違う！　急に現れたら誰だって驚くわ！」

両者は共に任務や依頼をこなし、その成功率も非常に高い。

中央室にて　。



「……様子は？」

「いい調子かもな。私の実家へ向かわせた、そこで力量を見極めてもらおう」

「そうか……。ケガして戻ってこなければいいがな」

ウエルトとパーフィの武人同士の会話。構成員たちは、この雰囲気には溶け込めないらしい。すごく空気が張り詰めていてコロナやエレナでも入りにくいようだ。

\*\*\*\*\*

「んにゃ、着いたねっ」

この辺であつてる……はず。パーフィさんの頼み事とは、この小包<sup>つみ</sup>を実家へ届けるというものだった。そして私たちが降り立った場所は、何やら竹の多く植えられている地帯の、そこにある賑やかな村。

「なんだか落ち着く場所……」

「ん……？ そっか、アイリスも田舎育ちだもんねえ」

ホウキを手に持ち直し、その村を歩いてみる事にした。パーフィさんが言ってたのはこの村にある大きなお屋敷らしいんだけど。

「くおらあつ！ 誰だお前らは！」  
「っ！」

びくっ！ と全身が逆立った感覚がした。後方で何やら男の人の声が出たんだ。

「おっとそこを動くな！ 怪しい奴らめー、俺が退治してくれ」

「怪しい奴なんかじゃないもん！」

「…その胸のマーク、リアンの者か。だったら早く言えっつてんだよ  
ったく…」  
「……？」

この人は誰なのか分からないままだけど、リアンを知っているようだ。手招きして先を歩いていく。私はエレロワちゃんと顔を見合わせて、なんとなくその後について歩いた。

「おら、ココだ。お爺様には粗相のないようにな！」  
「えっ…、あ、あのっ！」  
「……行っちゃったね。アイリス、でもここみただよ！」

その男性は走り去って行ってしまった。エレロワちゃんの指差す方向に、大きくパーファイ家の文字が書かれている。ここがパーファイさんの実家みたいだ。

私たちは早速中に入ろうとするが…。

「ねえアイリス？ いんたーふおんって無いのかなあ？」  
「い、いんたーふおん…？ あ、呼び鈴のこと？」  
「ん？ これかなあ」

エレロワちゃんが手にしたのは、見た目どおりの呼び鈴だった。

「ゴーン……、ゴーン……。それを一振りするだけで、何度も鈴の音が響き渡る。」

「む？ おお、来なさったか」

門が開き、その奥に立っていたのは何やら威厳のありそうなお爺さんだ。

「あの、お、お届け物で……」

「うむ。まあ上がっていきなさい。長旅で疲れたろう」

背中には大きく長い刀を掛けている。パーフィさんと同じような刀だ。しかもその鞘が凄く立派で、家紋のようなものが彫られている。

第11話 年少組への試練（後書き）

（ ）（エ）（ ）（ ）

どうも、ロアグスです！

今回は薄めの回でしたが、新キャラ登場ですね。男キャラです、待望の（笑

さて、どういう絡みになっていくのか。次話をどうぞお楽しみください。

## 第12話 空を見上げる少女

「そうか、アフロディテがこれをお」

小さく包まれた小包みをお爺さんに手渡した。畳の繊維一本のような紐で縛られていて、それを黒い布が被せてある。何が入っているのか分からないけれど、手のひらに丁度乗る程度のものだ。

私とエレロワちゃんの2人は客室へ促され、畳の上に正座してお茶を口に運んでいた。

「ん〜！ お茶熱ーいっ」

「ほっほっほ、舌を火傷せぬようにな。」

横のエレロワちゃんは、「べー…」と苦い顔をして舌を出している。私はこのようなお茶には慣れてるからすんなり飲む事ができるのだけだ。

「…キミのその刀、ちよいと見せてくれんかの」

「えっ？ …あ、はい」

腰に下げていた夢想丸を鞘ごと引き抜いてお爺さんに手渡す。何か依然と不思議な雰囲気かまを醸し出すその刀は、その手の中で怪しく光る。

「ふむ。いい調子じゃな」

「…？」

「ほれ、……」  
「じつ握るとどつじゅ？」

「ッ…！」

次の瞬間、胸の奥が何かに驚掴みにされたような痛みが私を襲った…！

「あ…！ うぐっ……」

「わっわっ！ アイリスっ!?」

「…なるほど、こんなにも進んでおるのか。すまぬ、夢想丸がキミにどれ程なついているのか試したかったんじゃ」

急に息ができなくなって、心臓を握られたような苦しい感覚が胸の奥に走った。お爺さんが夢想丸から手を離すと、その痛みからも解放される。

「あ、アイリス！ だいじょーぶ？」

「う、うん。でも、夢想丸が私になつくって…?」

「うむ。この夢想丸が”人を選ぶ刀“というのは知っているかね」

そうだ、ウエルトさんが言っていた。夢想丸は私を選んだんだけってよく意味がわからなかったけど、これだけ言われるとそれを信じることもできてくる。

「…この刀はな、キミの核かくとリンクしてある」

「私の、核…?」

核、それは細胞の一つ一つに宿るもの。俗にDNAとも呼ばれるものだ。

「だから、この刀が今みたいに刺激されれば、キミの身体に痛みが流れ出す。」

「……でも、それをどうして…?」

お爺さんは私に夢想丸をそつと返し、その刀をキュツと握り締め  
た。

「ワシらパーフィ家の家宝の1つなんじゃ。それは」

「…家宝？　これが……」

「それゆえ、アフロディテもその刀に触れる事ができる。その刀に  
認められぬ者は、触れることすらまま成らん。」

ウエルトさんが前にこの刀に触れたとき…、目に見えるほどの電  
流が彼女を襲ったのを覚えている。

「さて、ではキミたちにお礼をしようかね」

「え、お礼っ？」

今まで黙りこくっていたエレロワちゃんが前に出てきて、目を輝  
かせていた。

「うわあ〜っ！　おいしそあ〜っ」

「うちで作っている数多の野菜じゃ。アフロディテにも食べさせた  
いしのお」

§ §

一方、リアンの本部では　。

「なあ、アイリスたちは？」  
「私もわかんないよあつ」

エレナとコロナの2人が中央室にて菓子作りに励んでいた。その匂いにつられ、ずらずらと猫の行列が並ぶ。

「エレロワもないみたいだし…、一緒に出かけていったのかなあ」  
「……コロナさん」

「わあ！？ な、なーんだネイラちゃんかあ」

「あれ、ネイラって夜じゃなかったか？ 仕事は」

「……お腹、空いたんで」

夜勤のネイラは、この中で一番任務の成功率の高い存在であり、且つ一番多くの任務をこなしている。言わば縁の下の力持ちと言ったところだ。

時々このような気の抜けたような言葉が辺りを和ませる。

そしてこちらはリーンとマイリーの部屋。マイリーは窓際で読書、リーンは大好きな雑誌をベッドの上に寝転がりながら読んでいた。

「……はあ、もう飽きた」

「……。」

「ねえマイリー、あたしと模擬戦でもしない？」

「……。」

まるでリーンしか時が動いていないように、あたりの物という物が静止している。当然マイリー自体も。読書に耽っていて全く気付かない様子。



「マイリーったら〜！ おーい！」

「……………」

「だーっ！ 聞いてよーッ！！」

「きゃっ！ な、なんですよっ！？」

数回の呼びかけでやっと気付くマイリー。

「も〜っ、あたしと模擬戦でもしないかって言ったの〜！」

「お断りですわ」

「ど、どうしてさーっ」

次の言葉、それはリーンに傷を負わせるものでもあった…。

「もう3年近くもソルジャーをやってるのに…、未だにランクBの貴女となんてやれますか。まだ入って間もないアイリスの方がよっぽど優秀ですわ」

「なっ…！ あ、アイリスは関係ないだろっ？」

「…それに、暇つぶしのために相手するんだったら読書してる方が有意義ですわ。」

その言葉を聞いて、リーンは部屋から飛び出した。何も言わずに、冷たく応対するマイリーへの悔しい気持ちを心に残し。

\*\*\*\*\*

「……………」

幼き少女が父に口にした言葉。星の原理だとか、気候の関係でその色に染まるだとか論的に色々と述べる事だつて出来るその疑問。しかし彼女が望んでいた答えはそんなものではない。

「お前の心だからさ」

「あたしの心…？ それってどういう意味」

ラディカ家の家長である父との、最初で最後の冒険。2人きりで深い山の中へ潜っていったのだ。星空を寄り近くで見るために。

「お爺様が俺に言ったこの言葉の意味は、父さんにもわからんさ。いつか説明してくれよ、リン」

「だってあたしバカだもん…」

「そんなことないぞ？ リンはお利口な子だ。そして純粹で透き通った心を持つてる」

「…父さんの言ってる事、わかんない。」

リン・ラディカ、9歳。彼女がソルジャーを指すキツカケを手にした年でもある。そしてこの言葉を受け取った年でも…。

「お前が、自分で見つけるんだ。それでこそ俺の娘だよ」

やっぱり、よくわかんないや。でもなんだか、…空がいつもより大きく見えた。

「…さて！ リン、ウサギを狩りに行くぞ〜お」

「うん！」

ウサギ追いし、かの山。木々は身を染め、木枯らし吹き。

紅葉舞い落ちて、父は背を向け前歩き…。

「何ッ!? ドウカックだと…!?」

2人が村に戻ると、夜中なのにも関わらず村中の家から電球の光が漏れていた。

「はい、何でも既に10人ほど…」

「そんなバカな! 魔よけの結界はどうした!」

「ドウカックによって破壊されました…!」

「くそっ…! リーンを頼んだぞ、俺は様子を見てくる!」

そうやって父の姿は闇に消えていった。リーンの肩を押さえて後を負わせないように固定。

「…ねえ、ドウカックって何?」

「リーンちゃんは”カナシバリ”って知ってるかい?」

「うん。起きてるのに体が動かなくなる、あれでしょ」

「そう、ドウカックは金縛りで生命を絶つ魔物だ。」

金縛り、人を含む生物に、睡眠中に起こる現象だ。

「気をつける! こっちに来るぞ」

「くそ…っ! リーンちゃん、こっちへ隠れてるんだ!」

リーンの背を押し物陰へ押し込み、男は悲鳴のする方へ駆けて行

った。

そしてしばらくして、あたりの音と言う音が一切聞こえなくなった。リーンの周りには誰もいない、何も無い。

「…父さん、帰ろうよお」

だんだん不安が募ってくる。もしかしてドウカックはこちらへも来るんじゃないか。

もうこちらへ歩き出してるかもしれない。

あと少して自分は死ぬのかもしれない、まだやりたい事はたくさんある。

「うぐっ…」

急に視界が揺らいだ。少女はその場に倒れる少女を見た。……自分だった。倒れているのは、抜け殻になった自分。

\*\*\*\*\*

「……未だに会えてないや、あれから」

§ §

「話は終わったのか？」

「わっ！」

私たちはお爺さんに手土産を貰って、その家を後にした。その扉の影からさっきの男の人が急に現れて転びそうになった。

「あつ、さっきの口悪い人だあ……」

「ハン。ガキは黙ってる」

「あう〜アイリスう、苛められてるよお」

確かにちよつと口調が嫌かな…、なんだか鋭く睨むような目つきもしてるし。

「お前、名前は？」

「わ、私…？」

「……そつだ、お前だよ」

この人、なんだか怖いな。私の顔一つ分くらいの高い背丈の顔が迫ってくる。

「…アイリス」

「お前がアイリス…か。ちよつと来い」

そう言っていきなり左手を鷲づかみにされ、人通りをずかずかと進んでいく。私の身体はそれに引かれ半分引きずられながら歩いていく。エレロワちゃんもそれについて歩く。

剣道場。私が連れてこられた場所は、うぐいす張りの木で作られた横に大きな建物だった。

「アイリス、剣を抜け！ 勝負だ！」

「えっ！ な、何で勝負…？」

その人は、腰の刀を素早く抜き取り、私の方向へ向けて見せた。

「まあ待つんじゃないや、ウィード」

「んなつ！ 爺様…！」

すると、その建物の奥からさっきのお爺さんが姿を現した。

第12話 空を見上げる少女（後書き）

いつもありがとうございます、ロアグスです。

やっぱり学校が始まった関係で更新が遅いですね……。すいません。  
r z

さて、今回はリーンの過去をちょこっとだけ明らかにしたのですが、これも何かの伏線としてお受け取りくださいませ。

### 第13話 風吹く曇り空

「豪風剣！」

その剣から放たれた大きな風の風圧で私の身体は吹き飛ばされてしまった。「まだまだあ！」と彼も次を構える。彼、ウィードは私に”夢想丸に相応しいかどうか”を確かめるために戦うと言った。

「おらあ！ 掛かって来いよ！」

そんな私たちの戦いをじっと見守るエレロワちゃんと、刀を下げたお爺さん。既にボロボロな私に容赦なく立てつくウィードは、再び剣を高く掲げる。

夢想丸をしつかりと握りなおし、それを弾き返して一旦その場から数歩下がる。

「逃げてばかりじゃ俺には勝てねえぞ！」

「……うくっ……」

ウィードの放った剣技によって建物は半ば倒壊していた。そのせいもあってか、お爺さんは少々呆れ顔で彼を見ていた。

「その夢想丸はの、かつては我らパーフィ家のものじゃった。」  
「えっ……？」

それはウィードと戦う前にお爺さんに言われた事。



「ウィードはその夢想丸を取り返したいのじゃよ。一族の中で唯一の男じゃからの……」

「そ、そうなんですか……」

「じゃが夢想丸は弱い者には扱えぬ。対峙して勝った方が本当の所持者じゃ。」

夢想丸、なんだかよく分からないままだけ……。手放してはいけない気がしてならないんだ。なんというか、私の心にしがみついているというか、そんな感じ。

「……行きますっ!」

「よし、来い!!」

夢想丸を横に構えて、一気に前進。勢いよく斬りかかるが、流石にスツと避けられてしまい、少々よろけてしまった。

「はあっ……ま、まだまだ!」

ガンツ……キインツ……! 金属同士のぶつかり合う音が、もはや心地いい。ウィードの使う剣もかなり鋭く磨かれていて触れるだけで切り傷が出来てしまう程だった。

何度か攻防戦を繰り返していると、ウィードが少しだけスキを作った。

「やああッ!」

刃の反対側で、強く叩きつける。俗に言う“みねうち”。

ウィードはそのままその場に倒れ、「いつてえ〜！」と叩かれた部分を押さえて悶えていた。

「わぁーっ、やったアイリスの勝ちだぁ！」

そう言ってエレロワちゃんが駆け寄ってきた。その直後にウィードがむくつと立ち上がって、吹っ飛んだ剣を鞘に収めてこつちを向いた。

「……………」

「あ、あの」

少し睨みを利かせてるのか、それこそ鋭い剣のような視線で私の目を見つめている。

「みねうちなんて、なめたマネするじゃねえか。こんな甘いヤツに夢想丸が使える見込みなんて感じられねえ」

「うー、でもアイリスが勝ったんだもん！ 負けを認めろお」

「ツるせえ！ ガキは黙ってるって言ってるんだろ！」

怖い顔で怒鳴られて、エレロワちゃんは私の背後に隠れてしまった。なにもそんなに怒鳴らなくてもいいのに、と思った。

「まあまあ、それまでじゃ。ウィード」

「爺様！ まだ勝負は終わってねえ、邪魔すんな！」

「…みねうちが決まった以上、勝負は決まりじゃ。これは基本剣法じゃぞ？」

「うぐ……………」

とにかくにも、なんとか私はウィードを負かす事ができた、の

かな。魔術もまだ十分に使えない私だけど、このまま夢想丸を扱えるのかよつとだけ心配だった。

\*\*\*\*\*

そして、私たちはリアン本部へ帰還した。

「よつ、おかえりい」

本部に入ると、第一声を掛けてくれたのはエレナさんだった。いつものようにタバコを片手に、少々寒そうな格好。

「奥でウェルトとアフロが待ってるよ」

「あ、はい！」

エレロワちゃんと別れて、私は一人奥の部屋へ向かった。それにしても、本部にいつものような賑やかさが無い。コロナさんたちは出かけてるのかな……。

「失礼します」

「ん、帰ってきたか。アイリス」

部屋に向かい合って座って、ウェルトさんとパーフィさんはなにやら一冊の本を眺めていた。

今日は日が暮れる前に帰ってきた。それもあって、まだ本部に戻ってきている人が少なかった。  
なんだか今日は疲れたので、ベッドに横になって猫のミーコちゃんと同じやれて遊んでいた。

「んみやあ〜、ごろごろ」

少しだけ真ん丸な身体で、ヒゲは長く毛並みはかなり良い。そんなミーコちゃんを優しく撫で回すと、それに相応してかわいい仕草を見せてくれる。

「あははっ、くすぐったいよう」

「みやあみやあ」

ちよっぴり眠たくなってきちゃった…。頭がボーッ…としてきて、まぶたが重くなってくる。

みいみい……。ふにゃあ。

怖がるな。痛みを怖がるな。明日を怖がるな。これからを怖がるな。  
な。

寒さに負けるな。冷酷さに負けるな。孤独という寒さに負けるな。

「え……っ？」

夢想だ。

夢想しろ。

お前の夢はなんだ？ 強くなる事か？ ただそれだけなのか？

「……私は大事な人を守りたい」

ならば我を受け入れろ。今のお前は、我の力を発揮できていない。力を求めるのならば、我を解放しろ。憎き　　の血を。

消　　シ　　去　　レ　　。

「　　！！！！」

すごく禍々しい声が頭の中に響いて、私はガバツと身を起こした。その拍子でミーコちゃんが転がってベッドから落ちてしまった。

「ふみやあ……っ」

「あつ！　ご、ゴメンね……ミーコちゃん」

心臓が止まりそうな、すごく怖く低い声。それは私の中から聞こえたのか、どこからともなく聞こえたのかも分からないけど、確かに声はした。

「消し去れ」って……、どうして？　どうしてあの人の血を……。

「　　……………アイリス」

「ひゃあっ!」

と、いきなりベッドの上にネイラちゃんが見れたのに、かなりビツクリして変な悲鳴をあげてベッドの柵に頭をぶつけた……。

「いててて…」

「……アイリス、ドジっ子?」

「ち、違うよ〜」

ネイラちゃんに「ふふっ」と笑われて、ちょっぴり恥ずかしくなってしまう。

「……かわいいじゃんっ」

「へ……?」

「エレナさんが、呼んでたよ……。行ってあげて」

「あ、うん……?」

疑問符が頭に残ったまま、とりあえず私はエレナさんの元へ向かった。私に何か用事なのかな…?

駆け足でエレナさんのいる部屋へ向かうと、さっき吸っていたタバコを丁度灰皿に磨り潰しているところだった。

「おっ、アイリス〜っ!」

そう言ってエレナさんは、洗面具を持ってこちらへ歩み寄ってきた。

「一緒に入るっ! 風呂」

「え、あ…はい!」

なんだ…、お風呂に入るお誘いだっただ。変に緊張してしまた自分がバカらしい…。なんだろう、さっきのあの声を聞いて少し気が立ってるのかな。落ち着かなきゃ……。

今日は少しだけ曇っていて月が何度も雲に隠れる。

「そう何度もいい天気は続かないかあ」

エレナさんもなんだか残念そうに湯舟に浸かっていた。確かにここ何日かは天気がいい日が続いていたし、毎晩月を見ながらこうしてお湯に浸かっていた。だから私も少し残念だな……。

「アイリスうゝ、よく見たらスタイルいいじゃん」

「そ、そんなことないです…」

少なくともエレナさんには勝てないよね…。

「村で男たちが放っておかなかつただろ？」

「私…男の人とあんまり関わりないですもん」

「うゝん、それはそれで味があるね」

変な会話…、と内心少しだけ思ってしまった。男の人とは本当に関わりが少なかった。お父さんももういないし、私の暮らしていた村はそんなに男の人が多くも無かった。

そう言えばさっきのウィードも男の子だ…。あの時はそんなに意識してなかったけど、今思い返すとちょっと恥ずかしくなってきたやうな……。

「……私もいいか、2人とも」

「ん？ お、アフ」

べしッ！

パーフィさんの厳しい張り手（？）がエレナさんの背中を勢いよくはたいた。

「いってえ〜っ、何すんだよお」

「…ふ、背中に隙を作ったな。エレナ」

にやりとなんだか楽しそうに笑うパーフィさんに、本気で痛がるエレナさん。

「ふふっ…、アイリスも味わってみるか？」

「け、結構です〜っ」

月が見えない空でも、明日の朝にはまた晴れてるかな。

明日、また明日と色んな出会いが私を待ってる。そんな気がした。



### 第13話 風吹く曇り空（後書き）

（\* o ）ゝ

お久しぶりです、Lorexです。

気が向いたのでこちらも更新始めます！ 放ったらかしにするのも

気が引けるので；

んでは、いつも読んでいただきありがとうございますーっ！

## 第14話 吹き抜く潮風は

「起きろコロナ！ もう昼過ぎだぞ！」

日はすっかり昇り、天気も好調。アイリスとエレナ、コロナの3人部屋は特に日差しがよく入る部屋でもある。

ウエルトが中々起きてこないコロナを起こしに、この部屋までやってきたのだった。

「んん……。まだ寝るーのおーっ」

「ったく、夜勤のネイラも起きてるといふのに……」

そう言ってウエルトはその掛け布団を引っぺがした。コロナの周りには数十匹の猫が丸まって寝ていた。

「ううー、寒い」

「アイリスは一人で特訓に行ったぞ？ お前が中々起きないもんだから……」

「あぁっ！ そうだったあゝっ！」

と、今度は急にベッドから飛び起きて、パツパと身支度を始めた。

「ウエルトちゃん！ 猫たちにエサあげといてっ」

「あ、おい！ コロナ！」

重みのある大きな袋をウエルトに投げ渡し、コロナは猛スピードで部屋を飛び出していった。

「……………」

中央室、上層部の3人が共に間食を摘んでいた。

「あーコロナ、夜中に帰ってきたからな」

「そ、そうなのか？」

「うん。なんでも魔物退治に行つてたそうだよ」

夜遅く起きていたエレナだからこそ知っていること。ウエルトとパーフィはその話を聞きながらコーヒーを口に運んで一息ついていた。

「それでも、ここの起床時間を大幅に過ぎていた。上層部として少々ばかり対応せねばな」

「んゝ…でもさあ、コロナは別に悪気があつて規則破つてるんじゃないかと……」

「あいつはいつもそうやって処置を逃れてきている。ここの長として私は厳しく対応しなくてはならないんだ」

コロナへの処置。今まで彼女は上層部ということだけでなんとかそれを逃れてきていたが、ウエルトも総長として厳しく対応すべきと考えたのだった。

単なる注意でも構わないのだが、それでコロナが反省するのかどうかと考えればそれはそれで否めない気もしないでもないわけで。

「……おはよーいございます」

「うわぁっ!?!」

…と、いつもの通り急に現れるネイラ。

「アイリスは、どこ…?」

ネイラは、少しだけ視線を下げて問いかけた。

「魔術の特訓に行ってるよ。岸边の方に行ってみな」  
「……うん」

小さく頷くと、ネイラはそのまま外へ飛び出していった。その姿に少しだけ違和感を抱きつつウエルトたちは会話を続ける事にした。

「んで? コロナのことはどうするんだ?」

「……後々、私から言うておく。それに今日は休養日だ。2人もゆつくりと休んでおいてくれ」

「ん、あいよー」

「それからパーフィ。“夢想丸”のことで話がある。あとで私の部屋へ」

「…了解。」

§ §

水面はビシャシャと激しく水しぶきを上げて、まるで鯉が踊り泳ぎしてるような荒波が立ち上がる。

「うっ」

もう何回目だろうか。ホウキのスピードを上げるたびにコントロールが効かなくなつて海に身を投じられる。全身びしょ濡れになつてしまい、なるべく日の当たるところで温まっていた。それでも、たまに吹く潮風が身に刺さるように寒くてどうしようもできなかった。

ここから本部へ戻るのにも、ホウキに乗って行かないといけない距離のところにいる。肝心のホウキは水に濡れて萎びしなびてしまつてい

る。  
「っ、は……ツくしゅっ…！」

今日はコロナも遅くまで寝ていたし、休養日だけあつて気を使つてしまい。みんな忙しそうだったので一人で特訓を始める事になつてしまつていた。

そろそろ本格的に風邪を引く寒さに達していた。頭がポーツと暑くなり、思考回路も機能にブレーキを掛けている。

「……………見、つ、け、た」

「ひえっ！ わぁあ〜ッ！」

ドボン……………。

急に背後でした声に、ものすごく驚き変な裏返つた声が出て、衝撃で……………また海に落ちた。

「あははっ……………ふふ……………」

「も、もう……………ひどいよ、ネイラちゃん。驚かすなんてさ」

相変わらずその小さな声でくすくす笑うネイラに、何か不思議な視線を向けていた。

「……アイリス、休養日なのに頑張ってるね」

「う、うん。この前の任務…私、役に立てなかったから」

「……………偉いね」

そう言うとネイラはすつと立ち上がり水平線の方を指差した。すると海が一気に2つに割れ、一本のラインを水平線の向こうまで描いていく。これもネイラの魔術なのだろうか。

「…アイリスにも、これくらいは、出来るんじゃないかな」

「ええっ！ む、無理だと思うけど…」

「そんな根拠、ないでしょ…？」

時々こう言った尖った言葉を飛ばしてくる。確かに出来ない根拠は無いけど、出来る根拠も無い。海を一瞬で左右に割るほど大きな魔力、自分の中に宿ってる筈が無い。

半信半疑ながら、アイリスはネイラの先導に基づいて特訓を始めた。びしょ濡れだった服は少し乾き、ネイラの持ってきた毛布を身体に包んだまま。まだ湿っぱいせいもあってか、少しだけ気持ち悪い。

\*\*\*\*\*

「『地獄に眠りし魔刀』？」

ウエルトの読んでいた本のタイトルだ。夢想丸の伝説について誰

が書いたかも分からない書物を、解読したものが掲載されているもの。

「パーフィ、ゲンド様から手紙が届いたそうだな」

「…その透視能力、衰えないな」

「お前の隠し事の多さも、衰えを感じないのだが」

ウエルトの透視する魔術。相手の思想、感情、意思などを大まかに分析する事ができる。

「ふふつ、ならお互い様か」

「それはそれとして。パーフィ、手紙の内容は？」

「ああ…。」

パーフィはポケットからその手紙を取り出しウエルトに手渡した。ごくありふれた普通の一枚紙だ。

「……………やはりゲンド様も気付いていたか」

「お爺様は、アイリスとウィードを戦わせて夢想丸の状況を見極めたよつだ。」

その内容、それは誰も望まなかった状態と、これからの不安感を増幅させるものでもあった。

「どうする、ウエルト。このままだとアイリスは……………」

「……………今は何とも言えない。コロナのこともあるしな。様子を見る」

その数時間後。

ウエルトはコロナを呼び出し海岸に立っていた。

「ウエルトちゃん！ ゴメンゴメン、遅れちゃって…えへへ」

「……いや、そんなには待ってない。」

打ち寄せる波は、日が暮れるほどに満ちていき砂浜を飲み込んでいく。その様子がウエルトには、アイリスと夢想丸の絵図式のように見えて、何度か足で踏み蹴った。

「どーしたの？ お話って」

そんなウエルトの動作にも動じず、コロナはその長い髪を揺らし、ウエルトに近づいた。潮風は夕暮れの寒さと混じり徐々に冷たくなって2人の間を吹き抜けていった。

「コロナ。今日はどこへ行っていた？」

「えっ？ え、えっと…」

「あの魔物のところへ行っていたんだらう？」

「…！」

その言葉にコロナは一步後ずさりしてしまう。

「ど、どうして…知ってるの？」

「分かるさ。私の透視能力を忘れたのか？」

「………」

「任務は、失敗したんだらう。そして多数の犠牲を生んでしまった

」

「や、やめて…っ…！」



耳を塞いだままコロナはその場に膝を曲げてしゃがみ込んだ。ウエルトはそれを見て少しだけ歩み寄り、言葉を続けた。

「……その中に、あいつもいたんだろ？」

「やめてっば…！」

ウエルトが視線をずらすと、コロナの双剣は2本ともズタズタに傷ついており使い物にならないほど。金属がここまで傷だらけになるのかと思うほど、痛々しい傷跡が剣の刃の部分を埋め尽くしていた。

「コロナ。リミレットに会ったんだろ？ 何を言われたんだ」

「……さすがのウエルトちゃんでも、それは言えない。」

「私はリアンの総長だ。任務中に起こったことなら報告して貰わないとそれなりの処分をしなくてはならないんだ」

「じゃあ、じゃあ私はここから出て行って言うの…？ ど、どうしても…このことは絶対言えないもん…」

しばらく沈黙が続き、その間をまた潮風が吹き抜ける。コロナはそっと両手を元に戻し、しゃがみ込んだまま海のほうへ視線をずらした。

「私はお前に、ここを抜けるなんて思わないさ。ただ…リミレットは私の仲間でもある」

「……そんなの、そんなのわかってる！ 私たち5人…一緒だったし。ずっと」

「コロナ、私はそれなりの処分を……お前に下す。だが、ここを抜けてほしくは無いんだ…」



## 第14話 吹き抜く潮風は（後書き）

（一一一ノ、'（）ノ）

Lorexです。こんにちわこんばんわ。

今回は少しシリアス展開となりました。いつもほのぼのとしていたので、たまにはこういってお話も。

さて次話ですが、気になるコロナの暗躍として番外編を書きたいなと思っております。

## 第15話 コロナ・エミリア

ギルドナンバー？、コロナ・エミリア。

水と火のエネルギーが宿った双剣を使いこなす、ギルド・リアンの上層部の一人である。Aランク、任務成功率は78.3%。座右の銘は『猫にも小判』。

アイちゃんとエレロワちゃんが2人で出かけていたその日のこと。私はその日何もすることがなくて、本部の建物の中を行ったり来たりぶらぶらしていた。

「あれ、コロナさんっ」

「ふえ…？ リーンちゃんかぁ。おはよぉ」

パジャマから普段着に着替えたリーンちゃんに出くわした。そのフワツとしたショートヘアは少しだけ寝癖で跳ねていて、時折彼女はそれを気にしながら手で押さえつけたりしている。

「今日はお休みなんですか？」

「うん…、体力は有り余ってるんだけどね」

「なんか依頼表の方を整理して欲しいみたいで…、あたし一人じゃ出来そうになかったから、その…」

「あ、じゃあ私もそれやるよぉ」

良かった、ちょっとした仕事でもしておかなくちゃ。またウェルトちゃんに怒られちゃうし。そうと決まればちゃちゃっと仕上げちゃおうとー！

\*\*\*\*\*

「わあ〜……、散らかってるねえ」

「ウエルトさんが見たらすごいことになりそうなんで……。」

「そうだね、んじゃ片付けちゃおっか」

その部屋の机の上に散らばった依頼表の数々。ランクD（依頼主の家の留守番など）の依頼から、ランクS（命の危険と隣り合わせのデンジャー任務）まで数は様々。私はこれまでランクSの任務は2回ほど成功してるけど、それもほとんど偶然に等しい成功だった。Sランクを一番成功してるのは、やっぱり総長のウエルトちゃん……というより、ランクSの任務しか受けてないんじゃないかな？ そんな気もする。

「ん〜っ、紙の束がこんなに重いかあ〜！」

「あはは……、ちよつとずつ運べばいいのに」

リンちゃんは、机上の依頼表を掻き集めてそれをひとつの束にして棚の方へ運んでいた。ランク別に分類しなくちゃならないのに……。ま、いつか。

すると、その束の一番下の紙がヒラヒラと曲線を描いて床に落ちた。

「わ、ランクSだあ……」

「コロナさん、あたしもうダメ〜っ！」

「ふんふん……。流行病はやしびょう、かあ」

“ 求む、夢遊病の治癒薬。又は治療者。 ”

なんでソルジャーのギルドにこんな依頼を送ったんだろう？ と  
ちよつとだけ考えてみたけど、答えは出ずに謎しか生まれなかった。

「わああッ！」

ドサドサドサツ！ 丁度私の後ろでリーンちゃんが紙の束と一緒に引っくり返った。ちよつとだけ可笑しくて笑ったら、リーンちゃんに「むうう」と膨れっ面をされちゃった。

それにしても……、流行病。なんだか変に気に掛かるやつを見つけてちゃったなあ。内緒で受諾しちゃおうかな？ 治癒薬なら結構取り揃えてるし。

そうと決まれば、早速行動！ ウェルトちゃんの印を押さないと受諾は完了しないから、そつと忍び込んで判子を押さないとね。

「……………ウェルトちゃん、いないよね…？」

自分の耳にも微かにしか聞こえない小さな声で、ウェルトちゃんの部屋にネズミのように忍び込んだ。気配はしない、タイラズブレードも置いてない。どうやらこの部屋にはいないようだ。

「あつたあつた、これだよね…」

任務受諾と大きく彫られた印。赤いインクが少し滲んじやっただけ、とにかくこれで依頼の受諾は完了。

場所は…。 “ サウスヘレネント島 ”。ここからハウキでかつ飛ばせばすぐに着く場所だ。

「よーしっ！ 行くぞおっ」

「どこに行くんですか？」

「いつ…！？」

と、振り返るとそこに立っていたのは…、

「あ、マイリーちゃん…？ お、おはよお」

「おはようございます。それより、勝手に総長の部屋に忍び込んで…何をしてるんですの？」

「え、っど〜。ウエルトちゃんにこの書類持ってくるように言われてね、えへへ」

「……そうでしたか。わたくしはてっきり何かイタズラでも仕込んでるのかと…」

「そ、そんなことしないよお、もうマイリーちゃんったらあ」

メガネ越しの眼光は、驚くほどに私を突き抜けるように刺し光っていた。マイリーちゃんは相変わらずマジメさんだからなあ…、そこが彼女のいいところなだけだね。

「コロナさん、リーンを見かけたらこう言ってお下さいませんか？」

「ん？」

「……掃除当番、今日は貴女ですよ。って…」

「あははは…。りよ、了解」

マイリーちゃんには頭が上がらないや…はは。

依頼主の元へ一本連絡をし、待ち合わせ場所を確認しておこう。

裏口からそっと出よう。きっと中央室はエレナちゃんやネイラち

ちゃんもいるだろうし。

すると、前方に再びリーンちゃんの姿が目映る。マイリーちゃんの伝言もあるし、声掛けようかな。

「リーンちゃん、こんなところで何してるの？」

「…コロナさんこそ。ホウキ持って双剣背負ってどこ行くんですかあ」

「え、いやあ…ちょっとね。(ウエルトちゃんにはナイショだよ…)」

「あたし、今日掃除当番だったの思い出して。またマイリーに説教喰らうのもイヤですし」

あ、なんだ…。自分で気付いてたね。

「あっ！ ミーコちゃんにエサ上げるの忘れてた…っ」

「ね、ネコ…」

「お願いリーンちゃん、ミーコちゃんたちに朝ご飯あげておいて〜！」

「えっ！ ちょ、ちょっとコロナさあ〜ん」

そう言い残して、そこからホウキに飛び乗って滑走した。一応ラックSの任務だからね、日が暮れるまでに帰らなきゃだし、急いで向かおう。リーンちゃん、ゴメンっ！

§ §

へレネント島。その南部をサウスへレネントという。



「んーっ、いい天気…」

気候も安定していて、農作物が豊富な事で有名なヘレネント島。私たちのギルドとは海線一本で通じれるところにある島だけど、ここへ来るのはかなり久しぶり。

私は島の海岸に降り立って、左手にホウキを持って浜辺をしばらく歩いてみた。依頼主のいる場所は浜辺をずっといった岬に住んでるみたいだからね。

「……何も変わらないなあ」

ちょっと昔の事を思い出しちゃった。私たち5人が始めて出会ったのも、ここだった。

変わった事といえば…、あの人だけ私たちと一緒に来なかった。それだけかな。

「えーいつ！ 魔王めー、ボクが倒してやるぞお」

「やれるものならやってみるい〜！」

あ、“勇者ごっこ”やってる。私たちもやったなあ…、ウエルトちゃんとエレナちゃんが勇者役をやって、私とアツフーちゃんが魔王役だったっけ。女の子だけでやってたから、大人たちに「もつと女の子らしい遊びしなさい」って言われてた。確かその頃から…ウエルトちゃんたちは剣が上手だった。私はただ遊んでただけの子だったから、彼女たちには遊びでしかついていけないかった。

ここに来ると色々思い出す。

物思いに耽っていると、その依頼主さんの家がある岬に着いた。よりいっそう潮の香りが風に流れてきて、ちよつとだけしよっぱい。

「おお、あなたがリアンの…」

岬の先にそびえ立つ大きな屋敷の前に、一人のお爺さんが立っていた。この人が依頼主のようだ。

「ギルド・リアンのコロナです。え、えつと…急な受注でしたけど…大丈夫でしたか？」

「ええええ、構わんよお。聞けばこの島出身だそうで…」

「あ、はい！ 私はウェストヘレネント出身で……」

なんて、色々依頼主さんと話を長々としてしまい…。気が付けば私は家にながらせてもらって、お茶まで出してもらってしまった。た。

「ほっほっほ…、元気な娘さんじゃ。」

「それで、お爺さんのお孫さんって？」

その話の中で、お爺さんが口にしたのが“お孫さん”の話。私がその子に似てる、なんて言って気を合わせてくれる。どんな子なんだろう…？

「ふむ…。2階におるかのお。ちよつと待っててくだされ」

そういい残してお爺さんは2階へゆつくりと上がっていった。ハッとして“依頼中”だという事に気付いた。

そ、そうだよ…私何やってるんだろ。確か流行病を治すために薬を渡す任務だったはずなんだけどな。

「コロナ」

その声に少しだけビクツとして、どう聞いてもお爺さんの声ではないような若々しい声がして私はその方へゆっくり振り返った。

「……………えっ…？」

「…久しぶり、だな」

どうして…、ここにいるの？ だって、この人は。

第15話 コロナ・エミリア（後書き）

（ ・ ・ ）

Lorexですー。毎度毎度お読み頂きありがとうございます。

今回と次話はコロナが中心となるお話になります。いや、その次もかな…？（未定）

コロナ目線なので表現の仕方がいつもと違って見えると思うのですが、それはそれでコロナらしさということをご了承くださいませ。

## 第16話 いざ影の山へ

なんだか前よりスラッとしている。少し大人びて声も以前に比べて低くなった。

「リ、リミレット……?」

「うん。久しぶりだね、コロナ」

リミレット・クライヴ。私たちリアンの上層部4人と、一緒にときを過ごした私たちの親友。でも、どうしてここにいるのか。そしてすごい偶然な出会い。だってリミレットは……。

「な、なんで…? あの時、私たちを庇って」

「…ん、確かに僕はあるオムブルに捕らわれて、そのまま死んだように見えたんだよね。」

リミレットは何でここに立っているの? だって、だってリミレットは私たち4人を庇って魔物に餌食にされて…!

「ふむう、リミレットの知り合いだったのかい」

「はい。僕の親友のコロナです」

「リミレット……。生きてたんだね…ッ」

事情はどうなってるのか分からない。けれど、目の前に大事な親友がいる。その事実其自然と体が動きそのままリミレットに飛び込んだ。泣きじゃくる私の背中にそつと手を回してくれて、リミレットは「会いたかったよ」と耳元で囁いた。何がなんだか頭の中がごちゃごちゃになってしまった。

「……ゆっくり事情は話すよ。ホラ、涙拭いて」  
「んっ、グス…っ」

飛びついた腕の力を抜くと、そっとイスに座らせられた。リミレットに視線を送ると、一度笑って見せてくれてそのまま向かいのイスに腰を下ろした。

「コロナ、ウエルトたちは元気？」  
「えっ？ げ、元気…っ！」

まだ声が涙声になってて、滑舌が上手く回らない。

「良かった」  
「ね、ねえどうしてリミレットは……」  
「あ、うん…。」

リミレットはその身にまとっている長めのロングコートを綺麗にシワにならないようにして座り直し、視線をこっちに投げてきた。あの瞳は変わってない、そんな気もした。

「……まあ急遽なことだから、ちょっと昔話も入り交えて話そっか」

\*\*\*\*\*

その頃、ギルド・リアン本部では。

「なあアフロー、コロナは？」

「……貴様、朝っぱらからケンカ売るとは上等だな」

相変わらずエレナとパーフィのやり取りが繰り広げられていた。もはや誰も周りで突っ込む者もない。それが自然だと認識し始めてしまっていたのだろう。

「ふわあゝあ……。コロナがいなくてさ、リーンが朝ごはんやってるの見て可笑しくてさ」

「それだけか？ 全く…私は忙しいって言うのに」

「ん？ 依頼表眺めてるだけじゃんかー」

「………ランクSの依頼表が1つ足りないんだ。エレナは知らないのか？」

「あたしSなんてホイホイ受けないよ」

内容によっては命の危険もあるランクS任務。このギルドでも上層部4人と加えてマイリーしかランクSを達成した事が無い。

「あ、エレナさん。パーフィさん」

「ん、マイリーか。おはよー」

中央室にあまり顔を出さないマイリーが、珍しくここへやってきた。

「薬の保管庫なんですけど……、泥棒でも入ったんでしょうか？」

「へ…？ 保管庫？」

マイリーのあとを着いて歩き、エレナとパーフィは薬の保管庫の部屋へ。そこは本当に泥棒か何か入ったのかと思うほど散らかり放題だった。一番ひどく荒れているのが“目覚薬・睡眠薬”の部類。

「…睡眠薬なんて盗んで、泥棒は何する気だ？ 誰かギルドの子が使ったんじゃないの？」

「もしそうなら、わたくしはその人の整理心を疑いますわ。こんなに散らかしてそのままだなんて！」

マイリーの性格がよく出る一面である。マジメでキレがあって時折センパイにも厳しい。

「まあまあ…。って、ここに残ってるメンバーって言えば…」

「リーンとネイラ、それにウエルトか」

「総長はあり得ませんわ。こんなに散らかすお方ではありませんものの」

マイリーのウエルトへの崇拜は度を越えるものであることも、メンバーはみな知っていることである。ウエルトの言ったことは絶対従わないものを信じない。そんな頑固な心を持つ一面もあつたりするのが彼女だ。

「……………私じゃありません」

夜勤活動を担当するネイラは、ぐっすりと睡眠中だった。エレナがわざわざそれを起こし、少々可笑しげに尋問。ネイラは半目開けた状態のまま、再び「こてん」と効果音が出るように枕に頭を落としました。

「ん、じゃアリーンか？」

「…リーンはミーコにエサをあげてたはず…。そんなスキは無かつ



たような……むむ。」

「ネイラ、おやすみのところゴメンなーっ」

ネイラは、蚊の鳴くような小さい声で「アイリス……」とつぶやいたのは、誰にも聞こえていなかったようだ。

「あたし、そんな睡眠に困ってないよおっ！」

ネコたちに群がられるリーンは、ネコ嫌いに全く持って見えない風景の中にいた。

「あははは、リーンモテモテじゃんかー（ネコに）」

「う、嬉しくありませんよー！ コロナさんに頼まれたんですもん……、仕方なくやってんですー！」

「リーン、コロナがどこへ行ったか知らないか？」

尋問をしまくるエレナとマイリーの中を割って、パーフィが1つだけ質問を下した。そういえばそうだったー、とエレナもポンと手を鳴らす。

「え、えっ、と……。あ、あたし知らないです」

「……リーン？ 明らかに動揺してますわよ？」

「そ、そんなことないっ！ ホラ、いつもどおりのあたし　　うわあっ！？」

その不安定に立ち上がったリーンの両足が、ネコたちにバランスを崩され力を失い……。

「みやあみやあみやあ！」

「ふしゃーッ！ んみやああ！」

「あっはははリーン、楽しそうだな〜っ」

「ぜ、全然楽しくないですってば〜」

結局何も情報が掴めぬまま、尋問騒動は終結した(？)。マイリ  
ーとパーフィは、共に「はあ…」と溜め息交じりに息を吐いた。

「……うにゅ、眠いのにい」

「だってお前しか言えるのいないんだもん」

リーンが侵入した、ネイラとエレロワの部屋はハーブの香りで鼻  
を楽しませる匂い。エレロワがハーブにハマっているのだ。単にイ  
イ匂い、という理由付けで楽しんでるようだ。

「…何」

「コロナさん、何か大変そうな任務に行っちゃったんだよ。」

「……ぐう」

「寝るなーっ！」

リーンの一喝にネイラは迷惑そうに耳を塞いで逆方向に向く。

「…コロナさんなら、平気。でしょ」

「でも、でもさあ…。何か嫌な予感するんだよ」

「………そんなの、察せられるのならさ、私が眠いのも察してよ…」

ぼそっとそう言うと、よじよじと掛け布団の中に身を埋めていっ  
てしまった。ネイラは基本的に夜勤活動のため、起床時間が一人だ



「う、うるさいっ！ さ、私たちも行くぞ！」

彼女たち、ウェルト小队もオムブルの討伐へ向かう隊の1つだった。構成員は5人。5人ともソルジャーとして、討伐隊の中では珍しい組み方でもあった。ありふれた小队の例としては、剣専門の騎士イと魔術専門の魔導師マジシャンが集って前衛後衛として組み合わせるケースが圧倒的に多かった。

そのせいもあってか、かなり注目の的となっていた。ソルジャーとは魔剣士のことなので多少たりとも魔術も取り揃えているわけだが、それも両者に及ばない“中間的存在”。

「リミレット、オムブルを狩れば…私たちはやっとギルドを立ち上げる事が出来るんだよな」

「うん、そうだよ」

「故郷の期待も背負っている。なんとしても、一番先に狩るぞ」

「了解、だよ。総長っ！」

「そ、総長…って？」

リミレットがウェルトをそう呼んだのだ。それは彼なりの称えなのかもしれない。ギルドを立ち上げるウェルトの姿と、それについて協力し合う仲間たちの姿が見えていたのだろうか。

オムブルの巢食う山奥までやって来た一行は、近くに流れていた川のそばで足を休めていた。

「ふうふう…。な、なんか緊張してきちゃった」

「そうだなーもうすぐヤツの所だもんなあ」

山道を登って4日後のこと。この山は世界で5本指に入るほど高い山として、世間ではウワサされている。そんなこの山は“影の山”と呼ばれている。

オムブルはこの影の山に巢食いし魔物。人々の“影”を奪う。影を奪うとはどういうことか？

その者の存在自体を、周囲の盲点にしてしまうということ。つまり、影を奪われれば周りの人から忘れ去られてしまう、ということだ。オムブルはその根源となり、幾度と無く人々を苦しめた。

「……ねえ、リミレット」

「ん？」

「私たち、本当にオムブルを倒せるのかな……。犠牲になった人たちを救えるのかな？」

コロナはか細い声でそう言った。これから巻き起こる出来事をまるで予知していたかのように。

「大丈夫。だって、戦うのは……コロナだけじゃないよ。みんな一緒に戦うんだ」

「……その通りだ、コロナ。私たちは勝つことだけ考えてればいい。」

リミレットに続いてパーフィがそう口にした。自分の胸に手を当てて何度か深呼吸して、コロナは川に手を伸ばした。ひんやりと冷たい山水が手を湿らす。

「……そうだね。」

コロナはただそう小さく呟くだけだった。

「何かあったら、僕が守るよ」

「リミレット、なんだよ色男つぶっちゃってさ」  
「なっ、そんなんじゃないってば！」

+ + + + + + + + +

ギシャアアアアアア……ケツケツケケケケケ。

そして、彼女たちは幾度もほかの小隊と出くわしては先を追い抜き……。

遂にオムブルのいる洞窟の奥まで辿り着いた。

「ほかの小隊はまだ辿り着いてないようだな。私たちが一番だ」

「……ウエルト、陣は作戦通りで？」

「ああ。エレナとパーフィは前衛、コロナとリミレットは後衛だ。

私は魔術で敵を翻弄する

」

各自がその指定された場所へつき、いよいよオムブル討伐の始まり。しかしそのオムブルは雄たけびをするだけで何も手を出してこない。

なぜか攻撃は一方的に攻める事ができ、オムブルはその場に動かなくなってしまうた。

「……どうなってんだ？」

「ウエルト！ ヤツは本当にオムブルなのか？」

「……間違いないはずだ。オムブルの心中に犠牲となった人々の呻き声が聞こえる」

ウエルトは瞑想し魔物の心中を読み取っていた。透視能力で見えたその光景は、影を奪われた人々の悲しく嘆く声が溢れているものだった。間違いない、これはオムブルそのものなはず。

「……わ、私たち… オムブルを倒せた？」

「やった…、やったよ！ コロナ、僕たち… やったよ！」

「うんっ、うん！」

オムブルの身体から黒い霧のモヤのようなものが湧き溢れた。この時ばかりは、オムブルが本当に死に絶えたのだと、そう確信付いていた。5人ともが達成感で満ち溢れていたのだ。

しかし、目的とはそう簡単に達成できぬもの。必ず大きな壁と衝突するのだ。

「……………っ！！」

急な脱力感。身体中の力が抜けていく。5人共だ。みながその場に倒れこんでしまった。

「なっ…！？ こ、これは…」

「まさか、オムブルは最初からこれを」

そう、影を引き剥がされようとされていた。気がつけば5人の足首を1つの不気味な手のようなものがしっかりと掴んでいた。

オムブルは動かなかったんじゃない。ずっと地中に手を埋め彼女らの隙を狙っていた。

「いや…、いやあっ！」

「くそっ！なんだよこの手……！」  
「僕たちは……、こんなところで倒れるわけには」

もう2割、3割ほど影が剥がされていった。このままでは5人ともが消え失せてしまう……。リミレットの胸中は、もう1つの事しか考えていなかった。

（他の4人は僕の大事な親友だ。絶対に生かし、追いつけてきた夢を叶えて欲しい。そのために僕に今できることは……。たった1つ。）

「なっ、何をやる気だ！ リミレットっ！」

「僕たちはまだ弱かったみたいだ。今のままじゃ、オムブルを倒す事なんて出来なかつたんだ。だから今は逃げて……。逃げて生き延びるんだ。僕はそのための逃げ道を作る要となる！」

そう言いリミレットはゆっくりと立ち上がり、フラつきながら剣を突き向けて切先に魔力を送り込んで集中し始めた。これはリミレットの魔剣技。

「影は光があるから生まれる。だけどね、光が無ければ影を奪う事なんて出来ないんだ！」

「リミレット……お前！」

「ここが真っ暗になつた隙に、この洞窟を来た逆方向に走るんだ。そしてここへ向かうほかの小隊も止めてくれ」

「それやったら、お前は助かないだろ！ リミレットッ！」

エレナのその叫びも虚しく、リミレットは黒い闇を帯びた剣を頭上に掲げた。すると辺りは急に何も見えなくなり、本当に真っ暗になっ



「り、リミレットお……っ！」

「早く走れッ！！ 生き延びるんだ、今は……強くなるんだ！」

そしてウエルトたちはなんとか難を逃れ、その洞窟から脱出した。ただ1つの忘れ物を残して。

第16話 いざ影の山へ（後書き）

／＼（、、）、（）ノ

今回は少し長めでしたね…。執筆中に「あ、文字数越えてた（汗）（「と気づいてしまい……；」

というわけで、次話もコロナが主役のお話になってきます。ぜひお楽しみに。

## 第17話 猫娘の岐路

「それで、僕はオムブルに影を捕られた…。コロナたちはそう思ってるよね」

「だ、だって……。あのままりミレットは」

洞窟が静かになったんだ。様子を見に行った小隊の人たちには“一人の少年が倒れていた”って報告されたんだ。恐らくその少年がリミレットの事なんだと思う。

「コロナ、そういえば任務か何かでここへ来たんじゃない？」

「えっ？ あ、そ、そうだった…！」

突然そのことに気付かされる。まだ話を聞きたいことだらけなんだけどな……。

「え、えつと…薬！ いっぱい持ってきて…えと、それで」

「はは…。慌てなくていいよ、落ち着いて」

「うん……」

袋いっぱい詰めてきた、睡眠薬・目覚め薬などなど。流行病とかが何なのかわからないけど、たまたま目に付いたのを持ってきてしまっただけのこと。

「…いい薬ばかりだね。やっぱりコロナが調合してるの？」

「うん、たまにエレナちゃんも」

「…………へえ」

リミレットは散らばった薬を一つ一つ眺めていて、その横でお爺

さんがお茶を飲んでいた。流行病、つてことだから島中が危ないのかと思つてたけど、そうでもないのかな…。とも思えた。

「ね、コロナ。ちょっと海岸行こうよ」

「えっ…？ で、でも薬、配らないと」

「……病人たちは海岸沿いの病院にいるんだ」

「あ……。そうなんだ」

なら、急いでその病院へ行かないと。今も苦しんでる人たちがいるかもしれない。

「……ね、ねえ… ホントにこっちに病院があるの？」

「ん？ ……まあね」

だんだん人気も少なくなってきた。さっきまで遊んでいた子供たちの姿も見えないほど遠くへ来たんだ。リミレットの誘導に従つて、私たちは木の枝などが打ち上げられている浜辺のところへ。

「コロナ、突然だけどさ。1つ聞いてもいいかい」

「え…？」

リミレットが突然振り返つて口を開いた。

「 夢想丸。つて…知ってるだろ？」

「 ……！」

「そのリアクション…。やっぱり君らが隠し持ってたんだね」

「な…、夢想丸をどうして…？」

なんでここへ来て夢想丸の話になるのか、私には何にも分からない。

「悪いね、リアンへ依頼表を送ったのはこの僕さ。そして…流行病なんて何も無い」

「っ…！」

「ねえ…、夢想丸を僕にくれよ。あれさえあれば僕は…！」

リミレットの表情がだんだん揺らいでくる。いきなりことで、私は何がなんだか分からなくなってしまった。そんなことを考えると、急に胸倉を掴まれてしまう。

「っ！ や、やめて…！」

「…手荒なマネはしたくないんだ。夢想丸を、僕に運べ」

鋭い命令口調にまでなった。少し呼吸がしづらくなってきて、強引にその掴まれている手を振りほどいて双剣の方に手を添える。

「僕と戦う気か？ …落ちこぼれのくせに、度胸だけは昔っから…」

「…」  
「どうして、どうして！ リミレット、どうしちゃったの？」

「…できればウエルトが誰かに引っかけた欲しかったな。このワナに」

「ワナ…？」

「夢想丸。そう、あの魔刀さ。斬った者を悪夢に陥れると言っ…」  
「！」

もう、リミレットのこと、信じられない。そんな意思だけはちゃんと私の中に芽生えてくれた。このリミレットはもう昔とは違う。

夢想丸を狙う私たちの“敵”なんだって…。

「私、もうあの時とは違うよ。」

「ふん…。どうだか？ 落ちこぼれの代名詞のくせに…」

ガキキツ……………！！

その言葉に反射的に剣を振り下ろしていた。しかしそれはリミレットの刀によって阻止されてしまう。

「……………ほう？ エレナ並みに速くはなったのか。だけど…まだまだ狙いどころが甘いな」

「リミレット…っ！ 私、夢想丸のこと、あなたに話す気なんてない！」

「なら、僕自身がリアンへ攻め込んでもいいんだよ？ だってリアンにあるんだろ？ 夢想丸が…」

……………夢想丸を狙うと言う事は、アイちゃんの身が危なくなってしまう。そんなの、絶対にダメ。私がここで止めなきゃ。

「やあぁっ！」

右手の剣で斬りかかろうとする、しかしリミレットの姿は一瞬にして背後に消え去り気がつくとその身は海の上にあった。

「……………影を貰うよ」

「えっ …？」

影を…？ もしかして、と確信付いたのは私がリミレットに斬りかかったあとだった。

「っ…！」

「リミレット、もしかして…！ まだオムブ」

その太くも無い華奢な腕から想像もつかない力で、左手の水龍刀が弾き飛ばされてしまった。でもそれに怯んでる暇は無い。右手の豪炎剣を再び振り下ろす。

「相変わらず攻撃が一方的だ。それに読みやすい角度、威力。そんなんでAランクとはね」

剣はやはり受け止められた。でも左手でこの魔術を放てば！

「…：…僕の方が早いな」

「えっ…！ つあ…！！！」

気がつけば私の右肩に高圧な電流のようなものを流されていた。感覚が無くなって動かせなくなっている。力が入らなくて豪炎剣は浜辺の砂に転がった。

「弱いくせに、僕に立ち向かうからだよ？ …：…こんな剣、僕が壊してやるよ」

「やっ、やめ…！！！」

ガンッ…、ガンッ！ ギシャ…：…。双剣は2本ともあっけなく粉々に砕け散ってしまった。残った持ち手の部分だけを、リミレットはこちらへ投げ返した。

「…：次はコロナ、お前だよ」

このリミレットは、もうあのリミレットじゃないんだ。本体を、

こんなにした元凶を叩かないと　　！  
そう咄嗟に思った私は、身体を翻して林の方へ逃げ込んだ。

「…逃げる、か。それが他の3人との違いだ。コロナ…！」

そんな言葉も耳に微かに届いたけど、澄んだ潮風がそれを掻き消してくれるように強く吹いた。

\*\*\*\*\*

珍しく思考回路が何の濁りも無く透き通っている。

今のリミレットは、あの時のままなんだと思うんだ。あの時のままって言うのは、オムブルに挑んだ後のこと。

「……影の山」

昔5人で登ったこの山。今度は一人で登るんだ。ホウキで登れば数秒で山頂まで辿り着ける。そうだ…あの時とは違う。私はもう落ちこぼれなんかじゃない。

そして私はその絶壁を急上昇して登り、あの時の洞窟の入り口までやってきたのだった。

「……………」

ただ呼吸しているだけでも、その中では一つ一つの音が反響して響く。そんな暗黙で真つ暗な洞窟の中を私は一人で進んでみた。ここにリミレットの……本体があるのなら。私の胸の奥にはそんな期待と不安があった。



それにしても本当に真っ暗だ。目が慣れないうちは中々物の区別が付きにくいほど。自分の魔術で指先から小さな火を灯しても見られるけど、洞窟内は湿り気がすごい。それゆえ火が上手く点かずに何度も消えかかってしまう。

「んん…」

奥へ進んでいくにつれて、重々しい空気が漂っているのがわかる。時折、嫌な呻き声うめのようなものまで聞こえてきたりもした。

そして…、最深部。ここだけなぜか天井がポツカリと開いていて日の光が差し込んでいる。

「う、くう………」

暗さに慣れていた眼に入った急な光は、私の視界をしばらくの間遮ってきた。何度も眼をまぶたの上から撫で回して光に慣れさせた。

「……やっぱり、あなたはここにいたんだね。リミレット」  
「……。」

その場に鎖で縛り付けられているリミレットは、じつとこちらを見つめて動かない。多分、こっちが本物。向こうで私と接触してきた方がオムブルの何かしらのまやかしなんじゃないか、とここまで推測できていた。

「待っててリミレット！ 今、その呪縛から解放してあげるからね」

私はそのリミレットに駆け寄り、鎖を引いたり押ししたりしてみたけど外れる気がしなかったので、灯していた火を大きく燃え上がらせて鎖の鉄を溶かした。

右腕の鎖が取れた。左腕の方も同じように外してやると、リミレットはその場に力なく倒れこんでしまい私はそれをそっと起こしてあげた。

「リミレット？ 大丈夫？」

そう問いかけても、リミレットはまるで人形のように何も言わない。ただ遠い目をして私に寄りかかってくるだけだ。

「ね、ねえ…？」

「よくそこまで察せたな」

「……！！！」

突然背後から、もう1つのリミレットの声がしたのだ…。もう1つのリミレット、つまり、オムブル。別名“影縫かげぬい”という異名も持ち兼ねる魔物の声だ。

「逃げたと思ったのだが、やはりリアンの者は甘く見れんな」

「…どうして魔物のあなたがリアンのことを？」

「その少年の心は、今は我が持っている。そう解釈すればいいさ」

「なっ！ ど、どういうことっ？」

「………その少年はもう元には戻らん。お前が夢想丸の居場所を吐かぬのならな」

リミレットの姿をしたオムブルは、人の言葉を使って私にそう言ったんだ。リミレットの心はこいつが持っている、もう戻らない…？

「そんなの、そんなのって…」

「そしてお前は、我を滅ぼさんと小隊を組んで戦いを挑んできた」

人だな。実に哀れだ、この少年はどれだけ長い間苦しんでいた事か……！」

「……っ」

「我はこの身体を使い、夢想丸を手に入れる。そして星の支配者となるのだ」

「星の、支配者……」

こんな魔物が星の支配者なんかになってしまったら……。そう考えただけで背筋が冷え切る。ここで私が止めなくちゃ。夢想丸を、アイちゃんを守らなきゃならない。そしてなにより……リミレットを救いたいんだ。

私は粉々にされてしまった剣に一度手を添えるが、壊されてしまった事を思い出して両手はそのまま敵の方へ向けた。魔術だけでも私は十分戦える！

「この我を傷つければ、お前の友は助からんぞ？」

「……り、リミレットは……」

「諦める。夢想丸の情報を少し我に流してくればいいことよ。我の契約に従え」

契約……。でも、夢想丸に選ばれたアイちゃんがこのままだと危ないんだ。

私はどっちを取ればいい？ あの時助けてくれたリミレットか、まだ見習いソルジャーで新入りのアイちゃん。私はどうすれば……。

「答えを聞かせてもらおうか」

「……わ、私……」

その時、私の肩に寄りかかっていた本物のリミレットの瞳から、ポロツと一滴の涙が零れたんだ。それを見てしまった私は、心揺さ

ぶられ選択してしまったんだ…。

「……………わかった。夢想丸の情報は、教える」

「そうか」

「だから！ リミレットを解放して…っ！ リミレットを返して！

「一度ここへ夢想丸を持って見せに來い。裏切れば少年の命はもはや無いものと思え」

……………その時の私、どうにかなっちゃったんだらうか。その条件を飲まざるを得なかった。リミレットが泣いてた。その時溢れ出してしまった気持ちは、自分でも抑えられなかったんだ。ただリミレットを救いたいだけになってしまったんだ。

「……………それと、今まであなたが喰らった影も解放して」

「それは無理な条件だ。黙って夢想丸をここへ持つてくるのだ！」

そっか…。私は、犠牲になった人たちも救えてなかったんだ。

§ §

その日は、帰りがすっかり遅くなってしまった。もうみんな寝ている頃だろう。私はそっと自分の部屋に戻った。

「……………アイちゃん」

「ん〜、コロナか〜？」

「…あ、起こしちゃった？ エレナちゃん」

夢想丸は夜の月光に少し怪しげに光を放っていた。

## 第17話 猫娘の岐路（後書き）

（／＼、）

以上、コロナ編3本でした。いかがでしたでしょうか。

天然でネコ好きのコロナ先輩ですが、こんな岐路に立たされて一体どう行動し始めるんでしょうか。

幼なじみを取るか、まだ自分の身を守ることもまま成らない同僚を取るか。ご覧になられているあなた様ならどうお考えになるでしょうか。

というわけで、次話からアイリスのお話です。是非お楽しみください！

## 第18話 私の選んだ道

リウニオン防衛軍本部。月に一度この場所で各ギルドの報告会が繰り広げられている。そこにウエルトも出席していた。

「ふむ、コロナ殿がBランクとは。何かあったのか」

「……私は総長としての処理をしたまです。では…」

その指揮官長と対談し、ウエルトはそのままその場を後にした。報告内容は、新メンバーのアイリスの事と、コロナのランク下げの2件。

ウエルトはリアンに封じているあの話は、まだしていない。

「ウエルト君。もう帰るのかい？」

「あいにく忙しい身ですので。それに飲み会なら他の方と…」

「はっはっは、若い娘と飲むのがまた旨いのだがなあ。それなら仕方ないか」

「ふふ…っ。なら今度、うちのメンバー引き連れておいでしますね」

愛想程度の挨拶を交わした。ここに集うのはベテラン者が殆どで、年齢層も高い。歳若い者はウエルト他数人しかない。それゆえウエルトにとっては少し居づらい空間でもあった。

夢想丸のこと、そしてそれ選ばれた少女アイリスのこと。きっと人々は力を求めてあの魔刀を狙い動く。今はまだ封じておくべきだ。彼女がそれを制御できる様になるまで。

§

§

「これでよし、っと…」

日が差し込む時刻になった頃。アイリスは机に向かってペンを持って何かを書いていた。それは故郷にいるウルお婆さんへの手紙。もうここへ来て何日か経った。元気にしているか心配になり書き下ろしたものだ。

「…………おばあちゃん」

遠くまで飛んで行ける様になったら、会いに行こう。そして成長した自分を見せてあげるんだ。そうアイリスは自分に言い聞かせた。ふとイスを半回しにすると、スヤスヤと眠るエレナとコロナの姿が日に当たって見える。コロナのベッドには溢れるほどの猫の集団が共に寝ている。なんだかコロナまでもが猫に見えてくる始末だ。

そのまま、また眠ろうとしたが眠気はもうすっかり飛んでいたの  
で、アイリスはペンを置いて浜辺に向かう事にした。

波の穏やかな今日の海は、日の光がまっすぐに光って見える。そ  
の空の色は、まさに朝焼け色と言わんばかりの色をしている。

「ん…、アイリス。おはよう」

「おはようございます…………ふわわ」

いつもどおりパーフィがそこで剣の修行に励んでいた。どうやら  
毎朝こうして朝日に向かって剣を振り下ろしているようだ。そんな  
まっすぐな日の光と同じような、まっすぐとした瞳をしているパー



ファイがなんだか凜々しく見えて仕方がない。

「あくびもできる様になったってことは、緊張がほぐれて来たかな？」

「緊張はまだしてますよう……」

「……ふふ、ウエルトが気に入ってるだけはあるな」

「えっ？」

そうアイリスに言い放つと、再び剣を振り上げ海に向かって衝波を討ち込む。

「……ふう、今朝はここまでにするか。アイリス、朝風呂行くかい？」

「は、はい！」

潮風にひらつと靡いた長い髪と、少しだけ汗。アイリスとパーフイは浴場へ向かった。

\*\*\*\*\*

そして数時間後、皆が起床して中央室に集まっていた。

「ふわわああ……」

「エレロワー、でっかいあくび〜」

「ふにゅ……。だってあたしも夜勤組だもーん」

そこにコロナの姿が無かったのに、アイリスは一番初めに気が付いた。

「……おはよ。アイリス」  
「あっ、おはよう、ネイラちゃん」

寝癖が何かで少しだけ跳ねている髪の毛が、少しだけ可愛らしかったりするネイラにじゃれ合うリーンとエレロワ。

「これで全員だな。ではちょっとした朝会を行う」  
「総長、コロナさんはー？」

「ああ、あいつがここにいないワケも話す」  
「……？ コロナさん、どうしたんだろ？」

コロナ以外のメンバーが集結し、それぞれイスにつくとウエルトが口を開き始めた。

「まずは…、そうだな。今日もいつも通りそれぞれ依頼に励んで欲しい。それとケガなどしないように」

「ウエルト。今朝のリウニオン本部会議はどうだったんだ？」  
「ん、ああ。それもいつも通りさ」

ウエルトは相変わらず、その小さな身を精一杯背伸びして話をしていた。その姿はちょっとだけ幼げな少女のようでアイリスを含め数名のメンバーは心底で笑っていた。

「……コロナのことだが……。あいつはしばらく活動範囲を激減させることになった」

「えっ！ こ、コロナさんがっ!？」

「それにランクはAからBへと格下げをした。上層部の穴埋めはマイリーになってもらおうと思っっている」

「わっ、わたくしですか…!？」

マイリーのランクはAで、上層部と肩を並べるほどの実力の持ち主でもある。穴埋めとしては相応しい存在だ。

「ウエルト、やっぱりコロナに……?」

「…今のあいつは、少し落ち込んでるかもしれない。それを弁<sup>わか</sup>まえて接してやって欲しい。私の話は以上だ」

\*\*\*\*\*

「みいみい」

「…ミーコ、今日はお散歩行けないや。ゴメン……」

コロナは猫たちを背に向け、あるものをじっと見つめていた。親友を助けるにはこれをヤツに捧げなければならぬ。

「……早くこれをオムブルのところに」

バチチチツツ……!

夢想丸。それに触れようとすると、コロナを拒絶するかのようになり、紫色の電流でその手を弾き飛ばされる。

「ツ、いたた……」

「みいつ、フシャーッ!」

主人を傷つけられミーコは意思あるはず無い剣に威嚇している。その電流はかなりの威力でしばらくコロナの右手は感覚を失ってしまった。しばらくしてそれは戻ったのだが、これでは運ぶ手段が無

い。

ふとコロナは、その持ち主のアイリスを思い出す。

（そうだ、アイちゃんを連れてけば。……ダメ、アイちゃんは私たちの可愛い後輩で…夢想丸を取り上げるようなことしたら。……）

難しい顔でミークを見ると「みい……」と細く寂しそうに鳴いた。アイリスを裏切るのが、リミレットを裏切るのが。コロナは今悩ましい岐路に立たされていた。それに任務失敗と規則不純でランクもBに下げられてしまった。上層部としてのプライドはすでにスタズタだった。

「ねえ、私…。どうしたらいいかなあ」

思えばひよんなキツカケだった。偶然あの依頼を見つけて、すぐにこなせそうだったから受領した。まさかこんなことになるなんて全然思ってたんだから。

もう一度夢想丸に手を差し伸べると、やはりさっきの電流が再び不規則な線を描いておびただしく広がっていく。しかしコロナはそれに動じずそのまま夢想丸の掴んだ。

「くうっ…！ うああ…ッ！」

「みいっ！ ふみやああっ！」

しばらくその状態を保っていると、やがて足掻いていた夢想丸は電流を放たなくなりコロナの手元に寄りかかって倒れた。

「や、やった……。これで、リミレットを助けられるねっ」

しっかりとその刀を持ち上げてみると、一瞬だけ何か頭の中を一閃した様に感じた。しかしミーコだけは少し不安げな顔をしてコロナを見つめていた。

そしてコロナは、裏口からそつと部屋を出た。片手にホウキを、そして右手には夢想丸を持って。

§ §

「ッ！ うああっ…く」

「アイリス！ どうした!？」

「…くっ、はあっ…はあっ…。む、胸が、苦しい…ッ」

中央室でのこと。急にアイリスが胸の痛みを訴えたのだった。それを心配してウェルトらが駆け寄りその身を支えてやる。

「ネイラ、アイリスの痛みを和らげてやってくれ！」

「う、うん…ッ」

ネイラはそつとアイリスの胸に手を当てて集中した。その手は青白い光に包まれ、ちよつとするとアイリスの顔から苦しそうな表情が薄らいだ。

「アイリス…っ！ 大丈夫か？」

ウェルトがアイリスの頭を支えてそう問いかけると、アイリスは力無く「こくっ」と頷いてフラ付きながらソファに身を倒して目を瞑ってしまった。

「……ウェルト。これはもしかすると……」  
「ああ……」

パーフィがウェルトに何かを耳打ちした。

「わ、私……？」

「アイリス、夢想丸は部屋にあるのかい？」

「は、はい……」

アイリスをそのままソファに寝かせ、ウェルトは中央室を後にした。

## 第18話 私の選んだ道（後書き）

今回はそんなに進展無しですね。けどコロナが夢想丸を手にしてしまいました。どうなるんでしょうか…？ 次話を乞うご期待です！！

## 第19話 悪夢に誘う声

この依頼…、やはりあいつはこれに。オムブルも魔物のくせに小賢しい策を練ったな……。

「ウエルト、何か分かったのか？」

「…ああ。これだ、ランクSの依頼表が私の部屋にあった」

押した覚えも無い印の押された依頼表。恐らくコロナが勝手に押したんだろ。全くしょうがないやつだな…。依頼を受けたければ受けると言えば良いものを。

あいつは昔から隠し事が何かと多い気がする。5人の中でもリミレットとコロナは何かと一緒にいることが多かったような気もする。

「どうするんだ？ 場所はヘレネント島のようだが…」

「…私が行こう。こうなってしまったのも、総長の私の責任でもある」

ヘレネント島は私たち5人の故郷だ。リミレットがまさか生きていたとは思っても見なかったことだが、コロナが思っているのを透視したおかげでその事実が判明した。

やつの狙いは夢想丸…。コロナがそれを持っていったようだ。そうか、そのせいでアイリスがあんなに苦しんだのか。

「…オムブルに挑む気なのか？ それにコロナが裏切ってきたとしたら…」

「コロナは…私たちを裏切ったりはしないさ。あいつはきつと心のどこかで仲間のことを思ってる。今のあいつはただリミレットを助けたいだけなんだ」



そう信じ、そう願っていた。コロナは仲間を裏切るようなやつじゃない。むしろ誰よりも仲間思いで自分より仲間を守るつもりとするやつなんだ。

\*\*\*\*\*

中央室でアイリスはエレナたちに看病されていた。病気だとかケガだとかそんなものじゃないのは私とパーフィしか知らないこともあるから仕方ないが。

「ん、ウェルト？ どこ行くんだよ？」

「…コロナを連れ戻してくる。一人でオムブルのところへ行ったよ  
うだ」

「おっ、オムブルっ!？」

大袈裟にエレナは驚いて見せた。

「な、なんでコロナが一人で…？」

「……リミレットだ。あいつはまだ生きていた。オムブルがリミレットの身体を借りて行動している…」

「リミレットが……？ それはコロナから聞いたのか？」

「まあ、透視能力で割り出した情報だ」

「あ、あの…？ リミレット、って？」

アイリスの看病を積極的にしていたマイリーがそう問いかけてきた。リミレットのことは上層部の私たちしか知らない。

「すまない、今は急ぐ。エレナ…頼んだぞ」

「…う、うん。なんだよ…ただコロナを連れ戻すだけだろ？ そんなに深刻なのか？」

「コロナは夢想丸を持ち出した。きっとオムブルがそれを狙っているに違いない」

「えっ！ 夢想丸を…？」

いつまでもここで話してるわけには行かないな。さっさと行くか。

と、建物を出ようとすると、それを何かに阻止された。

「ウエルトさん、わ、私も、行きますっ！」

「アイリス…！ た、立って大丈夫なのか」

「…怖い夢、最近何度も、見るんです。私、夢想丸を手放しちゃいけない気がして…」

アイリスは真剣な眼差しでそうやってきた。まだ彼女が夢想丸を所持して数日、数週間…。もうここまでリンクしているのか。なら…アイリスなら夢想丸を取り返せるかもしれない。

そう考えた私は、少し覚束ない足取りのアイリスをつれてヘレネント島へ向かう事にした。

§ §

「随分早かったな」

夢想丸を右手に握り締め、コロナはまっすぐその姿を見つめていた。リミレットの身体を乗っ取っているオムブルを、何度か恨めしい顔

で見たりもした。

「……これでリミレットを解放してくれるんでしょ？」

「そうだな、良かろう。解放してやってもいいが……」

と、オムブルは一瞬口を止めてコロナの持つ夢想丸を凝視して立ち尽くした。

「……夢想丸。遂に我の物になるのだな」

「リミレットを返して。そのためにこれを持ってきたんだから！」

「さあ、渡せ」

コロナは夢想丸を持ち上げ、一瞬ためらったがそのままオムブルの差し出してきた手に乗せた。

「ふはは……、素晴らしい力よ。これこそ星の支配者が持つのに相応し」

その時、夢想丸はオムブルの手の上であの電流を巻き上げ、激しくオムブルに抵抗し始めた……！

「なっ……！ ぐぬぁアッ！」

「は、はじめからあなたのことなんて信じてないッ！ リミレットは私が救って見せるんだから……！」

コロナはそう言って電流と悪戦苦闘するオムブルのふところに飛び込んで、その腹に両手を押し当てた。

「何をやる気だアッ……！？」

「……私だってリアンの上層部の一人！ 落ちこぼれなんかじゃない、

私だつて……っ！」

強く念じると、コロナの両手はまばゆい光を発し始めオムブルの身を包み込む。その光がオムブルの本体を直撃したのだろうか、リミレットの身体から離れ黒い浮遊物となつてオムブルは出てきた。強すぎる光は影を掻き消すのと同じ。

「……それがあなたの本体？ オムブル！」

「この小娘がああ…ッ！！ 小賢しいマネをしおつてえエエ！」

「リミレットっ！」

身体を維持できずに悶え始めるオムブルを通り抜き、倒れたリミレットの身体をそつと起こす。何度も名前を呼んで起こそうとしてみたが反応は無い。

「クッ…、ムダだあ！ その少年はもう」

何度も何度も、コロナはリミレットを起こそうとした。心は封じられただけで、消滅はしていない。つまりまだリミレットが助かるんだとコロナの中にそんな希望があった。いや、希望ではないのかもしれない。要は信じるか信じないか。リミレットはコロナの腕の中で力無くぐったりとしたまま。

「私はアイちゃんもリミレットも犠牲になんてしない！ バカにしないでよッ…！」

「うがあああああ！ コロナああ…！ ならばお前の身体をよこせエエッ…！」

「きゃああッ！」

まさにコロナのふところにオムブルが喰らいつこうとしたところだ

った。

「……………そういうことだったのか、コロナ」

「うえ、ウエルト…ちゃん…?」

「!!! き、キサマは…っ」

コロナが気付いたころには、ウエルトの大剣がすでにオムブルの中心を斬り貫いていた。血でもない異色な色の液がオムブルからポタポタと零れてその場に落ちていく。

「コロナさん…っ!」

「あ、アイちゃんも! ど、どうしてここに」

「お前がここへ飛んでいくのを見たからつけて来たまでだ。…ったく、相変わらず世話の焼けるやつだ」

「グオオオオ…、お、おのれええ!!!」

そう言い残し、オムブルの本体はその場にぐしゃっと崩れて粉々になっってしまった。

「魔術に溺れた哀れな魔物、といったところか」

「…わ、私」

「リミレットは無事なのか?」

「え、あ…っ! リミレット!」

コロナはふと思い出したかのように抱えていたリミレットの身体をゆさゆさと揺らしてみる。

「……………リアンへ連れて行くぞ。コロナ、事情は本部でゆっくり聞く。今はリミレットの無事が第一だ」

「っ、うんっ! ……あ、アイちゃん、夢想丸を」

「はいっ、回収しました！」

とりあえず今は本部へ戻ってリミレットを回復させること。3人は急いでリアンへ戻る事にした。

「っ?。」

「アイリス、どうしたっ?。」

「…あ、いえ。なんでもないですーっ！」

\*\*\*\*\*

ギルド・リアン本部へ戻ったウェルト、コロナ、アイリスは救護班を他ギルドから呼び寄せリミレットの無事を頼んだ。

「これで一応は安心、か」

本部に残っているメンバーはどうやらいないようだった。アイリスはなんだか夢想丸をじっと見つめたままソファに座っていた。ウェルトはコロナを呼び出し彼女の部屋へ向かった。

「…だいたいは分かっている。しかしまさか夢想丸まで絡んでくるとはな」

「う、うん。オムブルは“星の支配者になる”って…。」

「星の、支配者だと…?。」

規模の広い思想だったようだ、あの魔物は。と半ば哀れに思えていた。

「コロナ、どうやって夢想丸をやつの下へ運んだんだ」

「え、えつとね…、私が無理してあの抵抗に耐えて、そしたら夢想丸は抵抗をやめて…」

「やっぱり、そうだったか。アイリスはそれで少しばかり苦しんでいたぞ」

「…えつ…！」

コロナは小さく声を漏らした。守る筈だった、大切なものに少しだけでも傷をつけてしまったんだ。そう深く心の中で思いを押し込めた。

「……まあ、アイリスはお前を恨んだりなんてしないさ。あの子はそんなやつじゃないからな」

「…うん。」

§ §

また、だ…。夢想丸を握り締めると、怖い声が頭の中に響くんだ。消し去れ、って。何度もそう言うてくる。夢想丸は何を望んでいるの……？

「……私がどうにかなっちゃったのかな。」

気晴らしに剣の修行でもしよう。パーフィさんのように海辺で潮風を斬るのもそこそこな修行になるから。

中央室を飛び出して、私はいつも早朝にパーフィさんが剣を振っているところに立った。

「……………」

夢想丸を鞘からそつと抜き出し、刃を水平線の方へ向けて持つ。  
私は一体どうしてこの剣に認められたのか。逆に夢想丸は私に何を  
求めているのか。わからない、何も…。

私は、ソルジャーになつてどうするんだろう？

大切な人を守る。愛すべき人々を守るんだ。

そのために必要なのは“力”？ 私はこのまま強くなればい  
いの……？



## 第19話 悪夢に誘う声（後書き）

まずは一段落です。少し急展開でしたが理解に苦しんでしまわれたらスミマセン。

さて次話から話は一変、アイリスが本格的にソルジャーになるため修行に励んでいきます。章で区切るのならここが第1章の終わり、と言ったところででしょうか。

では次話もヨロシクお願いします。

第20話 s u n - r i s e

夜中にふと目が覚めた。別に怖い夢を見たとか、お腹が空いて目が覚めたわけじゃない。

なんとなく眠れなかっただけ。私は夜風の吹く浜辺に腰を下ろして、薄っすらと明るくなった夜空を眺めていた。

ひゅーっ、と私の髪の毛を払って風は吹き抜けていく。眠りの中で温まった身体を少しずつつ冷ましてくれる。それがなんだか心地よくて、しばらくそのまま目を閉じてみたりもした。

「……………」

籠った熱も冷めてきたところ。少し剣を振って身体を暖めなおそうかな。

そう思っただけは海岸に寄って夢想丸を両手で持ち構えた。

何度か深呼吸をしてその場で素振りを試みたり、この大きな海を半分にしてしまうようなイメージで剣を振り下ろしたりした。でも、何か足りないんだ。何かが……………。

たくさん剣を振って汗までかいた。私はそのまま朝風呂として浴場へ向かった。今日はパーフィさんもお休みみたいだ。いつもならこの時間になったらパーフィさんと2人でこの浴場にいる。

「はあ……」と小さく息を吐いて、少し熱い湯舟の中でのんびりしていた。右手の首に髪を結んでいたヘアゴムを巻き、少し昇り始めた日の光を眺めた……。

「……綺麗だなあ……」

「 1人で何言ってるんだよ……?」

「へっ……?」

思わず変に裏返った声が出てしまった。誰もいなかった筈の浴場に、男の人の声がしたから。

「…よ、アイリス」

「…ッ!」

無我夢中で私が発した悲鳴で、近くで眠っていたであろう小鳥たちが一斉に朝日に向かって飛び去った。

\*\*\*\*\*

「あっはっはっは、そ、それでか……」

と、エレナさんはお腹を抱えて笑っている。私の悲鳴で起こしちゃったみたいだ。

「…な、なんであなたがここに?」

「 フン……。姉さんに頼まれたから来ただけだ」

「姉さん……?」

私の横に居るのは、夢想丸を取り合ったあのウィードだった。ちょっと口調がキツくて、正直良い印象を持っていない人物でもある…。

「あー、パーフィのことだよ。姉さんって。なー、ウィード」

「えっ…！ ぱ、パーフィさんの弟…っ？」

「……意外か？」

「意外すぎるよお…！」

パーフィさんとウィード。何だか釣り合いそうで釣り合わないというか。

まだ夜明けから間もない時間。私とエレナさんとウィードは中央室でそんな話をしていた。結局ウィードはパーフィさんに言われてここに来たみたいんだけど…、それでなんでお風呂なんかで出くわしたんだろう。

「…眠かったから風呂入って目覚まそうと思ったんだよ」

「わ、私が入ってくる前から…？」

「そうだよ…。このギルド、女湯しか無いんだもんな」

一応…半分納得。まあいつまでも引つ張っても仕方ないことだけど。

「ふふふ…、しかしなんで呼ばれたんだ？ ウィードは」

「……姉さんに聞かないとわかんない。」

と、少しやさぐれた感じてそう言った。なんだか前の時と印象違って見える、と感じた。ただ眠いだけなのかも知れないけど。

「んじゃあたしパーフィ起こしてくるな」

そう言ってエレナさんは走って行ってしまった。ウィードと2人つきりで、なんだか気まずい雰囲気になっていく。

「……何か言えよ」

「な、何かって…」

「夢想丸はどうなんだよ？ 調子は」

「え、調子…。調子って言われても……………」

その後、また沈黙状態になってしまふ。雰囲気どころか空気自体悪くなつていくのが良く分かつて、それが変に胸に引っかかる。

「お前、まだ完全なソルジャーじゃないってのにここの構成員なんだな」

「そ、そうだよ。何か悪い…？」

「けっ、別に……………」

む、なんだか愛想悪いなあ…。印象変わって見えるっていうのは撤回だ。あの時と同じ口の悪いウィードだ。

「ウィード。もう来てたのか」

「ん、姉さん」

と中央室にパーフィさんも起き出してきた。少し乱れた着物というか巻き布を直しながらこちらへ向かつてくる。

「おはよう、アイリス」

「おはようございますっ……………」

「ふん…。で、俺に何の用事だよ？」

「ああ、ちよつとこの子に関係する事でな」

…そう言つてパーフィさんは私の頭を何回か撫で回した。私に関係する事、なの……………？

「ウィード、お前にアイリスの世話役を任せたい。そして2人で修

行に励んで欲しいんだ」

へ……？ 私もウィードもぼかんと思考回路が煮詰まっていた。しばらくしてやっとその意味を理解して、

「ええっ！！」

あんまりにも驚いて、ついついウィードと声を揃えてしまった。その後顔を見合わせてしまい、何だかさらに気まずい雰囲気。

「ははは、何か仲いいな」2人とも

「え、エレナさんっ！！」

「あっはっはっは」

そんな私たちのやり取りをからかうようにしてエレナさんが大笑いしていた……。パーフィさんも耐え兼ねないクスリ笑いで私を見ていた。

「……ゴ、ゴホン。さて、そういうことだ。ウィード、アイリスのことを頼んだぞ？」

「ま、待てよ！ 俺がこいつの世話役？ 冗談じゃねえよ」

「なっ……、じよ、冗談ってえ……」

「んだよ？ 誰がそんなの引き受けるかってーの！」

ウィードは私を少し冷ややかな目で見て、パーフィさんにそう言い放った。

「……ふっ、これでもイヤと言えるか？」

「な、なんだよ？」

パーフィさんが何やらポケットから取り出した。それは何かバツジのようなもの…？

「それ…！ お、おい、それをくれるってのか！」

「私の頼み事を聞いてくれるなら、だ。いやこれはギルド全体からの頼みか」

「……チツ、しゃーなーなあ……。わーったよ！」

「え、ええ〜っ…!？」

ウィードも承認しちゃった…？ ど、どうなっちゃっの〜！

§ §

そしてそろそろ時間も昼時。その急な“修行の旅”は今から行かされるようだ。

「ウエルトさん…、私本当に…？」

「ああ。だんだんキミの能力も覚醒しつつある。ウィードと少し修行してそれを完成してみてくれ」

そんなこと急に言われたって…。なぜかウィードはすっかりやる気、なのかな…？

「おら、さっさと行くぞ。いつまでも女臭<sup>くせ</sup>えギルドにいんのも息苦しいからな！」

「ま、待ってよ〜っ！」

「…ふふ、気をつけて行っておいで、アイリス！」

……その修行内容とは。

まず私の夢想丸をちゃんと手懐ける事。時々起こる発作のような症状は、まだ完全に夢想丸がなついていないということらしい。

そして、魔術も身に付け真のソルジャーとなってリアンに帰ること。…といっても出かけるのはたった3日だけになるみたいだけど。ウィードは長く私と一緒にいるのがイヤみたいだし……。

「…おい、行く場所は決まってるのか？」

「そんなの決まってるないよ…。だ、だって急だったし」

「ったく、そんなくらいすぐ決めておけよな」

「そんなこと言ったって…」

私の腰には、何か鎖のようなものが巻かれた夢想丸。私が朝のお風呂に入ってる間にウエルトさんが何かしてたみたいなんだけど、本人に聞いても曖昧な事しか言ってくれてなかった。

「適当にお前の故郷でも行ってみるか。リアンに来てから帰ってないんだろ？」

「あつ！ そ、それいいね」

「…自分でそんなくらい思いつけてーの！ まったく、大変な3日になりそうだぜ」

ウィードは相変わらず冷たい態度だけど、私には少し楽しみという希望も湧いていた…り。



第20話 sunrise(後書き)

はい、第2章開幕です。

この章ではウイードが重要キャラになってきます。貴重な男キャラなので、作者としても気合を入れて書いていくつもりです。  
では、次話からいよいよ新展開 !

## 第21話 大きな滝の下で

「…わあ、帰ってきちゃった」

突然ギルド・リアンから下された任務(?)。それは夢想丸を完璧に手懐けることであった。

そしてそんな私の横に立っているのは……、

「んで、お前ん家どこだよ？」

「え、えつと…あつちだよ」

ぶつきらぼつな感じ、こう言っちゃ悪いけど決して暖かくない目線。そんなウィードと2人での修行であった。一応期間は3日だけなんだけど、正直3日だけで夢想丸を手懐けるなんて出来るはずないなんて思ったりもしていた。

きつとそれを口にしたらウィードにまた何か言われちゃうかな…。たしかウィードも夢想丸に認めてもらいたくって、以前は無理やり私と戦わされたし。

「ねえ、修行…って何すればいいのかな」

「はあ？ ……そうだな、集中力をつけるとか？」

「集中力…か」

ウィードの答えも若干曖昧だった。というよりも、答えに困ったのかな。具体的になって言われても難しいか…。

「とにかくさっさと行くぞ。モタモタしてつと日が暮れる」

「あ、うん…っ」

ホウキを左手に持ち替えて、私はしばらく帰ってなかった実家に戻る事にした。ただウィードもいるんだけどね。

私たちが降り立った場所は、あの滝の場所だ。ウエルトさんと初めて出会った場所。何日も修行してた滝だ。そっか、修行だ…。私はここで修行してた。

村の中をしばらく歩いてみると、なんだか懐かしい気分に戻ってきた。私はここで生まれてここで育ってきた。

村の様子から、あれから鬼のような脅威は起こっていない様子。

「……なんかあそこと似てるな」

「ん、あそこって？」

「俺が住んでる村もこんな感じさ。前来ただろ？」

そんな話をしながらウィードと横に並んで歩いていた。なんだかさつきまでの冷たい感じは少し薄れて、村の暖かみを感じてるのか穏やかな感じだった。

「あつ！ アイリスじゃないか！」

と、背後から大きな声がして、振り向くとそこには知り合いの村人さんがこちらに手を振っていた。

「どうしたんだ、急に帰ってきたりして…。英雄さんっ！」

「え、英雄って…。」

鬼を退治して、どうやらこの村では英雄扱いのようだ…。これは少し対応に困っちゃうかな？ 嬉しいことだけど、ね。ふと横を見るとウィードは黙って、腕組みしながらこちらを眺めていた。

「これからウルさんの所に帰るのかい？」

「はい、久しぶりだから……」

「ははは、喜ぶぞ〜ウルさん。なら早く帰ってあげな！」

相変わらず元気な人ばかりだ。とりあえずウイードの視線が気になったので、まずはおばあちゃんのところに行こう。

§ §

一方、そのころギルド・リアンでは。

「……………ふわわ……っ」

上層部のメンバーは依頼を持ち、コロナとマイリーはリミレットの様子を見に行っていた。中央室にいるのは、ネイラとリーン、それとエレロワの3人。

「ネイラも眠かったらまだ寝てりゃいいのに。そんなあくびしてさ……………」

「……………ツくしゅ……」

「って！ くしゃみかよっ！」

リーンのツッコミを受けて尚、ネイラとエレロワはほぼ半目状態でその場にいた。

「……………だって、アイリス……いないんだもん」

「そっだよお〜っ！ なんてあんな乱暴そうな人に預けたのさー」

「あたしだって知らないよ…。それに起きてる理由になつてないし！」

リーンがビシツと手の甲を2人の額に当てる。「ふわぁ」と2人揃つて変なあくびをして、ソファの上で並んで横になった。

「……アイリス、大丈夫、…かな」

「もお、ネイラちゃんったら、アイリスの心配ばかり」

「……。」

エレロワは少し妬ましい目をして、ネイラの腹部にぎゅうっとしがみ付いた。

「だつてなく、ネイラはアイリスのこと　　むぐぐ、なあんだよ」

「……むう」

ネイラは少しだけ頬を赤くしてリーンの口を無理やり押さえつけた。

「ぶはっ…。だつてホントのことじゃなかー」

「ん、何がホントのことなの？　ネイラちゃん」

「…き、気にしなくても、平気だから」

「エレロワ、耳貸して耳」

「だっ…ダメ、だよ…」

エレロワは「ん？」とよく分からない様子のままリーンに片耳を預け、その後「ふんふん」と何かを理解しきつた清い顔をしてネイラのもとへ戻ってきた。

「なぐるほどねえ…？」

「も、もう…エレロワまで…っ」

ネイラはだんだんと顔をさつきよりも赤く染めて、両手を自分の頬に当ててその部屋を駆け出て行った。

「ありやりや、からかい過ぎたかな」

「えへへ……。ネイラちゃん、“じゅんじょー”だもんね」

「純情ねえ…。まあそう言われればそうか」

普段のような平凡な会話をして時間を潰していた。リーンは休暇を取って、ネイラとエレロワは夜にならないと基本的には仕事を持たない。

ソルジャーとしての実力のある夜勤組2人には夜の緊急時の対応がメインの仕事となっている。

「おい、ネイラちゃん？」

「……わっ…！」

少しの時差でネイラはびくっと軽く飛び上がって振り返ろうとした……が、座っていたイスが期待を裏切り、そのまま鈍い音を立てて倒れた。

「あははははっ」

「……うう、イテテ……」

「あはは…っ、ネイラちゃんらしくないなあ、なんか」

イスから転げ落ちて、逆さまになったまま強打してしまった頭部に手を当てて変にもがいて痛がった。

「びつくりしたんだもん……っ」

「ネイラちゃんっ、アイリスの様子見に行かないっ？」

「……えっ！」

らしくもなく、ネイラはいつもより大きな声で驚いてしまった。体制はまだ転げたまま……。

「ね、あのウイードって人に何かされてたら大変でしょ？」

「……行こう、準備、してくる」

「わあ、ネイラちゃんノリ気だねっ　あたしもノってきたあっ」

何をどう“ノった”のかよく分からないが、2人は準備を済ませアイリスの元へ向かうことにした。

アイリスがどこへ向かったのかも全く分かっていないままなのは、後々気付く事になる……。

\*\*\*\*\*

またその一方、リミレットの様子を見に行ったコロナとマイリーは

セントガリアル砦にリミレットは輸送されていた。砦に着いてリミレットの様子を見に行くと、まだ目が覚めていない様子。

「なるほど、この方がリミレットさんですね」

「っん……」

リミレットは質素なベッドの上に寝かせられていたが、決してぐったりとしているわけではなく、間隔の開いた規則正しい呼吸をしている。

「あの…、リミレットは回復気味なんですか？」

「はい。オムブルの魔力は徐々に消えていますので…」

と、こここの守り手であるガリユルアートの兵士は頷いて答えた。

「そういやコロナさん、なんでもBランクになられたとか……」

「…あ、うん。えへへ…色々と失敗しちゃって、ね」

「す、すいません！ お気に触られましたか…」

ガリユルアートはギルド・リアンの直属の兵士集団を表す呼び名。ソルジャーを始め、ナイトやマジシャンも多数掛け合わせている規模の大きい組織だ。リアンの下についているものなので、兵士たちは頭が上がらない様子。

「コロナさん、また機会を伺って来ましょ。今はまだ待っていても」

「…ん、そうだね。じゃ…また来ますね」

「はい…。お気をつけて、お2人とも」

コロナとマイリーを見送って、兵士は再び持ち場に着いた。

「…そういえば、さ」

「どうしました？」

「前にセントガリアル砦、敵兵に襲われてたよね」

「あ…、そうでしたわね。動機はまだ分かっていないみたいです」



けど」

「……そのちよつと前に、ウエルトちゃんが何者かに襲われたですよ？」

ランクSの任務だった。ウエルトはただ1人、謎の黒い衣を羽織る連中とすべくその依頼を持った。

報告によれば、4人の凄腕のソルジャーを相手にし、夢想丸らしきものごとを詮索されそうになった。

「……エレナさんが総長を急に助けに行つたあの時、ですね」

「うん。それで……、やっぱりアイちゃんは狙われてるんじゃないかなって」

「……そうですわね。夢想丸を求める輩も少なくとも無いでしょうから」

コロナは、皆を襲つた連中もその一味じゃないかと考えていた。

「ウエルトちゃんが苦戦する相手みたいだし……さ。もしアイちゃんとウィード君のもとにその連中が現れたら」

ただでは済まないことになるかもしれない。少し嫌な予感がして、2人はとりあえず本部へすぐに戻る事にした。

§ §

「おばあちゃんっ！」

そのおぼつかない腰つきのおばあちゃんに、ぎしつと抱きついた。

「おやおや、帰ってたのかい。アイリスや…おかえり」  
「うん、ただいまっ」

玄関ではウィードが“入り込めないからなんとかしろ”みたいな視線を送っているのがわかったけど、しばしおばあちゃんとの再会を喜ぶ事にした。

「…なんだか雰囲気変わったねえ、ギルドとやらは楽しいかい？」  
「うん、優しい人ばかりで…えっと、でもお仕事は結構大変なのもあって…」

「俺を除者のけものにすんなよ…。バカ」

と、割って入ってウィードは腕組をしながら家に上がった。

「おやおや、ボーイフレンドまでできたんかい」

「えっ！ ち、違うよぉ～おばあちゃん」

「……ウィード・パーフィと申します。しばらくこのアイリスと共に修行させてもらってまして」

「おおそうかい…。礼儀正しい少年じゃの。アイリスも隅に置けんのぉ」

「も、もう！ おばあちゃんったら…！」

ウィードは急に敬語なんか使い始めて、組んでた腕もまっすぐ下におろし綺麗な一礼をして見せた。

「……なんか私の時と全然対応違うね」

「当たり前だ、お前は俺のライバルだからな。ライバル相手にあん

な喋りできるかってんだ」

「…ライバル、か。夢想丸、狙ってるんだよね…？」

「狙ってる？ いや、取り返すためだ。もともとパーフィ家の家宝だっつてのは知ってんだろ？」

そういえば…、前にパーフィ家のお爺さんが言ってた。それに私の核とリンクしてる、とかそんなことも。

「ところで、修行つてどこで何するんだよ？ 俺たちは故郷を懐かしみに来たんじゃないぞ」

「…うん、いい場所あるんだ」

私の道が切り開けた、あの場所。

## 第21話 大きな滝の下で（後書き）

今回は少し振り返り回でした。何の事かわからない部分は、これまでのお話を読み返していただければご理解が可能かと。ご承知くださいませ。

ウィードとアイリスのコンビ、作者としてはかなり凝ってます。そしてリアンに残っているメンバーのお話も次々と広げていきます。

## 第22話 いつもの場所

「さっき降りた場所じゃねえか」

おばあちゃんはいつものように畑を耕して野菜を作っていたので、近くまで行つてくると言つて私たちはこの“滝”の下に來た。私がソルジャーを夢見るようになってずっと修行をしていた場所だ。

「うん。ここの滝、流れが凄く強いから修行にイイかなつて」

「なんだ？ この滝にでも当たるのか？」

「えっ！ 違う違う、この滝に向かつて剣を振るんだよ」

私はずっと木刀でそんなことをしてた。夢想丸を使えるのが、そのおかげなのかどうか分からないけど。そんな簡単なことじゃないんだよね、きつと……。

「…そんなんで修行になんのか？」

「だ、だったら、やってみなよお」

ウィードは呆れたような顔で剣を抜き出し、滝壺にある僅わずかな足場に飛び乗つて剣を滝に向けて振り下ろしてみた。すると…、

「うおっ…！？」

滝の勢いはかなりの物で、案の定ウィードの身体は剣ごと水の流れに負けて水面に落ちてしまった。

「…うい、ウィードっ！？」

「…ぶはっ、な、なんだこの滝っ！」

「あはは、凄いでしょ？」

さすがのウィードでも驚きを隠せない様子。そんな彼を見て私はなんだか得意気になってきてしまった。

「早く言えよ……たく、びしょ濡れだぜ」

「風邪引いちゃうよ……。一旦家に戻る？」

服に水が染みこんでなんだか重そうだったので、私は仕方なくウィードの片腕を引っ張り上げて肩に掛けてやった。するとウィードはそれを拒絶するように私から離れて、

「……平気だ、俺は上で見てる」

「えっ、でも……」

「いいから！ 覚えとけ、男はこんなことじゃ風邪なんか引かねえ！」

そう言つてウィードは岩場をひよいひよいと登つて滝の上に行つてしまった。

男の人つて……、そういうのに強いものなのかな？ だったら平気、なのかな……。そう思いとどまったが、埒らちが明かないので。

夢想丸をそつと滝の前に出して、一度深呼吸。

「……はあっ」

軽く滝の水につけると、夢想丸は妙な協和音のような音を奏で出し、なんとなく心地いい。

そして夢想丸に滝の水が勢いよく当たっていく度に、私の中で何かが何度も蠢蠢いたような感覚もした。

「やあッ！」

ズザアッ……。滝の流れは斬られ、一度だけ途絶えて元に戻る。

「アイリス、ちょっと待った」

と、今度は滝よりも勢いよくウィードが滝の上から降りてきて私の立っている狭い足場に降り立った。

「どうしたの、ウィード？」

「お前、魔術は使えるようになったのか？」

「……使えないよ。ホウキに乗るだけならできるけど、ね。」

「だったら、今は“剣技の修行”より“魔術の修行”が先決だ。ついてこい」

そう言うとウィードはその足場から大きくジャンプして土の足場に戻った。

魔術の修行…か。何するんだろう。ちょっとだけコロナさんとやったことあるけど。

「……ホントに何にもできねえんだな」

「だ、だって…っ」

魔術の修行をウィードとすることになったんだけど…、

「集中しろ！ こうやって剣にエネルギーを送るように、だ！」

「さっきからやってるっば」

「…ったく、夢想丸に認められたとか聞いて呆れるぜ」

「うう…」

「オラ、俺がビシバシ叩きこんでやつからよ！途中で投げ出すじゃねえぞっ」

色々と罵声(?)を浴びせられた私は、少し落ち込み気味でウィードの言つとおりにした。ここまで言わなくても…、なんて俯きながらウィードの言つたとおり夢想丸を前に掲げて強く念じてみる。

「……………うう、ホントに上手くいくのかなあ」

「諦めんのかよ？姉さんたちが聞いたらがっかりされるぞ？」

パーフィさんやリアンのみんなは……、私を暖かく受け入れてくれた。そうだよな、がっかりさせるわけにはいかないか。できる限り私なりに頑張ればそれでいいのかな。

「おやおや、頑張ってるかの」

「あっ、おばあちゃんっ？」

するとおばあちゃんが私たちのところへやってきて、何やらお茶菓子のようなものを持ってきたくれたみたいだ。

「ほれ、お前さんも食べてみなされ」

「…ありがとうございます」

ウィードは何食わぬ表情でそのお茶菓子にそつと手を伸ばしてそれの吟味に集中していた。

おばあちゃんのお茶菓子は小さい頃から大好きなんだ。ちょうどこんな大変なときの息抜きになって、凄く嬉しい。

「おばあちゃん、ありがとう」



「ほっほっほ…。何やら大変そうじゃが、頑張るんじゃぞ？」  
「う、うん！」

おばあちゃんがそう私に言うのを横に、ウィードの視線を感じて少しだけ「うん」と答えづらかったりもしたけど、やっぱりおばあちゃんの期待は裏切れない。

「それでこそアイリスじゃ。帰る頃には夕ご飯作って待ってるよ」  
それでこそ、か…。なんだか胸に来るおばあちゃんの言葉。おばあちゃんはそう言い残して村の方に戻っていった。

「…………ほら、続けるぞ」  
「う、うん…！ 頑張るよ…っ」

ウィードは、少し意外そうな顔をしたあとすぐに真剣な顔に戻って、私はまた夢想丸を掲げて念じ続けた。そうだ、こんなところで諦めてなんかいられないよね。

§ §

「そうですか…、もうそんなに」

実力あるリアンの上層部3人は、パーフィの実家に足を運んでいた。パーフィの祖父、ゲンドにアイリスの状況を聞きだしにやってきたのだった。

「あの子なら平気だと思うんじゃが…。少し思う事があっての」

「なんです？」

「……いつ暴走するか分からないのじゃ。彼女はまだ未熟ゆえ、リミッターがまるで効いていない状態なんじゃよ」

「り、…リミッター？」

エレナがそう問うと、ゲンド爺さんは深く頷いて話を続けた。

「ウイードと戦わせた時…さりげなくじゃが、あの子は本気で殺そうとしていたように見えたのじゃ。それもアイリスの強い意思によって封じられ、“みねうち”という形に持っていかれたがのお」

ゲンド爺さんは少し呼吸のペースをゆっくりめにして深呼吸し、ウエルトたちの正面を向いて目を見開いて、

「夢想丸の性質、これは知っているな？」

「あれですよ、斬った人を酔夢に陥れる…って」

「うむ…。時にウエルトよ。アイリスが“鬼”を夢想丸で打ち倒したというのは事実なんじゃな」

「はい。実際に夢想丸の胴体部にそれらしき血痕も見られましたので」

「ずっと、と湯気を立てるお茶を一度口へ運び、ゲンド爺さんは真剣な眼差しをして湯呑みを音を立てて置いた。

「…お前さんたちはアイリスを見守ってやってくれ。今回の修行でアイリスがどう成長して帰るのか、それによって対処も変動するじやろっ」

「はい。…お爺様、ウイードは…」

「大丈夫じゃよ。なんとってお前の弟、じゃろっ？」

\*\*\*\*\*

\*\*\*\*\*

気がつけばあたりはもう暗くなっていた。

「…もう日も暮れたか。アイリス、そろそろ戻るぞ」

「あ、うん…っ」

ウィード曰く、少しだけコツを掴めて来たそうだ。けれど私自身にそれらしい実感はまるで無かった。

それどころかただ気力を使い果たしてしまったような、変な無力感にも陥っていた。これまでが上手く行き過ぎてたのか、少し自身を無くす。

ウィードはあくまで厳しい教官となつて私に魔術のイロハを叩き込んできた。魔術は鍛えようによつてだけど、全ての人に扱えるものらしい。ただ、その才能だとかさまざまじい集中力だとかを兼ね備えていないと、その力も開化せずに放置状態になってしまうとのこと。

「ただいまあ、おばあちゃん」

少し落ちたトーンでおばあちゃんに帰つたことを報告すると、おばあちゃんはキッチンに向かって大きな鍋をグツグツと掻き回していた。凄くいい匂いがして、まるで疲れも吹き飛びそう。

「おかえり。もう少し掛かるから部屋で休んでるといいよ」

「うん。おばあちゃん、ヤケドしないようにね」

心配いらぬ忠告を残して、私はウィードを連れて自分の部屋に戻つた。

この部屋もしばらく帰ってなかったためかやっぱり懐かしく感じる。そんなに長い間帰ってなかったわけじゃないんだけど。

「……ね、ウイード」

「ん？ なんだ」

「私、さ……。ホントに」

そう言いかけたその時、部屋の外で何やらガタガタと乱音がしたのでそちらに2人とも気を惹かれてしまい。

「なんだろ……？」

部屋の窓を開ける。するとそこにはひっくり返ったような2人の人影が……。

その正体がすぐに分かって、私は窓を飛び越えてその着陸地点に駆け寄った。

「……ね、ネイラちゃん？ それにエレロワちゃんも……」

「あははは……、着地失敗 アイリスく会いに来たよお」

落ちたのは生え乱れた茂みの中で、エレロワちゃんの頭の上にはその小さな葉っぱが散らばって乗っている状態。ネイラちゃんもむくつと起き上がった。

「……良かった、無事みたい、だね」

「ぶ、無事……って？」

「あんたら、上層部に許可は得たのか？」

と、私の背後からウイードの鋭い声突き抜けていった。許可、って何のことだろう。

「あーっ、乱暴な口の人〜！」

「……またお前か、ガキンちょ」

「むきーっ！ ガキって言うなあ〜！」

ウィードとエレロワちゃんが睨みあっている中、ネイラちゃんが私のところへ寄ってきて、

「……ここ、アイリスの家？」

「あ、うん。そうだよ？」

「………」

ネイラちゃんは何かにこやかな表情を見せて、エレロワちゃんを引っ張り睨み合いから脱出させる。

「ネイラちゃあん、この人怖い〜」

「……どうしてココが分かった？ 行き先は不定だったから伝えてなかったはずだが」

「ネイラちゃんの探知魔術だよ〜ん ね〜」

なんだか私が蚊帳の外状態。3人は私のよく分からない話で盛り上がって（？）いた。

「……ウィードさん、修行の方は、順調？」

「ああ、決して不調ではないな」

「ええっ！ だ、だってまだ魔術の1つも……」

と私は割って話しに入ろうとすると、ウィードが私の頭を押さえつけてきた。そのせいで変な姿勢になってしまい、「わあっ」と変に高い声が出てしまった。

「……アイリス。魔術のことなら、私に任せて」

「えっでも2人はこれからお仕事とかじゃないの？」

「大丈夫。…ウィードさん、私たちも一緒に、いいかな」

ネイラちゃんとエレロワちゃんが私の元へやってきてくれた。嬉しいやら、大変そうやら……。ウィードだけでも何だかこんなに疲れるんだけどな。

とにかく、その夜は2人も混ぜておばあちゃんを入れて5人、鍋を囲んで楽しく食事をした。

ウィードがかなり居づらそうな感じだったのは、分かっていたけどあえて何も言わずに見守った。

## 第22話 いつもの場所（後書き）

今回は進展無し、ですかね。ウィード君がハーレム状態になってしまいました。

アイリスの修行はどうなるのか、そして魔術を会得することはできるのか。次話、アイリスの大きな進展が見られるかなと思っております。

## 第23話 迫るモノ

「……そう、その調子、だよ」

明朝、朝早し。

アイリス、ネイラ、ウィードの3人が滝のふもとで静かな森の音を聞きながら何かをしていた。

鳥の鳴き声と滝の落ちる音、それに吹き抜ける風の音が見事の調和し、心地よい協和音を奏でている。

「（昨日より上達している？一体アイリスに何をした…？）」

滝に向けているのは剣ではなく、アイリス自身の両手。その狭い足場の上で、アイリスとネイラは水しぶきを浴びながら“魔術の修行”をしているようだ。

「アイリス、そのまま目を閉じて集中してみて」

「う、うん…！」

モチベーションも上がり、アイリスは昨日に増して集中力も上がっていた。ウィードはそんな2人の見張り役。

ウィードには事前に夢想丸を見張るよう姉のアフロディテに言われていたため、この修行の旅も実は前々から練られていた計画中にあつた。

そのためウィードは嫌でもアイリスを見張らなければならない。彼女が夢想丸を完全に使いこなせるようになるまでは。

「今だよ、力を解き放ってみて…」



ふっ…と力を抜いて集中していた分の気力を放出するように。すると、ほんの一瞬だけ目の前の水面が縦に割れた。

「わっわっ…！ 今、水が！」

「……ふふっ、どう？ ウィードさん……」

「（あんたは血筋があるからだろ、…ったく）」

その後も魔術の修行は続き、日は丁度彼女らの頭上まで昇るまで時間が経った。

「おやおや…、元気な子たちじゃな」

「えへへっ アイリスのおばあちゃんって優しい人なんだねっ」

エレロワはすっかりウル婆さんに懐いた（？）ようで、特製のお菓子を頬張りながら家の前を走り回って遊んでいた。それを屋根の上で見ているのはネイラとアイリス。ウィードは「滝にリベンジしてやる」などと言って修行場に留まっている。リベンジ、とは意味合いが違ってくるのだが。

「……エレロワ、元気、だね」

「あははは…、だってまだ12歳でしょ？ ああやって遊びたい年頃なんじゃないかな……」

「……アイリスも、ああやって、遊んでた？」

「えっ、う、うん……。どうだろう……」

幼い頃に両親を亡くし、友達もいなく唯一の理解者はウル婆さんだけだった。それだから、ああやってはしゃいで遊んだ事なんて無かったかもしれない。

もつとも、小さい頃の事なんてそう沢山覚えてる訳もなく。

「…友達、いなかったから。私」

「えっ……」

アイリスが小さくそう言うと、ネイラの顔色も少し暗めになった。

「で、でもね！ 今はネイラちゃんみたいに…友達、出来たからもう寂しくないよ」

「……アイリス」

「あははっ、変だな…昔の事なんてとっくに忘れたはずなのにっ」

なんだか無理して笑顔を作っているように見えていたネイラは、そのまま黙って座ったまま腰をアイリスに近づけた。

その後ネイラはぼそっと何かを囁いたのだが、元々声は小さい方なのでアイリスはつい聞き逃してしまった。でもなぜかアイリスには嬉しく思えたことだった。

\*\*\*\*\*

その一方、ウィードは滝と睨み合っていた。

「……」

予想以上に重量感溢れる流れ方をするこの滝に、以前は剣を持ってかれそうになって足場から落とされた。

そしてそれはウィードに屈辱を与え、変な敵視を向けていた（滝に）。

「おらぁッ!!」

ザバァッ…! 滝を斬りつけるとその水しぶきがその身に降り注ぐように掛かる。風も少なかつたためそれによる寒さも感じず、ウィードの集中力の矛先は剣の先に。

「（こんなに重く流れる滝を…軽々しく斬ってたあいつは一体何モんだよ、ったく…）」

剣に錆びが入るといけないので、ウィードの剣はそのまま鞘にしまわれた。上を見上げるとその滝はまるで笑うかのように曲線を描いて水を流している。

それに一度舌打ちして、ウィードはその狭い足場から元の場所へ飛び戻る。

「……夢想丸はどうしてあいつを…」

分からない。宿命だとか、そういう運命だとか言われてもウィードには理解し難いことだった。

なぜ、あのアイリスを選んだのか。夢想丸は持ち主を選んでこの時代まで引き継がれてきた。それは由々しきパーファイ家に伝わってきた。ウィードもその一味なワケだが。

ちょっとした悔しさを噛み締めたまま、アイリスのいる村の方へ。

ウイン…、ガシャガシャッ!

「……（なんだ？ この音…）」

\*\*\*\*\*

\*\*\*\*\*

昼間もネイラによる指導で、着実に魔術のコツを掴んでくるようになってきたアイリスであったが。

「はう…、つ、疲れたあ」

「……今日は、これくらいで、いつか」

時間は過ぎに過ぎ、日も落ちかけてくる頃。エレロワは滝の上の岩場のところで腕を立てて寝転がり、こちらを覗きこむようにして眺めている。

「…アイリスは、風の魔術性質っぽいね」

「魔術性質？ 風…」

「うん。……ウィードさんのと、なんだか似てるんだ」

ウィードと似ている、その言葉に少し変な違和感を抱きつつもあえて何も言わずに両手を見つめるアイリス。

「私、魔術を……」

「…アイリス？」

「あ、うん…。嬉しくって、ちょっと動揺してるの」

「そっか…うん」

魔術を身に付けて、そこで初めてやっと“ソルジャー”としてリアンに居れることになる。

ホウキで飛べるようになったのは、コロナの指導のおかげ。そして

この“風の性質”の魔術を使えるようになるのはネイラのおかげ。世話になってばかりだな、と遠慮がちな性格のアイリスにはそう思えていたりもした。

「2人ともくっ！ そろそろ帰ろうよおー」

滝の上でエレロワがそう叫んだ。

3人は足並みを揃えながら、滝の修行場を後にしウル婆さんの元へ帰ることにした。修行の旅は、あと2日。といっても…その2日の内の1日もそろそろ終わるころなのだが。

「おばあちゃん？ 叔父さんが来たってホント？」

「ああ、アイリスが帰ったって聞いて駆けつけたみたいだよ。あやつはいつも通りじゃったがのお」

「あはは……」

アイリスの父の弟に当たるランマ叔父さんは、血族なのにも関わらずアイリスの世話を放棄しようとした人物であり、ウル婆さんとは少しばかり対立気味な立ち居地にある。

「バカな男じゃよ。アイリスは姪っ子じゃないか」

「……おばあちゃん」

少し嫌悪な雰囲気になるのを、アイリスは嫌だったのでそのまま静かに部屋に戻る事にした。アイリスの部屋には他の3人も一緒に腰を下ろしていた。

「ふわああ…、あたしもう眠いや」

「ったく……だったらリアンに帰れっての」  
「むうー」

また例に乗っ取ってエレロワとウィードは、猫が威嚇し合うように睨み合う。

「……私も。にゃん……にゃあ」

「あ、あははは……ネイラちゃん、結構お茶目なんだね……」

「ネイラちゃん、怖い野良猫さんが怒ってるよお」

「……だあ、もういい。ショートコントも疲れる」

ショートコントだったのか、疲れるならそのままにしていればいいのに……など色々言いたい事も思いついたりした。けれどアイリスも流石に疲れていたもので、そう突っ込む気力も無く。

結局、そのままその日はみんなで寝る事にした。当然だが、男子のウィードは別部屋に追いやられ……。

§ §

ウィン……ういん。ガシャ……ッ。

「……探せ」

土の道を歩く、鉄で出来た手足を持つもの。その両手部分には鋭く磨かれた斧おのや火炎放射器のようなものが付いている。直立歩行で大

きさは人並み。1つの赤く光る目がその進行方向を照らす。その数は、どこかを攻めるかのような数で、約30体。

「たーげっと、カクニン」

「攻撃もーどニ移リマス」

喋る事のできる能力もある。ある程度の事だけだが。そんな機械の中に一人、生身の人間がいた。その男がこれらを操ってるのだろうか。

「よし、行け。抵抗する者は全て消せ…！」

男がそう言って指差す方向に、妙な機械音を立ててその集まりが動き始めた。

ウイーン、ビービー…。ハカイスル、ハイジヨスル。  
手ニ入レル、膨大ナル、ちからヲ。

## 第23話 迫るモノ（後書き）

突然現れた謎の機械たち。これらは一体どこへ向かっているのか、  
そしてアイリスは無事魔術を会得出来るのでしょうか。  
次話、夢想丸が動きます。



## 第24話 引き金

日も暮れてきた、夕方。滝の水は橙色の夕日を水面に移していた。

「そのまま前進しろ。妨害する者は消せ」

男がそう命じると、機械兵たちは足並みを揃えて突き進んでいく。片手に斧を、もう片手に火炎放射器を装備している。

「ビービー…ッ！ たーげっと、1km先二確認シマシタ。進撃もーど二移行シマス」

「待てッ！」

すると林の奥から少年らしき声が出た。機械兵たちは当然、主の言あまじ葉にしか耳を傾けないのでそのまま無視して突き進んでいった。

「何者だ、貴様？」

「ウィード・パーフィだ。その機械で何をする気だ」

「……説明する必要は無いな。その腰に下げている剣、貴様もソルジャーか」

ウィードは瞬時に剣を抜き、その男に向けて立った。ある程度の推測だが、恐らく夢想丸を狙う連中なんだとウィードはそう思い込んだ。つまり、“敵”だと。

「機械兵ども！ 10体は進行を続け、残りの20体はこちらに付  
け！」

「ビー……命令変更、確認シマシタ」

前の方を進んでいた機械兵たちはそのまま村の方へ進行して行き、後ろの方の機械兵たちはぐるっと体勢を180度回し、ウイードの方を向いた。持っている斧を何度かブンブン振っている。

「やはり狙いは夢想丸なのか？」

「……いや、違うな」

男は自分の周りの機械兵の動きを一度だけストップさせ、腕を組んで視線を向けてきた。

「その夢想丸を持つ、あの娘だ。確かアイリスとか言ったか」

「なんだと…!？」

「さて、ハナシは終わりだ。 やれッ！」

機械兵たちが急に動き始め、ウイードの元へ突進して来た。小さく舌打ちし、ウイードは剣を向けたまま機械兵たちに斬りかかっていた。

\*\*\*\*\*

「ウイード、遅いなあ…」

アイリスの部屋。エレロワはすっかり疲れてしまい布団に包まって眠っている。

「…ふふ、気になるの？」

「えっ！ そ、そうじゃないってあ…。だってもう外も暗くなってくるし」

「……………（慌ててる慌ててる）」

ぼそっ…とネイラはアイリスにも聞こえないような小さな声でそう言った。確かに外はもう日も落ち暗くなってくる頃だった。ウル婆さんももう夕食の準備を始めているところだ。

「ねえ、ネイラちゃん」

「…ん？」

「私さ、……………ホントにソルジャーになれるのかな」

アイリスの突然の発言に、少しだけネイラは戸惑いを見せる。魔術を使えないだとか、剣技が優れていないとかそういうことではなく、たとえソルジャーになっても誰かの役に立てるのかという意味も兼ねている。要は自信が無かったのだ。

「…それはさ、アイリス次第。だよ」

「私、次第？」

「うん…。誰かのため、頑張る。それと…」

アイリスはそつとネイラの小さな声に耳を傾け、目を瞑ってそれを聞いていた。

「大切な物を、守ること、…大事だと思うんだ」

その思いは、アイリスのものと似ていた。彼女も初め、そういう気持ちでソルジャーを目指しリアンへ入属した。今では少し迷いも生まれ戸惑いの中でこうして修行をしているのだが。

「……………大切な物、かあ」

アイリスの思う、大切な物とは…。ここまで支えてくれていたウル婆さんや、村の人々。そしてギルド・リアンの皆。だが、果たしてそれだけなのだろうか。アイリスは苦悩の中にいた。

\*\*\*\*\*

「な、なんだ…？ あれ」

村の中を歩き進んでいく機械兵は、着実に目標のところへ近づいていっていた。

「わぁーい、カツコイイっ！」

「こ、こら！ 危ないから触っちゃいけません！」

幼き少年とその母親の親子がその前を通り過ぎ、少年はその機械兵を見ては触って喜んでいた。先頭を進んでいた機械兵の目の色が変わり、歩めていた足を一旦止める。

「……ボウガイシヤ。ハイジヨ、ハイジヨ」

「えっ…？」

一瞬の出来事。

その親子は気が付けば村道の隅に吹き飛ばされて倒れていた…。幸いな事に軽傷で済んだようだが、それを見た村人たちは黙っていた。かった。

「んなっ…！ な、なんだコイツら！」

「おい、何だか分からんが止めるぞっ！」

村の男たちが機械兵たちの周りを取り囲み、その進行を止める。鋏<sup>くわ</sup>や物干し竿などを持って、男たちは徐々に集まってきた。

「ボウガイシヤ、多数」

「邪魔スル者、スベテ…ハイジヨ、ハイジヨ」

「このやるツ！」

ガンツ…！ と村人が鋏で殴るも、その硬い装甲に傷が少し入っただけだった。その攻撃に機械兵は首をこちらに傾け、その目から光を放ったのだった。

「うわああッ…！」

「お、おい！ 大丈夫か！」

レーザー光線のようなものだ。受けた村人の服の脇腹部分が焦げて黒い煙を上げている。

ハイジヨ、ハイジヨ、ハイジヨハイジヨハイジヨハイじよ……。

機械兵たちはそう呟きながら村人を襲い始めた。

§ §

「な、何の音だろ…？」

家の外で何か凄い音が聞こえたりする。まるで、機械の暴れるような音だ。アイリスは少し胸騒ぎを感じ、余計にウィードの帰りが遅

いのを心配になってきた。

「……ういんういん言ってるね……」

「やっぱり、見に行ってくるよ！」

「……アイリス一人じゃ、危ないかも。私も……行く」

アイリスとネイラは立て掛けていた剣を腰に下げ、部屋を出て行った。エレロワは相変わらずスヤスヤと寝息を立てていた。

ウィードのいる滝の修行場へ向かう途中、アイリスたちはやはり機械兵の軍団に遭遇してしまった。

「なっ、何……？ これ」

「……機械、みたいだね」

アイリスとネイラは少し警戒気味でその機械兵たちの様子を見ていた。一度その進行を止めて、機械兵たちは一点を見つめている。

「ムソウマル……。たーげつと、確認シマシタ」

「捕獲及び、攻撃モードニ移行シマス」

そう言つて機械兵たちはアイリスたちのいる場所まで一気に突き進んできた。

「なっ……！ きゃあっ！」

ブンツと振り下ろされた斧を辛うじて避け、アイリスとネイラは剣を抜き機械兵に向かってそれを向けた。

「……たーげつと、あいらす。捕獲シマス」

「ターゲット…?」

「アイリス、下がってて…。ここは、私が」

ネイラは戸惑っているアイリスを置いて、一步前に出て何やら念じ始める。

すると次の瞬間、ネイラのその足元から炎が噴出し機械兵に襲い掛かる…!

「ビービービー!」

「……。」

「ボウガイシャ、ハイジヨ、ハイジヨ…!!」

今の火炎で前に立っていた2体の機械兵が動きを止めた。煙を上げてどうやら壊れてしまったようだ。ざっと数えて、残っているのはあと8体。

「ネイラちゃん! 私も戦うよ…!」

「…危ないよ」

「大丈夫! 私だって…リアンの構成員だよっ!」

夢想丸を我流の構えで持ち替え、ネイラの横に並ぶ。

「やあぁッ!」

「ビービーッ!」

アイリスは振り下ろされた斧を夢想丸で受け止め、それを流し腕の接続部分を断ち切る。するとその腕はガガンツと鈍い音を立てて落下した。

そしてそのまま剣を横になぎ払い、目の前の機械兵の胴体を真っ二

つにして破壊する。

「…アイリス、すごい…」

「あっ、ネイラちゃんっ！ 後ろ！」

「…っ！」

いつ回り込んだのか、機械兵はネイラの背後に回って火炎放射器から火柱を放ってきた。

ネイラは両手を向けるとそこから魔方陣が現れ、それが盾になって炎から身を守った。

「おらぁッ！」

すると、機械兵の何体かがいきなり粉々になって碎け散っていった。その後ろには、

「ウイード！」

「…ったく、外に出てくるんじゃないやねえよ！ 狙ってるのはお前だ、アイリス！」

「ど、どうして私が狙われてるのっ？」

「そんなの俺が知るかッ！」

そう言い放ち、残った最後の1体も斬り崩した。その剣の周りには強い風のようなものが帯びてあった。

「……チツ、これからまだ20体ほどここに来るぞ！」

「ええっ！ ど、どうしよう…っ」

「…ったく…。ネイラさんも大丈夫か？」

ネイラはこくつと頷いて、壊れた機械兵の残骸を眺めていた。その



装甲は剣で斬られたせいかわし曲がっているワケでなく一刀両断されている。アイリスとウィードの剣さばきは、鋭く正確に敵を射抜いている。

「私、エレロワを、起こしてくる。すぐ、戻るから……」

「ああ。…さて、んじゃ“ホントの任務”、開始と行くか」

「えっ？ ほ、ホントに任務って何…？」

「この状況、だいたい分かるだろ。お前と夢想丸を守るんだよ、絶対こういう機会に敵が攻め入ってくるって思ってたからな」

「そ、そうだったんだ…」

そんな話をしていると、前方から多くの機械兵が姿を現してきた。その中には、それを先導しているであろう男の姿もあった。

「…見つけたぞ、君がアイリスだな？」

「……………」

アイリスは一步身を引き、夢想丸を握る力を一層強くする。ウィードはそんなアイリスの前に立ち、機械兵たちに剣を向けた。

「なるほど、夢想丸を手に入れても使いこなせない。だからその所持者を狙ってるわけだな？」

「……察しが良いな。さすがパーファイ家の子息だ」

「どうやら夢想丸のことはかなり知り尽くしているようだ。機械兵を使って夢想丸に打ち勝てると思ったか？」

「我らはあくまで正統派だ…。アイリスとやら、村を傷つけられたくなければ、こちら側に付け…！」

「けっ…どこが正統派だよ」

その男は余裕そうな顔で、アイリスの持つ夢想丸を見つめていた。

「美しい…」とそう呟き、男は機械兵たちをアイリスたちの元へ襲わせた。

「来たぞ、アイリス！ 本気で行くぞっ！」  
「も、もちろんだよっ！」

\*\*\*\*\*

「おや…、どうかしたのかい？」

ネイラが部屋に戻ると、ウル婆さんは夕食の準備を既に済ませており、食卓に座って皿を磨いていた。

「……この村、危険です…。みんなで避難、お願いします…」

「危険？ さっきから聞こえるこの音かい？」

「…アイリスが、危ないんです…」

「なんじゃと…？」

ウル婆さんはその弱った腰を気遣いながら立ち上がり、家を駆け足で出て行った。ネイラは止めようとしたものの、その勢いは止められなかった。

仕方ないのでネイラはそのまま部屋に向かい、エレロワを起こす事にした。

「エレロワ、起きて……」

「…ぐう」

エレロワは寝息をピクリとも乱さず、そのまま眠りこけている。ネ

イラはポケットからアレを取り出して深呼吸した。  
アレ、とは…。そう、エレロワを起こすために必要な笛である。

ピ                    ツ!!

「わうっ!?!」

「……起きた? エレロワ」

「あ、あれえ…。あたし、寝てたんだあ、えへへへ」

寝癖がピヨンと跳ねていて、ネイラは水魔術を使って両手から少しだけ湿り気を出し、それを撫でて髪を直す。

「…アイリスが、危ないの」

「わあー、なんか変な音するねえ」

「力、貸して。…エレロワ、強いもんね」

「うんっ! じゃあ早速向かおう!!」

エレロワはバツと起きだし、机の上に置いていた短剣を持ちネイラと共に部屋を駆け出て行った。

\*\*\*\*\*

「れーざー、発射シマス」

アイリスの戦っていた機械兵が、突然動きを早めその動きを惑わせる。

「うあっ…!!」

「アイリスッ！」

悲鳴にもならないアイリスの声にウィードが傍に駆け寄る。機械兵の放ったレーザー光線は、アイリスの両足首の辺りを火傷状態にしてしまった。

「くそっ…、傷が痛むか？」

「…あ、熱いよ……ッ」

アイリスは立てない状況になってしまった。ウィードも戦いに疲れ、息も乱れている。機械兵の数はまだ15体ほど残っている。先導している男はまだ一步もそこから動かずに、怪しげに笑っている。

「ウィードさんっ…！ アイリス…っ」

「ね、ネイラちゃん…っ、エレロワちゃんも…」

「わっわっ！ ど、どうしたのその火傷…っ！」

「すぐ、治してあげるから…」

ネイラはウィードと場所を変え、アイリスの足首に手を押し当てた。

「ウィードさん、エレロワと敵を…」

「ああ、わかってる。おら行くぞガキンちよ」

「むうー、まだガキって言うっ」

渋々エレロワはウィードの後について機械兵たちに向かって剣を向ける。

…と、戦う姿勢をしたその直後。

「おお、もう止めておくれ…」

「お、おばあちゃんっ！？」

ウル婆さんだった。走って疲れたまま、機械兵を操る男のもとに歩み寄って止めに入っていたのだ。その足並みはおぼつかずにヨロヨロとしていた。

「……俺に近づくな。老婆よ」

「アイリスを苛めないでくれ……、あの子は、あの子は……」

「おばあちゃん！ 危ないから離れてッ！」

アイリスがそう叫んでも、ウル婆さんは男から離れずに機械兵を止めるよう説得する。その背後に迫る影にも気付かずに……。

「ウルお婆さんッ！ そこにいたら危ない！」

「ビー……、主ヲ脅カス者、ハイジヨ、ハイジヨ！」

「……！ やめてえっ！」

その老いた背中に振り下ろされた斧は、容赦なくウル婆さんの身を。その場に漂った、血生臭い匂い。4人は驚きを隠せずに静止してしまっていた。

「くそっ……！」

「ウルお婆ちゃんが……！」

ウィードとエレロワは倒れたウル婆さんのもとへ駆け寄ろうとするが、それも機械兵たちに遮られ足を止める。

「……おばあ、ちゃん……。」

「あ、アイリス……？」

ネイラの治療も終わり、傷は塞がったもののまだ痛みは残っている。そんな足のままアイリスはよろっと立ち上がり、夢想丸を握る手を震わせていた。

「……（夢想丸が、光ってる…！）」

怪しく紫色の光を放って、夢想丸がアイリスの手の元で光っている。

「許さない…！」

少し、地響きがした気がする…。

第24話 引き金（後書き）

今回は区切りが少し多かったですね、混乱しないようにゆっくり読んでくれたらなと思います。

## 第25話 解放されたチカラ

怪しく光る刀を持つアイリスを中心に、青い電流のようなものが幅広く帯び始めていった。

その電流によって、近くで武器を構えていた機械兵たちはショートしてしまい煙を上げる。

「ビ…びび、完全機能テイシモードに入りマス…びび」

そして更にアイリスを軸に大きな空気の渦があちこちで巻き起こる。彼女が刀を強く握ると、その強い風は一層力を増し、あたり一面で機能停止していた機械兵たちをバラバラにして吹き飛ばす。

「あ、アイリス…？ まさか！」

アイリスがそのまま機械兵を操っていたらう男のもとへ歩み寄ろうとするので、ウィードはそれを止めに掛かろうとする。が、巻き起こる風は止まず更にその回転力を上げていく。

「くそっ…、アイリス！ 夢想丸を手離せッ！」

「……………この人を殺すまでは無理だよ。」

いつもと声色が低く感じるアイリスの声に、男は「ほう…？」と声を漏らした。

アイリスから広がっていった風の渦は村をも襲い、家の屋根の瓦を吹き飛ばし、八百屋の品物をバラバラにしたりと被害は相当な物となっていく。

ネイラとエレロワはその場で啞然としたまま、小声でその名を呼ぶだけだった。



「俺を殺すか。少し頼り気の無い少女に見えたが…、やはりその刀のせいか」

キツとその眼光を男に向け、一旦刀を握る力を弱めると風は止んだ。

「よくも…、私の大切な人を…！」

「ここに転がってる老婆のことか？ どうせ助けてもそう長くは

」

その一瞬、アイリスの夢想丸はそのまま突き出され、男の片耳付近をギリギリで突き通った。

「……同じ目に合わせてやる、鬼のように焼き殺してやる…！」

「（目の色が…変わったただと？）」

男にしか視界に入らない、アイリスの瞳の色は赤目から群青色の濃い色に変色していた。少し血走り、丸い可愛い目とは思えないほど殺気に溢れていた。

と、次の瞬間。ブワツと身を刻むような風が吹き辺りを包んでいた。

「アイリスッ、その力を抑えろ！ このままじゃお前の村が崩壊するぞー！」

「うるさい……っ！ 私を罵る者は誰でも殺す…！！」

「……（自我を失ってやがる……。ウル婆さんが殺されたのが引き金かよ……ったく、面倒な女だぜ）」

ウィードは数歩下がり、どうしたらいいか分からなくなっているエレロワとネイラを引っ張りその場を離れる事にした。

アイリスのその殺気にも動じず、男は腰に隠し持っていた機械兵の自爆スイッチをそつと右手に持ちアイリスを見下ろした。

「俺について来い、お前は十分な力を備えている」

男がそつ口にした瞬間、突き出されていた夢想丸の刃が男の首元に向かって勢いよく振り下ろされる。しかしそれを持っていたスイッチで防ぎ、アイリスと距離を取って立ち直った。

「……」

「……こちらもこれくらいは想定してたさ。」

「……!」

男はそのスイッチを力強く押し、その場から逃走した。アイリスはそれを追おうとするが…、

「なっ」

「びびび……。ジバク、自爆シマス。5、4、3」

機能停止していたはずの機械兵の一体が、アイリスの足首を掴んだままそう言った。

\*\*\*\*\*

\*\*\*\*\*

「ね、ねえ！ アイリスはどうしちゃったのっ？」

ウィードは2人を引きずりながら滝の場所へ来ていた。

「夢想丸が暴走しやがってるんだ…」

「ええっ…！」

もはや止めに入ればアイリス自身に殺される。いや、殺されるといふよりも永遠の悪夢を与えられてしまうと言った方が賢明だ。夢想丸に斬られた生物は精神を蝕む悪夢を永遠に見せると言われる。

「……ウィードさん、私、アイリス、止めるよ」

「ダメだ！　いくらあんでもアイリスは止められねえよ…」

「ううん、私…。アイリスの友達、だし」

そう言い残し、ネイラはパツと振り返り村の方へ走り出した。

「おいッ！　…くそっ、これだから女つてのは苦手だったの」

「あたし、ネイラちゃんを止めてくる…！」

「いや、待て。お前は本部に戻って姉さんと呼んできて欲しい」

「え…、パーフィさんを？」

夢想丸を家宝としてきたパーフィ家。ウィードには無理でも姉のアフロディテならもしかしたら…とそう考えた。

ドオオオオオオオン……………　　ツッ！！

急に村の方で爆音のような音が響いて届いてきた。滝の水面も揺れる。

「急げ！ 俺はネイラさんと時間を稼ぐ！」  
「うん、わ、わかった！」

\*\*\*\*\*

\*\*\*\*\*

1つのクレーターのようなものが出来ていた。その辺り一面、爆風で家々が吹き飛び無残な光景が広がっていた……。夢想丸を巡る争いが生んだ結果である。

「……………くはっ……………」

アイリスは何故か身体に火傷などの傷は負ってなかったが、多量の煙を吸ってしまい立てなくなっていた。うつ伏せのまま夢想丸を握り締めてその地面に倒れこんでいたのだった。

「さすが夢想丸に選ばれただけある。簡単に死なれては困るからな……………う、あっ……………！」

男はアイリスの背に足を乗せ、もう少し弱らせようとする。男の目的はあくまでアイリス自身であり、そのついでとして夢想丸を狙っているという考えだった。そのため彼女が死んでしまったら何の意味もなくなってしまうのだ。

「少し気絶してもらおう事にする。悪く思うな」

男がその足に力を入れアイリスを踏み弱らせようとしたその瞬間……………！ 男の身体に放たれた1つの火炎球。

「 なっ…!?!? 」  
「 ……その足、どけないと、許さない… 」  
「 くそっ…! 」

男はそのまま逃げ出したのか、そこから姿がパツと消え気配も無くなった。瞬間移動の魔術でも使ったのだろうか。とにかくアイリスは無事な事が確認できたネイラとウィード。

「 ……う、ぐ……あ 」  
「 アイリス、無事か! 」

ウィードがその場へ駆け寄ると、アイリスは一瞬弱って力無くしていたかと思いきや、急に目の色を変えウィードに向かって夢想丸を振り切ろうとした。咄嗟にそれを避け、ウィードは仕方なく剣を持ちアイリスと向かった。

「 ウィードさんっ……、アイリス、斬っちゃダメ、だよ 」  
「 わかってる! 今あのガキが姉さん呼びに行ったから、それまで時間稼ぎだ! 」  
「 ……邪魔しないでよ、ウィード 」

アイリスはまるで何かに操られた人形のようにフラフラと動き、その口にした。呂律も普通とは何か違和感がある。しかしその溢れ出る殺気は尋常ではない。もはや誰を始末すればいいのかすら忘れかけている。

「 夢想丸、アイリスを解放しろ、そいつはまだお前を完全に使える器<sup>うつくわ</sup>じゃねえ! 」

ウィードはアイリスに向かってではなく、その手に持つ夢想丸に

そう言い放った。夢想丸の意思がアイリスを動かしてるのだとそう考えたからだ。

アイリスは容赦無く斬りかかりはじめ、ウィードはそれを受け止めては受け流すのを繰り返す。

「やああッ！」

刀とは思えぬほどの重量感のある斬り込みに、ウィードは耐えながらネイラがそれを援護しあくまで攻撃を受け流すだけ。

「…アイリスっ…、もう少し、だからね……」

「うるさい、うるさい……。うああああー！」

するとアイリスの身体が先ほどの渦巻く風に包まれていき、髪を結わえていたりボンもその風にはち切れてしまう。髪が風に激しく靡き、アイリスの見た目はいつもとまるで異なる外見と化した。

「チッ……、早く来てくれよ姉さん……！」

§ §

『お前の望みを叶えるのだよ……』

頭の中で聞こえた、1つの低い声。それは稀に聞く幻聴のようなものと酷似しており、やはり同じ声主なのだろうとアイリスもそう

悟っていた。

「……………っ、う」

『苦しいか。だがそんな物は我にとつてどうでも良いこと。お前の怒りを引き金とし……………その身体、少し借りさせてもらおう』

やめて……………やめてよ。

アイリスのそんな思いも言葉にならず、表ではアイリスの自我を奪われ仲間たちを襲っている。

そんなことを望んでいるのではない。せつかく出来た繋がりを、そんな形で失いたくなんかない。

『殺された、お前を育てた婆を思え。……………どうだ、怒りが増してくるだろう？ 殺したヤツを許さないだろう？』

「……………おばあ、ちゃん……………」

アイリスの声色は震えだし、上手く声に出して言えない。

自分をここまで育ててくれたウル婆さんを、目の前で殺された光景に、アイリスは2つの見方があった。

育ての親と言ってもいい、ウル婆さんを失い悲しいこと。それと……………、鬼に目の前で殺された両親の姿を思い出していたのだ。その時の憎悪がふと甦り、何もかもをめちゃくちゃにしてやりたいと思うってしまった。

『全てを壊したいだろう？ こんな悲しみしかない世界を破壊し尽くしたいであろう』

「……………ッ」

『我を受け入れる！ そうすればお前を最強の剣士にしてやるぞ……………』

……………

もうアイリスの精神状態がもたない状況にまで追いやられていた。人の心理とは弱い物だ。すぐにあちらこちらへと意思が移転してしまつのは誰しもがよく分かる事。

彼女はもう、その声に従いチカラを注ぐしかなかった。

「うあああッ！」

無心で振り下ろす刀。それを受け止め、何度も名前を呼んで正気に戻そうとするウィードとネイラ。3人ともだんだんと吐息が乱れ、き始め、剣を握る力も徐々に落ちていつている。

「はあっ…、はあ、畜生…ッ！」

ウィードが力いっぱい剣を振り下ろすと、アイリスの夢想丸が鋼鉄の音を立ててその手から離れ落ちた…！

「ッ………！」

「（今しかねえ！ こいつを気絶でもさせねえと……！）」

隙の出来たアイリスの背中に剣の持ち手で叩き、アイリスはその場にドサツと倒れこんだ。

「あ、アイリスっ…！」

「大丈夫だ。急所を突いただけだから」

「……夢想丸、回収、しないと…！」

ネイラが夢想丸に近づいて、それがまだ怪しい光を帯びているの



を確認する。

「それは俺が回収する！ 触るとケガするぞ」

「ひうつ……」

ウイードが少し怒鳴るような形でそう言ったので、ネイラは少し驚いてしまい変な声が漏れてしまった。夢想丸から後ずさりし、ウイードに代わってアイリスをそっと抱え上げる。解けた長い髪は、重力に従い垂れ下がっていた。

「……姉さんが来るまでも無かった、か」

「ウイードっ！」

そう口にした瞬間聞きなれた声が遠くからし、その方を向くとエレロワと駆けつけたアフロディテの姿があった。

「姉さん、急かして悪かったな。アイリスはもう収まった」

「良かった……。とにかく、リアンへ帰るぞ」

「ああ。…ネイラさん、平気か？」

アイリスの腕を肩に回して立ち上がるネイラも、魔力を使いすぎて疲労が溜まっていた。その足取りは覚束ない。

「ネイラちゃんっ……無理しない方がいいよお」

「……はあっ、はあ……。ご、めん……」

アイリスの身体をエレロワに託し、ネイラはその場で気を失って倒れた。

一行は無事リアンへ戻った。アフロディテがリアンの入り口の扉を勢いよく開いた。

「コロナ！ アイリスを診てやってくれ」

「う、うん…、でもどうしたの…？ アイちゃん」

「詳しくはウィードから聞いてくれ。ウエルト、話がある」

「…ああ。」

そう言っつて、ウエルトと2人で奥の部屋へ向かっていった。

ぐったりとしているアイリスとネイラを心配して、皆がその場に集う。

「アイリスはただ気を失っただけだ。ネイラさんの方を重点的に診てやってくれ、コロナさん」

ウィードがそう言い放つと、コロナはこくつと頷いてアイリスをソファの上に静かに寝かせ、ネイラを部屋まで抱えて運んで行った。リーンやエレロワが何度も名前を小声で言っていた。

「…ウィード？ 何があつたんだー？」

「夢想丸が暴走しちまったんだ。そのせいであいつの村は……」

もはや、家々の破片が飛び散っている廃墟。アイリスは自身の故郷の村を破滅させてしまったのだ。

「えっ！ …それでネイラも倒れちゃったってわけか？」

「ネイラさんは魔力を使い果たしたただけだ。コロナさんの治療なら

すぐ良くなる…」

エレナは吸っていたタバコを灰皿に押し付け潰し、ウィードに問い続けた。

「でさ…、アイリスは魔術とか使えるようになった？」

「……………どっちとも言えない。ただあのチカラは…」

アイリスを囲ってとてつもない大きな風の魔力。あたり一面を吹き飛ばす程の威力。ウィードはなんだか自分より遙か上にアイリスの存在がいると、少し悔しくなつて齒に力が入る。

\*\*\*\*\*

一方、アフロディテに呼び出されたウェルトはその部屋のイスに腰を下ろし話を伺っていた。

「じゃあ、あの子から取り上げる、ということか？」

「ウィードの話によれば…、そのチカラは恐ろしい程だそうだ。…ただ、アイリス自身にそんな気力が残っていなかったため、ウィードが止めてくれたけどな」

「……………アイリスはあの刀を持って…、自信を付けていた。だが…止むを得ない、か」

## 第26話 新たな思いで

アイリスの修行、及び夢想丸を手懐けるための任務は終わった。しかしアイリス本人は夢想丸の暴走により眠ったまま、ネイラも魔力の使い果たしで疲れ果てている状態だ。

「アイリス、起きないね……」

「夢想丸……。アイリスなら、と思っていたんだが」

その部屋の前で腕組をして立っているエレロワとウェルト。背の低い幼い体系の2人が揃って同じ姿勢をしているので、なんとも可愛らしい絵図であった。なぜ部屋の前にいるかと言うと、パーフィ姉弟に話の邪魔だと追い出されたからである。

「むう……。総長さんですら邪魔なんて」

「……恐らくパーフィ家の秘密事項なんだろう。夢想丸が使えるアイリスにもそれは知る意味があるんじゃないのかな」

「ねえねえ、たまにはみんなで遊びに行ったりしようよあ」

話の腰を折るようにエレロワが溜め息混じりにそう言った。

「遊びに、か……。確かにみんな疲れてるみたいだし……いいかもな」

とブツブツ言いながらウェルトは歩いて行ってしまった。

「うゆ……？ 冗談のつもりで行ったのに……。ま、いつか」

\*\*\*\*\*

\*\*\*\*\*

「…本当にこいつから取り上げんのか？」  
「仕方ないだろう。少し夢想丸と距離を置いたほうが彼女の身のためだ」

夢想丸は地下の封印室に封じた。そこには特殊な方陣が張っており、膨大な魔力も抑えることができる。その術者はコロナとエレナの2人で、彼女らの魔術の1つでもある。

「じゃあこいつ、リアンに置く意味無くなるじゃねえか」

「……アイリスはここに相応しい子だよ。居るだけで自然と笑顔になれる」

「こいつ、少しながらも魔術を使えるようになったんだぜ。リアンの力にしようとは思わねえの？」

「強要は出来ないよ。だが…、本当にソルジャーと言える立場になれたのかもしれない」

アフロディテの手がそつとアイリスの頭に触れる。フワツとした髪の毛はその手を包み込み、アイリスの寝息のリズムが少しだけズレた。

「…まったく、要はこいつを追放する訳にはいかない。ってことだろ」  
「当たり前だ」

「……これ置いてってやるよ」

ウィードは荒らげに自分の腰に下げていた剣を鞘ごと取り出し、アイリスの横に並べて置いた。

「ウィード？ それ、お爺様から譲り受けた剣じゃなかったか」

「けっ…、こんな剣無くたって俺は…」

と、吐き捨てるようにそう言っただけでウィードは部屋から出て行った。「まったく…」とアフロディテはウィードの慈悲心を受け止めその背を追わなかった。

アイリスに託されたウィードの剣、その名は“風切”という。名の通り風を切り裂くような鋭い刃先をしていて、更に風の魔力を引き出せるというものだ。アイリスの魔属性にとってはかなり好都合な武器である。

「アイリス…。夢想丸が無くて、キミは立派なソルジャーになったと言っておくよ。キミ自身、納得しないかもしれないけどな」

アフロディテも弟と同じような去り際で部屋から出て行った。

\*\*\*\*\*

日は水平線の彼方に沈んでいき、辺りはだんだんと暗くなってきた。浜辺でウィードを見送るためにウェルトとアフロディテの2人が砂浜にいた。

「ゲンド様によろしくな、ウィード君」

「はいよつと…。そっちなこそ、姉さんを頼んだぜ」

半ば疲れてるようならけた声でウィードはそう言った。

「ウィード…。本当にあの剣はアイリスに？」

「貸すだけだ。あいつが今より強くなって、また夢想丸を手にする

時が来たならそこで返してもらおう」

「…………ふふっ、そうか」

「じゃ、またな」

ホウキの上にも上手くバランス良く立つて乗り、ウイードの姿はだんだん遠く見えなくなっていく。浜に残った2人は、少しの沈黙。その後ウエルトが口を開いた。

「エレロワの意見なんだが…、少しみんなに休暇をやるうと思うんだ」

「休暇…？」

「まあ、要は疲れを取る時間だ。最近はやけに忙しかったからな」

なんだかウエルトラしくない発言に、アフロディテは少々戸惑い気味。しかしその意見に反する事も何も無かったので、「そうだな」と波の音に被ってそう呟いた。

「休暇だつて〜？」

「…っ！ わぁッ」

と、2人の背後から急に飛び出してきたエレナに本気で驚く。

「え、エレナか…。話、聞いてたのか？」

「そうそう。砂浜でタバコ吸おうと思ってたんだけど、2人が何か話してたからさ」

「そうか…」

ポケットから銀色のライターを取り出して口にくわえていたタバコに火をつけた。その煙は潮風に流され短く立ち上がっている。

「あ、そうそう。リミレットのことだけど」

“リミレット”という名前に反応して2人はエレナの方を向く。  
一旦タバコをまったくわえ灰色の煙を息に乗せて言葉を続けた。

「まだ目は覚めなくて…、何か特別なクスリが必要みたいなんだ」

「クスリ…。うちの薬物庫には無いものなのか」

「そうなんだよ…、だからそれに関する情報とかを探してんだけどさ」

「エレナの治癒薬リストにその物は？」

「ん〜……。って、あつたらもう届けに行ってるっ！」

貴重なエレナのツツコミを頂き、3人は日が沈んできたので中に戻る事にした。

§ § §

……何かの声で、目が覚めた。小さな物音のようなか細い声。

「…んん…。つ。あ、あれ…？」

「みゃあみゃあ！ ふぬー」

「あ…ミーコちゃん？ わあっ…。」

アイリスの真横で鳴いていた猫のミーコが彼女を目覚ませたのだ。そしてもう片方の横には、見知らぬような、はたまた見たことがあるような剣が置かれていた。



「この剣……なんだろう？」

そつとその鞘に触れてみると、何とも言えない鉄の感触。アイリスの眠っていた枕の真横にそれが置かれていて、少しばかり体温が乗り移っていて暖かみも感じる。

「みゃあ〜」

「あ、ミーコちゃんっ？」

ミーコはピヨンツとベッドから飛び降り、器用にドアを開けて部屋を出て行った。少し急ぎ気味な様子が伺えた。

「……？　なんで私、眠って……」

寝起きの思考回路は少々ボケているが、その状態で必死に頭の中をぐるぐると考え回してみる。

「ん〜……？　あれれ……」

「　　アイちゃんっ！」

パンツとドアが勢い良く開かれ、何やらエプロンを着たコロナが息を上げながら部屋に来了。

「わあ〜っ……！　良かったああ」

「あ、え……？　コロナさん……っ？」

「……無事で良かったあ……、ホントに……」

そう言っって優しくアイリスを抱きしめ、小声でそう呟いた。そのエプロンからは甘い香りがして、鼻をくすぐる。

「ミーコがね、急ににゃんにゃん鳴くからびっくりしたんだ」

「ああ…、それで……」

「もう大丈夫？ どこが悪いところ無い？」

「あ、あの…私、なんで眠ってたんですか…？ 私、ウィードと修  
行に」

「覚えてない…みたいだね」

コロナはアイリスの身体をそつと起こしてあげ、その身を背負って中央室へ向かった。アイリスは何が何だか分からない状態で困惑していたのだが…。

「あつ、アイリス…っ！」

中央室へ向かうと、そこには1人を除いて全員が集合していた。

「もうリーンちゃんったら…、アイちゃんは寝起きだよ？」

「うー…でも！ 良かったあ無事で！」

コロナは背中におぶっていたアイリスをそつと降ろしてあげ、ソファに座らせた。

「心配しましたわよ？ あれからちつとも起きないんですもの…」

「え、あ…あの？」

「ねえウェルトちゃん、アイちゃんね…何も覚えてないみたいで」

「そうか…、なら説明してやる必要があるな」

ウェルトがアイリスの横に腰を降ろし、アフロディテを近くへ呼んだ。

「アイリス……。夢想丸を、キミから取り上げる事にする」

第26話 新たな思いで（後書き）

少し間が開いてしまいました…、Lorexです。

今回はそんなに進展はありませんでしたが、これからの物語に必須な回なので。

では次話より……。少し新展開！

## 第27話 空飛ぶ図書館へ（前書き）

Lorexです。しばらく空けていてすみません。

別連載の方に手が回っていたのでこちらに回りませんでした。けれど、新年も変わらずに連載していきますのでご安心を。

ではごきげん。

## 第27話 空飛ぶ図書館へ

「……あら？ 何かしら……」

しばらく使っていないかった書庫を掃除していると、1枚の紙切れがヒラヒラと舞って落ちた。何やら文字の羅列が書き綴られている物のようだ。

「……… 解読は不可能ですわね」

古代文字なのか、とにかく現時点では全く読めない文字で書かれていた。ハタキを持って掃除をしていたマイリーはその紙切れを折りたたんでポケットにしまい、再び書庫の中をはたき始めた。もうかれこれ1時間ほど掃除をしているが、本や書物に乗っかるホコリはまだまだ粘りを見せる。

この書庫はギルドの地下に造られており、日の辺りは全く悪い。なので定期的にこうして掃除しないと書物がカビてしまったりしてしまうのだ。書物の中には、誰が何度依頼をこなしたかなどの情報を記された物や、リアンの秘密情報なども記されている物が置かれている。

「マイリーい……、何やってるのさ」

「何って、掃除ですけど」

「ホコリっぽい……。ゴホゴホ」

書庫にやってきたリーンは手をパタつかせ舞うホコリを払いのける。

「何しに来たんですの？ 掃除の邪魔するのなら出てって下さらな  
いかしら」

「あー、そんなコト言っているの？ これ持ってきてやったのに  
い」

と、リーンはその手に持つホカホカな肉まんを焦らすようにマイ  
リーに対して見せびらかした。

「…い、いただきますわ」

「へへ、掃除はいいんだねえ？」

「なっ！ わ、わたくしは食べ物なんか釣られませんかよっ！」

「釣られたじゃん」

「むぐ…」

肉まんを口に押し付け渡し、リーンは逃げるように書庫から退却  
していった。

「もう…。お、おいしいですわね…。これ」

\*\*\*\*\*

\*\*\*\*\*

「もう大丈夫なの？」

「……うん」

1日ほどぐっすり眠った結果、なんとか魔力の回復は進んでいき  
ネイラは平常に戻る事ができた。枕元で座り込んでいたエレロワに  
そっと微笑んで見せた。

「アイリス、…無事？」

「あ、うん！ でもねえ、夢想丸は取り上げられちゃったの」  
「……………そっか」

またあんな惨事になってはいけない。上層部の計らいで、いや…  
アイリスの意思も半分あつて夢想丸は地下の封印室に封じられたの  
だった。

すると、ギルドの建物内に響き渡るアナウンス。

『リアンの諸君、中央室に集結してくれ。話したいことがある』

「総長さんが呼んでるね。ネイラちゃん、立てる？」

「…大丈夫、だよ」

\*\*\*\*\*

\*\*\*\*\*

そして中央室には、久方ぶりに全員が集結した。

「…ネイラ？ もう平気なのか？」

「……………みんな、心配、しすぎ。…だよ？」

と、いつもの調子で喋るネイラにホッとする一同を前に、アイリスが心配そうに近寄った。

「ネイラちゃんっ、あ、あの…」

「……………アイリス」

「私のせいで…、ゴメンね…ッ」



ネイラは気にせず微笑んだ。アイリス意外のメンバーはネイラの魔力再生能力の凄さを身を持って知っているため、それ以上は言わず。

「さて…。では、少し注目してもらいたい」

ウエルトの号令で、一同が注目する。すると彼女は左手に一枚の紙切れを掲げた。

「これは先ほどマイリーが発見した物なのだが…、文字が古い。そこで解読のために何か案があればいいのだが…。誰か、意見はあるか」

「な、なんだよウエルト。久しぶりに全員集合したと思ったたらそんな紙切れの解読なんてさ」

「ギルドの地下書庫にあったものだ。書物を取り込んだ時に紛れた重要なものかもしれないだろ？」

「うーん…。あたし古い文字なんて読めないよー」

ポケットに手をつ突っ込んでタバコを吸い始めるエレナ。しかし、そんな読めない文字の紙切れがどうして紛れ込んだのかも分からない。

「あ、はいはい」

「ん？ どうしたリーン」

すると突然、リーンが挙手。

「アイリスたちが修行に行ってる間にさ、あたし”空飛ぶ図書館”見つけたんだ」

「空飛ぶ図書館…？」

「うん、何か飛行艇みたいでさ、こーんな大きいの！」

リーンは腕を大きく広げてその大きさを表現した。しかし、そんなものが空を飛んでいるのだろうか。

「……それは珍しいジョークだな、リーン」

「ええっ！ ウソじゃないですよ、ホントに見たんですもん！」

半信半疑の一同……。その中に、コロナだけが目を輝かせていた。

「ねね、リーンちゃん！ それって、あの猫ちゃんがいつぱいいる図書館のことっ？」

「中はよく見てないですけど……。あ、でも猫のロゴマークがあったかな……」

「やつぱり！ それって”空猫館”だよー！」

「……なんだ？ それ」

コロナが一人で湧いているのでウェルトがそうぼそつと聞き返した。空猫館という名前の図書館。当然ながらアイリスにはよく分かっただけなく、頭の中に疑問符が浮かぶ。

「ウェルトちゃん、その空猫館はね、どんなことでも調べられるって図書館で有名なんだよ」

「……初耳だな。パーフィとかは知ってたか？」

「さあ……」

やはり空猫館を知っているのはコロナだけだった。元々コロナは読書好きでそういう情報に敏感なのかもしれない。

「だからさ、これを機に空猫館に行ってみようよー！」

「古文字を解読できればいいんだけどな」

「それに、リミレットを目覚めさせるクスリのことかね！」

「…！ そうか…、コロナも冴えてるな〜っ」

と、リミレットの名が出た途端エレナたちの顔色が急変。

「そうと決まれば、いざ空猫館へ！」

「ちょ、ちょっと待ってくださいよ総長！ わたくしたちを放ったらかしにしないで下さい」

「おお…、すまんすまん。でも、いい意見だろ」

「…わ、わたくしは賛成ですけど…。ネイラとエレロワはどうなんです？」

マイリーの問いにエレロワが前に出て、

「あたし読書嫌いだもん…」

「…んじゃあなただけ、リアンで留守番してます？」

「うえーんヤダよお」

「…との事ですわ、総長」

まだ何も聞かれてもいないネイラとアイリスを放って、メンバー一同はその空猫館に行くことを決定付けてしまった。2人も別に反論がある訳でもないことを、皆が察したのか。

\*\*\*\*\*

\*\*\*\*\*

……とは言ったものの。

「全員で出掛けるなら、本部はどうする？」

「戸締りしてけばいいじゃん」

「いや、もし何かあった場合だ。万が一ということもあるだろう」「たかが図書館に行くだけだ。それに直属のガリユルアートたちがいる」

エレナとパーフィの口実で、ウェルトは「うん…」としばらく悩んだ挙句、結局全員で空猫館へ向かうことに。

ただ、アイリスには別に心配事があった。「夢想丸」のことだ。

「……夢想丸のことなら大丈夫だ、アイリス」

「で、でも……」

そう、あれはアイリスの核とリンクしてしまっている。つまりあの刀に何かあれば、アイリス自身もまずい状態に陥ってしまうかも知れない。

「だーいじょうぶ！ あたしとコロナの封魔術で押さえ込んだから、大丈夫！」

と、エレナがアイリスの肩をポンポンと叩く。

まあ上層部の魔法が得意な2人のことだ。きっと大丈夫、とアイリスはそう信じた。

## 第28話 キャット・パラダイス

空飛ぶ図書館、『空猫館』へ向かう事になったギルド・リアン一行。その図書館は世界各地を飛んで回っており、その資料の量は半端ではないという。彼女たちはそこへ、リミレットの回復のためのクスリに関する情報と、突如書庫から出てきた謎の古い文字で書かれた紙きれの解読という2つの目的を持って向かっている。

「アイリス、ホウキに乗るの上手になったね」

「そ、そうですか…？ 私はもっと上手になりたいなあって思ってるんですけどね……」

アイリスの視線は前方のエレナの方へ向けられる。彼女はホウキに跨るのを嫌がっているようで、安定して飛行するホウキに、片腕だけで掴んでぶら下がって飛んでいる。あれくらい余裕持って飛べるようになりたい、とアイリスは思っている。

「でもさあ、夢想丸が無くてアイリスは大丈夫なの？」

「……ちよつと不安です」

「その剣、ウイードって奴のでしょー？」

アイリスの腰に下げられている、ウイードに託された剣。その名も”風切”。

彼女の魔力は風属性に偏っているという事で渡されたのかもしれない。その名の通り鋭く長い剣だ。

「リーン、あんまりアイリスを不安にさせない方がよろしくてよ？」  
「だってえ」

マイリーがリーンを引つ張って引き寄せ、何やら説教されている。一人で皆について行こうとホウキで飛んでいると、何だか置いていかれたような気持ちにもなるが。

「……………寂しい顔、してる」

「わわっ！」

「…落ちちゃうよ、そんなに、驚いたら」

そして、いつもながら急に現れるネイラに驚くアイリス。

「び、びつくりしたあ…」

「……………かわいい」

「へっ…?」

「…ふふ。なんでも、ないよ。ほら、置いてかれちゃうから、行く?」

リーンの話によるとその空猫館は、セントガリアル砦の近辺を飛行していたらしく一行もそこへ向かっていた。

「リーン、ホントにこの辺なの?」

とエレロワがくたびれた様に問う。

「砦から帰るときに見つけたんだもん、近くに飛んでるはずなんだけどなあ……………」

「あっ…、ねえ、あれじゃないかな……………」

とネイラが指差す方を見れば、何やら丸く長い、いかにも飛行船と言わんばかりのものがゆったりと飛行している。

「わあ〜！ 本当に猫のマークだよ」

コロナもそれを見て目を輝かせる。情報と猫、どっちが大事なのか。と上層部のメンバーに突っ込まれていたその隅で、アイリスはただその飛行船のような機体をまじまじと眺めていた。村育ちのアイリスには、こんな飛行物体など見たことが無い。

「よし、じゃあ早速向かうか。私に続け、みんな」

ウエルトがそう言葉を掛ける。皆がそれに応じて一斉に空猫館へ向かった。

\*\*\*\*\*

『空猫館 - KUBYOKAN -』

入り口にはそう書かれたパネルが置かれている。その外見は、オシャレなカフェのような印象が強い。

「いらっしやいませ、空猫館へ！」

ニヤンニヤンと多くの猫の鳴き声と共に、それもオシャレな衣装を身に付けた女性が出迎えてくれた。その足元に様々な色の猫たちが寄り添っている。

「わっわっ！ ネコちゃんがいっぱいだよ」

「うげー…、あたしネコ嫌いなのに……」

その可愛らしい猫たちを見てテンションの上がるコロナと、半目になり一歩身を退くりん。その姿は本当に両極端過ぎて、アイリスは少しだけ笑いそうになるのをこらえる。

「今日はどのようなご用件で？ 図書館ですか、それともキャットパラダイスの方ですか？」

それは何なのかとパーフィが口を挟む。するとそれは書物を読むのに疲れた人々を癒すために猫たちと触れ合わせる部屋があるという。輝いていた目を更に輝かせて、

「私、そっちがいいっ！ ね、行こ行こエレナちゃんっ」

「えっ！ ちょ、コロナーっ！」

「あたしも行くっ！」

……と、その案内人の横を過ぎて、コロナとエレナ、エレロワの3人が奥へと進んでしまった。ウエルトが「…はあ」と溜め息を吐いたのは、全員が聞こえた。

「と、とにかく…。私たちは図書館へ書物を探しに来た」

「はい。では、こちらです」

案内人の後をつけて一行は歩き出す。アイリスはちらつと後ろを振り向きコロナたちの姿を探すが、もう見えなくなるところまで走っていつてしまっていた。仕方なく、アイリスもウエルトたちについて書物を探す事にした。

それにしても凄い数の本棚。それにぎっしりと詰め込まれた本たちは、みな手入れが完璧なのかホコリ一つ付いていない。



「まあ……。ここ、ぜひ通いたいですわね」

「マイリーは本好きだからなあ。あたしはネコ嫌いだけどねーッ」

館内にも猫たちは放たれており、通りすぎる猫たちに舌を出してそっぴりうりーん。「フシャーツ」とネコも威嚇を返し、りーんは本よりネコの相手に夢中になっていた。

「なあアフ、…パーフィ、こんなのはどうだろう？」

「……………今、油断してただろ？　ここが図書館じゃなければ剣を振るってたところだが」

「す、すまん、以後気をつけます……」

「それは専門的に書かれていない。こっちの方がいいだろう」

珍しくウェルトが弱腰になって敬語まで使う仕舞い。真の総長はパーフィなんじゃないか、とアイリスは微笑んで見ていた。そして、そんなアイリスを横で眺めるネイラの姿も。

「…アイリスは、どんな本、好き？」

「えっ、うーん……。こ、これとかかな……」

アイリスが手にした本は、可愛い女の子が描かれている絵本のようなもの。少し意外だったのか、ネイラはほんのりと口を丸くする。

「…やっぱり、かわいいつ……。ふふふ……」

「……………？」

なぜか赤面しながらほくそ笑むネイラを不思議そうに見つめていると、ポンッとマイリーの手がアイリスとネイラの頭を軽く小突く。

「もう、これも仕事でしてよ？ まったく…」

「あつ、ご、ゴメンなさい…っ」

「……マイリー。…アイリスを、ぶっちゃダメ。私、怒る…」

「…いいから、役に立ちそうな本を見つけてくださるかしら」

ちよつと眉間を窄めてマイリーを見てアイリスの前に立つネイラ。  
「むむ…」と少しだけ睨み合いをしてマイリーが先に目を逸らし、  
本を探しているウエルトたちの方へ行ってしまった。

「…大丈夫だった？」

「あ、う、うん…、平気だよ」

そう応じるとネイラは微笑んで見せ、アイリスの手を掴んで別の  
本を探しに向かった。

\*\*\*\*\*

\*\*\*\*\*

そして一方、キャットパラダイスという憩いの場へ向かった3人  
は…。

「うあゝ、かわいい〜ッ！」

ギルドリアンのムードメーカー的存在、コロナは猫たちの愛くる  
しい姿に、目をパツチリと開かせている。そしてそれにつられてエ  
レロワもネコたちと戯れ始めた。

「ネコちゃんネコちゃん！ かわいいなあ〜」

「……おーい」

完全に蚊帳の外なエレナ。彼女もどちらかと言うとマジメでは無い、と自覚しているのだが。こればかりは流石についていけないようで、仕方なく外へタバコを吸いに出ることにした。

飛行船だけあって、ゆつたりと飛行してるものの風は強く、タバコに着火するためのライターの花がすぐに消えてしまう。

「ん〜…」

手で覆ったり何度か奮闘してやっとタバコに火を着け、一服すると、外へ出てきた時を通ったドアが急にバタンと閉まり、それにビツクリして振り返るエレナ。

「なっ、なんだ…？ うわわッ！」

突然、何かに引きずり込まれるようにエレナの身は暗い小部屋のようなところに消えた。

## 第29話 ネコたちの思い

「リウニオンの勇者」……?」

そのやけに分厚い書物を抱えてアイリスの両足が向かうのは、中でもより高々とそびえ立つ本棚の前。

ウエルトがこちらに気付कि、振り向くと同時に持っていた書物をまじまじと見つめる。

「この本は?」

手渡したその書物 『リウニオンの勇者』という題の本をパラパラと捲っていく。

古い紙の匂いがツンと鼻をつつく。決して嫌な匂いでは無い。

やがて最後のページは捲っていた手から離れパタンと本が閉じられた。

「……………」

「ん、どうした? ウェルト」

横にいたパーフィの声も聞こえてないようにウェルトは目を閉じたまま動かない。

「よ、読めん…」

……………思わずすっこけそうになった。

気まぐれに見せるウエルトの可愛らしい一面である。というのは今、どうでも良く。

ハッと気付くようにウエルトは古文字で書かれた紙切れと並べて

見てみた。

「あ」

全く同じ文字…では無いものの、似たような書体でもしかなければこれと同時期に書かれたものかもしれない、と1人で考えを進めるウエルト。

「そうか!」その本を抱え走り去っていく彼女を、黙りこくつて見送る。

「……ど、どうしたんだ? あいつは」

何か分かったのかもしれない。ということで2人もウエルトを追いかけることに。

アイリスと一緒にいたネイラも、引き続き本を探しているマイリも何処に行ったのか分からず。

このただっ広い迷宮のような図書館にいるのは確かだが。

そう、迷宮。この空猫館はただの図書館じゃない。

\*\*\*\*\*

\*\*\*\*\*

「む」

「……何」

交わす言葉は極めて少なく、2人の少女は睨み合っていた。

アイリスとはぐれてしまい仕方なくウロウロしていたネイラを強張った瞳で見つめるマイリー。

「…いい本は見つかったのかしら？」

この2人は何かとすれ違いの多い関係。それゆえ、仲が良いわけでもないのだった。

互いが相手の苦手なメンバー。

物静かで感情を露あつわにしないネイラに、細かな指摘も欠かさず先輩にも口負けしないマイリー。対照的な2人だ。

「どうやら、見つかってないようですわね」

「……………そっちこそ」

「う……………」

沈黙。

「……………ふみやあ」

そんな色濁った空気にも容赦なく一匹のネコが2人の間で鳴き声をあげた。

ぶち模様の小さな子猫だ。

「……………あれ、何だろ…………？」

その子猫が口に啞えて持っていた、プラスチックの塊を受け取る。カチカチと弾く部分があつて中にはオイルのような液体。言つまでもなく、これはライターだ。

「それってエレナさんのじゃ……………」

「……ネコさん、エレナさんはどー？」

小さな頭を撫で回してやり、そう問い掛けると子猫はマイリーの足の間を通り過ぎて走り出した。

「し、仕方ありませんわね……」

それを追いかけるネイラの後を追うようにマイリーも走り出した。

「……本、探さなくて、いいの？」

「あ、あなたに言われたくありませんわ！」

相変わらず心を開かないままネイラは子猫の方しか見ていない。

(……やっぱりこの人は苦手ですわ)

マイリーの胸中はそのような思いが溢れていた。

\*\*\*\*\*

\*\*\*\*\*

アイリスたちは古文書とリミレットの回復についての情報探しに没頭。

コロナやエレロワはキャットパラダイスにて猫たちと戯れ、エレナは一人喫煙。

そんな彼女のライターを何故か持っていた子猫を追い回すネイラとマイリー。

……と、誰かを忘れてないだろうか。

「うー…マタビ臭いよお」

リーン・ラディカ、16歳。

彼女はマイリーと一緒にいた筈なのだが……、猫と威嚇し合っている内にいつの間にか迷子になっていた。

「みんなあゝ……、どこ行っただよゝ」

いつの間にか猫たちに懐かれたようで、集<sup>たか</sup>られている。

ギルド・リアンでコロナの世話している猫のミーコをはじめ、猫は嫌いな彼女。

威嚇していたにも関わらず、逆に懐かれてしまいどうしようもない。

「あー、もうっ！ じっとしてろおゝ！」

右手を伸ばしパチンと鳴らす。

「……………はあ、あたしの魔術が”カナシバリ”で良かったあ」

カナシバリ…、つまりは金縛りだ。

足元に集っていた猫たちは、時間が止まったように動かなくなる。

ちなみにこのカナシバリの効力は5分。それが術者であるリーンが魔術を解けば動けるようになる。

と、猫から解放されたはいいが…。

「こっ、どこだよゝっ！」



迷子なのは変わりない。まさに迷宮入り。

こんな所、二度と来るもんか。

まるで親を探す子供のように館内を走り回ってメンバーたちを探すことに。

そしてすぐに、壁にぶつかるのである。

《 行き止まり ！！ 》

「……うぐぐぐ、もーっ！ なんなんだよぉー行き止まりって！」

図書館にあるまじき看板。本当にここは迷路なのかと疑う。

細かな迷路など、その分野に置いて大の苦手なリーン。来た道を引き返す。

「 道にお迷いですか？ 」

「 うわぁっ！ び、びっくりしたぁ 」

急に本棚の角から現れた案内人の女性。

必要以上に驚いてしまい、思わずその場に倒れこみそうになってよろける。

「 …… お仲間のもとへご案内しますよ。ついて来て下さい 」

一瞬目を疑う。

その顔を初めてじっくりと見て、そして気が付く。彼女、人間じ

やない…！

「…だ、誰だ！ お前、人間じゃないっ」

どうしてここに来た時に気付かなかったのだろうか。その雰囲気も、まるで獣の様ではないか。

「気付かれましたか。…さ、こちらですよ」

「もうバレバレだぞっ！ その雰囲気分かる！」

ソルジャーの勘。魔物らしい狂気と、チラツと見えた長く細い尻尾のようなもの。そんな物が人間に生えてる筈が無い。

「この部屋に皆を捕らえたのか！？」

指差している方向に走ると、1つの小部屋に入った。小さな物置部屋のような散らかった部屋だ。

…ガシャンッ…！

「あっ！」

突然背後から鋼鉄の落ちるような音がして振り向けば、鉄格子のようなものが降ろされていたのだった。

「なっ！ あ、開けるおっっ」

「…あなた方はソルジャーですね」

「だったら何だよ！」

「…この愚か者どもめッッ！」

突然大声を上げて怒鳴られ、また驚かされて声が詰まる。

「一生そこで暮らせばいい…。お前の仲間たちも、同じ運命だ！」  
「な、何だよ急に調子変えて」

羽織っていた衣服から尻尾が伸び、髪の毛が逆立ち目は鋭く睨むようになっっていく。

人型の形成は保っているものの…その姿を見て思ったのは、”化け猫”。

「……連れてきて」

その猫化した女が振り返って誰かに声を掛けると、その奥から小さな猫たちが『誰か』を引きずるように引っ張って運んできた。その姿には見覚えがある。…というよりも、馴染みある容姿。

「え、エレナさんっ！」

「…猫の住む聖地に、憎きソルジャーなど野放しにしてたまるものですか」

どうやら気を失ってるようだ。エレナはぐったりとその場に置かれ、女は鋭いツメを彼女に向けて見せる。

「やめろぉ！」

「……あなた方は猫とは真逆。孤独より信頼を求めろ…」

鉄格子越しにエレナを助けようとするが、邪魔をする数本の鉄の棒切れ。

まるでこっちが檻に入れられた動物のように、女は鋭く笑った。

「そんなあなた方を、許さない。…2人とも、我らの人質となつてもらいますわ」

エレナを抱え上げ、鉄格子を少しだけ開けて入れ込む。放る様に投げ込まれた。

すぐに鍵を閉められてしまいどうする事もできずに、女は猫たちを引き連れて去っていった。

「ど、どうしよう…っ」

まだ空猫館に散らばるメンバーたちに知らせなくては。そう思っても、連絡手段は何も無い。

この飛行船は魔物の操るものであり、このままでは危ない気がしてならない。肝心のエレナも気を失わされて倒れてるし、行動できるのはリーンのみ。

あの化け猫、何者なんだろうか。

## 第29話 ネコたちの思い（後書き）

作者Lorexです。

記念すべき30部目（登場人物紹介含）です。お気に入り登録、感想の方ありがとうございます。

今話で登場させてないコロナとエレロワの2人。彼女たちをあえて書かなかったのは、次話にて主に書かれていくからです。今話ではそれ以外のメンバーの軽い紹介みたいな物を書かせていただきました。特徴を少しずつ把握していつてくれれば幸いです。

### 第30話 鋭き眼が射る

マックスボルテージではしゃぐ二人は気付いた。

「あ、あれ…エレナちゃんは？」

先に気付いたのはコロナだった。一緒にこのキャットパラダイスについて来たハズのエレナの姿が見えないという事に。コロナがそう言ったのでエレロワもハツと我に帰る。

「ホントだあ」

「あはは…2人ではしゃいじゃってたからね、ウエルトちゃんたちの方に行ったのかも」

「そういえば本探しに来たんですっけ」

膝の上に寝かせていた猫たちをそつと降ろし立ち上がる。

…と、その部屋を出ようとする。すると数匹の猫たちが前に出てきて、

「ふしゃー!!」

「わ…!! イテテテッ」

いきなりその鋭く伸びたツメを数回振りかざしてきたのだった。

「ね、ねえエレロワちゃん…？」

「うん…」

「ネコさん、何か私たちを脅かしてるみたい……」

穏やかにじゃれていた猫たちは、目の色を変えて2人を威嚇して

いるように見える。

……………ガチャ

「あつ」

ふと急に部屋の扉が開いて、案内人の女性が入ってきた。それを見て猫たちが急に道を開けだし、じっとし始めた。

「……………楽しめましたか？」

「え……？」

その女性の声色は決して明るい物ではなくて、それに2人は驚きを隠せず思わず聞き返してしまった。

「……………やりなさい」

「フシャシャーッ！！」

主のその言葉を待っていたかのように、控えていた猫たちが2人に飛び掛った。

「…ッ！ きゃあーッ！！」

\*\*\*\*\*

\*\*\*\*\*

そして一方……、この2人はというと。

「 リーン！」

ライターを持っていたネコの後をつけていた、ネイラとマイリー。そのネコが案内した場所は、何やら牢屋のように鉄格子で封じられた小部屋。

その中に閉じ込められているリーンを見つけて、マイリーがその声を上げた。

「あつ、マイリー！ ネイラもっ」

「そ、そこで何してるんですの？ 眠ってるのはエレナさん？」

「好きでここにいるんじゃないって！ 出してよぉっ」

マイリーが鉄格子越しに手を伸ばして助けを求めるリーンの手を握って、

「……魔物の匂い」

「おっ！ さっすがマイリー！」

「当然、ですわ」

マイリーは一瞬だけ目を瞑って、何かを察したように見開いた。

彼女の備えている、独特の能力である。嗅覚と聴覚を一瞬だけ最大限に引き出すことが出来るという物だ。

「って！ 魔物が現れたんですのっ？」

「そうなんだよお、そいつに閉じ込められちゃってさ……」

難しい顔をしてリーンの手はまたその鉄格子の向こうに戻る。

「これは…鍵じゃない？ 何か、魔方陣のような……」



「……私、できる、かも……」

マイリーの背後でネイラの声。真剣な表情でそう言って、前に出てその魔方陣に手をかざしてみた。

「……マイリー。私に、魔力……少しちょうだい」

「なっ……し、仕方ないですわね……」

今は小競り合いをしている場合じゃない、と先に判断したのはネイラだった。それが少し悔しいのか、マイリーは渋々彼女に魔力を差し出すことに。

その左手の上に手を置いて、指先に精神を集中させる。こうすることで、他人に魔力を分け与える事ができる。与えすぎて自分の魔力が飢えると、それこそ危険なのだ。

「………ありがとう、先輩」

「……同期でしょうが、あなたとは」

「………そう、だったね」

そんな会話をして、何だか一瞬打ち解けたように感じた。

「………そこまですよッ」

バチチチッ……！

一瞬の事、火花のような物がいきなりネイラに襲い掛かり、彼女はまるで感電したようにその場に倒れこんでしまう。

「う……っ、あ……」

「ネイラ!? ど、どうしたんですの?」

「……まずは一人」

静かにも重々しくそう言い歩み寄ってくる、案内人の格好をしている女性。

「あなた……、魔物が化けてらしたのね」

すぐに察すマイリーに少しだけ驚くが、すぐに目を尖らせて凝視してくる。

まるでネコが人化したように、直立して立ち長い尻尾を揺らしている。

「そちらの少女のようになりたくなければ、その剣を置きなさい」

右手を開いてマイリーの方向へ向ける。その女性　魔物は鋭く睨むように彼女を眼に焼き付ける。

「なるほど。……ネコの意味体、ですわね。あなた」

「なっ……!」

しかしその睨みにも動じず、マイリーはそれを上まるように魔物化した女性の姿を、腕を組んで見つめ返す。そのメガネ越しの視線は、魔物を一歩後退りさせた。

「リアンのナンバー?、マイリー・シーワ・フレデリカですわ」

「……(この女……!)」

「魔物を見た以上、放ったらかしには出来ませんわね。……巢食っているこの空猫館もですわ」

そう言って腰から熱を帯びた剣　　カレントソードを突きつける。

「構わないツ！　お前たち、この2人も捕らえなさいツ！！」  
「そうはいかなくてよ！」

この猫たちが魔物だと分かった以上、その剣を振り下ろすのを止めることはしない。マイリーがその剣を振るうと、飛び掛ってきたネコの魔物たちの身体に炎が燃え盛る…！

「ッ…！！」  
「今すぐ牢の2人を解放しなさい」  
「ふ、ふざけるなあッ！」

その女の姿は更に獣化していき、目の色は血走って真っ赤だ。身体に魔力を秘めているのか、周囲に転がっている魔物の亡骸を衝撃波が払いのける。

「……よくも我が同胞を　　！」

そう叫んだかと思うと、いきなりマイリーの目の前に煙が撒かれる。その煙は少し　　いやかなり鼻を刺激する激臭であった。

「なっ…！！　ごほっ、ごほっ…（体が、痺れる…？）」  
「うらあああッ！」

その煙を吸ってしまった途端、マイリーの前に飛び込んで腹を強く殴った。

「うぐ…ッ!？」

「ま、マイリーっ!！」

自らの腹部に強い痛みが生じたのを遅れて感じ、その場に膝を折り曲げてしまう。鉄格子の向こうからリーンが名を呼んでいるのも聞こえたが、それよりも何も腹部への衝撃は尋常ではなかった。

やがて、煙が完全に気化し消えた頃、マイリーはその場にぐったりと倒れてしまっていた。

「……っ、ま、マイ、リー」

同じく倒れていたネイラが力無く手を伸ばしたのもつかの間、女は2人の首元に掴みかかり鉄格子に押し付けた。

「これで思い知った…かしら。我らの痛みを……!！」

そして、2人も牢に入れられてしまった。

「くっそお…! いい加減にしるお、この化け猫…ッ!！」

リーンが投げ入れられた2人を受け止めながら、歯を食い縛ってからそう言った。

「残るは3人…」

「3人? じゃ、じゃあコロナさんたちにも……!！」

「ふふふ……。精々そこで冥福を祈るのね」

残酷に言い捨てるようにして、女 獣化した魔物は残る3人を探しにフラフラと歩いていってしまった。

第31話 樹琳開封 - ジュリンカイホウ -

拓けた場所に腰を下ろし、抱えていた分厚い本を広げてマイリーから預かっていた紙切れを見る。

アイリスの見つけたその本は：“リウニオンの英雄”という題名。英雄がその古文書の何に関係しているのか、互いに首を傾げるアイリスとパーフィを背にウエルトはただ一人、何かをブツブツと呟いていた。

「そうか…ふむ。これは…！」

すっかり蚊帳の外である二人は、探究心に追いやられているウエルトの姿をまじまじと眺めていた。

その小さな身体に、誰よりも大きな心の強さと思思・信念・探究心など。きつとそこが尊敬の眼差しを向けられる要因なのだろう。そうアイリスは胸中で考えていた。

「アイリス、お手柄だぞっ」

「へっ…、あ、はい！」

突然振り返って名を呼ばれたので、慌てて返事してしまい変な高い声が漏れてしまった。

「この本…古きリウニオンの国事や医療、政治など…凄く詳しく書かれている」

「それと古文書と何の関係が？」

「これは確かに所々、古文字で書かれていて読めないが少しばかり現代語も含まれていて…」

ウエルトがそのページを見開いてパーフィに見せる。

そこには、紙切れに書かれている物と似た文字で書かれた羅列が少々、あとはその解説を現代語版として記されていたのだ。そしてウエルトが指差す部分に、重要な事が。

『崇め称えよ、真の英雄を。今、其の者、リウニオンの地に眠らん』

「…この文章は？」

「ゲンド様から聞いたことがあるだろう、龍に乗って世界を見守った英雄の話」

「……??？」

何やら二人で話が進んでいるようで、アイリスは全くの部外者になつてしまった。英雄、リウニオンという単語が何度も発せられるのだけは分かった。

「そしてその英雄は、有名な薬師でもあった…」

「……そ、そういうことか」

「アイリス、キミのおかげでノルマクリアーだ。古文書の意味も、リミレットの回復に必要なクスリの事も分かった」

「え、あ……あの？」

とにかく謎は解けたようで。アイリスは煮えきらぬまま、とりあえずホツと胸を撫で下ろした。

「よし、じゃあ皆と合流するぞ」

その本を棚に戻して、前に立って先に進む。3人の中で一番小さなその背筋を伸ばして、堂々と歩き出す。

「ウエルト？ その事実は分かったにしても…、それからどうする気だ？」

「ん。大丈夫だ、考えがある」

「考え……？」

腕を組んで得意気に、振り返って彼女はそう言った。どこか頼りがいのある、そんな表情だった。アイリスはそれを見て綻ほころんで、両手を腰の後ろに置いた。

\*\*\*\*\*

\*\*\*\*\*

「……まるで迷路だな」

流石のウエルトたちでも、その迷路のような構造に頭を悩まされていた。

しかし何故か、アイリスは冷静だった。「こつちじゃないですか？」上層部2人を導く。するとその方向は、「キャットパラダイス」の部屋がある場所だった。つまり、入り口付近まで辿り着けた。

「ここは来た所か。なんだか今日のアイリスは冴えてるな」

「そ、そんなことないですよ……」

実を言うと、来た道を覚えていただけだった。なので、冴えているとかの問題ではなくただ道を逆戻りしただけ。（つまりは2人が方向音痴なのかもしれないが）

……と、3人はそこで皆が戻ってくるのを待つことにした。また変に迷っても仕方無いので。すると何かを感じたのか、パーフィが

ある一点を目を凝らしてじっと見つめていることに気が付いたアイリス。

「あの、パーフィさんっ」

「……………ッ!」

「ひぁッ…!」

パーフィがいきなりアイリスの胴体部に飛び掛り、2人まとめてその場に倒れ込む。

「何者だ、出で来い!」

「えっ……………?」

右手で剣を抜き、向いている方向に突きつける。その気配にウェルトも感付いた様で、その方向に向けて鋭い視線を送る。

パーフィの背後の壁には、何やら尖った円錐型の物が飛ばされていてそれが突き刺さっている。パーフィがアイリスごと回避しなかつたら正直危なかつただろう。

「……………あなた方は普通ではないですね」

低くも高くもない、濁った声がしてアイリスもその方を向き直す。徐々に声の主が姿を現すと、その身は人のようで獣のような容姿の女性がコチラを睨んでいる。片手に先ほどの円錐型の柱の一片を抱えている。

「アイリス、無事か?」

「は、はい…っ」

その女のことはウェルトに任せようで、パーフィがその身を心



配して震える肩をそつと押さえる。

アイリスにも何となく分かった。あの女は魔物と同じ感じだということ。

「……愚かなソルジャー。この空猫館に入ったが最後、もうあなた方は」

そう言葉を続ける女の方をじつと凝視したまま、ウエルトはタイランズブレードを片腕で持ち突き向けた。

「あなた方の仲間は、牢に閉じ込めました」

「何…ッ？」

「半殺し程度に抑えてある。助けたくば我と戦いなさい！」

一瞬にして女の姿がウエルトの背後に回りこみ、鋭いツメを突き刺そうとする。それを大剣で防ぎ、再び距離を取って凝視し始める。

「……………」

女の目にはウエルトしか映っていないように、パーフィたちには視線が送られてこない。猫の本能か何かなのか、狙った獲物は止めるまで追い続ける。

黙りこくってただ大剣を突き向けていただけのウエルトが、突然コチラの様子を見る。

「パーフィ、アイリス！ その”牢”は一番奥の部屋だ、ここから走ればすぐに辿り着く！」

「なっ…！？」

「ああ、承知した！」

その言葉を待っていたかのように、パーフィはアイリスの手を引きそこから駆け出した。「待てッ！」と声を上げる女の前に、いきなり大剣を振り下ろし猛撃。

「……なぜ牢の場所が分かった！」

「あまりソルジャーをナメない方が良い。私の透視能力さ」

ずっと凝視し続けていたのは、その獣化した女。魔物の頭の中を探っていたため。牢の場所から、誰が閉じ込められているのか、彼女たちはどんな状況なのかまで全て見通す。

「くそッ…！ うあああ！」

彼女の能力、腕力を底上げしたり今のような透視能力…。ただの大剣使いではない。

その活性化した腕力で大剣を振り回し飛び掛ってくる魔物を薙ぎ払い吹き飛ばす。ただ、この腕力を底上げするのにも魔力は消費していく。

つまり、限度が無いわけではない。

壁に叩きつけられた魔物が、フラつきながらその鋭い視線だけを突きつける。恐らくは”猫の意思体が人へ乗り移ったもの”なんだろう、と勘付く。

「うらああーッ！」

「……ッ！」

急に魔物の攻撃速度が格段に上がり、何度もツメを振りかざしては消え、瞬時移動を繰り返して来る。

「我らの恨みい！ 思い知れエツ！！」

いつの間にか背後を取られ、膝の関節部分を蹴られバランスを崩す。すると腕に送っていた魔力がいきなり途絶え、大剣の重みでその場に倒れてしまう。

「な、何をした…ッ」

「人間の弱点を突き、そこから妨害を加えた。お前の腕力の正体が魔力なのはすぐに気付いた」

ふと魔物のその姿を見ると、人の姿を保ちつつも明らかに獣の容姿になっていた。鋭く伸びたツメに、逆立つ長い髪。ウエルトは再び立ち上がって大剣を取るが右腕に力が入らなく、ガシャツと剣を落としてしまう。

「…！！」

「お前の右腕は今、魔力を受け付けない状態にある！ その小さい身丈では操るの事は不可能だろう？」

相手の考えを読んでいたはずが、いつの間にか逆に魔物に読まれている。

この魔物は一筋縄ではいかないとそこで感づき、左腕にそつと魔力を溜め込み始める。

「何をしようと無駄だア！！」

迫り来る魔物にも動じず、相変わらず肝が据わったまま溜まりきった左腕の魔力を、勢い良く床に叩きつける。

まさにツメを振り下ろされる次の瞬間、一本の小枝のようなもの

が床から飛んで、魔物の右手を射抜く。

「うあッ…!?!?」

「タイランズブレードが使えなくても、私にはコレがある」

床に押し付けているウエルトの手を中心に、緑色の魔方陣が浮かび上がる。

魔方陣の周りから小さな芽が生え始め、それが急速に成長。太い木々がいきなり伸び始めていく。

「じゅりんかいほう樹琳開封……。コレを使うなんてな」

ウエルトを中心に木々が渦巻くように伸び、魔物を巻き込んでいく。何度もツメで切り開こうとするが、明らかに木々が成長する方が速い。身体全体に茎が巻きついて締め付ける。

「うぐぐ…う、こ、こんなチカラが…まだ…!」

「私を相手に選んだのが、貴様の誤りだ」

生い茂る木々に包まれ、ウエルトはその小さな身を起こし魔物を吊るし上げる茎に魔力を送り込む。

空猫館全体に木々が茂り、迷路のような建物はジャングルのように姿を一瞬にして変えた。

第31話 樹琳開封 - ジュリンカイホウ - (後書き)

総長ウエルトの本領発揮…！

流石はナンバー？だけあります、追い詰められてもまるで動じない肝の持ち主です。

### 第32話 風切

空飛ぶ図書館、と呼ばれる空猫館　この大きな飛行船に訪れた少女たち。

彼女らを突如襲った、魔物のワナ。彼女らは半数近くを捕らえられてしまった。たった一体の魔物に、この空飛ぶ箱舟の上で。

「……ここか、牢は」

ウエルトの知らせてくれた、その牢のある部屋へ何とか辿り着いた2人。確かに普通の気配では無かったのは気付いていた。だが、たかが調べ物をするだけで争い事を起こすのはナンセンスだと、彼女らなりに自粛していたのだ。

「何かあるか分からない。アイリス、気を付けてくれ」

「は、はい！」

その部屋の扉を、ゆっくり開くパーフィの手は常に剣の鞘にあった。その真剣な表情に、アイリスも警戒心が強まる。

「あ！　パーフィさん、アイリスーっ！！」

「リーンさん！」

部屋へ入ると、そこは狭い牢になっていて中にリーンたちの姿を確認。

「無事だったか、はあ……」

パーフィがほつと胸を撫で下ろしている横で、アイリスがそつとその鉄格子に手を掛けてみる。薄暗い部屋の中、牢の奥で寝込むように横たわる人影がアイリスには見えた。マイリーとネイラ、そしてエレナもいる。

「アイリス、ちょっと下がっててくれ」

「え、あつ…はい！」

後ろで剣を構えるパーフィに、少しびっくりして剣の当たらなさそうな距離まで下がる。

そして彼女の剣は、鉄格子に張られた魔方陣ごと切り崩したのだ。つた。

「さつすがパーフィさん〜っ！ やつと出られるう…」

「あつ、待てリーン！」

パーフィの斬鉄によって崩れた鉄格子の一部一部から、何やら不穏な魔力を感じパーフィはその魔方陣を左手で押さえ込む。するとその漏れ出した魔力は少しずつ姿を消していった。

「……よし、出てきていいぞ」

「うう〜居心地悪かったあ」

一体何の魔方陣だったのか、解析してるヒマも無く。

「み、皆さん無事ですか？」

「あたしは無事だったけど……、3人が」

「……エレナ」

そう名を呼んで、パーフィがエレナの腕を肩に回し立ち上がらせ

る。

「ネイラ、マイリー。立てるか？」

「わ、わたくしは何とか…。ネイラ、立てます？」

精魂尽き果てたように、呼吸を乱しながら首を横に振るネイラ。

「…一体何があった？」

エレナは気を失っているようで、マイリーとネイラは魔力切れなのか力無く…、そこまで強い魔物なのかと、ウェルトが少し心配になる。

「なるほど…」

大まかな事情を聞きだし、パーフィはとりあえず来た道を戻ると皆に言い、その部屋を出る。

「…これは」

「わっ、図書館がジャングルになってる…？」

部屋を出てすぐのところ、尋常でない量の木々が辺り一面を囲っていた。木と木が密していて、これ以上先に進めない状態。

「…木には、風…だよ」

「ネイラちゃん…？」

アイリスが支えていたネイラが、耳元でそう囁いた。「風」という魔術性質を持つアイリスなら突破できるだろう、と遠まわしに



伝えてくれたのかもしれない。

……そう思い、アイリスはネイラの身をリーンに任せて刀を鞘から抜き出す。

「アイリス、何をする気だ？」

「……ウイードが置いていつてくれたこの刀、試してみたいんです」

「風切、か」

そう呼ばれる刀。パーフィの持つ剣とよく似ていて、細長くアイリスの背丈以上もある刃の部分。

「……………」

夢想丸とは違った持ち味。自身の魔力が吸い上げられるように増幅していくのが良く分かる。あの修行で、魔術を少しだけ理解し発すことが出来るようになったことが、ここで役に立つか否か。

ウイードの豪風剣を思い出し、ふっとそれをイメージすると同時に刀が満たされていく。

「やああーッ！ー！」

ヒュオオオオオオオ……

耳を引っ掻くような風の通り抜ける音が辺りを駆け回り、その強烈な風圧で次々と木々が崩れていく。何度かその風が鋭く尖って丸太のように木を捌き切る。

「す、すごーい！ アイリスっ」

ハッとアイリスが気が付けば、辺り一面の木々が殆んど切り崩されてその山になっている。

「……流石、だね」

「あ、ありがと、ネイラちゃん」

リーンから再びネイラの身を受け取り、そっと腕を肩に回し支え歩く。

「これほどの魔力を……」

「……ん、おゝアフロじゃんかあ」

「なっ！」

パーフィのすぐ横で、反射神経が疼く呼び名が呼ばれる。どうやらエレナが目覚めたようで、周囲の顔が青く。

「ふわわ……あれ？ なんであたし眠って……？」

「貴様……。もう一度眠らせてやるーっ！」

「ひえっ！ な、なんだよアフロー！」

「だーっ、その名で呼ぶなー！」

その場でエレナを追い掛け回すパーフィ。「はあ……」と呆れる一方ホツとしたような溜め息が皆から零れる。

「お2人とも！ そんなことをしてる場合じゃありませんわ！」

「……ん、なにになに？」

「……と……そうだったな。エレナ、ギルドに帰ったら覚えてるんだな」「こ、怖いっばー」

茶番もひとまず棚に上げ……彼女らはその道を改めて進む。

\*\*\*\*\*

\*\*\*\*\*

その一面はとても飛行船の中とは思えない光景。  
辺りに木々が生い茂り、それが魔物を中心に巻き付いて縛り付けている状態だ。

「はあっ…はあ…」

樹林開封、ウエルトの持つ魔術で1、2を争うほどの高度魔術だ。それゆえ、急な魔力の消費はウエルトにとって少し負担が掛かってしまっていたようだ。

「…ど、どうやら…。そっちにも力量の限界があるようね…」

「…私には仲間がいる！　ここでお前を拘束、後は仲間に任せるだけだ…っ」

と、その場に手をつき呼吸が乱れていく。一方身動きの取れない化け猫の魔物は、そんなウエルトを見て不敵にも笑みを浮かべ始める。

「こっちだって、いつまでもやられてばかりじゃない…！」

グッ…と魔物を締め付けていた太い枝にヒビが入り、すぐに破られてしまった。

「なっ！」

「ふふ…、その大剣を扱うのに魔力を消費し過ぎていたようね。こ

の木ぐらい……」

優劣が逆転し、身体に力が入らなくなって立てぬウエルトに歩み寄っていく、獣の姿を纏った人間のような魔物…。

「我らの痛みを知れ……ッ！」

「っ……！」

その鋭く尖ったツメを頭上に掲げ、まさに振り下ろそうとしたその時だった。

魔物の背後に、感じ慣れた雰囲気を感じ取りウエルトの緊張感を吹き飛ばす。

「無事か、ウエルト」

「……ッ!? う、ぐあ……っ」

その逆立った毛を伝って零れる赤みを帯びた血を見た瞬間。

魔物はその姿を人間の姿に戻し、全身の力が失われたようにその場にドサツと倒れ込む。

「ぱ、パーファイ……」

「お前……樹琳開封を使うまでの敵だったのか、こいつは」

「……いや、こいつは……」

魔物を斬り付けたパーファイに遅れて皆が追いついて辿り着く。

「あっ！ ウエルトさあ〜ん！」

「リーン、お前たち無事だったのか……」

「まだですよっ、コロナさんとエレロワが……」

\*\*\*\*\*

\*\*\*\*\*

「……………うう、ん…?」

「あ！ コロナさあ〜ん…!」

眠らされていたようで、記憶の無いまま暗い部屋に閉じ込められていた。横にいたエレロワが、安心したように擦り寄ってくる。

「だ、大丈夫だよ…エレロワちゃん」

「ふええん、怖いよう…っ」

真っ暗で、近くにいるエレロワの姿しか見られないほど。

「……………みんな、無事かなあ」

### 第33話 アローン・キャット

「……パーフィ」

息を荒げたまま、ウエルトはその場に膝を折って体勢を低くする。そして、剣を突き刺したままのパーフィの名を呟いた。

「お前はケガしてないのか、ウエルト」

「そ、その剣を抜け……。そいつは、何も……っ」

「ウエルト……？」

力無くそのまま小さな身を引きずってパーフィの剣にそっと触れる。

「……頼む、パーフィ」

ウエルトのその言葉に、一度眉をひそめてからパーフィは魔物からゆっくりと突き刺してあった剣を取り除いた。剣先から、赤みを帯びた液がポタポタと床へ垂れ落ちる。

「こいつは魔物だ、どうして退治させない？」

「いや……違う。これは魔物なんかじゃ無かった……」

「どういうことだ……？」

すると、倒れた化け猫の姿をした魔物の姿が徐々に”人間”の姿に戻ったのだった。

そしてそれはこの空猫館へ来て、館内の案内をした女性の姿だった。

「……わたくし、気付いてましたわ」

メガネの奥で目を少し細め、マイリーがそっと口を挟んだ。

「マイリー、この人は……」

「ええ……。ネコの意思体ですわ」

「ね、ねえ！ ちょっとは分かりやすく説明してよー」

よく分からない話に口を挟むリーンに柔らかく息を吐いて、言葉を続けた。

「……要するに、何かしらの恨みが宿っていた、ということですよ」  
「ん？ あ、アイリスうう、わかった？」

その説明を受けても、確かによく分かり辛いと胸中で同意しながらも、アイリスは難しい顔をしたまま脳内を整理していた。

「わ、分からないです……」

「もつと簡単に言えば、この世への未練……だな」

「総長、もつと分かんないですってばあ」

ふう、と溜め息を付きウェルトは倒れた女性のおでこにそっと手を宛がう。

どうやらコロナたちの居場所を突き止めたようで、彼女はそのまままっすぐと指差した。

「この方向みただ」

「よし……、お前たちはここにいてくれ」

そう言ってウェルトとパーフィはさっさと先へ進んでいってしま

った。

よく分からない内容の話が多く、アイリスの頭に沢山の疑問符を残したまま事件解決。そもそも、どういう状況だったのかすらよく分かってはいないが。

「エレナさん、どうしたんですか黙って」  
「ん？ あ、いや…」

何かを探してるようで、身に付けている服のポケットに何回も手をつ突っ込んで引くを繰り返しているようだった。

「あ……。エレナさん、これ、ですか」  
「おっ、これこれ！ ありがとうー、ネイラ」  
「……いえ」

拾ったライターが主の下へ戻り、エレナは早速一服しようとしたが、

「あ、あれ…、タバコも切れてたんだっけ」  
「あはは…」  
「もーっ、早く帰って吸いたいっ！」

と、子供のように喚くエレナに、アイリスはそっと微笑みを投げかけてみた。

とにかく、無事でよかったと。

「…喫煙は程々に、ということですね。エレナさん」  
「ちえーっ」



\*\*\*\*\*

\*\*\*\*\*

ガ…、ガガンツッ!!

「わわっ…!?!」

真っ暗な部屋に閉じ込められたままの2人の所へ、乱暴な音が押し寄せ驚いた。

「…だ、大丈夫だよ、エレロワちゃん」  
「ううう」

人というのは視界が揺らぐと不安になるもの。  
今の彼女たちにとって、その轟音はどんな怪物が襲い掛かってくるほどの恐怖に感じた。

ガガガ……ガンツ!

と、次の瞬間その壁から明るい光が漏れ出したので、それに過剰に反応してしまいエレロワをぎゅっと抱きしめていた力が強まる。  
コロナの向く方の光に小さな影とそれに比べて大きな影の2つが映り、怖くなって瞼をキュッと引き締める。

「…っ、…来ないでえっ」  
「コロナ、エレロワ! 無事か!」

と、聞き慣れた少女の声がして強まった力をいきなり緩める。

「…ありゃ？」

間の抜けた声が自然と口から漏れ、安堵からか全身の力が抜けたようにその場に座り込むコロナ。

「うわあ〜ん！ 総長さあんツ！」

「……ただ閉じ込めていただけか。コロナもケガとか無いか？」

「うん、平気…。はうう」

意味の無いような声をまた漏らし、パーフィの差し出す手に捕まり立ち上がった。

「ね、ウエルトちゃん…」

「どうした？」

「……あ、その顔はもう気付いてる？ この図書館のネコのこと」

「…ああ。一応、敵は保護することにする。リミレットの回復法が見つかったついでだ」

ウエルトの小さな身にこれまた小さなエレロワがしがみ付いているので、幼子同士のじゃれ合いのように見える中、真剣な事を言っているので何だか笑えてきた。コロナとパーフィは揃って口を押さえるようにして軽く笑って見せた。

「な、なんだ、お前たち」

「ふふっ、なんでもないよ〜。ね、アツファーちゃん」

「そうだな、……っふふ」

それが何故かツボにハマったのか、パーフィは続けて笑いを堪え

ていた。

「な、何が可笑しいっ、…アフロ！」

…と、一瞬にして時が止まったかのようにパーフィの笑みも瞬時に治まった。

わざとつばく言い放たれた気に入らぬ呼び名に、「怒」の表情が形勢逆転して笑みを上まったのだった。

「…貴様、エレナ共々…覚悟している。この剣のサビにしてくれるわ」

「じよ、冗談だ！ エレナはまたそう呼んだのかもしれんが、わ、私はただ場を和ませようとしただけだ、ああそうだ」

「…よく分からん言葉を並べおつて」

「あはは…。さっ二人とも、そろそろ帰ろ…？」

パーフィの鋭い眼差しにビクビクしているウエルト、その合い間をコロナが声を濁して仲介に入る。と、別にケンカをしてる訳でもないのだが。

\*\*\*\*\*

「いやあ…、とんだ災難だったなあ」

全員が集結し、やっと空猫館から脱出した一行。

いつの間にか「空飛ぶ図書館」である飛行船の空猫館は、ウエルトの樹琳開封によって重さが増し墜落したようだった。そんな衝撃は全く感じなかったものの、その飛行船は完全に破れ散り森林の中

へ落ちていった。

「まったく、少しは警戒しておくのも重要な  
「うー、わかってるって」  
「それと、これを機にタバコはやめた方がいいんじゃないか？」  
「ん〜。…それはないなっ！」

魔物 でもなかったが、敵の操っていた飛行船とはいえ凄い量の情報が集まっていた。

恐らく、この後ほかのギルドなどからの遠征陣が書物などを回収にあたるのだろうが、今の彼女たちにとってはもうコリゴリだった。

「……もつたいないですわ、あんなに沢山の本を……」  
「なら持って帰ってくれば良かったじゃなかあ、マイリー」  
「わっ、わたくしには人様の物を黙って持っていくなんて出来ませんわ……」  
「…もつたいない、とか言ってたくせに」  
「そ、それは…その」

外はすっかり日が落ちかけ、水平線の向こうへ日が半分顔を隠している。

結構な高さの所を飛んでいるため、海と夕焼けの景色がハッキリと見えて、絶景のように感じるほど綺麗だった。

「……アイリス」  
「あっ、ネイラちゃん。さ、さつきはありがとね」  
「…？ なんの、こと？」  
「『木には風だよ』って、教えてくれたでしょ？ 私、ちゃんと覚

えておくから」

「……。ふふ、やっぱり、アイリスって……」

アイリスの腰からは、夢想丸よりも長い丈を持つ風切という名の剣が下がっている。その鞘に付いている飾りが風に揺れ、鈴がちりんちりんと可愛らしく鳴り響いていた。

「ん？」

「……………私好み、だよ。なんとなく……」

「え、…あ、うん……？」

その言葉の深い深い意味は、少々鈍いアイリスには分からなかったようだ……。

ただアイリスは、友達として相性が合う。そんな感じの事を言ってくれたんだろう、と勝手に解釈してその場をやり過ごした。

「…ねえアツフーちゃん。この人って」

「ああ、ただの人間さ。恐らく、飼い猫か何かが乗り移ったんだろう」

何故かコロナが保護した女性を運ぶことになっていた。

というのも、コロナはホウキ無しでも浮遊できるので、彼女自身は空を舞っている状態。ホウキにその女性を乗せて運んでいるのだ。

「それって、怖い事だよね……。きっと、その猫ちゃんが……」

「……………目を覚ましてから事情を聞けばいい話さ。私たちの目的の物は見つかったからな」

「えっ！ 本当っ!？」

「それも一旦リアンへ戻ってから、だ。リミレットはしぶとく粘る

タイプなのは、お前が一番知ってるだろ？」

「うん！ わぁ…良かったぁ」

夕日が遂に沈む頃、彼女たちはようやくリマンへ帰ることが出来たのだった。

### 第33話 アロン・キャット（後書き）

作者のLorexです。

空猫館編も一応は終結となります。…が、その内容が完全に終わったかと聞かれれば、それはまだですね。化け猫のように襲い掛かってきたあの意思は何だったのでしょうか、そして女性の正体は…。

次話をどうぞお楽しみに！

### 第34話 虚ろな気持ち（前書き）

作者のLorexです。

更新に間隔が空いてしまい、申し訳御座いません。諸事情により多忙だったため、更新できずにいました。すみません。問題なく執筆・更新は進みますのでご安心を。では、続きをどうぞ。



### 第34話 虚ろな気持ち

「ねえアイリス、こっちもお願いー！」

「あ、はいっつ！」

空飛ぶ図書館、空猫館から帰還した一行。

不慮の事態に傷を負ってしまった仲間たちの治療、及び看病に当たっていた。一人一人が、自分のできることを探しては行い、役に立とうと努力している。

「アイリスは働き者だね」

先輩のリーンに呼び出され、あの戦いで軽傷を負ったマイリーの看病に手を施す。

「当然です。私、一番新米ですし」

「……どこかの誰かさんとは大違いですわね」

と、半目でリーンの姿を眺めていた。肝心のリーンはというと医療箱の整理をしながら、片手に肉まんを握っている。それを頼張りながら包帯などを巻くため、時間が掛かり手間も悪い。

「マイリーさんは大丈夫ですか？ 魔力とか」

ここまでネイラの看病もしていた。彼女の魔力はほとんど底を付いて精神的に疲れ果てていた。

魔術を多様するソルジャーは、魔力不足になると生命力を少しずつ失っていくという作用があるようだ。今のネイラを見ていたら、それがよく分かる。

「だいじょーぶだよ、マイリーは図太いから」

「あなたが答えなくていいですわ！ まったく……」

相変わらずのやり取りに安心。そして蚊帳の外にされたアイリスは、微笑ましく思いほんのりと笑う。リアンのメンバーにとって、すっかり定着した展開である。

\*\*\*\*\*

\*\*\*\*\*

そして問題はこの女性。

「ううむ……、しかし目を覚まさないな」

空猫館を操っていたとされる、ネコの意思が取り憑いていたという女性だ。一行が保護しこうしてリアンにて様子を見ているのだが、もしもの時のため、こうして上層部4人が集って見張っている。

「やっぱりガリユルアートに持っていった方がいいんじゃないの？」

「いや、向こうにはリミレットも置かせてもらっている。あまり負担は掛けられん」

リアンの抱えている問題の数々。

リミレットの意識不明、謎の古文書、この女性の身柄。そして恐らく、国の方から”空猫館”について聞かれるだろう。色々忙しい。

「リミレットの方はさ、もう解決したも同然じゃんか」

「……英雄リウニオン、か」

アイリスの見つけた本に書いてあった、この地を護ったとされる英雄だ。

そして彼は有名な薬師でもあり、今の医学にもかなり影響を及ぼしている。

ただ、今はもう生きていない。これは百数年前の話だからだ。

「エレナちゃん、その英雄ってもう生きてないんだよ？」

「ええっ！？ そ、そうだったのぉかぁ」

「まあ、彼の子孫や取り巻きの人物が生き残っているのならば……」

情報はそこから聞き出すしかない。そもそもリミレットがどういう状態なのかも未だに分からない。

「ウエルト、お爺様に聞いてみるのはどうだろうか？」

元はといえば、この伝説はパーフィの祖父ゲンドから聞いたもの。つまり彼ならば何か詳しく知っているかもしれない。

「そうだな、ゲンド様なら何か……」

「な、なら！ すぐにでも行こうよ！」

「コロナ、そんなに焦らなくても大丈夫だからさ」

やっぱりリミレットのことになると、こつも焦ってしまうのがコロナだった。ソルジャーになりたての時も、コロナは真っ先にリミレットの事を考えていた。

「……心配だもん」

\*\*\*\*\*

\*\*\*\*\*

日はすっかり落ち、皆が寝静まった頃。

「……………ここ、は」

馴染みの無い天井に毛布の香り。辺りを見渡せば、小さな置時計が針を動かしているだけだ。いかにも質素で素朴な個室。柔らかな布団に包まれ、彼女は眠っていた。

「みい」

「わ……………ネコだあ……………」

短調に鳴いた猫は彼女の安静を望んでいるのか、枕元で丸くなり毛繕いをしながらこちらを眺めていた。

「ねえ、ここはどこ？」

そう問い掛けても、当然ながらネコは言葉で答えない。

しかしそのネコは、まるで微笑むように「みゃあ」と愛らしく鳴き、個室の扉を開ける。

「……………？」

「みいみい、ふにゃああ」

招くように手を動かし、扉の向こうへ行ってしまったネコを仕方なく追うことにした。

“ねえ、どこに行くの？”

答えてよ。ねえ、お願い。私を一人にしないで。 ”

「私は一体……」

歩幅を合わせてくれてるのか、ある一定の距離を保って自分のことを導いてくれているようなネコを追い、彼女は何やら暗く静まり返った広間に出た。

そのネコはと言うと、近くにあったソファの上でまた毛繕いを始めていた。

「あはは、キミ、それ好きなんだね」

「にゃあ」

「ふふっ……あはは」

こちらの身体もむず痒くなりそうなまでに、ネコは一生懸命後ろ足をぐるぐると回していた。

周りに目線を配ってみる事で、そこがどんな場所なのか何となく理解できる。立て掛けられた大小までの武器、大きな連絡装置、それに軽いキッチンのようなものである。

「誰だッ!!」

「わ!？」

突然広間の明かりがつき、響き渡る声。驚き思わずネコを抱きし

めてその場に丸くなった。

「……………君は」

声主が近づいてきたのが分かって、そのネコを抱きしめる力も徐々に強まっていくのがコントロールできない。何よりも、怖いという感情で満ち溢れていたからだ。

「無事だったみたいだな」

「……………えっ？」

「安心して大丈夫だ。驚かして悪かったな」

害の何も感じられない優しい声に、そっと顔を上げ声の主に視線を送る。

まっすぐに伸びた髪と凜々しい顔立ちの女性。彼女が手を差し出すと、抱きしめていたネコが飛び出しその下へ歩み寄った。

「珍しいな、このネコが懐くなんて」

「……………あの」

「と、私はアフロディテ・パーフィという。ここでは皆が起きてしまっ、外へ行こう」

スラッとした身丈、まっすぐ前を見つめる潤った瞳。女性でも見惚れてしまうほど、パーフィの容姿は魅力的だった。

“ お願い、助けて。

このままだと焼けちゃうよ。ねえ、一緒に逃げようよ……………。”

夜の海風が、二人の間を吹き抜けて髪をさらう。空に浮く月は雲の切れ目から少しだけ顔を覗かせている。何の変わりも無い、いつもの夜の風景だ。

「君は”空猫館”という所にいた。そして、魔物となって私たちを襲ったんだ」

「私が……魔物に？」

やはり自我は無かったようだ。

「恐らくだが、君の中にネコの怨念のようなものが入り込んだようだな」

「……………」

「その邪念が君を魔物の姿にしたんだろう。あくまで推測だけど」

ハッキリと否定できない何かがある。心の中で引つ掛かっていた。目が覚めたと同時に、次々と思いつく物事が、痛いほどに胸に突き刺さるのだった。

“ どうしてよ。こんなに信じてたのに。

自分だけ助けられたいの？ そんな子だって思わなかったよ

”

「……………」

「何か、思うところがありそうだな」

胸の奥が痛む。パーフィがうずくまる彼女に近寄り、そっと肩に手を置いてやる。

「…………話してくれないかな。そのこと」





### 第35話 孤独な少女と不思議な子猫

大雨の日だった。

小さく鳴くその子は、ずぶ濡れになりながら泣いていた。

「……ね、寒い？」

当然、言葉は返さない。その子は身の毛を乱し、すっかり水が染み込んで身体自体が重いようだった。それゆえ、物陰へ駆けることだつてできないんだ。

小さく、また小さくなつていく声。この子も独りなんだ。

結局放っておく事なんて出来なくて、両親に見つからないように部屋まで連れてきてしまった。

「ここにいてね。ご飯持つてくるよ」

「……」

しっかりと身体の湿り気を拭き取ってやり、自分が寝るベッドの中へ入れてあげた。少しでも暖まってくれば嬉しいから。

「はい、これ食べられるかなあ」

決して裕福な家庭ではない。むしろ貧乏で生活に猶予は無い。精々与えられるのは、湿気たパンと水ぐらい。

「にー」

「あはは、良かったあ、まだ元気だね」

それにしても愛くるしく鳴くその子ネコは、布団から顔だけを覗かせてパンを頬張っている。食べかすが幾つも布団の上に零れるが、そんなものよりもネコの仕草に目が行ってしまう。

「……そうだ。名前がなきやね」

ふとそんな事が頭に浮かんで、答えるはずも無い小動物に語りかけてみた。あまり声を張ると両親に見つかるので、細々と小さな声で。

名前を考える、という行為が初めてでどうしたらいいものか。

「にい、にい」

「……そういえば、変わった鳴き声だね」

まだ小さいからなのか、そのネコの鳴き声は決して綺麗ではないが透き通ったような潤いある声だった。同じネコ科の猛獣がいるとは思えないほど、穏やかでふわりと柔らかく細かい声。

「うん、名前は……ニィ！　それがいいよね」

そこで鳴き声を上げて答えてくれれば完璧だったのだが。と変な期待も持っていた。

でも嫌がっているような様子はちっとも見せないの、それで確定とした。鳴き声をそのまま名前にするという、あくまで簡潔なネーミング。

それから3年の時が過ぎた。

すっかり両親には、”ニイ”のことがばれてしまい……。しかし少女の説得で何とか家族の一員に入れてもらうことが出来た。

「コーにー」

相変わらずそうとしか鳴かない。3年経ち、その姿も一回り大きくなって”子ネコ”とは呼べないぐらいに成長した。それでも元々小さな種類なのか、少女の膝上にちょこんと乗っかるほどの大きさだ。

「ちょっと出掛けてくるわね。留守番お願いよ」  
「うん」

今日は両親の結婚記念日ということもあって、どうやら二人で豪華な料理を食べに行くそうだ。自分も行きたかったのだが、そうすればニイが独りぼっちになってしまう。

ニイも連れて行きたいが、恐らくそんな豪華そうな料理店にネコを連れ入れることなんて出来ないだろうと悟った。

その日も変わらず、平凡に時間を過ごしていた。友達という友達は居ない。なのでニイが友達 いや親友だったのだ。

かけがえの無い、大切な存在。

「……あっ！」

自分の部屋でニイと無邪気にじゃれ合っていると、開けていた窓から何かが落下してしまった。

少女の大切にしていた指輪。母親に買ってもらった、唯一の贅沢だ。

「ちよつと取つて来るね。ここにいてね、ニィ」  
「にい」

こうして言葉に応じる回数も増えてきた。会話しているようでも何か楽しい。

少女は家の階段を駆け下り、窓から落ちた指輪を取りに行くために外へ出た。窓から見ると、家の周りに茂っている茂みの中に落ちた様子。

「……………ん、無いなあ」

ちょうど上を見上げると、窓からニィがこちらを眺めているのが分かった。心なしか、可愛らしく微笑んで見ているように思えて指輪のことなんか忘れそうになるほど。

それから数十分。辺りを探してみるが、ちつとも見つからず。ちよつとした熱気を感じ、服をパタパタと動かして風を作ってみる。

パチ、パチ ……パチ…。

どこかで合掌でもしているのか、手のひらを叩きつけるような音がした。しかし家の周りに人は居なく、相変わらずニィの視線を感じている。

「……………なんだろあ」

気の抜けた声で独り言のように呟く。

次の瞬間、視界がぐらりと揺らぐような光景が目飛び込んでき

たのだった。

「え……?」

「にいにいにい、にいー」

いつもより激しく鳴くニイが、窓をカリカリと引っ掻いていた。

「な、何これ……!」

家が、燃えている。

すでに黒い煙をたくさん吐き出している我が家は、ちょうど少女の居る逆方向から燃えていたのだ。

「ニイ! ニイが……!」

急に心臓の鼓動が早くなって焦り、家の扉を開けようとする。が、ドアノブの部分がすでに高温を帯びていて、触った瞬間身体中にその熱が伝わる。そして反射的にその手はそこから離れる。

「どうしよう、どうしよう!」

暫くその扉を悪戦苦闘しているとすぐに野次馬が集まってきて、その中の一人が消防隊に連絡をしているのが分かった。

「誰か助けて、誰かあ!」

集まってきた大人たちは、とりあえず少女の身柄は保護しようと男たちだけでその熱気を潜り抜けてくる。やがて掴まれた少女の手。「ニイを助けて」と訴えても、当然ながら伝わるはずもなく。ニイなんて変わった名前の人間はいない。

当たり前だ、ニイはネコなのだから。そんな事を一瞬で思考できる大人は残念ながらその中にいなく、少女は家から離され、振り被ってしまった黒灰を払ってもらった。

「……！！」

そして家の中で何かいけない物に着火してしまったのか（恐らくストーブか何かの灯油）、家の天辺から噴出すように豪炎が舞った。

「こりゃデカイ火事だ」

「消防隊はまだ来ないのか！」

「とにかく家にいたのはこの子だけみたいよ。良かったねえ無事で」

などと大人たちは暢気にも、少女を離さず護ろうとしている。

でもそのおかげで、少女はニイを助けに行けない。

「ニイ、ニイ　　ッ！！」

出る精一杯の声を絞り出し、親友の名前を呼ぶ。

言葉に応じてくれるようにはなつた。けど、今度は何も鳴いてくれなかった。鳴いていたのかもしれない、けど炎のせいでそんなもの、掻き消されるように聞こえないのだった。

“ねえ、どこに行くの？”

答えてよ。ねえ、お願い。私を一人にしないで。”

“お願い、助けて。”

このままだと焼けちゃうよ。ねえ、一緒に逃げようよ……。”

“ どうしてよ。こんなに信じてたのに。  
自分だけ助けられればいいの？ そんな子だって思わなかったよ  
”

\*\*\*\*\*

\*\*\*\*\*

思い出すだけで胸の中に刺さるものがある。

結局消防隊が来て、ニイの姿はどこにも無かったという。何とか逃げ出せたのか、という希望もあったが、また焼けて死んでしまったとも考えられるわけで。

「……なるほど」

パーフィは納得したような表情をして、彼女の零した涙をそっと拭ってやる。

「……………」

「きっとそのネコは、主人の君を思って取り憑いたんだろう。……  
親友なら、尚更」

辛い現実の話。きっとそのせいで、ニイは人間を恨んでしまったのだろう。だから、空猫館で人間を襲っていた。

「事情は理解した。安心してくれ、リアンの子たちは優しいのばかりだ」

「……………リアン？」

「そう、我がギルドの名前さ。」 絆 ” という意味の、な

朝日はまだ顔を覗かせていない。もう一眠りしよう。  
悲しい現実を、なるべく忘れるため。ニィを、夢で見るため。



### 第36話 ソルジャーとして

所々であくびをするのが数名見られるが、その日は皆ぐっすり眠れたという。まだ回復が見られない者もいるのだが、ひとまずは一件落着ということだ。

「ふわぁぁ……うう」

「わ、可愛いあくびだね、アイちゃん」

新入りで浮き上がっていたアイリスも、すっかりこの生活に慣れ親しんでいるようだ。緊張の糸も解れてきて、思ったときにあくびをする事ができる。

「そ、それよりも、こんな早朝から何話すんでしょっね」

「うーん。私もわかんないや」

そんなアイリスの横で、猫たちを抱き上げて頬ずりするコロナ。中でも、猫のミーコはアイリスにも懐いてしまったようで、彼女の膝上に身体を丸くしている。

「ミーコったら、すっかりアイちゃんに心変わりしちゃってえ」

「あはは……」

先輩の膨れっ面も、もう見慣れてしまったかもしれない。それはまるで甘えたがりの猫のように愛くるしい。

そしてしばらくして、一部を除いたメンバーが集結。除かれているメンバーというのは、ネイラとエレロワの二人。未だ完全に回復

していないネイラを看病していたエレロワは、徹夜で彼女の面倒を見ていたという。それゆえこの早朝集会には参加していないというわけだ。

「揃ったか。では話を始める」

今回は珍しく、総長のウエルトが仕切るわけではなさそうだ。当の彼女は、アイリスたちと同じ聞く位置に腰掛けている。

「みんな昨日はよく眠れたようで安心だ。まあ、一部はあんな状態だが」

「ねえ、ネイラ、どうしちゃったの？」

空猫館で、然程大きな力を使ったわけでもなく。敵の魔術が何かにやられ、それから様子がおかしい。至近距離で見ているマイリーは、ネイラが感電するように倒れるのを目の当たりにしている。

「……わたくしが思うに、身体的なショックを受けて思うように立ってないんですわ」

普通の魔術ではないようだった。バチバチと熱線を破るような、目でハッキリ見える電熱が彼女を襲ったのを覚えている。

「とりあえずネイラの意識はある。じきに回復するだろう」

「そうだといいですわね……」

「ありや珍しいじゃん、ネイラのこと心配するなんて」

「う、うるさいですわ、リーン！」

これも未だに打ち解けていなかったマイリーとネイラだが、今回の事で少しずつ和解していった様子。と言っても別に仲が悪かった

わけでもないが、すれ違いが多かっただけで。

「話を戻すぞ、二人とも」

とにかくパーフィはその話をしたいわけではなく、本題に戻すためにリーンとマイリーを静める。

「夜中に、あの少女が目を覚ました。空猫館で私たちを襲ったあの子だ」

「アフ　じゃなかった、パーフィ何か話したのー？」

禁句が飛び出そうになって口を噤んだエレナを、キツと鋭い視線が射抜く。「ご、ゴメンゴメン」とその表情に焦りながら謝罪。

「まったく……。それで彼女は、どうして魔物化していたかを話してくれた。今からそれを皆に伝えようと思う」

すると広間の入り口付近に、顔の半分だけを覗かせてこちらを見る少女が一人。ウワサをすればなんとやら、だ。

「入ってきてくれ。話す前に紹介したい」  
「……………」

黙りこくって目線を下へ傾けたまま、パーフィの横まで歩み寄った。

「皆も安心していい。彼女に魔物の意識はもう無いようだ」  
「魔物だった時の気迫、感じないもんね……………」

と、感心気味に顔を覗こうとするリーン。それに戸惑って少女は

どうしようか迷って、とりあえず目線を逸らす。確かに魔物だったころの気迫、雰囲気のようなものは感じない。

「私、空猫館の”ミライ”です……」

静かな口調で、少女は自分をその名をミライと名乗った。

\*\*\*\*\*

\*\*\*\*\*

「うん」

外はやつと日が昇りかけてきたところ。カーテンは相変わらず閉まったままだが、その隙間から日の光が差し込んできているため、朝だと分かる。

「……もう大丈夫、だから」

「だめだめ！ ネイラちゃん、元々身体が弱いんだからあ」

ベッドに寝かせてあるネイラと、それを見守るエレロワ。この二人は、このギルドに所属する前からの仲で、非常に良好な関係。

「……だってエレロワ、寝てない、でしょ」

「そんなのいーの！ あたし、眠くなんか無いし！」

「……………あくび、何回したっけ？」

眠くないと言い張るエレロワは、もう数え切れぬほどのあくびをしてその眠さを身体が訴えかけている。何度か虚ろになりそうなのを留めて睡魔と悪戦苦闘しているわけ。

「ううう、眠くなんか……ないもん」

「無理しちゃ、ダメ。私、平気だよ……」

徹夜という苦難は、まだ12歳の少女にとってかなりダメージになる。

次第にエレロワの声の方が、ネイラの声より小さくなっていく。

「ネイラちゃん、まだ……」

「ほら、ここでいいから、寝ていいよ」

「それ治って、ないもん。あの痛いヤツ……」

「……っ……!」

そう、どんな薬でも今の世界の技術ではどうしようもないもの。

ネイラの身体は生まれつき弱く、そして受け継がれた脆い部分があるのだった。

魔術を多用できる分のリスクとも言える、後遺症があるんだ。

「……………」

そこで力尽きたようで、エレロワは静かに寝息を立てていた。元々夜勤組みということもあって、朝は苦手。その上徹夜までしていたので、体力も長くは持たず。

ただネイラは、この子が自分の後遺症のことを知っていたということに驚きを隠せずにいた。

\*\*\*\*\*

\*\*\*\*\*

結局そのミライという少女は、リウニオン国本部に引き取ってもらった事になった。それに空猫館のことも聞かなければならないと、向こう側からの意見だった。

虚無感に襲われるほど、悲しい話を聞かされた。ただミライは飼った猫だったニイを思い、思われていた。それが裏目に出て、あのような魔物になってしまった。

ミライの悲しい意思と、ニイの悲しい思い。その二つが混じり合いただけが強調されてしまった。それゆえ、心にはそれしか浮かび上がらなく、憎悪を持った魔物になってしまう。

それがこの世界　リウニオンのメカニズム。

深すぎる憎悪は、その姿を変え力とし、他者へとぶつけることで解消される。それが原因で戦争などというものが起きてしまうのだ。

そして、それを止めるために魔物を退治する。それがソルジャーの務めなのだ。

「……リミレットの事が解決したら、会いに行つてやるか」

「そうだな、きっと向こうでも孤独から逃げられないだろうからな」

ミライは手厚く迎えると言われてはいるが、それでも心配な点はある。

「どうしてリアンには置いてあげられないの？」

「一応リアンはソルジャーのギルドだ。彼女は普通の女の子。ソルジャーとして働く者ではないから、置く事は国から禁じられている」「……そっか」

人一倍心配性なコロナは、ホウキに跨ったまま声色を濁らせていった。

そんな彼女の肩を抱いてエレナも、「優しいなあコロナ」と子供をあやす様に髪の毛を撫で回す。

「わっ、エレナちゃんタバコの煙が〜！」

「お、悪い悪い」

「……エレナ、器用なんだなお前は」

「へ？」

コロナの肩を抱いている左手、右手にタバコを持っている。つまり、ホウキに乗ったまま両手を離れた状態。色んな意味で感心するウェルトとパーフィだった。

### 第36話 ソルジャーとして（後書き）

ひとまずこれにて、空猫館編は終わりです。

飼い猫の意思に憑かれた少女ミライは、この先大きな活躍を見せてま  
す。ご期待下さい。

では次話より新展開。

アイリスと夢想丸が、再び動きます……！



### 第37話 問題解決へ！（前書き）

作者のLorexです。

今話より少し新展開となります。何度も語られている、”リウニオンの英雄”が主題となってきます。

### 第37話 問題解決へ！

薄暗い個室。幾重にも張り巡らされた魔方陣を潜り抜けて、その奥にある目的物の目の前に辿り着く。

「……エレナちゃん。アイちゃん、集中してるみたいだよ」

「一応アイリスがまだ夢想丸を使えるか調べるんだろ？」

「うん、ウエルトちゃんはそのつもりみたいだけどね……」

少しだけ力んだ右手をそっと夢想丸へ向け、そのまま刀に触れる。

斬った者を悪夢に陥れるという、闇の刀。そして持ち主を選ぶというその刀は、このアイリスを選んだ。

純粹で優しく明るい、まるで光のようなこの少女を。

「どう？ アイちゃん」

「だ、大丈夫です！ ほら、この通り！」

手に取った夢想丸を掲げてコロナたちの方へ振り向く。そのアイリスの表情は、少し歪んで見えた。

しかし結局、まだ夢想丸は封じておくと総長ウエルトの意見があった。また暴走を始めて止められなくなつては困るからだ。

あの時は敵の攻撃もあつて、何とか力が完全に表へ出ずに済んだ。しかしそう好都合も重なるわけは無いので。

「というわけで、私たちはちょっとゲンド様のところへ行ってくる」

一同が集結させられ、ウエルトたち上層部の4人が準備をしていた。といっても、行き先はパーフィの実家なのでそんなに大荷物でもないわけで。

「何聞きに行くんですかー？」

「んー、今オススメのタバコとか？」

「ち、違うでしょーエレナちゃんっ」

パーフィの祖父ゲンドは、確かに喫煙もたまにする。が、別にそんな事を聞きに行くのではなく、

「アイリスが見つ付けてくれた、”リウニオンの英雄”についてだ。リミレットのことや古文書のこと、上手く言えば解決するかもしれないからな」

ガリユルアート砦にて引き取ってもらっている意識不明のリミレット。

それと、書庫で見つかった謎の古文書。

夢想丸の事もそうだが、まだこのギルドに残ってる未解決な事柄はこの2つがある。

「んじゃあたしたちお留守番？」

「ああ、リアンを頼んだぞ？ リーン」

「はい」

上層部の4人が出掛け、リアンに残る5人。けれど、エレロワとネイラの方は未だ部屋から出てこずにいたのだった。

アイリスたちが様子を見に行っても「大丈夫だよ」と扉越しに言われるだけで、中へ入れてもらえず。なのでリーン、マイリー、ア

アイリスの3人はどうなっているのかちつとも分からないまま。

「さあて、わたくしはお風呂に……」

「あ、一人風呂なんて寂しいぞーっ、あたしも行く」

「もう……。アイリスはどうします?」

あの広い浴場だ、恐らく3人で入ったって弊害無いほどの面積を持つ。

メガネを外しかけながらそう問い掛けてくるマイリーに一つ頷いて、アイリスも2人の後を追って浴場へ向かうことにした。

「ううううっ、ん……」

湯気の立つ湯舟に身を浸し、両手を組んで伸びしてリラックス。空猫館での戦いは、リアン一同にとって久々に疲れる大仕事でもあったため、湯舟に疲れを吸い取ってもらいたいと思惑。

「もうリーンったら、はしたないですよ? 責めてタオルくらい巻いたら……」

「いいじゃん女しかいなんだから。えいっ」

「あっ!! ちょ、ちょっとリーンっ! 返しなさい!」

澄まして油断していたマイリーに巻きついていているタオルを剥ぎ取り、湯舟の中で追い掛け回されるリーン。悪戯っぽく笑いながらぐるぐるとそれを回し、その水しぶきが幾度とアイリスに吹っ掛けられ。

「も、もう……あははは」

面白おかしく感じ、アイリスも自然と微笑んで見せた。

「えーい！」

「わわっ!? ちょっとリーンさん！」

……と、油断していたアイリスも同じ目に合わされるハメに。

そんな光景を眺め降ろす太陽と、外にある浴場に吹き抜ける涼しげな風。いつも通りの風景とそれに被さって湯気が立ち昇る。

「あははは、ここでウイードあたりが来たら面白いのにっ」

「呼んだか？」

「も、もうリーン！ いい加減返しなさいったらっ！」

「そうですよおっ！ ……って、あれ？」

今、その場にそぐわない声色が聞こえたのは気のせいだろうか。とアイリスが最初に気付く。

「ん、今の声って」

数秒遅れてリーンとマイリーも、その存在に気付かされる。

腰に長いタオルを巻き、遠くを見るような眼でこちらを眺め降ろす存在に。

「……何やってんだ？」

「……わ、わー。ウイードだ、あはは……」

あからさまに棒読みである。そして、

「「キヤアああああ　　ッッ!!」」

同時に放たれた3つの悲鳴に、驚き飛び去っていく鳥たちの哀れな背中。

……悲鳴を上げられ、複雑な気分のウィード。

アイリスは前にもこんなことがあった。あの時は確か夜中で、自分の悲鳴のせいで何人かを起こしてしまったような事態になった気がする。

「だから、俺は姉さんに頼まれて」

「パーフィさんがあたしたちの風呂覗き頼んだって？　そんなわけあるかい！」

「そ、そうじゃねえって！」

湯上りで更に紅潮してきた3人の顔。

尋問し続けるリーンに、腕を組み『怒』の眼差しを向けてくるマイリー。それと、両手で顔を隠したままのアイリス。

「（だいたいここに女湯しか作らないのが悪いんだよ……）」

「ん？　何か言った？　ウィード」

「ここは別に女限定で作られたギルドじゃねえし、いつ男が来てもいいようにしておけよな、まったく」

「文句ばかり言うなあ」

リウニオン国、ギルド統率協会にて結成されたこのギルド。まあ確かに女性限定というルールは特に無かった。

要するに男湯も用意しておけ、というのがウィードの意見。それに何食わぬ表情の女性3人。

「……私、ウイードに覗きされるの2回目ですよ」  
「べ、別にお前なんか」

ボソツと言葉を放つアイリスに対し、きつく言い返すウイード。

「とにかく、俺はお前たちのお守り<sup>も</sup>として呼ばれたワケだ。ここま  
で来るのに疲れたから風呂借りようって思っただけで……」

「ホント〜?」

「……姉さんの名に免じて、許してください」

3人の粘りに耐えかねて、仕方なさそうにウイードは似合わない  
敬語で両手を合わせて見せた。主にマイリーの視線が怖かったよう  
で。

\*\*\*\*\*

\*\*\*\*\*

「……ふうむ」

「ど、どうですか? お爺様」

まずは古文書を手渡し、それと持ち帰ってきた”リウニオンの英  
雄”という本を一緒に見せる。難しい顔をしたまま文字の羅列をま  
じまじと眺め続けるゲンドに、正座をさせられていた4人の足は痺  
れに耐える。

「この古文書はリアンの書庫にあったんじゃない」

「はい」

「なるほど、どうやらお前たちの先代が残したものかもしれんなあ

……」

その言葉に、きよとんと顔を見合わせる4人。

「そ、それはどういっ？」

「あのギルド、元々は”彼”の邸宅だったんじゃないぞ」

彼。

……一体誰なのだろうか。



第38話 天にそびえし都市へ（前書き）

更新に滞りを生じさせてしまい申し訳ございません。  
というわけで、続きです。

### 第38話 天にそびえし都市へ

かつて この名も無き国を魔物から救った、一人の青年がいた。仲間も連れず、彼はたった一人で魔物の軍勢に立ち向かった。そして、最後の魔物と相打ちになって世を去ったという。彼のおかげでその国は安泰を保てるようになり、平和へ繋がっていった。

彼の名を取り、この国は『リウニオン』という国に。英雄の名を称え、その名が付いた。

上層部の4人がリアンへ帰宅。揃って地下の書庫へ向かっていた。

「うえ、ウエルトちゃん」

米俵ほどあるだろうかと疑えるほどに重そうな書物を抱えて、コロナが必死になりながらそれを運んできた。今にも落としそうだったので、ウエルトはそつと腕を支えてやり安定を保つ。

「ふう〜、これ重かったんだよお」

「……確かにこうして見ると、関連付く書物がたくさんあるな」

ウエルトの目線の先には書庫から掻き集められた、英雄リウニオンに関する書物の山々。エレナ、パーフィも共に書物を次から次へと集めて来てはここに束ね置く。

「なあなあ、これ集めたはいいケドさ」

「なんだ？」

「ホントに解読の手がかりあるのかな？」

ちょうどこの書庫でマイリーが見つけた、一枚の古文書。

ここにあったということとは、解読の鍵もここにあるのではないか。ゲンド曰く、ここは彼の邸宅だったそうだから。

「絶対ある、とは言い切れないな」

「うーん……。あ、あたし休憩してきていいかな」

と、既にタバコとライター片手にそう呟くエレナ。確かにもうこの作業をして2時間ほど経つ頃。ウェルト自身も流石に疲れていたので、

「そうだな、休憩後には他のメンバーにも手伝ってもらおうか……」

「んじゃあたしはお先に、……って」

エレナが書庫を出ようとしたその時。

丁度鉢合わせるようにその場所へやってきた2人が。

「ウイード君じゃんか、どーしたんだ？」

書庫へやってきたのは、パーフィの弟ウイードとリーンの2人だった。何食わぬ表情を共に浮かべつつ、特にウイードは複雑そうな顔をしていた。

「姉さん……。俺もう帰っていいかな」

「ど、どうかしたのか？」

「あはは、また女湯入っちゃった？ ウイード君っ」

……大当たり。ウイードは落胆気味に声色を落として、遠くで蚊の鳴くような声量でそう言った。

「やっぱり。んでリーンがいるってことは、リーンが覗かれたワケだ」

「あたしだけじゃないですよーっ、マイリーとアイリスも」  
「覗きじゃねえってば!」

必死に抵抗を示す、湯侵入容疑者ウィード。

「いやー、ウィード君もお年頃だからさあ」

「……エレナさんは黙っててくれもう。姉さん!」

「な、なんだ?」

「あんた等は女性限定でここ作ったわけっ?」

正確には、ここはそんな規制も規則も無い。

リユニオン国統率協会に創設を認められた、というだけのギルドだ。男性メンバーもいてもおかしくは無い状況。

ただ、女9人も集まってしまうと流石に男衆は入り込みにくいわけだ。パーフィの弟としてウィードは何となく顔を出してはいるのだが。

「それはこの小さな総長に　　って、あれ」

パーフィが指し示そうとしたウェルトの姿はすっかりその場に無く、いつの間にかエレナを追い越して先に休憩に向かったようだった。行動力は相変わらず誰よりも優れている、そんな総長……。

「……ま、俺はこのメンバーじゃないからいいがな」

「だったら、そんなに抗議する必要ないんじゃないのか?」

「マイリーさんの視線が怖えんだよ……」

と、少し想像してみるとやっぱり背筋に来るものがある。

メガネ越しに光る瞳孔は、上層部の先輩ですら身引きしてしまいそうになるほど。

「とにかくお守りはもう大丈夫だ。ウィード、何なら少しだけここに置いてやってもいいが」

「あ、あのなあ……。姉さん、こんな状況のままここに置くことするか？ 普通」

「なら帰るか？ 疲れてるだろ、風呂入ろうとしたのなら」

「……けっ」

ウィードの素直でない性格が際立つ。

\*\*\*\*\*

早朝 リアンに一本の連絡が行き届いた。あの時間に起きているのは殆んどパーフィかアイリスだったが、奇遇にもウエルトはその時刻に目を覚ましていたので直接連絡を受諾する事ができた。その日は特にアイリスたちも起きていなかったようでウエルトは一人、ギルド総本部へ出向いていた。

「はい、ナンバー？には、夢想丸を一旦手放させていますので」

総本部は何かと年を召した と言っては失礼だが、ウエルトに比べて年齢層は高い者々が集結している。そんなわけで浮いてしまっているのだが、別の意味でもウエルトは注目されてしまっている。

「まあ今回の空猫館の事件も、リアンの子たちによって解決させられた。夢想丸を保管しておくに相応しいギルドだよ」

「あ、ありがとうございます」

空猫館での活躍はすぐに知らせられたようで、ギルド・リアンの信頼度もかなり右肩上がりな状態にある。8人だった頃に比べると大分飛躍してきた。

やはりあのアイリスは、ただの少女じゃない気がしてならない。

「ところで、今日は何用で？」

「ああ。ウエルト君たちに、調べて欲しいことがあってね」

ウエルトの大先輩にあたる、軍服を羽織った男性がウエルトの前に歩み寄って肩を掴んできた。

「調べて欲しいこと、ですか……？」

「英雄リユニオンの行方を追って欲しい」

「えっ！」

何という偶然。ちょうどその情報が欲しくてここへ来たのもあったので、いい方面としての偶然だ。

「こちらで多少なりとも調べてある。彼の、英雄のご子息の行方がわかったのだ」

「そ、それは本当ですか！」

「ひとまずコレを見てくれるかい」

手渡された地図のようなものに目を通してみる。折り畳んであって、広げるとウエルトの肩幅では到底腕が届かないほどの長さがある地図で、上手く広げられずに悪戦苦闘しているウエルトを見て先輩は笑っていた。

とりあえず床に地図を広げて、彼の指差す場所に着目してみる。すると……、

「この雲海を渡った先、ヘヴニールという都市がある。そこのお屋敷に英雄のご子息はいらっしやるようだ」  
「ヘヴニール……」

\*\*\*\*\*

\*\*\*\*\*

「と、いうワケなんだが」

所々を省略しながらウエルトの説明を受けて、難しい顔をする者もいればパツと何かに閃きを持ったような顔をする者も様々だった。というのも、それぞれの性格でその両方のどちらかなのかは簡単に定まる。

「ウエルトちゃん、”ヘヴニール”って確か……標高が高くて行くのが大変じゃなかった？」

「ああ、それにそこを庇うように大きな雲海が立ち込めている」

雲海、すなわち大きな雲の塊だ。突撃しても濃密過ぎる霧の中で方向感覚を持っていかれて、最終的には力を使い果たして大海原へ投げ出されてしまう。……そういう意味で、極めて危険な任務かもしれない。

「とにかく！ この任務には4人ほど付いて欲しい。誰か志願者はいるか？」

「……ヘヴニール。天にほど近いとされる都市だな」

この任務の危険さは説明するまでもなく皆に伝わってしまったように、流石に進んで志願する者は残念ながらおらず。

必要なのは雲海を切り開けるほどの剣技と魔術を兼ねた存在、それとその補助役。そして、万が一夢想丸を狙う連中に遭遇してしまった時の対処役。これらが重要視される部分だ。

「あ、あの！」

「どうした？ アイリス」

「……えっと、私、行かせて下さい！」

やはり、ただの少女ではない。アイリスを見ていると改めてそう思う。



### 第39話 幼なじみコンビの実力

気が付けば、ホウキに乗って空を飛ぶのもすっかり手馴染んでいる。少し前まで、ただの木刀を振るっていた自分が 今となつては、夢に見たソルジャーと呼ばれる位置に値するようにもなつたそうだ。少なからず、自信は付いてきたかもしれない。

そして夢想丸は相変わらずギルドに閉じ込めてあって、腰に下げているのはウイードから譲り受けた風切。そんなアイリスを含め4人の若きソルジャーたちが空を駆ける。

「んで」

細いツインテールに束ねた髪を風がさらって行く中、横を飛んでいた小さな銀髪少女との間にリーンが割り行つて口を挟む。

「何であたし達なんですかあーっ」

選出された面子は、アイリスにとって初めて共に任務を受け持つ顔揃いだつた。

「いや、リーンたちが最適かと思つてな」

「うん」

いまいち釈然としていない様子。そしてその後方で、窓際に座るようにホウキに乗って本を読むメガネ娘さんに目をやった。両手を離しながら、しかも読書に集中しつつその安定を保っているところに凄さを強く感じた。

「……雲海を越えるのなら、むしろわたくし達では不十分なのは

「？」

「ま、マイリーまで乗り気じゃないのか。参ったなあ」

ここで面子4人を晒すのならば、リン、マイリー、ウエルト、そしてアイリス。アイリスのוותて2人の実力はどれほどの物なのか把握できてはいない。

「ちゃんと構成に則ってメンバー決めをして貰わないと困りますわ  
「まあ……、確かに安直だったか？」

上層部にも負けず劣らずなマイリーは相変わらず、総長であるウエルトと同じ目線で物事を語る。

「それにへヴニールは閉鎖的な都市ですわ。行って簡単に入れても  
「それには思えません」

「ああ、それなら大丈夫だ。総本部から通行書を預かったから」

閉鎖的、すなわち外との干渉を避けている。やはり英雄の息子がいるという事で外と何かしらトラブルでもあったのだろう。それゆえ閉鎖的になってしまった都市、そう思える。

「それでさ、アイリスはどうして行こうと思ったの？」

自由自在にホウキを操ってアイリスの真横まで飛び寄ってきたリオンは、片手を離してアイリスの肩を抱く。そのせいで何度かグラついたが、何とか体勢を整え直す。

「な、何か気になって……。昔この世界を救った英雄って、どんな人なんだろうって」

「ん……」

リーンは両手をホウキから離して腕を組んでみせた。そんな状態でも普通に飛行していて、手馴れてるんだなと改めて関心してしまう。

「とにかく変な人じゃなきやいいけどね〜っ」

「あはは……」

アイリス、リーン、マイリー、そしてウエルトの4人はへヴニールへ急いだ。

そこで何を知りリアンへ帰還するのか　今の彼女たちには知る由も無く。

\*\*\*\*\*

\*\*\*\*\*

今日もミーコは元気。あの子が来てから、より元気になった気がする。あんなに病弱だったネコなのに。あの子のおかげですっかり良くなったみたい。

「コロナあ、ライター取って〜」

「うん」

ただ夢想丸を使いこなせる女の子ってワケじゃないみたいだ。何か……、何か自分たちとは違ったモノを持っている。それが彼女なのかもしれない。

リーンちゃんやネイラちゃん、エレロワちゃんもすっかり彼女を気に入って後輩として可愛がってるし、自分もあの子は好き。一緒に

にいて和む感じがするから。

……とそんな思いになっている横で、エレナは室内なのにも関わらずタバコに火を灯そうとじていてライターをパツと取り上げる。

「なんだよおコロナ」

「もう……吸うなら外で！ じゃないとライター返さないもんねっ」「わ、分かったから返してーっ」

ちよつぱり悪戯つぽくライターを返さずにエレナから逃げてみる。するとエレナは「返せえー」とタバコをくわえたまま追いかけてきた。

たまにはこんなじゃれ合いも良い。最近は特に忙しかったから遊び心もほとんど無かった。

「わっ……！」

バフツ……

ちよつど廊下の曲がり角で、つい誰かとぶつかってしまった。

「コロナか。……何ライター持って走り回ってる？」

「あ、アッフィーちゃんかあ、ゴメンね」

アフロって言うのと凄く怒るけど、『アッフィーちゃん』と呼ぶのは別に気にしないらしいパーフィとぶつかってしまったようで、変に笑って誤魔化した。

そんな事をしてる間にエレナに追いつかれてしまい、

「こらーっ、ライター返せえ〜！」

「なっ……わわわっ」

エレナは飛び込むようにコロナの背後に手を回し、衝撃でパーフイごと前に倒れてしまった。

「な、何だお前まで……エレナ」

「ありやアフ　っと、パーフイも仕事終わったみたいだね」

「貴様……、最近ワザと言ってるだろう」

剣の鞘を握ったパーフイに、エレナはいつも通り平謝りしながら宥めを掛ける。本当にこれが日常的になってきた。言ってる側も言われる側も、きっと心底では楽しいんだと思う。

「ね、ねえ2人とも」

「ん？」

こんな日常が続くなら本望だ。

リアンが8人だった頃より、すっかり和む空間になった。そんな空間がいつまでも続くなら　それで幸せかもしれない。

「……………ううんっ、なんでもない！」

「なんだコロナ？　言いたいことがあるなら」

「あはは、ちよっとね」

この楽しい輪が広がって、皆が一緒に笑えたなら最高の幸福。

まだ目覚めないリミレットも、預けられてきつと寂しいであろうミライも一緒に。

3人が並んで広間へ戻る。すると……見慣れた金髪の少女が慌てふためいて走り回っていた。

「ど、どうかしたの？ エレロワちゃん」

コロナが声を投げかけてやるとこちらに気付いたようで、エレロワはその金髪を揺らし振り返った。

「ネイラちゃんが……、ネイラちゃんがあ」

「お、落ち着けエレロワ」

「ネイラちゃん、胸が苦しいって……！！ うえええん」

その幼げな瞳から、幾つも雫がこぼれ落ちていた。無意識にその小柄な身体を抱き寄せてやり、泣き顔を埋めてあげた。

「……コロナ、エレナ。急いでアレを用意しろ。私が術式を作る！」  
「う、うん！」

彼女の　ネイラの魔力は強力だ。それゆえそれに伴ってリスクも大きい。使いすぎると相応の苦痛が伴ってしまうのだった。

「ネイラ、まさかそこまでアイリスに……いや、考えすぎか」

夢想丸の力を押さえ込むのに、彼女の魔力まで使っていたのはウエルトも知らない。

パーファイ家の娘だからこそう対応が無難だと思った。しかしそれは……ネイラ自身に被害が及ぶかもしれない事だった。

\*\*\*\*\*

\*\*\*\*\*

「これが雲海ですね」

目の前に広がっている、膨大な雲の塊。雲の下に影ができて地表は暗い。それほどに分厚く大きな雲だというのが一目で分かる。

「マイリー、お前に任せる」

「わたくしですの!？」

「その剣の力を最大限まで引き出して構わない。アイリスにお前の能力を見せてやってくれ」

得意気に微笑んでウェルトはマイリーを雲海の中へ送り込んだ。

マイリーとは模擬戦をやったことがあるが、その時彼女は手加減しっぱなしだった。彼女のソルジャーとしての能力はまだアイリスには見知らぬものでもある。

「……仕方無いですね。でも雲海を吹き飛ばす力はわたくしに無くてよ」

「お前の電熱で、雲をより蒸気に近づけて軽くする。そしてリーンが吹き飛ばしてくれれば完璧だ」

「あ、あたしもやるんですか」

「(アイリスに、カッコいい先輩っていうトコロを見せておかないのか?)」

アイリスには聞こえなかったが、何やらウェルトが耳打ちしてリンに何か呟いた。

それを聞いてリーンは顔色をガラリと変えて「よーし!」と片手を空に向けてあげた。

「じゃあ……行きますわよ!」

この2人は一体どんな力を秘めているんだろうか。もう馴染めるまでの付き合いだ、まだこの2人がどれほどの実力者なのかアイリスには未知数だ。

マイリーが背中中の鞘から剣を取り出す。……何やら橙色に輝いていて、刃の金属部分が高熱を帯びているようだった。

「アイリス、あれがマイリーの”カレントソード”だ」  
「カレントソード？」

「電熱装置が埋め込まれていてな、溶岩並みの熱を操れるんだ。そこにマイリーの魔力を注ぐ」

「溶岩並み……!?」

あらゆる物を溶かし尽くすことができる。剣自体がそんな力を持っているのに、更にマイリーの魔力も継ぎ足されて想像を絶する高熱を保つ事ができる。

暫くして熱風のようなものが辺りに立ち込めてきた。ウエルトの判断でマイリーの周辺から少し離れて、熱風で火傷しない程度の距離まで引き下がる。

「いつけえ〜！ マイリーっ！！」

マイリーが剣を雲海に向けて振り下ろした。

辺りの空気という空気が熱せられて、雲が景色と同化していく。透明な水蒸気になって薄っすらと雲海も姿を透明化していく。

「よしリーン、お前の出番だぞ」

「あ、はい！ アイリス、見ててね〜！」



熱風にも負けずにマイリーの近くまで飛んでいってしまった。

「行くぞおっ、吹き飛ばー!!」

ヒュオオオオオオオ……………!!

今度は熱風が一気に冷めてしまうような冷風が立ち込めてきて、リーンの掲げる三日月型の武器に集まる。

「あれは…………？」

「リーンの武器、エフグリンというブーメランだ。キミと同じ、風属性なんだリーンは」

「あ…………」

ネイラに言われた。自分は風の魔術を持っているって。

ウィードの風切も使えるから、きっと彼も同じ。風が切れるかのように辺りを包みこむ。

「やああ ツー!!」

リーンがその武器を投げ飛ばすと、その三日月型の形に沿って風が集い、大きな三日月風になって雲海に突っ込んでいく。

と、次の瞬間！ 爆破したみたいに雲海が大いなる風によって完全に掻き消されていく。

「凄い…………!!」

「ふふ、リーンもマイリーも、可愛い後輩の前だから張り切ってるな」

長い曲線を描いて、ブーメランは再びリーンの手に戻った。振り返って得意気に笑うリーンのもとへ飛び寄ってみた。

熱風と冷風、2人の力は絶大だった。これがリーンとマイリーの  
実力。

雲海は、跡形も無く消え去った。飛ばされ冷えた水蒸気は雨のよ  
うに地表へ降り注いでいった。

### 第39話 幼なじみコンビの実力（後書き）

マイリーとリーンの活躍回でした。熱風冷風コンビですね。

一方のギルド・リアンの方では何やら大変なコトが……。ネイラは一体どうなってしまったのか。

次話をお楽しみに。

## 第40話 明かせていない裏面

辺りには煙のように立ち込める雲々、見上げると一際目立つ塔のような建物が見える。ただでさえ標高の高い場所にあるので、その上層は雲で隠れてしまっている。あの塔は一体何の建物なのだろうか？

港町とかなら分かる。夜に船出し帰還するのに港側と船側が連絡し合うのに塔の光が用いられる。ではこの塔も同じ役目だろうか。

「まあ、どうでもいいよそんなコト」

「よくありませんわよ！ きつと何らかの理由があるはず……」

塔の存在を何かと意識するマイリー。

そんな二人に遅れて、やがてウェルトとアイリスがその地へ降り立つ。

「ん、どうかしたのか？」

「いえ……。それより、どうやら簡単には通してくれそうになさそうですわ」

マイリーの指差す方向には、何やら数人武器を構えて大扉を護っていた。やはり封鎖的な都市ということもあってガードはすつかり万全な様子。マイリーの言つとおり簡単には通してくれそうにない。

4人がその場へ歩み寄ると……、扉を護っていた男たちが長槍を構えて立つ。

「貴様らッ、何者だ！」

「本部より連絡が行き届いているはずですが、ギルド・リアンの

者です」

「む………?」

ウエルトが何か小さな紙切れを手渡し見上げる。すると男の表情は急に安堵に浸ったかのように緩み、持っていた槍を壁に掛けなおした。どうやら総本部から授かった通行書のようなものらしい。

「……あー、びっくりしたあ」

「わ、私も、です」

リーンとアイリスが胸を撫で下ろして安心していながら、4人は大扉の奥へと導かれる。

\*\*\*\*\*

\*\*\*\*\*

「うくっ……、かは」

顔を青ざめて、胸に両手を押さえつけたまま痛みにもがくネイラを宥めようとコロナたちが彼女の身を擦る。

「ネイラちゃん、封印術を解いていいよ。一旦休んで」

「……でも、そしたら、夢想丸………が」

「大丈夫だよ、今はアイちゃんもウエルトちゃんもいないから」

コロナのその言葉を聞く途端にネイラはフツと集中力を断つ。

……そう、ウエルトたちにはまだ知らせていない、ネイラの封印術。その反動が今になってネイラ自身に起きてしまっているのだ。

「今ねアイちゃんたち、英雄リウニオンの息子さんの所へ向かってるの」

「リウニオンの、息子……？」

「うん。……彼に、アツフーちゃんは会ったことあるもんね」

「ウエルトに話さなくていいのか？ 仮にもあいつがここの総長だ。いくら総本部と繋がってるからって秘密を作り続けるのは」

言い掛けたところでパーフィは視線を降ろす。そこには丁度ウエルトぐらいの背丈をしたエレロワが涙を浮かべながら見上げていた。

ウエルトは総本部と繋がるパイプ役でもある。ウエルトにこの事がバレてしまえば、リアンはもしかすると活動できなくなってしまうかもしれない。だから上層部の3人、それとネイラだけの秘密だった。

「夢想丸の封印術、それを主に担当していたのはネイラ。この事を知らせても、もうアイリスは夢想丸には手を出さない」

「……いや、あの子はきつと引き寄せられると思うよ」

エレナが口を挟み、いつに無く真剣な話にならぬエレロワはただネイラの心配をするだけだった。

「だって夢想丸とアイリスは、かなり浸透してたんだろ？」

「お爺様もそんな事を彼女に言ったらしいな……。細胞とリンクして、決して引き剥がせない」と

「じゃ、じゃあ、どうすればアイちゃんは……」

この3人の考えは既に一つであった。

アイリスから夢想丸を引き離すこと。それはもう敵に狙われないため、そしてネイラの封印術の限界。夢想丸は悪魔の剣。正義を仕

事とするこのギルドに、そんなおぞましい物をいつまでも置いてな  
んかいられない、とパーファイが出した結論でもあった。

「……村を襲ったあの男、アイリスを狙ってた」

「え……？」

「夢想丸、じゃない、です……。敵が、狙ってるのは」

「どついうことだ？」

力無く口を動かすネイラを優しく擦ってやり、その口実をしばし  
聞いてみることに。

「……だから私は、アイリスを護りたくて、……あの封印術に志願  
したんです」

「ね、ネイラちゃん……っ」

「でも、夢想丸を封印したら、アイリス自身を封じることになるん  
です。だって、あの剣とアイリスは繋がってるから……こほっ、こ  
ほっ！」

眉を顰め、顔を見合わせる3人。

アイリスをウィードに”修行”という形で出掛けさせ、その間に  
彼女たちは隠れてこの準備を行っていた。それを遂行していたのは  
上層部の3人。ウエルトには何も伝えなかった。そしてネイラは彼  
女らを追い、共に敵と戦い追い払った。

ネイラは自分の魔力を　アイリスのために使いたい、そう言っ  
たんだ。単に気に入ってたとかそんなことでもなく、別の感情を抱  
きつつ。

「ひとまずリーンとマイリーもここにいない。封印術を解くに  
しる時間は今しかない」

「うん、エレナちゃん、行こ！」

コロナとエレナ、上層部の中の魔術側主力。封印術のベースを作っているのはこの2人で、主な魔力を注いでいたのがネイラ。

そのため、空猫館での戦いの際には本気を出せなかった。身体に負担が掛かりすぎるからだ。幸いにもあの時、夢想丸はリアンに置いたままだったから良かった。アイリスがあれば持ち出して空猫館へ向かっていたら、恐らく封印術の事はすぐにバれてしまっていた。

その後をパーフィも追い、部屋にはエレロワとネイラが取り残された。

「ねえ、ネイラちゃん？」

「ん……」

いつも陽気で元気なエレロワも、ぐったりとするネイラの前ではそんな表情も出来ず。状況も知らされぬまま、ただ心配をさせられるだけ。

「夢想丸の事に関わってたってこと？」

「……うん、そうだよ」

「あれ、悪魔の剣なんでしょ！？　なんでそんな剣の事に……！」

あの夢想丸が恐ろしいものというのはエレロワも承知済みだった。

「アイリス、ここに来るまで……」

「……」

胸の痛みも治まってきて口もスムーズに動かせるようになってきた。



「友達つて、……いなかっただみたいなんだ。だから」  
「……………!」

\*\*\*\*\*

\*\*\*\*\*

「何かモンモンしてるなあ……、気のせい？」  
「た、確かにそんな感じしますね」

俗に言う、ただならぬ雰囲気というやつだ。街を歩く人々の表情は殆んどが険しく強張っている。

「うう………気持ち悪い」  
「だ、大丈夫ですか、リンさんっ」

すると突然、リンがアイリスの肩にもたれ込むように倒れる。

「どうしたんですのっ、リン!」

アイリスにもたれ込むリンを、ウエルトが預かり背負うように運ぶ。大剣を扱うウエルトの腕力なら、自分より背の高いリンでも軽々しく持ち上げられる。

「……あの”塔”が、リウニオンのいた場所だ。恐らくレガット様も、そこに」  
「レガット様？」

「英雄のご子息さ。私の上司から聞くと彼は医師をしてるそうだな」  
「ってことはあの塔、病院なんですか？」

街の外から見えていた、雲を突き抜ける高々しい塔。それが病院だと言われてもしっくりこない。

「うう〜……息苦しいよお」

「そうと分かればそこへ向かいますよ、総長」

「ああ」

リウニオンの息子、レガットのもとへ向かう一行。

アイリスは、何故かその名を一段と意識していた。不思議な、変な気持ち。

## 第40話 明かせていない裏面（後書き）

進展という進展はあまり無かった回でした。

が、ギルド・リアンで行われていた裏行動とは一体？ ネイラは夢想丸に何をしていたのか。

## 第41話 英雄の血を引く者

突然息苦しいと訴え始めたリーンを休ませるために、見晴らしの高い塔へ。街の外から視線を陣取るほどの高さを誇っていてまず目にしない者はいないであろう大きさの建物だ。恐らくこの街のシンボリック存在なんだろう。

「リーン、大丈夫ですか？」

「ううん……ふええ」

中も同様に大きな部屋となっていた。

そこは本当に病院のようで、数十という数の人々が集っては列を作っていた。その人たちは皆、顔色が悪そうだったりとにかく体調の優れない者ばかりのようだ。

「おや。どうかなされましたかな、お嬢さん方」

すると4人の様子を伺いに、杖を突いて歩く男性が近づいてきた。パツと見るとそんなに年老いてもなさそうでもむしろまだ若々しいような青年だった。

「あの、ここって？」

「通称『空の上の治癒院』。そちらのお嬢さん、顔色が優れないようですよ」

なんとも安易そうなネーミングだと思ったのは片隅に置いておき……、どうやらウェルトの覗んだとおりここは治癒関連の施設で間違いなさそうだ。

その青年はリーンの青ざめた顔を覗き込み何度か頷く。そして治

癒室へと続く人の列を見て、

「ふうむ……。では自分が診て差し上げましょう、どうぞコチラへ」  
「は、はい」

治療室とは逆の方向へ青年は足を進め始め、ひとまずはついて行ってみる事にした。

「なるほ特にと、高山病のようなものですな」

何やら銀色の心音機を背中に当てられては深呼吸を繰り返させられるリン。

雲海を越えて遙か上空にあるこの街 標高も並大抵の山以上にある。もっともここに住む住人たちは慣れているのだろうが。

「はああ……。心配掛けて、まったくもう」

「あはは、マイリー心配してくれたの？」

「べ、別にそんなの……。と、当然ですわ！ 仲間として」

不意を突かれたようでマイリーはあたふたと動揺を見せていたのが微笑ましくてアイリスは傍でクスクスと笑った。

その笑顔を見て、相変わらず杖を突くその青年が口を開く。

「キミ、もしかして……！」

「えっ？」

「いや、気のせいかな。すまんね」

まじまじと顔を見つめられて何がどうしたのかさっぱり分からな

いが、自分のことを誰かと見間違えたのだろう、とその場はやり過ぎしていた。

\*\*\*\*\*

\*\*\*\*\*

「ねえ、ネイラちゃん？」

気晴らしにと外へ久しぶりに出させてもらえて、2人は肩を並べて砂浜に腰を下ろしていた。ネイラの容態は落ち着いたようで、その表情に曇りは無い。ただ、逆に他の仲間たちの心に曇りが生まれてしまったかもしれないのだが。

「もう無茶しないでねっ、…………絶対！」

「…………うん」

「約束だよ？」

夢想丸の結界、そのの魔力を注ぐ協力をしていたネイラ。総長ですら知らされてなかった事実だ。そして夢想丸とリンクしているアイリスすらも。

話せばどんな答えが返ってくるか分からない。もしかすればアイリスに距離を置かれるかもしれない。彼女にとって、ネイラは大切な友達になった。それゆえ反動も小さいものではなさそう。

「…………私、ちょっと行きたい場所、あるんだ」

「え？ どこ？」

付いた砂を払って立ち上がり、右手にホウキを構えた。ふと視界に収めたい場所があったからだ。

「うん……アイリスの、村だよ。もう、ボロボロになっちゃった、けど」

「あ……」

「アイリスの友達として、挨拶しなきゃ、ね。村の人たちに」

いつにも増してハキハキ喋るネイラに少し驚きを隠せずにいたエレロワは、「あ、待って！」すぐにホウキで飛び上がるネイラの後を急ぎ気味で追いかけた。

あの場所でアイリスの世話をしていたウル婆さんが敵に殺められて夢想丸が活性化するキツカケとなってしまうた。引き金はアイリスの純粹な心から来る”怒り”その物。

観察眼の強いネイラは、その時の彼女の変化を覚えていた。

（青い眼になって、髪結びが千切れほどけるほどの風、発生したよね）

自己的に使用する魔術とはまた違う感覚だった。剣の先から漏れ出す魔力のエネルギーがアイリスの力を底から一気に引き出して敵を薙ぎ払っていった。あの鋼鉄装甲の施されていた機械兵たちを次々とバラバラにしていった。……ただの魔術では無い、もはや潜在能力のようなものかもしれない。そしてそれがアイリスの中には眠っている。

「……ひどいね、これ」

荒らされたまま放置されているのが何とも腑に落ちない。こういう始末はガリキュルアートの方で処理される筈なのだが、やはり山の

中という事もあって見送らせているのか。

「もし私が、アイリスだったら」

「ネイラちゃん……」

「きつと、今のアイリスみたいに、元気でなんていられない……」

彼女にとって故郷ともいえるこの場所、そして目の前で殺された里親のウル婆さん。こんな残酷な現実を目の当たりにされて平生を保てるアイリスが逆に不思議に思えてくる。

……いや、それとも。まだ現実を受け入れられていないだけ、なのかもしれない。

「ネイラちゃん、夢想丸がアイリスに何かしてるんじゃないかな？」

「えっ」

ふとエレロワが服の背中をキュツと掴んでそうやってきた。

「そもそも何でアイリスなの？ 夢想丸は何でアイリスを選んだの？」

「……………」

思えばついこの間まで普通の少女だった。

キツカケは単純で、彼女は見習いソルジャーとしてギルドへやってきて、その内にどんどん夢想丸と近い存在になっていった。この村で敵を追い払った時も、空猫館での風切も……普通の少女には到底不可能な事を成し遂げた。

だから特別なのもかもしれない、アイリスが。

「ちよっとだけお祈り、してこうね。エレロワ」



「うん」

\*\*\*\*\*

\*\*\*\*\*

「リアンの方々だったのですか。どうりで軍事的な衣装を着ておられる」

「はい、あなた様の事は総本部より聞いてきました　レガット様」

ウエルトがそつと膝をつき頭を下げる仕草を見ると、それを真似てほかの3人もぎこちなく同じ姿勢になってみる。頭を下げられた彼からしてはそんな礼儀など必要なさげだったのでそつと「頭を上げてくれ」と言わんばかりの仕草をして返してくれた。

リーンを診てくれたこの人こそ、リウニオンの息子であるレガット。それは彼の胸に付けている名札ですぐに分かった。

「……ではやはりキミは」

「こちらに見覚えが？」

レガットはまた、アイリスの方を見つめる。二つのお下げを揺らしてきよとんと目を丸くし、戸惑う。

「キミは……、アイリスかい？」

「えっ」

まだ彼に自己紹介なども何もしていなかった。

だがしかし、レガットはアイリスの姿を見てパツと名前を言い当てた。それに驚く一同に、一旦席に戻るレガット。

「そうか、無事だったんだな。良かった……」

着ていた白衣を半ば雑に脱ぎ捨てて、若干シワのあるワイシャツを手直して調べて再びアイリスの前に。

「え、あ、あの……？」

「まさかキミが訪れてくれるなんて。……会いたかったよ、アイリス」

これ以上無いというくらいに、アイリスの頭中には疑問符がポンポンと徘徊する。

「レガット様、アイリスを知ってるのですか？」

「知ってるも何も」

言いかけて一旦言葉を切って息継ぎをし、また顔を暖かくしてアイリスに向いた。

「アイリスは彼の……、英雄リウニオンの娘だよ」

その言葉を聞いて胸の中で、何かが物音を立てた。

#### 第41話 英雄の血を引く者（後書き）

突然告げられた謎の発言 レガットの言葉は本当なのか。

アイリスはリウニオンの娘、そして夢想丸の使い手。何か深い関わりでもあるのだろうか。次話、アイリスの生い立ちが明らかに……！？

## 第42話 陰陽少女

英雄リウニオンが世に遺した遺物といえ、あのガリユルアートが有名だ。世界を魔物から救った彼が置いた巨大な砦の一つ。今でもリウニオン国で唯一無二の大砦として機関も施されている。ギルド・リアンもその機関に関わりを持っていて、上層部の仲間であるリミレットが保護されている。

そしてその英雄の息子であるのがこのレガット。しかし彼は難解なことを口にした。

「……私が、リウニオンの娘……？」

唐突な事でウェルトらも耳を疑う。しかしレガットが決してウソを言っているようなそんな面持ちが無かったので、疑問と不疑が交差する。

「つまりこの私の妹。それがキミだよ、アイリス」

「え、えっ……？」

いきなりそんな事を言われて、誰がすぐに信じられるだろうか。

後ろを振り返るとリンたちも目から鱗状態に陥っていて変な表情のままアイリスの事を見つめていた。

英雄の娘、それが自分？ アイリスの胸騒ぎの理由は、もしかするとこのせいなのだろうか。

「ま、待ってくださいレガット様」

その話が本当ならばこのレガットはアイリスの兄。しかしアイリスは村育ちで両親は鬼に殺された。思えばそれがキツカケでソル

ジャーになると決意したのだから。

「アイリスの両親は既に……、それにこの子は」

「証拠ならある。キミは夢想丸に選ばれたんだろう？」

ウエルトが代わって事情の説明を持ちかけようとするが、「夢想丸」という言葉を口に出されて更に驚く。アイリスが夢想丸の使い手だとは言っていないし、そもそも今持っている剣はウィードの風切だ。

不意にレガットが、そつとアイリスの頭に手を置く。本当に兄が今まで会えなかった妹に「おかえり」と言っていてやるかのように。

「私たちの父はリウニオンだよ、アイリス」

「……私の親は、鬼に」

だんだん声色が緩んできて言葉が紡がれていなくなる。

「鬼」が、どうしてキミの両親を狙ったか……分からないかい？」

「えっ」

口を挟もうにも挟めずに驚きの中にいた後ろの三人はただ呆然とアイリスたちの会話を聞いていた。

「すまない、二人で話させてくれるかい」

「は、はい、分かりました。……アイリス、話が終わったら薬庫へ来てくれ」

そう言い残して部屋を後にする三人。何だか取り残された気分がして表情が浮かない。

+++  
+++  
+++

「キミは小さい頃、ここに住んでいた。まああの時は生まれて間もない時だったから覚えてないだろうけどね」

「……私、お父さんとお母さんとあの村に……」

どうして鬼が現れるような危険な村に住むようになったかまでは分からないけれど、アイリスの記憶としてはあの村で過ごした事しか頭に残っていないのだった。だが、レガットは首を横に振る。

「父リウニオンは、その鬼から村を守りたかった。あの村には借りがあったみたいだから」

借り……。世界を救うゆえに何かしらの援助でも得たのか。

「鬼は……村を狙ったわけじゃない。キミを含むリウニオンの一族を消すために襲ったんだ」

「どうしてそんなことを……？」

両親は目の前で 鬼の鋭利なツメに引き裂かれて殺された。

脳裏に何度も巡るその時の映像が、アイリスの心境をより不安定にしている。

「恐らく父の滅ぼした魔族、鬼はその生き残りなんだろう」

英雄は世界を絶望の淵へ追いやった魔物の勢を壊滅させた、とウエルトから聞いた。

なら、あの時も……。アイリスが初めて夢想丸を手にしたあの日

も、アイリス自身を狙って村を襲いにやってきたのだろうか。  
しかしその不思議な刀で鬼は打ち倒し、火送りの儀式まで催して  
その身を焼き払った。だから鬼の事はもう忘れようと思っていたと  
ころだった。

仲間が待っているだろうと言われて、結局そこまで話を聞いてか  
ら部屋を後にした。

「……私が、英雄の」

見ず知らずであった人物の話をいきなり信じ受け止めることは流  
石に難しい。だからまだ半信半疑なのだ。しかし鬼の事といい夢想  
丸の事といい、何も話していないのに言い当てられて、それはウソ  
じゃないのではないかと思ってしまう。辻褄が合いすぎているのだ。  
とにかく今はウエルトたちのもとへ向かうとしよう。確か、薬庫  
へ来てと言っていた。

+++

あの子が英雄の娘、そんな事を伝えられて驚きを隠せないが今は  
真の目的の方を優先するしかない。

友であるリミレットの回復、そのために薬を調達に来たのだった。

「流石に高いですね……」

薬剤師であろう人にリミレットの詳細を話し、彼がオムブルとい  
う魔物に精神の自由を奪われているという事を伝えるとそれに相応  
した薬を紹介された。

「大丈夫、総本部より支援金を得た。これで何とか」

魔物の邪気を打ち破る薬　これもリウニオンの息子であるレガットの作った代物なんだろう。

「あつ、おーいアイリス〜っ!」

リーンが遠くにアイリスを見つけて「こっちこっち〜」と呼び招く。

「話は終わったみたいだな」

「……はい」

彼女はどこか遠くを見つめるような浮かない顔をしていた。それに加えて、肩が少しだけ震えていてどうも調子が良さそうには見えない。やっぱりレガットの話は真実で、その確信を得てしまったのか。

それはともかく、支援金を払って薬を手に入れた。これでひとまず任務は完了だ。

「……やっぱり、本当なんですの?」

ふるふると縮こまるアイリスが心配になってマイリーがそっと肩に手を置く。

「私、やっぱり……」

半信半疑だが否定できないこの感情。アイリスは複雑な心境の中でその事実の事を考えていた。夢想丸の事もあるし、それに鬼のこ



とも思い出させられて平生が保てないでいる。

「ひとまずリアンへ帰ろう。薬は手に入ったからな」

「ちょっと待ってくれ」

すると遅れてレガットの声が4人を引き止める。

「アイリス、キミに渡したいものがあったね」

「……行っておいで、アイリス」

ウェルトがそっと背中を押してやり、今は見守るだけ見守ることにした。

そつと手渡されたのは、赤い装飾のペンダント。

胴体部分が開くようになっていて、ただ丸だけのシンプルなデザイン。

「……！！」

「そこに写っているのは、キミの父と母だね？」

そう、ペンダントの中に入っていた写真に写っていたのは……。

紛れも無く、記憶に鮮明に残る両親の優しい微笑みだった。

何もかもが楽しくて幸せだったあの日あの時の記憶が、少しずつ頭を過ぎていく。

「お父さん、お母さん……っ」

安心してしまったのかどうなったのか分からないけれど、なぜか涙が止まらなくて、久しぶりに見た両親の顔に胸の置くがキュッと締め付けられるんだ。

「アイリスをよろしくお願いします、リアンの方々」

「はい、お任せ下さい……。英雄の血を引く子ならば尚更です」

「アイリスっ、リアンに帰ろっ！」

リミレットのための薬を入手して英雄リウニオンの息子レガットに会い、本来の目的は見事達成できた。これを持ち帰ってやればリミレットも恐らく回復するだろう。

ただ、もう一つ新たな問題が生まれた。

(アイリスが……。英雄の娘、か)

ただの女の子ではないと思っていた。我流で習った剣技は強者並みだし、何より夢想丸を使う資格を持つ者だ。

光の英雄、闇の夢想丸。アイリスは今、陰陽の境目にいるのかも  
しれない。

\*\*\*\*\*

ぐあああ……。ここはどこだ……。？

「ひいつ!? ね、ネイラちゃんっ！」

ボロボロに朽ち果ててしまった村の中を歩いているときいきなり、  
重圧の掛かった声が背後で轟く。

「……………エレロワ、下がってて」

「あ、あたしもやるよ！ ネイラちゃん病み上がりなんだから！」  
その赤々とした身体をフラつかせているその”魔物”。狂っ  
ているかのように笑い声を上げているその醜い容姿。

間違いない、アイリスの言っていた 鬼だ。

### 第43話 私を呼ぶ声のもとへ

気味悪く笑うその醜い肉体を持つ化け物は足元に転がっていた太い木の破片を持ち上げて、2人の方へ威嚇するように向けた。しかし動じないその出で立ちを見せるネイラに、鬼は奇声を上げて更に威圧してくる。

「……………」

決して威圧的な目ではないが、ネイラは鬼のことをじっと見つめて様子を見ている。耳に囁く風の音がよりその集中力を向上させてくれて、鬼に気付かれないように魔術の詠唱を行う手段に出た。

その横で短剣を構えるエレロワに合図を送って、陽動を行ってもらう。合図と共にエレロワはその小さな身を急がせて鬼に突っ込んでいく。

「ぐがあああ!!」

ブンツ…………と空気が押し流される音と共に、その鈍器と化した木片を振り下ろすが、エレロワの身のこなしにそれが追いつかなくて的外れだ。

「やあつ!!」

「ぐぐぐ、があつ…………!?!」

目では決して追えないスピードで次々と鬼の身体を着実に傷つけていく エレロワの剣術、”月舞”だ。決定力は小さく弱いものの、鬼の周りを何度も駆け回り、目で捉えられない剣さばきで次々とその身に傷を入れていく。

小さなその身体と相応して小さな剣だからこそ、そのスピードも格段に上がる。

(……うん、エレロワも、調子いいみたい)

音速を超えられるエレナ程ではないが、その不規則な動きに敵は必ず翻弄される。

それに一撃必殺攻撃で敵を仕留めていくエレナとの決定的な違いは、その軽々しい身のこなし。直線的でなく電流のように読めない動きをするのがエレロワの剣術だ。

そんなエレロワの攻撃に鬼が動きを止めている隙に、ネイラの詠唱も終わりその魔力を自身の刀に注ぎ込んでいく。

ネイラの使う刀 蛇骨鋭刀。毒が染み込ませてあり真っ直ぐ伸びる刃の周りを囲って巻きつく毒蛇の鱗が際立つ。

「……エレロワ、そろそろ、いいよ」

「うぐぐっ、げへ、げは」

ネイラの小さな声の合図でエレロワが元の位置まで戻って、ネイラがゆっくりと鬼のほうへ歩み寄る。手に握り締めるその刀は、深緑に染まった刃が毒を垂らして光っている。

身体中が痛むのだろう、鬼は傷だらけになったその身を不自由そうに後退りさせてネイラから距離を置こうとする。が、ネイラの歩みは止まらずすぐに追いつく。

「コ、コムスメエ!!」

言葉らしい言葉をその口から零すが、動じないネイラは容赦なくその刀で鬼を前方向から斬り付けた。

「ぐ、ぐがあああ……!!」  
「もう生き返ってきちゃ、ダメ、だから」

刀に注ぎ込まれた魔力は、斬りつけた相手に毒の進行を早めるための魔術。

そして刀からは斬りつけた傷から多量の毒を染み込ませ、徐々にいたぶ甚振るように相手の死を待つ。ネイラの戦法はその毒と多彩な魔術たち。ギルド・リアンの中で最も魔術に長けた存在だ。

+++  
+++  
+++

「なんで鬼はまた現れたのかなあ？」

確かアイリスが夢想丸で葬ったハズの鬼。しかし、現に2人の前に現れて襲い掛かってきた。コンビネーションの優れたパートナーが横にいたから楽に狩れたものの、もし一人だったら大変な相手だったかもしれない。

だけれど、アイリスは一人で鬼を倒した……。やはり夢想丸の力なのかそれとも。

「……あいつ、悪夢を見たまま、襲い掛かってきた」  
「えっ？」

「だから狂った感じで、しかも、そんなに攻撃してこなかった」

相手の状態も感知可能なネイラには、刀で斬りつけた時に鬼の状態が何となく把握できた。その頭の中は真っ暗闇でまるで何も外の事が見えていなかったような。

「それってさ、夢想丸のせい？」

「……多分」

そして何らかの理由である場所に復活し、丁度その時にいた2人に襲い掛かってきた。しかし悪夢に縛られた状態だったため成す術がなくまた滅ぼされた。

夢想丸は 斬りつけたものを悪夢に陥れるという魔剣。アイリスはそれで打ち倒したから鬼はあんな状態だったのだろう。でも、どうして復活したかは分からない。

「封印術はもうやってないんだよね？」

「……大丈夫、だよ。コロナさんたちに、任せてる、から」

夢想丸とアイリスを離して、アイリスにこれ以上痛みが及ばないようにしていたのだが 恐らくアイリスはそれを知ったら自分のことを嫌いになってしまいかもしれない。なぜならアイリスは、夢想丸のおかげで自信を持つ事が出来てきている。

だから引き離してはいけないのかもしれない。夢想丸とアイリスは、互いを必要として惹かれあっている。

(……私も、アイリスに惹かれて欲しい。なんて……ね)

\*\*\*\*\*

\*\*\*\*\*

へヴニールから帰還したアイリスたちは、疲れ果てた表情でギルドの入り口をくぐってホッと一息。

「おっ！ お帰り〜」

「……室内でタバコは吸うなってコロナに言われてなかったか？」  
ソファの上にだらしなく座って煙を吹くエレナに「ただいま」よりも先にそう注意する。

「あー、ゴメンゴメン」言えはすぐに止めるのだが、ふと見るとまたタバコに火を付けようとしているのは読まれた行動。  
「ったく……それより、リミレットの薬が手に入ったぞ」  
「おおっ！ でかしたウエルト」と、リーンたちも！

とにかく上空から降りてくると何かと疲れが出てくる。

「疲れたし3人でお風呂行こうよお」  
「そうですね……ふう」

+ + + + + + + + +

湯に浸かっても夕焼けを眺めていても、気分があまり晴れない。  
それはあのへヴニールで聞いた真実のせいか、それともただ単に気分が悪いだけなのか。

「アイリスう、元気出して！ あたしが背中洗ってあげるからさ！」

いや、やっぱりレガットに告げられたあの事が自分をこんな気分  
にしているんだろう。英雄なんて自分から遠い存在で、雲に手が届  
くような話だった。なのに自分はその英雄の娘だなんて喜ぶにも喜  
べない。

あの村はもう それに自分には夢想丸の持ち手という宿命もある。  
自分への重圧があり過ぎる。



「……今はそつとしておいてあげた方がいいですわ」

元気付けようとリーンは励ましているのだろうけれど、アイリスの表情は一行に明るくはならなかった。それを見てマイリーはそつとしておくのがいいと考えたのだが。

「だって英雄の娘だよ？ 凄いじゃん！ 世界を救ったりウニオンの」

「もう、それ以上言わないで下さい！！」

言いかけたところで、アイリスが怒鳴って言葉を遮った。

「あ……」

バスタオルを身体に巻き付けて、アイリスは浴場を出て行ってしまった。

怒鳴られ驚いて、リーンも表情を濁らせるのをマイリーは溜め息を吐きながら見つめていた。

「英雄の娘。この事は、あんまり明かすべきではないですわ」

「う、うん。後でアイリスに謝らなきゃね……」

不安定になつて心の整理が出来ずにいるアイリスの気持ち、怒鳴られてから分かった気がする。

だってアイリスは 涙ぐんだような顔をしていたから。

+ + + + +

部屋のベッドに身体を倒すと、枕がその頭を優しく包み込むように受け止めてくれる。

(私はどうして……)

どうしてこんな重大なことばかり背負わされるのだろう。夢想丸の事、英雄の娘だという事。それらのどちらも重々しくて不安にさせる代物。

空猫館で風切は何か使いこなせるようになったのかもしれないけれど、あくまで自己認識。自分は、本当はまだまだソルジャーとしての風上にも置けないのかもしれない。だからこそ今までの自信がズタズタに壊されていく感じがして不安になる。

アイリスよ

我のもとへ来い

「……………っ!」

いきなり胸の中に響き渡る声に驚いて、ベッドの上で急に起き上がった。今の声は恐らく……いや、間違いなくあの声。

(夢想丸が、呼んでる……)

アイリスは取り憑かれたように脚を急がせて地下の封印の間へ向かっていった。

### 第43話 私を呼ぶ声のもとへ（後書き）

再び現れた鬼、告げられた事に不安定になるアイリス。  
そして彼女を呼ぶ夢想丸。物語がいよいよ動いてきます。

## 第44話 輝け、夢想丸

呼んでいる……。手招きするように、あの刀が私を呼んでいる

無意識の中、ふらふらと壁伝いに足を運んでその声の方へ進んでいく。目は遠くを見つめていて虚ろ虚ろとしたまま、アイリスは地下の封印室へ向かっていたのだった。

「う、く……」

胸の中心部に針が刺さったような痛みが伝わった。

ふと思いついた、『自分の細胞が夢想丸とリンクしている』というゲンド様の言葉。最近になってだんだんその意味が分かってきたような気がする。時々身体に細かな痛みが生じることがあった。

「あつ、アイちゃん」

その場所へ向かうと、コロナとパーフィが並んで”夢想丸”を眺め下ろしていた。その封印術式はどうやら解かれているようだった。夢想丸の力を解放的に感じ取ることが出来るから。

「アイリス」

遅れてその可憐なまでの長い髪が揺れてパーフィは振り返った。厳かな表情で、でもその中には包み込んでくれるような優しさを感じ取ることの出来そうな そんな表情をして彼女たちはアイリスを手招きした。

「夢想丸を求めてここに来たんだな？」

「……………」

意識が何となく朦朧としていた。その投げかけてられた問いに、アイリスはただ頷くだけ。

「安心していい。今のキミは少し前のキミよりも十分に強くなった。だからこそ……………」

気が遠い。そのパフィーの声も僅かながら擦れて聞こえてきてしまっただけ。

我を使いこなせるのか

英雄の血を引きし子よ

ずっと頭の中へと響き渡ってくるその声は、鮮明にはつきりと聞こえていた。自分が夢想丸を手にすることを、刀自身が望んでいるのだ。

「今こそ、再び夢想丸の解放だ。アイリス……………」

唇を少しだけ噛み締めてから、鞘に納められて置かれてある夢想丸に軽く触れてみる。そして指を折り曲げて握り締めてみる。

よかろう

闇の力をお前に与えよう

バチチツ！！と青い電流が数回暴れ出した。しかしすぐにアイリスが刀を持ち上げると、その電流は抵抗を見せなくなった。

「あ、アイちゃんっ、大丈夫？」

しばらくそのまま目をつむって瞑想していた。この刀を再び手にすることで、これからどんな事が巻き起こってくるのかなどと色んな考えを全身に巡らせながら立ち尽くす。

+ + + + +

闇の力　その言葉が胸に残る。どうも共感できない言葉だからだ。

潮風に髪をゆっくり撫でられながら、砂浜の上にある岩の上に腰掛けていた。その日は透き通るまでの綺麗な空で、そのおかげか海もまた一層綺麗に見える。

この思いは、自分を育ててくれた父と母へも送りたい。そんな意味も込めて、父母への手紙がさらに一枚机の中に増えたのだった。どんな内容を書いたのかは、今の自分の不安や募ってくる焦燥。

そして、自分を守っていてくれた父　リウニオンへ。

「お父さん……」

父と母が鬼に殺されてしまったのは、アイリスが6歳になった頃だった。だから鮮明と顔を覚えているわけではないのだが、ヘヴニールで貰ったペンダントに父と母の写真が入っている。だからもう、忘れないしずっと傍に居てくれる気がする。

「……パーフィさん？」

するとアイリスの腰掛ける場所へ、パーフィが砂浜を歩いてくる。

「調子はどうか？」

「は、はい、調子、っていうか……その」

何と言って表現したらいいのか分からない。とにかく夢想丸は以前と同じように自分の手中で治まってくれているとだけ伝えたかった。

「キミと模擬戦をしたくてな」

「え……！」

それは突然の申し出だった。

\*\*\*\*\*

パーフィのその長刀は、しなやかに真っ直ぐ光の如く刃を伸ばしている。模擬戦と言われながらも、その真剣さは本番並みかそれ以上。

「……本気で来るんだ。私の方は手加減しないぞ」

気を立てられるというか急かされるといっつか、夢想丸の刃が日の光に照るのを見てやる気になってくるといっ感じ。

もちろんこの刀でパーフィを傷つけてしまえば、彼女を悪夢に陥れることになってしまう。それだけは避けなければならぬのだが、彼女も恐らく本気で真剣。思えばコロナやエレナとは模擬戦をしたことがあったが、パーフィとはまだ剣を交えたことが無かった。

「ッ！」

だから不安ではなく……、楽しみでもあった。

「はあっ！」

横ぶりに振られた長い刃を弾き返し、懐へ飛び込み動きを怯ませる。しかしそこに彼女は隙を作らず、すぐに身を下げて脚払いを仕掛けてくる。

「きゃっ……！」

「足元がまだ甘いぞ！」

ほかの人とは違い、相手の動きを利用して受け流す形で避けるパーフィのしなやかな動きは見惚れるほど綺麗だった。そんなことを思っている内にパーフィの刀がこちらへ向き刃が何度も振り落ちてくる。

「……くうっ」

ガガッ！！

金属同士が競り合う形でぶつかり合い、鈍い音と共に動きが止められる。

しかしパーフィはその長剣を片腕で、アイリスは夢想丸を両腕で構えていたがその状態でもほぼ互角な力の差。パーフィにはまだ片腕の余裕があり、表情に揺らぎは一切無い。

“一流の剣士”と称するのが最も似合う、凜とした出で立ちが凄くかつこ良くて憧れを持つほどだ。

「やあっ……！」

斜め斬りで攻め立てるも、それは受け止められるのではなく受け流されてしまい、アイリスの身がその度にバランスを不安定にさせ



る。

「……ひゃ、あ」

そして前向きに倒れそうになるところで、首元に刀をそつと置かれる。こうなつてはもはや抵抗もままならなく、そのまま力無く膝を折り曲げるだけ。

「まだ本調子では無さそうだな。……でも」

たとえ本調子でも、この人には到底敵わないように思えた。たった数分の競り合いで、一気に体力を削られてしまう。息が乱れるアイリスに対して、パーフィは至つて真つ直ぐスラツとしていた。

「さすが、夢想丸の使い手といったところだな」

「……はあ、はあっ」

別に身体に傷を付けられたわけではない。華麗なまでの受け流しは、不意のバランス崩しを引き起こさせてそれが体力を着実に減らしていく。まるで吸い取られるように。

美しい花に捧げる日光のよう。

その模擬戦はあつという間に終わってしまったが、その騒ぎのせいでギルドの皆が砂浜の方に集まってきてしまった。

「ありや、パーフィ？ アイリスに何したのさー」

「な、何だお前たち」

相変わらずタバコを吹かして、膝を付くアイリスのもとへ駆け寄った。

「わ！ 夢想丸じゃんか、解放したの？」

「そろそろ夢想丸自身も、アイリスも限界だろうと思ってな」

エレナに遅れて、リーンとマイリーも駆けつけてきた。何か事件でもあってその野次馬のように、物珍しそうに。

「もう……、アイリスとパーフィさんが戦ってるから何事かと思いましたわ」

「あはは、でもアイリスさ、あのパーフィさん相手に結構粘ってたじゃん！」

やっぱりギルドにおいても、1、2を争うほどに強いのだろうか。

「……あの、リーンさん」

「ん？」

でも、剣を交えたことで何かが吹っ切れた。刃だけに、不安を繋げていた糸を断ち切ってくれたよう。今のアイリスの心中は、この空のように明るく透き通った。何故だ分らないけれど。

「私……、急に怒鳴ったりして ゴメンなさい」

「な、なあんだ。別に気にしてないよ？ あははっ」

そう言って優しく手を差し出してきてくれた。

ちょっとだけ照れくさかったけれど、リーンのその手にそっと掴まって立ち上がった。

#### 第44話 輝け、夢想丸（後書き）

ひとまずここで CHAP - 5 ”英雄の軌跡”は幕引きです。

アイリスの生い立ちにはまだ深い意味がありそうです。そして解放した夢想丸はアイリスに何をもたらすのでしょうか。物語の核心を突いたお話でした。

さて、では次話より CHAP - 6 ”月夜に歌う王女様”です。

## 第45話 行方不明の二人（前書き）

ここから新章に移ります。

この章の主要人物は、ネイラとエレロワです。そしてもう一人とある国の、行方不明となった王女様のお話です。

それではお楽しみ下さい。いつもご愛読、ありがとうございます。

## 第45話 行方不明の二人

この国の王女が失踪して、早くも数ヶ月が経っていた。あの日からこの国は、どんよりと沈んだ雰囲気に覆われてしまっている。誰しもが明るい顔をしていないのだった。

そして、いつも王女と一緒にいた城下町の娘も同じく姿を消してしまっていた。その娘の両親もたいそう心配して、何度も王宮へと足を運んできては泣きじゃくって娘の無事を望んでいた。とにかく二人の少女の失踪は、この国の活気を著しく損なっていた。

「まったく、一体どこへ行ったのだ」

もしかしたら、もうこの国には居ないのかもしれない。然程大きな国ではないので、もしこの国彼女たちが居るのなら恐らくすぐに見つけ出せる。しかし、もう数ヶ月もその姿を見られていない。

「やっぱり拉致されたんじゃない……ううう」

失踪した王女の母、王妃がそんな事を口にしながら泣いているのを、国王が慰めようと声を掛ける。こんな風景はもはや日常茶飯事だ。

「できればそんな事は無いように願っただけだ。あの子はきっと無事だな」

「ええ……、そうですね」

本当に王女はどこへ消えてしまったのだろうか。これでは近衛兵である自分の肩身も狭まってしまう。

\*\*\*\*\*

\*\*\*\*\*

「うう〜っ!」

カン、カンと何度もそのフォークが皿に当たって音を立てる。

「……取ってあげるよ」

「いいっ！ あたしが取るの〜！」

徐々に夜勤が早く済み、一同が揃って夕食を取っていた。

その丸くて赤いトマトと悪戦苦闘するエレロワを、隣でまじまじと見つめては微笑してしまうネイラであった。

「あはは……エレロワちゃん、スプーン持ってこようか？」

「いいですコロナさんっ！ フォークで取りますっ！」

こういう時は少々頑固になりがち。なにせ食べられるしか能の無い”トマトごとき”にからかわれているような気分だからだ。絶対に負けるもんかと闘争心のようなものが掻きたてられる。

と、その時。

カンカン鳴っていたフォークがターゲットを射止めたようで、今度は”プシュツ”という噴出したような音がした。

「ううあ〜っ」

どうやらトマトの中心を刺して中身の赤掛かった果汁が、エレロワの顔を含めた箇所飛び出ってしまったようで、顔中に赤い果汁が吹きかけられてしまっていたようだった。

「……もう。ほら、こっち、向いて？」

「ううーありがとお、ネイラちゃん」

隣のネイラがそっと布巾で顔を拭いてやった。甘えているようにエレロワも顔を突き出してその布巾に顔を埋めている。

一方、こちらは上層部側の席。

「んでさ〜、リミレットの件はどうなったわけ？」

「レガット様から頂いた治癒薬をガリユルアートへ送ったんだ。じきに連絡が来るだろう」

薬師でもあった英雄の息子が選別してくれた薬だ。恐らくはこれでリミレットも回復してくれることだろう。彼が回復してくれれば、このギルドの抱える問題もほぼ全て解決したに等しい。

「そっか、良かったあ……………」

「何だコロナ。顔、赤いぞ？」

「えっ！　そ、そんなことないようー！」

確かに少しだけ赤く染まったその頬を隠すように、からかうウエルトに軽く小突いて見せながら照れ隠ししていた。ウエルトに乗じてエレナも、同じくコロナをからかつては笑っていた。

「……………相変わらず騒がしいな」

と、一人黙々と食事を済ませて、食器を台所に流し終えたパーフィがアイリスの横へと腰掛けてそう声を掛けてきた。

「み、みんな楽しそうじゃないですか」

「キミは大人だな……………アイリス」

「えっ、あ、あはは……………」

あくまでクールで周りを見守っていられるような、大袈裟に言っ  
てしまえば女神的存在なパーフィに声を掛けてもらってアイリスと  
しても嬉しかったりした。先日の模擬戦から、何だかアイリスのパー  
フィを見る目が少し変化を生じていた。

「食事が終わったら、私の部屋へ来てくれ。特別に稽古を取ってあげようかな」

「本当ですかっ！　い、急いで食べます！」

その姿は、剣を極める師匠と弟子のようだった。

「あ……………、筋肉痛のアホお」

先日の任務は久々で、それが原因なのか身体を痛めていたリーン。張り切りすぎた部分もあったのだろうけど、隣に座って悠々と食事をしているマイリーをじいーっと思つめてやった。

「どうかしたんですの？　これ、頂きますわ」

「ああっ！　それあたしのミカンだぞーっ」

「ふふん、ポーツとしてるのが悪いんですのよ」

不意を突かれて、最後に残してあったミカンをマイリーに取られ

てしまい、リーンも黙ってはおられずに反撃に出る。

音を立てずにフォークを右手に構えて、真剣な面持ちをしながらマイリーの皿を見つめる。

「えいつ！」

「きやあつ!? ちょよ、ちょっとリーン! 何するんですの!?!」

少し照準がズレたのか そのフォークはマイリーのカップにぶつかってしまい、その中に淹れてあった紅茶が熱を帯びたままマイリーの膝元に降り注ぐ。

「あたしのミカン、取った罰だあー!」

「お、お生憎様ですわ。わたくし、これぐらいの熱なら、たっ、耐えられますわ」

普段から電熱という武器を所有している彼女に、紅茶程度の熱では動じないかと考慮をさらに掻き立たせるリーン。

「でも、びつしゃびしゃだよ」

「ああっ!? り、リーン! これわたくしのお気に入りの服なんですのよ〜!」

「あははは、悔しかったらあたしのこと捕まえてみる〜!」

膝元から紅茶の香りを漂わせながらマイリーは逃げ出すリーンを全力で追いかけた。

「きよ、今日という今日は許しませんわーッ!」

犠牲となった紅茶とそのカップ、そしてお気に入りの服。積み重なった悪戯は、マイリーに冷静を維持させるのが不可能だった……。

ギルド・リアンの構成員9人が一緒に団欒とできた良い時間だった。日常が久々に戻ってくれたようで、それぞれが嬉しくて頬を緩ませていた。

\*\*\*\*\*

\*\*\*\*\*



「……ねえ、エレロワ」

トレードマークでもある、その曲がりくねった長いクセっ毛を枕に寝かせて、すっかり寝息を立てているエレロワにそっと声を掛けてみた。けれど、当然反応は無く。

「……ねえ、エレロワ」

ギルドで一番幼くて、まだまだ子供な部分が多い彼女だけれど、それでも寝顔だけはやっぱり愛おしいほどに可愛らしい。寝付くと相当なことが無い限りは目を覚まさないほど睡魔に弱い部分もあつたりするのだが。

「……ねえ、マリナ」

「んんう……？」

その呼び名に反応したのか、ただ単に寝言を言っていたのかは分からない。その後また寝息を立てて眠ってしまったので恐らくは反応したのではないんだろう。

「ネイラーっ、ちょっといい？」

すると突然リーンが部屋に飛び込んできて、「いい」か”ダメ”なのか答えさせずにネイラのベッドに腰を下ろしてきた。

「……なに。うるさいよ」

「いや、ちょっと聞きたいことあってさあ」

ネイラもこれから眠ろうとしていたところで、睡眠の邪魔をされたようで変に気が立つ。

「ネイラの下の名前って、”ティラミス”で合ってるよね？」

「……それが、どうしたの」

“ネイラ・ティラミス”。確かにその名前で合っているのだが。なんかね、ネイラに会いたい人がいるって。総長さんからの伝言ね

「……？」

「総本部からの連絡なんだってさあ。『ティラミスさんに会わせて

欲しい』って言う人がいるみたいだよ」

リウニオン総本部の人たちが用事だなんて前代未聞な事だ。しかしリーンの口調も決してふざけ半分でもなさそうなので、冗談ではなさそうだけれど。

「……エレロワのこと、見てて」

「了解了解。あ、何かね」

部屋を出て、総本部との連絡を取るために連絡機のある部屋へ向かおうとしたところを引き止められた。

「ちよつと変な感じだったよ。どっかの、厳しそうな兵士っぽい人って感じ」

「……！」

そのリーンの言葉を聞いて、ネイラの歩みは駆け足に変わった。急いで連絡機の場所へ向かい一刻も早く連絡を通じたかった。もしかしたらその自分に会いたがっている人っていうのは と見当がつく人物がたった一人、ネイラの中にはあった。

『ネイラ君、連絡待っていたよ』

リウニオン総本部の大佐とご対面。別に初対面というわけでもなく、アイリスがここへ入る少し前まで世話にもなっていたので顔見知りではある。

「私に、会いたい人って」

『ひとまずこちらへ来てくれないか？ 色々と見せて話したいことがあるそうなので』

「……一人で、ですか」

何となく一人で向かうのは気が引ける。総本部なんて普通は、総長のウエルトぐらいしか出入りしないような組織で、構成員の自分たちにとってはほとんど縁が遠いものだったから。

総本部の連中は、全員が大きな功績を残した特級の”ソルジャー”。

『すまん、一人の方が良いそうだ』

「……わかりました」

とりあえず自分に会いたい人というのは恐らく……。

あの子には、まだ黙っておいた方がいいかもしれない。

## 第46話 目覚める親友と予感

外は強風で雲行きも決して良くなかったので、フード付きのコートを羽織って総本部へ向かった。そのフードを顔がほんの少し見える程度まで深く被って、腰にはネイラの扱う毒剣 蛇骨鋭刀が下げられている。”もしもの時”のために、一応用意しておいたものだ。

(久しぶり、……ここ、来るの)

リウニオン総本部。大雑把に言えば、ギルド・リアンの上位関係に当たる組織だ。

このリウニオン国の防衛軍。自衛隊、または軍事力。言葉で表せばいくらでも出る。とにかくこの組織に属する人たちは一筋縄ではないということ。皆がそれぞれ大いなる力を秘めていて、中にはソルジャーも勿論、魔法専門の人もいたり逆に剣技に長けた人もいたりと振り幅は大きい。

ガリユルアート砦をはじめ、この国に置かれる機関の頂点という存在なのがこの組織。

「おお、待っていたよ」

「……どうも」

中へ入ると早速お出迎えしてくれた、この男性がここの大佐。無精ヒゲが印象的で強面だが、内面は穏やかな人で人望も厚い。

夜も遅かったので中は人がそんなになく、いつもの活気は無いようだった。リアンのようなギルドとは違い、その建物自体に住む習慣というものが無い。それゆえ勤務が終われば皆は自宅へと帰宅していく。

「彼を呼んでくる。ここで待っていてくれ」

自分呼び出した人物が誰なのか、ネイラには少しばかり見当が付いている。そろそろ顔を出してくる頃だろうという察しもあった。

しばらくして、大佐が2つのお茶を淹れてきたと同時にその人物を連れて戻ってきた。

「ティラミスさん！」

「やっぱり……」

大佐押しつけて自分の前に跪き、目を輝かせている男。そして、自分を”ネイラ”と呼ばず苗字の”ティラミス”と呼ぶ。やはり間違いないこの人だろうと思っただけはいた。

「……帰って、ください」

「いえいえ。彼女の居場所を吐いてもらうまで、帰れませんよ」

そこでいきなり声の調子が鋭くなり、少しだけ怖気づいてしまった。まるで内心をえぐられたかのように男の表情は急に得意気に変わったのだった。

\*\*\*\*\*

\*\*\*\*\*

「リミレット　っ！！」

それは急な連絡だった。夜分遅くにリアンに届いた電通によると、ガリユルアート砦で保護されていたリミレットが目覚めたとの事で……上層部の4人が音速の如くで飛んできた。

「こ、こちらです！」

言ってしまうと、パーフィ以外は寝起き状態。パーフィは遅くまでアイリスの稽古を取ってやっていて起きていた。連絡に気付いたのも彼女だった。

砦の中は複雑な構造をしていて迷いやすくなっている。これは侵入された時に、砦の核をやられないようにするため。しかしすっぴん構造を知り尽くした4人はすぐにリミレットのいる寝室へ向かう

ことが出来た。

「あ……」

扉を勢い余るほどにこじ開ける。

「ど、どうしたの？ みんな揃ってさ」

そこにはベッドの上で上半身だけを起こす　リミレットの姿があった。

血色も良く……、以前と変わらないその柔らかな微笑みがそこにはあったんだ。魔物オムブルに意思を囚われ悪夢の底にいたリミレットが、目を開けて笑ってくれている。

「うわああ　ッ！！　リミレット、リミレットお……！！」

「うわっ！　コロナ！？」

と、真っ先に飛び込んでいったコロナ。

「やっぱりあの方の薬は……。とにかく無事で何よりだ、リミレット」

ヘヴニールで得られた、英雄の子息のこしらえた薬は効果を見せた。ギルドにあったどんな薬でも目を覚まसानかったリミレットが、こうしてここに自分たちを見ている。

上層部4人の大切なもう一人の仲間　リミレット・クライヴ。

「ウエルト、エレナ。それに……アフ」

バコッ……！！

もはや反射神経も極限にまで向上しきったパーフィが、何か薄っぺらいものでその頭を叩く。

「ええいリミレット、貴様もか……！！？」

「いてて……。あ、あはは、今ので目が覚めたよ」

パーフィのことをこうしてからかうのも、元はといえばリミレットが素直に間違えたのがキツカケだった。それに誘発されてエレナもウエルトもそう呼ぶようになった。

「パーフィ当人も、殴るのは決して”怒り”の意ではなく”そばにいる安堵”とかいうような感情であった。だから今も、リミレット

の頭を何度も叩きながら微笑んでいる。

「リミレット」

すると、そんな様子をその小さな背丈で眺めていたウエルトが一歩前に出て、微笑む彼に声を掛ける。

「ウエルト……。薬って？」

「ああ。英雄のこしらえた薬だ。それがお前を救ってくれた」

あの場所へ向かった時、また別の衝撃事実も聞かされたわけだが、それもウエルトはまだ他の3人に話してはいない。英雄の血筋がこんなにもすぐ近くにいたなどと、信じるかどうかも不安だが。

「もう立てるのか」

「あ、うん。何かね……。体の中の邪気が一気に掻き消えたよ」

レガットには色々と学ぶべきものがあるようだ。リアンの薬品を扱う役を命じられているのはコロナとエレナ、ネイラにマイリーの4人だが、彼女たちでもこんな凄い薬を作り上げるのは不可能に近いはずだ。

「なら……。少し私たちのギルドを見に行こうか。お前たちもいいか？」

「おっ！ あたし賛成っっ」

咄嗟に賛成の意を表したエレナに続いて、コロナもパーフィもそつと頷いてリミレットの身を起こしてやった。リミレットは男性ながらも、背丈はパーフィよりも小さくてどちらかというと童顔だと、こつこつして見るとそう思えてしまう。

+++

目を覚ましたものの、リミレットに宿っていた魔力などはまだ完全に戻らないようで、自身でホウキに乗ることもままならないようだった。なのでコロナが自らに宿る浮遊能力を用いてリミレットを

運んでやった。本当に、今までベッドの上で顔色悪く眠っていたのがウソのように彼は元気そうな表情をして空を舞った。

「……ふふ、あいつ楽しそうだな」

「ウエルト。少し話がある、耳を貸せ」

「ん」

ホウキに跨って飛行しながら、少しリミレットたちと距離を取ってパーフィが耳打ちしてきた。なにやら先ほど皆に居た時のような柔らかい表情ではないのに気付く。

（警戒しておけ、リミレットの中に オムブルの気配がまだ……）

（なっ……！？）

ウエルトには、心中を察する透視能力のようなものがあつたにも関わらずそのことにはまるで気が付かなかった。完全に邪気は消え失せたと感じていたのだが、パーフィは決して冗談を言うような顔でもなかった。

（やはり気付いてなかったか）

（……私の透視能力でも届かない奥底に、ということか？）

そう問い掛けると首を振られる。パーフィはどうやってそのことに気付いて、自分にそう言い聞かせてくるのか。

（”夢想丸”と同じ感じがした。オムブルと夢想丸はよく似ているだろう）

その耳打ちで背筋に少しだけ寒気が走る。

思えば、同じ”悪夢”を司るような存在。そして、パーフィ家の家宝であった夢想丸。パーフィが気付くのは無理も無い。

「おーい、何してんの？」

……この話はまた別の機会だ。そう最後に耳打ちしたパーフィはそつとリミレットのもとへ飛び寄る。近づいてきたエレナは、きよとんとしたままウエルトの後ろを飛んでいた。

「（アイリスに会わせるとマズイか……？ せつかく夢想丸を解放したのだが）」



夢想丸とリンクしているアイリスとリミレットは会わせてはいけないのかもしれない、という考えまで生まれてくる。なるべくそんなことは無いように思いたいのだが、もしリミレットの中のオムブルが再び目覚めてしまえば、それはまた厄介なことになる。

夢想丸

夢に浸るのは、ここまでだ

どこかで重々しい声があった気がした。

## 第46話 目覚める親友と予感（後書き）

この6章は、かなり長くなりそうです。

話の進み具合としては、

ネイラと謎の男性の対話の内容、それとリミレットとオムブルの事。  
2つのストーリーが入り混じってくるお話となりそうです。乞うご  
期待。

## 第47話 大切な私だけの友達

居場所っていうのは恐らくあの子の居所のこと。何で今更押しかけてきたのかは分からないけれど、あの子の居所を易々と吐くわけにはいかなかった。今のあの子はまだ……。

「ここにおられるのですか」

リウニオン総本部を出て、ネイラはその男を引き連れてこんな場所へやって来ていた。

ここはギルドから大分離れたところにある山の奥。ネイラはただ黙りこくったままその奥へと男を導いてやっていた。

「しかし、薄気味悪いところですね」

「……ここ、立って、下さい」

不自然ながらも、その拓けた場所へ男を誘った。

そして、咄嗟にその足が妙なツタに絡まれていく。

「なっ!?!」

「帰ってくれないのなら、こうするだけ、です」

ネイラの魔術で地面から木々のツタが生え始め、それが男の足首と脇腹に引き絞るかのごとく巻きついた。

「やはりあなたは……。王女の居場所を知っているのですよね？」

「……居場所は、教えられません。……マリナは」

拘束され状況が悪いはずだが、男の静かな笑みが止まない。自分の置かれている状態が分かっていないのか。この森は人食いのバケモノなど容易く出現するような危険地帯にあり、ソルジャーの資格がなければ入森することはままならない。

とにかく、彼女の居場所はこの人に教えるわけにはいかない。

「大切な、友達、だし……」

男が鼻で笑う。

それに気付かないフリをして、ネイラはその森から飛び去った。

ギルドに戻った頃、もう外は日が昇りそうな明るさを帯びた夜中だった。建物内はすっかり静まり返っていて、広間は気味が悪いほどに静寂に包まれていた。自分の歩みの音しか聞こえない。

(……………どうして、今更……………)

出来れば、このまま忘れていて欲しかった。あの国にはもう帰る気も無いし、きっとあの子だってここに残りたいたらう。あの子がソルジャーになるのは小さい頃からの夢だったから。

そして自分も、それを支えるような存在になりたくて。今の自分があるのもあの子のおかげだ。

「エレロワ……………」

部屋へ戻ると、お守り(?)をしていたリーンも一緒になって寝息を立てていた。この2人はどっちも賑やかしが上手で元気だけが取り柄のような存在だ。そうやって自分自身を確立させる”何か”がある。自分には何があるだろう。

ただこのギルドに属しているだけの、無口で無表情で……………影のような存在。そんな自分が一番嫌い。

「……………寝よ」

気分が優れない。今はぐっすり眠っていい夢を見たい。

例えば、アイリスと一緒に浜辺でお話する夢、とか……………。考えてちよっとだけ照れた。

\*\*\*\*\*

\*\*\*\*\*

エレロワの本名は、マリナっていう名前。でもあの子はその名前が好きではなくて、自分の好きだったお人形の名前を取って”エレロワ”と名乗っている。

「ナンバー？、バーレンシア・エレロワ・ベツシー・マリナ！」  
「はぁーい」

今日は一段と眠そう。総長もその長い名前をよく続けて一息で言えるものだ、と勝手に感心してしまう。あの子は自分のその長い名前がコンプレックスで、本当は本名で呼ばれることが凄く嫌だったりする。その気持ちを知っているのは自分。ネイラだけであって誰もその名前に籠められた意味なんて知るよしも無い。

バーレンシア王国のマリナ王女……それがあの子の正体。あの子自体、それはもう忘れたい過去であって今はこのギルドに居たいと言っていた。

だから、帰す訳にはいかなかった。あの男に居場所を教えてしまつたら厄介になる。

「眠そうだなエレロワ。さつきから欠伸あくびが止まらないじゃないか」

「うーん……。あたし夜勤ですからぁ、ううん」

「まあいい。次、ナンバー？、アイリス！」

毎朝こうやって典型的に点呼を取るわけだが、なんせ朝が早いため皆眠そうなのは否めない。ましてや夜勤組みの二人にとっては余計に睡魔がやってくる時間帯でもあるわけで。

ふとその呼び掛けに返事が無いことに気付く。皆がアイリスの方に視線を集める。

「アイちゃん、呼ばれてるよっ」

「え、あつ！ は、はいっ！！」

横のコロナに肩を叩かれて我に帰ったようで、アイリスもかなり眠そうだったのがよく分かる。

パーフィによる稽古は厳しい面もあってそれが堪えてるのだろう。

「アイリスもなんだか眠そうだな」

「す、すみません……っ」

「ウェルト。アイリスは私の稽古で疲れてるんだ。許してやっ  
てくれ」

「言われなくても、分かるさ」

自分の右隣で、エレロワはまた一つ大きな欠伸をした。左隣はマイリーで、こちらはメガネ越しでも分かるようにちゃんと目を覚ましている（こう言っただけだが、朝の総長の話をまともに聞くのはマイリーだけだったりする）。

「ネイラちゃん、どうかした？」

半開きのまぶたをしたエレロワが首を揺らしながら声を掛けてきた。

「ん……。何でもない」

「そっかあ、ふわあ……」

目を擦って机にうつ伏せになるエレロワ。今の自分の思い、マリナ王女のことについてはまだ触れないで置こう。その方がいいのかもしれない……。

自分にとっても、エレロワにとっても。このギルドに変な面倒事を巻き込ませるわけにはいかないし。

「よし、皆眠そうだからランニングだ！ 全員浜辺に集合しろ」

「ええ、あたしタバコ吸ってからがいい」

「……没収」

「あ、返してつてウエルトお」

「ギルドの周り10週走らないと返さないぞ？ 他の皆もだぞ！」

タバコとライターを見事に取り上げられるエレナを見て、一同はそそくさとギルドの外へと向かっていった。ちなみにギルド周辺の10週とは、約20キロメートルあるのだ。

このランニングでいつもトップを走るのはリーンかパーフィのどちらか。この二人は脚力があって走るときの脚の使い方までもが普通とは違う。今日も二人が、他の皆を3週遅れにして追い抜いていた。

「……あ！」

すると突然、走りながらコロナが何かに気付くように声を上げた。  
「ねえウエルトちゃん、リミレットはまだ起こさないの？」

「ああ、そういえば……」

とりあえずウエルトも眠かったのだった。リミレットの事をすっかり忘れてしまっていて、部屋に寝かせたままだったのに今気付く。ちなみにリミレットをリアンへ連れ戻したのは夜中だったので、まだこのギルドにリミレットがいることを知らない面子もいるということである。知っているのは上層部の4人だけ。

「ひとまずこれが終わってからだな」

「あはは……リミレット、女の子ばかりのココに入るのすっごい嫌がってたよね」

「……パーファイが何とか説得したらしいぞ」

「アツフーちゃんに言い寄られちゃあね……、男の人はつい領いちゃうんじゃないかな？」

そんな会話をしているうちに、また1週分抜かされた。

いつも最後に10週を走り終えるのはネイラであった。元々体力に自信が無く、別に気にしてもいなかった。むしろ大袈裟に心配まですてくれる始末。優しいのは有難いのだが、こんな疲れはすぐ回復する。

「……お風呂、入ってきます」

「あ、あたしも行く〜！ アイリスも行こっ！」

「うんっ」

汗だくになってしまったので早々に風呂場へと向かう。

\*\*\*\*\*

\*\*\*\*\*

そう言えばここへ来たんだ。ウエルトたちの立ち上げたギルド・リアン。メンバーは全員が女の子って聞いて、居心地はいかな物かと不安にもなったけれど、結局この場に自分はある。

呼吸をすれば女の子の独特の香りがする……ような気がする。

「あ、これって……」

暖簾のようなものが下げられた奥に、湯気の立ち昇る空間が見える。

「……」

自分がどこを覗いているかが分かってきて、何故か頬が引きつって来るのでそれ以上は暖簾を捲らないことにした。誰かが中にいたので。

とにかくウエルトたちはどこにいるのだろうとギルドの中を歩き回ることになった。しかし何処も彼処もソルジャーらしい建物では無い、という印象。別に悪い気はしないのだが、可愛らしい装飾があったりするのが気まずい気分させられる。

「……この刀は」

そして目に留まった、怪しげに光る刃を持つ刀。鞘から少しだけ抜け出したその刃が、部屋に差す日光で光っていた。

リミレットの中で、何かが動いた気がした。



## 第47話 大切な私だけの友達（後書き）

エレロワの長い本名の秘密が明らかに。

そしてリミレットの動き。9人の女の子に囲まれたリミレットの気持ちは、羨ましいのか気まずそうなのか。そんな気分になりますね。

第48話 小さな約束、大きな感情（前書き）

1ヶ月くらい更新を止めてしまつて、申し訳御座いませんでした。  
通常通り更新を進めていきますので、ご了承下さい。

では、続きをどうぞ。

## 第48話 小さな約束、大きな感情

(まったたく、あの子も人が悪いな)

めきめき唸る木を押しつけ、男は這いずり出てくるように地上へ姿を戻した。掛けられていた呪縛はそこまで複雑な構造の物ではなくて、容易く術式を解除することができた。

それにしても深いところまで引きずり込まれてしまったようで、この森から脱出するのは相当難しそうだった。あの少女、相当肝が据わっているようだ。ここなら猛獣が出てもおかしくはない世界だ。「そこまでして王女を……」

こちらとて探知能力は飛び抜けて高い。どこへ逃げたかを突き止めるなど造作もない。彼女の残していった足跡でいい。それだけでその人物の生命エネルギーを察知できるのだ。バーレンシア国も、自分を遣わせたのはこの能力が長けているため。

こうした呪縛も予想していた。何の問題も無い。

すると突然、茂みの奥がざわざわと揺れ、暗がりにも光る双目がこちらを睨んできた。

(ほう、これもあの子が仕組んだのか?)

なにやら蠢く蜘蛛くものような身体を持って、鋭い角のような物を二本頭に生やしている不気味な”魔物”だ。どちらかと言うと大きな蟲に近い。

背中の部分に彫り込まれた紋章は、間違いなく彼女の      ティラミス家の血が施された物だ。

「ぐぎゃ あああー!!」

「……面白い」

どうやらタダでは帰してくれそうにない。その触覚を振動させながらこちらを威嚇してくる。

ならばこちらも容赦する気は皆無だ。虫ケラとしてそのまま眠っていてもらおう。

ぞぞぞっ……！！ 鈍い音が辺りに轟いた。

\*\*\*\*\*

「わ、アイリス、一つ結びにしたのー？」

すっかり白袴が似合う格好になったアイリス。髪の毛も、お下げだったのを稽古の時だけ一つ結びに変えて気を引き締めるようだ。

「こら、リーン。お前は任務中のハズだぞ」

「もう終わったんですっ、今日のノルマは！ あー、ちよつと〜！」  
畳の上に胡坐をかいて精神統一させられていたので、代わりにパーフィがネズミを追い払うようにリーンを部屋から摘み出す。

「ったく……。アイリス、そろそろ休憩にしようか」

振り返るパーフィの顔立ちは相変わらず、これ以上無いというくらいに凜としていて綺麗だ。そしてすっかり師匠と弟子のような関係になってしまい、アイリスは毎日彼女に稽古を受けている。

夢想丸を完全に使いこなすため、それと夢想丸を付け狙うものを追い払えるようになるための力をつけるために。アイリスは十分に腕前もあるが、未熟な部分もたくさんある。例えば、たどたどしいところだとか。

白袴の格好のまま外へ出てみると、潮風に煽られているネイラの姿がそこにはあった。どこか切なげな顔をしていて、それはそれで絵になりそうな横顔だ。

「どうかしたの？」

そつと声を掛けて傍に寄ってみる。

しかしネイラは表情一つ変えず、ゆったり動く雲を眺めたままだった。もしかして声が聞こえなかったのかなと思い、もう一度声掛けてみるけれど、反応は無い。

「ネイラちゃん？」

すると、目を瞑ったままネイラは、アイリスの左肩を突き押しように力を入れてきた。不意なことだったので、そのままよろけて倒れそうになる。

「いたっ……」

「！ ごめん、アイリス」

どうしていきなり突き押ししてきたのだろうか。その時の表情がいつにも増して鋭利に胸に刺さってくる。凄く怖い顔をしていた。

ネイラはそのまま方向を変えてギルドの方へ戻っていつてしまった。

「ネイラちゃん、どうしたの……」

突然過ぎて、驚きを隠せない。

怖い顔で自分を突き飛ばしてきた、友達に。

+++

あの国の事をここのギルドに関与させてはいけない。何より、リウニオン国とバーレンシア国は対立関係にあつていつ戦争になるかわからない状況でもあつた。

エレロワは自分の生い立ちを否定し続けるけれど、事実だからどうしようもない。

「ネイラちゃん、その事はもう言わないって約束だったはずだよお……」  
「……そうも言つてられないんだ、今は」

敵国であるバーレンシア国の王女が今この場所にいるだなんて知れ渡ってしまったら、恐らく付け狙われてしまう。それこそ、夢丸よりも優先的に。

エレロワは、敵国の王の娘だ。きっとギルド・リアンの人たちだ

って敵対してきてしまう。

「やっぱり、ネイラちゃんが会ったその人って、お城の人だったんだね」

「……そうだよ。黙っておこうって、思ってたけど、ね」

「その人はどうしたの？」

「森に置いてきた。……ここを突き止められても、困るし」

それに、強力な毒蟲を呼び寄せておいた。

“召喚術”はしばらく使っていなかったけれど、まだまだ腕は鈍ってないようで安心できた。これできつとあの男は毒蟲に食われて、ここへは来られないだろう。そう確信付いていた。

「ねえ、ネイラちゃん」

エレロワの小さな手が、ネイラの両手を包み込む。相変わらず暖かい手をしていて、ずっと触っていたい。

「あたし、ネイラちゃんが狙われるのだけは、イヤだからね？」

「え……」

「約束して？ あたしのために、ネイラちゃんが傷付かないってじつと見つめてくる。青々としていて澄んだ瞳が、まるで自分を吸い込んでしまいそう。それに少しだけ潤んでいる。」

「うん」

ネイラは、ただ短くそう答えるだけだった。

自分よりも年下で、まだ12歳で……そんな彼女に自分は心配されている。本当に王族っていうのはしつかり者だなと思わされる。

すると、部屋の外からなにやらドタドタと駆け回るような足音がして必要以上に驚いた。

「ネイラーっ！ あ、いたいた」

「……うるさいよ」

部屋の扉を躊躇無くこじ開けるリーンが、ネイラの手を掴んで急ごうとする。

何なのかと尋ねると、「お客人だよ!」と焦ったような声で言う。  
……一瞬、背筋が凍るような思いがした。

「連れて来ましたーっ!」  
駆け抜けて、すぐに広間に出る。するとそこには上層部の四人と、もう一人。

「ネイラちゃん、お客さんだよ?」

「なんでもお前に話があるそうだ。客室を空けよう」

コロナとウエルトが潔く男を招き入れる。どうしてこの人が、ここににいるのかとか色々言いたいこともあつて両足がすくむ。

「ふふ、この人たちは親切ですね」

「あはは、ウエルトちゃん、褒められたよお」

何食わぬ優しそうな青年張りの表情でコロナたちと話している。

「何をしようと無駄ですよ……」

「……………!」

自分の横を通り過ぎて行く瞬間、小声でそう囁かれてゾツと血が冷え切ったような感覚に陥ってしまう。

「ありや、どうしたの?」

ここには、あの男が狙う人物がいる。バーレンシア国の王女。  
マリナ王女が危ない。

\*\*\*\*\*

\*\*\*\*\*

日当たりが悪くて少し暗いその客室に、ネイラとその男が二人。  
ウエルトたちが部屋を去っていくと同時に、男の表情は一変する。

「さあて、王女はどこですか? ティラミスさん」

「……………どうして。まさか、あの毒蟲を……………?」

「ははははは、あなたも可愛い顔をして残忍だな。あの蟲、刺

されたら一瞬で全身の細胞を殺す強力な毒を持っていたな」

自分の術式を見破られている？　ますます心が落ち着かなくなつて呼吸が乱れてくる。男はソファに腰を深く落として腕を組んだ。鋭いその目は相変わらず自分を突き刺すかのように睨みつけてきている。

「　あなたはバーレンシアの裏切り者だ」

「私は、ただ」

「今ここであなたを殺めても、国は何も言わないだろうな」

「……やる気、ですか」

唐突に物騒な事を言い出すので、いつもの冷酷さがつい表に出てしまった。

自分は王女を連れ去つた裏切り者。間違いは何も無い。けれど、少なくとも王女本人はそう思っていないはず。あの子は自分を信頼してくれている。

「だが待て、もしあなたがここで争いなど起こせば……ギルドの人はどう思うだろうな？」

「……っ」

残忍なのはどつちなのか、と言葉を挟みたいところだが、それどころではない空気に変わってきている。

「聞きなさい、ティラミスさん」

すると男の表情がまた一変、得意気で腹の立つ顔をしてこちらを見つめてきた。

「　あなたの母親は、僕が殺したんですよ」

その言葉が放たれると同時に、脳天が爆破しそうな思いをさせられた。

怒りと憎しみが入り混じって、男の左耳に刀を突き刺した。



## 第49話 裏切り者

心の琴線に触れてくる言葉を聞いたせいで、不意に血を見る事になつてしまった。突き刺した刃から滴る数滴の血に、思わずゾツと慄く。そして、刀を握る自分の手が震えまくっている事にも。それは怒りから来るものと、血の匂いに恐れを為す感情から。

「怒りましたか？ そりゃあね、母親を殺した相手が目の前に居ちゃ仕方ありませんか」

「うるさい……黙れえええつ……！！」

わずか目前で憎たらしい顔をするその男に感情をぶつけ、突き刺したままの刀を抉るえくように上下させたり勢い良く引き抜いたり、返り血が激しいまでにネイラは怒り狂った。日常でもこんな酷い声を出したことはない。

今、どんな顔をしているのだろう。きっと鬼のようなおぞましい顔をしているに違いない。

「その顔だ。やはり似ているな」

どんなに血を噴かせても男の意識は消える事なく、余裕のありそうな顔をされる。腹立たしくなつて、ついつい感情に身を任せてしまふ。刀を思うがままに相手に振るう。

マリナ王女の事で胸がいっぱいだつたネイラにとって、母親を殺した相手が現れるのには耐えられなかつた。たとえ、それがウソで口から出任せでも、そんな事を口にするこの男を許せない。挑発に掛かっているのなら尚更、憎い。

息が絶え絶えになつてしまい、そのままその場に尻餅をついてしまふ。

「裏切り者ですよ。あなたの母親もそうだつた」

英雄リウニオンの相棒とされる 大魔女。

彼女は多彩な魔術を用い、リウニオンの背に付き共に魔物の軍勢を打ち滅ぼした。その大魔女が、かの英雄ほど伝説として大きく伝えられていないのは、最後の最後にリウニオンを裏切ったからである。

彼の薬術を真似て、挙句の果てにはそれを奪い去ってしまう。そのせいで死んだ命も多数。それ以来リウニオンは、ヘヴニールという天都市に身を移して影を潜めてしまったという。

「大魔女バーリイ」。それがあなたの母親で間違いないですね？」  
「……………」

大魔女バーリイ・ティラミス。

彼女とて、初めは薬術に手を伸ばしてなどいなかった。今のネイラとは真逆の性格をしていて、策など気にせず突き進んでいくような大雑把な性格をしていたため、攻撃魔術しか会得していなかったのだった。それも、魔術書に載る全てを使えるまでの實力を持ち合わせて。

「あの方はリウニオンを裏切り、そしてバーレンシアをも裏切ったのだ。そうでしょうか？ あなたを、この国の、このギルドへ送ったのは何故です？」

話をしている間に、いつの間にか男の耳から流れていた血が止まっただけで、ピンピンとした面持ちのまま迫ってくる。

「バーレンシアを敵国とし、娘のあなたに復讐させるつもりだったんですよ」

「……………違う、違うっ！」

「いいえ違いますよ。あなたは”捕虜”として、マリナ王女をここへ連れてきたのだ！」

違う、そんな事、詭弁だ。あの子の エレロワの事を捕虜だなんて思った事も無いし、復讐の意味なんて無い。

+++  
+++  
+++

(一体、何の話をしてるんですの……)

すれ違ったりリーンに聞くと、ギルドに客人がやってきたというのだが、どうも不穏な匂いがする。そしてそれは上層部の四人もそう思っていたようで、マイリーに軽い見張りを任せた。

中から聞こえてくる男の高らかな笑い声、そして怯え慄くネイラの震え声。ドア越しに耳を宛がって聞いている場合ではない。

バンツッ！……こじ開けるように扉を開ける。すると、床にこびり付く赤い液にたちまち背筋を凍り付けにされる。

「あなた達、一体何を!?」

今まさに、男がネイラの首元へ掴みかかろうとしていたところだった。

「……邪魔が入りましたか」

「ネイラ!」

咄嗟にネイラの前に立ちはだかり、男の視線を睨みつける。

床にこびり付く血痕、そして乱れまくったネイラ。こんな普通じゃない。

「あなた、ネイラに何を!」

「ま、あなたでもいいです。王女の居場所を教えてください」

「は……?」

身を小刻みに震わせるネイラをそっと抱き寄せ、彼女の毒刀を借りて構える。

明らかにネイラを殺しに掛かっていた。扉を開けた瞬間、張り詰めた殺気に全身の毛がよだつほどに、殺意に満ちた空気をかもし出していた。

「何を言ってるか分かりませんわ。あなたは確実にネイラを殺そうとしてた!」

「ふふ、血の気が多いんですね」

あくまで冷静ぶるその男。非常に憎たらしい。

「そこまでだッ!!」

するといきなり怒鳴り声が聞こえたかと思うと、男の背後に剣を突きたてるエレナの姿がそこにはあった。

「ふうん、やっぱり怪しいと思ったよ!」

「エレナさんっ!」

通称”ハヤブサ”の名は伊達とは言わせないそのスピード。音の如し速さに、少しだけ冷静さを崩して驚きを隠せない男は、慌てるように背後を振り向く。

男はそのまま身を翻して、窓ガラスを割りそこから逃げ出そうとする。

「ウエルト、右だっ!」

またエレナが瞬時に姿を消すと、ブウンツと轟音を立ち込めて大剣を振りかぶるウエルトの姿が横切る。

男はウエルトの大剣を避け、そのまま激しい音を立てて部屋の壁を派手に倒壊する。

「チッ……」

「待てッ!! 逃がさん!」

たった一振りでコンクリートの壁が崩壊した事に恐れを為したか、男は浜辺の方へ走って逃げていく。

\*\*\*\*\*

\*\*\*\*\*

「わわわっ!?!」

建物の中を轟く音に、アイリスの集中も途切れてしまった。

「び、びっくりしましたあ」

「まさか……」

相変わらず精神統一を行っていたアイリス。しかし全く動じないパーフィを見て、何故だか赤面してしまう。驚いているのは自分だけか、と。

「アイリス、キミはここにいろ」

襖を勢い良く開けて、パーフィは長い髪を揺らしながらギルドの外へ駆け出した。いつどんな状況においても肝が据わっているパーフィのように冷静で居なければならぬのだろう、とそこは反論をせずにそのまま窓から彼女の足取りを目で追った。

「わあ、事件だね」

「!? きゃあっ!」

すると突然の事、アイリスの真横に何の足音も立てずに近づいては腰を下ろす青年の姿。どこかで見た事がある気がして、思わずそのまま目を見つめてしまっていた。

「え、えと」

「何があっただらうね。すごい音したよねえ」

「り、リミレットさん……?」

「うん」

何故ここにいるのか、だとかそんな事よりも、物凄く朗らかで落ち着いたような声で「事件だね」と呟く、そんな彼に驚いた。

リミレット・クライヴ 上層部の四人の仲間の人であり、魔物のせいで暫く眠ったままだった人だ。

「さつきもコロナが焦って外に出てったけど、かなりヤバそうだよねえ」

「あ、あの……?」

「ん? あっ! 僕ったら、一人で喋ってた。あははは」

……どこか抜けたような人だなあと、完全にリミレットのペースに飲まれていくアイリス。口を挟む隙すら無く、彼の落ち着きまくったトーンに半ばこっちも落ち着いてしまいそうだ。

「んと、アイリスちゃん。だよね?」

「あ、は、はいっ」

じーっと近くまで迫られる。

おでこが触れ合いそうなくらいに顔を近づけられて、純真の塊のような性格のアイリスには赤面せざるを得なかった。

「ふんふん……。なーるほどお」

まるで顔のどこかに吹き出物が無いか探すかのように、リミレットはその白い指を少しずつつ当ててきて眉をなぞったりして来る。

流石に耐えられなくなって、きゅっと目を瞑って少し距離を置いた。

ゴオオオオオオオオ……

「わっ」

また、地響きのような音がした。

「浜辺の方だね」

「何か、あったんでしょうか」

明らかに何事かが起こっているに違いないと、いくら感が鈍かろうと気付ける。だが、アイリスの行動をリミレットは許してくれない。

部屋を出ようとしたところで、右手首を掴まれて引き寄せられてしまう。

「心配ないんじゃないかな？

ねえ、それよりさ」

「……………!」

不意に腕を背中に回されたかと思うと、その幼げな青年の顔が左肩へ近づいてくる。

「僕の手カラになつてよ、……………ねエ？」

何か恐ろしい怪物に、首筋を食われたような気分だった。

## 第50話 血塗られた宿命

特に武器や魔術も使ってこなく、ただひたすらこちら側の攻撃を全て躲すだけしかしてこない。だから余計に、こちらの体力を消耗させられるだけ。

ウエルトとエレナが二人で、男の前方と背後を取っている。

やはり瞬身の能力があるエレナには恐れを為したのだろう、必ず視界にエレナの姿を捕らえるようにしているのは確実。

「それなら……」

ただ剣を振るうだけでは埒が明かない。ここは魔術ばかりで攻めてみるしかない。

ウエルトはその大剣を浜辺の砂に突き立てると、そこから砂の中へ一気に魔力を送り出した。

「エレナ、少し下がっていてくれ」

「……!!」

その言葉に従ってエレナが姿を消した途端、砂浜がうねり盛り上がり、波を打ち始める。同時に激しい地鳴りが辺りに轟き、衝撃波が波紋のように広がっていく。

「大地を揺るがす程の」

男の立っている場所へ集中力を置く。すると地響きはそこへ集中していき、揺れに耐えられなくなった砂浜の砂が大量に舞い始める。それが砂の波となって、敵を飲み込むように覆い被さっていく。

「ウエルト、エレナ！」

敵を砂の波に埋めたと同時に、ギルドの建物の方から走ってくるパーフィとコロナの姿があった。パーフィに至っては既に剣を抜いていたため、戦意も甚だしい様子。

「大丈夫だ二人とも。敵は砂の中に埋めてある」

「や、やっぱりさっきの人なの……?」

突如ギルドへやって来て、ネイラに用があると云ってきた。しかしどうやら、それは穏便な状況ではなくなったことぐらい、同じ建物に居れば分かる。

一瞬しか目に映らなかったが、あの客室には血痕が幾つもあった。決してネイラの血では無さそうではあった。とすれば、ネイラがこの男に傷を負わせたと考えられる。

「おーい！ 総長さんたちっ！」

すると、リーンがマイリーと共に走ってきた。どうやらウェルトの発した地響きで、異常事態が起こっていると悟って出てきたのだろう。だがこれで、こちらは六人。相手は男だからと言って、こちららは全員がソルジャーだ。戦力に不十分は無い。

「総長さん！ 敵はどこ!？」

マイリーを連れて来たという事は、リーンも恐らくあの血痕染みた客室を通って来たに違いない。

「安心していい、ヤツはこの砂の中に」

「うわわわっ!？」

言葉を遮るようにリーンが声を上げるので何かと思えば、白い蛇のようなものが彼女の足元に巻き付いていた。それはどんどんリーンの足を伝って上っていく。

まさか……、とそう思った次の瞬間、その”まさか”は的中する。

「ウェルト、下がれッ!！」

「!！」

\*\*\*\*\*

\*\*\*\*\*

思わず変な言い回しで迫ってしまった。大袈裟なまでに純粹そうな彼女だからこそ、目を回して気絶してしまったのだろう。

「ありゃりゃ、でもこれでいいんだよね」



やっぱり自分の中に眠るこのチカラは、アイリスの夢想丸と繋がっている。

悪夢を操る魔物”オムブル”のチカラだ。『夢』という点で、何かしらの接点があるとは思っていた。

「ううう〜」

若干顔が紅潮したままアイリスはその場で気絶してしまった。

別にリミレットが無理に抱き締めたからというわけではなく、恐らくはオムブルのチカラを適合させたお陰だろう。

自分でもよく分からないけれど、夢想丸とアイリスのために、このオムブルのチカラを分け与えてやら無ければならない。と了解させられる。誰に命令されるわけでもなく、自分の意思がそちらへ傾倒するのだ。

「僕、疲れてるのかな……」

英雄リウニオンの教えからきた薬のおかげで、リミレットは目覚める事ができた。復活したばかりで、まだ身体が本調子ではないのかもしれない。

そして何故か、目の前のアイリスには何かしらの親近感がある。不思議なまでに、運命的な何かを感じる。大方、夢想丸とオムブルの繋がり関係から来るものなのかもしれないのだが。

「……はっ!!!」

「あ、目が醒めた？ アイリスちゃん」

「り、りりりリミレット、さん……っ」

これ以上無いっくらいに口をどもらせて、アイリスは腰を引きずって部屋の隅っこまで逃げる。

「ゴメンね、変な風に近づいちゃってさ」

「えっ?」

「別に、寝てるキミに変な事なんてしてないからっ！ し、信じてよっ」

「ええっ!?!? そ、そう言われると、余計に……ううう」

と、身体を護るように両手で自分の肩を抱くアイリス。その仕草

がまた面白くて、ついつい吹き出しそうになる。

「そ、それじゃ僕、一旦ガリユルアートの方に戻るよ。ウエルトたちによるしくつ！」

どうやらこの場所にいるのに気が引けたようで、リミレットはそのまま部屋を出て行ってしまった。ガリユルアートに戻るという事は、ここへ何しに来ていたのだろうか？

一気に気が抜けたアイリスの考慮では、そんな事は後でどうにかすればいいかと思えて、そのまま力無く畳の上に身体を横たわらせる。

「……」

ふと、部屋の隅に置いてあった夢想丸へ目が行く。

この魔力を使いこなせるようになるために、こうしてパーフィの稽古を受けている。そして強くなって、多くの人を守る存在になりたい。それが、最初の目的だった。

「お父さん……」

それが今では、真の目的として、自分の父が辿った運命を追い求める事に向いていた。

アイリスの父　英雄リウニオンが、どうしてヘヴニールからあの辺鄙な村に身を移してまでして、アイリスを守りたかったのか。

まだ、自分が”英雄の娘”であるという事は話していない。一緒にヘヴニールへ行った、ウエルトやリーン、マイリーはその事実を承知しているが、けれど、まだ話すべきでは無いような気がして、いつも話す機会を自分で断ち切ってしまう。

「……おばあちゃん。私、知りたいよ……」

本当に英雄の娘なら、一番リウニオンの事は知っていなければならぬ気がしてしまう。

自分はどれだけ無知なんだろう、と胸の奥が締め付けられる。

「おばあ、ちゃん……」

不意に口ずさんでいたら、ウル婆さんの姿が自然に頭に浮かんでくる。

あの村で、両親を亡くしたアイリスを引き取ってくれた、『血の繋がらない里親』となってくれた人。生涯で一番親しみ深い人物、と胸を張って言える。

「……………！」

色々村での事を思い出している中で、ふと ある人物の事を思い出す。

(ランマ叔父さんは、どうしたんだろう……?)

あの時、機械兵を操る男が村を襲った時……叔父さんの姿はどこにも無かった。

両親が亡くなって、唯一の『血の繋がる親戚』だった彼。あれから一切、音沙汰無い、と今更気付かされる。

そこで、覚束ない思考回路でも、話を繋げる事は出来た。

ランマ叔父さんなら、何か知っているに違いない。

なぜならば、自分と同じ血族であるのなら……あの人は”英雄の弟”という事になるから。

「……………考えすぎ、かなあ」

自分の血族なんて、ちっぽけな存在だとばかり思っていた。しかしもしも英雄の血を引く者の集う血族だったとしたら、そんな思いは真逆と化する。

もしかやウル婆さんや村の人たちは、それを知っていた……?

\*\*\*\*\*

\*\*\*\*\*

まるで砂の上にそびえ立つ蟻塚のような佇まい。砂を被ったまま、男はその場によるよると覚束ないまま立ち上がった。

「はっは……、凄い圧力の砂でしたね」

恐ろしい程に平生を保った表情のまま、男はニヤリと笑う。砂の波で押し潰しに掛かったのだが、男の身体はどこも傷を負っていないように見える。一体、何をしたのだろうか。

「ひいつ！ た、助けてえー！」

「この白い蛇……、斬るのは無理ですわね」

リーンに巻き付いていく蛇も、恐らくこの男の操るものに違いなし。リーンを助けなければならぬが、敵が次に何をしてくるか分からないので簡単に動けない。

「無駄ですよ。その蛇の鱗には魔力が練り込まれてありましてね……

……。鋼よりも硬いですから」

「貴様！ 何が狙いなんだ！」

「王女を差し出してくれば、リーンというこの子は解放します」

この男は何を言っているのだろうか。『王女』と呼ばれる者がこのギルドにいると勘違いしているのだろうか。どちらにせよ、ギルドを襲った事には変わりはないため、それに応じた対応をしなくてはならない。

「口で言っても無駄ならば、答えは叩いて出すだけだ」

「パーファイ……」

「私がやる。お前たちは下がっている」

長く綺麗な髪、スラツとした身は相変わらず。それに加えて異様なまでの威圧感があるのは否めない。

「……あなたは中々、腕が立ちそうですね」

長剣を斜めに構えると、パーファイはすぐに”波剣”を勢い良く放つ。

風の魔力を剣の軌跡に合わせて放つ衝撃波のように、それが男へぶつかると血が噴き出る。

「っ!? な、何……!」

「次はその腕を斬り落とす。口を割るなら、今だぞ?」

“波剣”は史上最大の難易度を誇る魔術であり、魔力をこうして剣に乗せて放つのはとてつもなく難しい。このギルドでもパーフィにしか操れない能力だ。

「ぐああ、く、くそ」

今まで傷つく事に、全く苦しむ様子を見せなかった敵が、パーフィの波剣を喰らった途端に苦しみもがき始める。

「はー、アフロすげえ」

「……貴様、この期に及んで」

「そ、そんな怖い顔すんなってー!」

「はぁ……」

相変わらず空気を読まないエレナにひとまず一息吐いて、パーフィは咄嗟に剣を男の右腕に突き立てる。貫通して後ろの岸壁まで押し込み、完全に身動きを封じる。

「は、はは……。そうでしたか、あなたはあのパーフィ家の」

「貴様、異国の者か。なら尚更容赦はしない」

剣を突き刺したまま、少し距離を置いて魔術の詠唱を始める。

途端に辺りを豪風が包み、砂浜が再び風に乗って竜巻のように舞い上がる。

「ストップ!! やめてやめて、パーフィさんっ!!」

いきなり大きなエネルギーの波が押し寄せてきて、パーフィの詠唱が途切れてしまう。

「エレロワか、何故止める!」

「……その人のために、パーフィさんが手を下すまでも無いよ!」

突然浜辺へ来たエレロワが、パーフィの前に出てきて男のもとへと歩み寄る。

「これはこれは。探しましたよ？ マリナ王女」

「あたしが狙いでしょ？ だったら、この人たちには何もしないで  
！」

「……」

どういったわけなのか、エレロワがそう言うつとすぐに男が魔術を  
解いて、捕らえていたリーンを解放する。

急に殺気立った表情を緩めたかと思うと、男はエレロワの手首を  
掴んで自由を奪う。

「エレロワ！！」

「……はっは、王女から出てきてくれるとは。手間が省きましたよ  
」な、王女だと……？」

間違いなく男は、エレロワの事を”王女”とそう呼んだ。

「 エレロワ！！ ダメっ……！！」

「ネイラちゃん！！」

浜辺に集まる一同を掻い潜って、息が絶え絶えになったままのネ  
イラも前に出てくる。

「ふふふ……。ティラミスさん、もうあなたに用はありませんよ？」

「私は、まだある……！！ マリナを返してもらおうのと、お母さんの  
カタキ……！！」

ブワツと髪が揺れた。

凄まじい程の魔力が、辺りに広がっていく。

## 第50話 血塗られた宿命（後書き）

アイリスの叔父ランマは、第1話と第23話に登場して以来です。今後の鍵を握る人物です。

そして、ギルド・リアンを巻き込むネイラとエレロワの秘密。

## 第51話 復讐

こんな夜中にどこへ行くのかと思って、母の後を追いかけた。廊下は真つ暗で何も見えなかったけれど、妙に静かだったので、逆に母の足音を聞き分ける事ができて追うことができた。

暫くそのまま息を潜めていると母は、家の前にいた”誰か”とぼそぼそ喋っていた。

「置いていって、いいのかい」

相手の人は男性のようで背もそこそこ高い。顔は暗くて見えなかった。

ドア越しに二人の話す声に聞き耳を立てて、彼女はそのまま息を殺していた。

「……あの子は王女様と仲が良い。連れて行くと、あの子と王女様を引き裂いてしまう事になるわ。だから連れて行けないのよ。こうして黙って出て行くしかないの」

その時は、母が何を言っているのか分からなかった。まだ幼かったから。それでも、このままだと母は家を出て行ってしまふんだという事ぐらいは分かった。

「俺にもね、キミと同じぐらいの子供が二人いるんだ」

「……確か双子の兄妹、だったわね」

「俺も子供たちを置いてきた。だから、気持ちには分かるよ。……でも、キミの子供、ネイラちゃんはワケが違ふだろう？」

唐突に自分の名前が呼ばれてびっくりしてしまい、ドアの横にあ



った傘を倒してしまった。そのせいで、話をしていた二人に気付かれてしまったようだった。

「ネイラ!? そ、そこで何してるの」

「お、お母さん……。その人と、どこか行っちゃうの?」

心配で心配でたまらなくて、幼きネイラは母と男性の間に割って立つ。

「リウ、先に行つてて」

母はその男性を”リウ”と呼んだ。どこか親しげで、それは娘の立場からしたら凄く飲み込みづらい事でもあって、リウという男性を行かせてから母に話を聞こうとした。

「お母さん、これから大きな仕事があるのよ。だからお留守番しててね」

「あの人は誰?」

「お母さんの友達よ。」リウニオン”っていう名前で、魔物ハンター  
の異名を持つ凄い人なの」

「……仕事って何?」

それを聞くと、母は黙りこくつてしまいい何も言わない。

ポンと頭に手を置いてから、……母は真つ暗な夜中の世界に消えていってしまった。聞きたい事にも答えてくれないまま。

それから数年後、風のウワサで「リウニオンが死んだ」と聞いた。あの人と一緒にいた母は無事なのだろうか、幼いながら精一杯詮索に励んだ。仲の良かったマリナ王女と王様の系列を通して、あらゆる情報源を掴みにかかった。

英雄リウニオンと大魔女バーリイは、何者かに殺されたんだ。

それを知って更に数年、ネイラは母国のバーレンシア王国へ恨みの念を向けていた。国が母を送ったんだ、そのせいで殺されたんだ、と思ってしまう。マリナ王女以外の人物を憎んだのだった。

いつまでもその場所にいるのに気が引けて、ネイラはマリナ王女を連れて国を出て行った。半ば強引に、王女を連れ去る形で。

「私はもつと強くなつ、てお母さんを殺した奴を、殺すの」

「ネイラちゃん……。怖い顔しちゃ嫌だよ」

復讐のために国を出て、あの時母親と一緒にいた男の名前と同じ”リウニオン国”へやって来たのだった。

\*\*\*\*\*

\*\*\*\*\*

「そうですね。あなたの母バーリイと、英雄に手を掛けたのは自分です」

全身の細胞がざわめき始めるほどに、怒りが止まらない。目の前に復讐の対象がいるという事に、身体が言う事を聞かないでいる。エレロワはそんな彼女を見つめて、今にも泣きそうな表情をしていた。

「ネイラ、落ち着け!!」

でも、気に掛かる事も幾つかある。空猫館などで聞いた話に寄れば、英雄リウニオンは魔物の軍勢に立ち向かって死んだという。

話が合わない事に、力が急に途切れてしまい、バチチツと何かがかち切れるような音がしてネイラの身体がその場に倒れ崩れる。

「わわっ、ネイラちゃん！」

「こいつは私たちに任せろ！」

ネイラを抱きかかえてエレロワが皆のもとへ離れる。

そして再びパーフィが前に出て、長剣を男へ向けて構えた。

「……あなたは強い。相手にしていると苦労しますね」

そう言っつて男は身軽にも高く飛び上がり、海に顔を出す岩石の上のところで着地した。どんな攻撃にも動じなかった敵が、唯一パーフィの波剣には痛み苦しんで血を流した。やはり敵にとつて、パーフィのような風使いは脅威なのだろう。それでいてパーフィは、このギルドで一番強いといつて過言ではない実力者だ。

「マリナ王女、一つ忠告を」

「え……」

「このまま我らの敵対をするのであれば、あなたの父親　バーレンシア国王を殺します」

「……！」

一同にはマリナ王女というのが誰か分からなくて、そんな中を一人、前に出て男へ視線をぶつける少女がいた。それが、エレロワだった。

「エレロワ……？　どういう事だ！」

バーレンシア国王を殺す。その言葉を聞いて、エレロワの表情は

普通ではなくなった。青ざめて冷や汗をかいて、小刻みに肩を震わせている。

「ごめんなさい、あたし」

そう言っただけで彼女は男の方へ向かって、海水の中へ足を進めていく。

「エレロワ！」

「みんな……。ネイラちゃんをよろしく、です」

切なげな顔には、すでに涙の跡があった。

「ついて来る気になりましたか？ 王女様」

「……このギルドの人たちにはもう近づかないで。勿論、ネイラちゃんにも」

「ええ、あなた以外に用は無いですからねえ」

男がエレロワの手を掴む。何かを達成したような笑みを浮かべて、奴は視線を岸にいるネイラへ向けた。嘲笑うかのように、その表情は何も知らない方から見ても憎たらしかった。

エレロワを止めようとしても、彼女は決してもうこちらを向かなかった。泣き顔を見られたくないのか、それとも、もうこのギルドへの思いは何も無いと言うのだろうか。

「エレロワ ツー！」

男とエレロワの姿は、一瞬にして消えてしまった。まるで空間に穴が開いたように、その場所だけ渦巻いた波紋が見えた。

「ど、どういう事だよ？ なぁウェルト、追いかけてよ！」

「……待てエレナ。先に、ネイラに話を聞いてからだ」

こういった事態時に冷静でいられるのが、このウエルト総長だった。焦りに焦って戸惑うメンバーを差し置いて、ウエルトがネイラのもとへと歩み寄る。

ネイラの過去や生い立ちなどはあまり知らない。なるべくそういった情報は把握しておくのが義務だが、ネイラはなぜかそういったことを公表してはくれなかった。

(ひとまず、アイリスがこの場にいらなくて良かったな……)

あの男が言ったことを、決して聞き逃しはしない。

(英雄に手を掛けたと言った。つまり、アイリスの父親に手を掛けたのはあの男なのか?)

まだ上層部の他のメンバーたちには話していない。アイリスが英雄の娘だという事実を知るのは、まだウエルトとリーンとマイリー、そしてアイリス本人だけだ。

エレロワの事と並列して、これは聞いておかなければならない。

「コロナ、早急にネイラの看病をやってくれ」

「うん、で、でも……、エレロワちゃんを！」

「焦るな。私の特有能力を忘れたか？」

ウエルトには全てお見通しであった。恐らく敵も、感付いてはいない。相手の心中を見透かせる能力がウエルトには備わっている。

「ウエルトちゃん、いつの間はその力を使って……」

「だからエレロワの事は私に任せろ。それよりも、ネイラに聞いた

い  
事  
が  
あ  
る  
「

## 第51話 復讐（後書き）

会話文が多かったので、改行を入れて見やすくしました。今後この体制をとってみようかなと思います。

## 第52話 親友のために

唐突に訪れた騒動に驚きを隠せずにながら、ぽっかりと心の抜け落ちたような彼女を支えてやり、その部屋へと向かっていた。

ウエルトとマイリーが部屋に残り、真っ直ぐ俯いたままのネイラを励ましながら事情を聞きだす事にした。あまりに突然起きた事態だったので、ギルドの者はまだ完全に状況を把握出来ている状態ではない。

「そんな事が……」

何とか口を割ってもらえると、ネイラの口からは驚くべき事が告げられた。決して嘘ではなさそうで、むしろ的を得ているような事ばかり。

そして、それはこのギルドどころではなく、もしかしたらリウニオン国全土を巻き込む事態にまで発展するかもしれない。ネイラの抱えていた真実は、あまりに大きかった。

「わ、わたくしには言ってることがよく分かりませんわ」

「ああ……。私も、少し混乱気味だ」

精魂尽き果ててしまい、ふつと力を抜いて椅子に腰を下ろし、ネイラの顔を覗き込んでやると、目に全く光が宿っていないような虚無さを感じた。相棒とされていたエレロワが連れ去られて意識が朦朧となっているのだろうか。

それを自分に置き換えてみたら、と考えてみると……。総長として、ギルドの一員が一人でも欠けるのはあってはならない事で、なにより辛い。

ギルド・リアンのナンバー？。その名を背負ったエレロワが欠け、



総長としても頭を抱えさせられる。

「……こうしちゃ、いられない、です」

少々怒りの籠ったような声で、ネイラがゆっくり立ち上がる。

「安静にしてるんだ。まだ体調も良くなっていないだろう」

「……私なら、大丈夫、です。それに、じつとなんて、してられな  
い」

もともと身体が強くないネイラは、過度に魔術を扱う事はできない。会得している魔術は多いものの、持続力はあまり無い。

どちらかと言うと、仲間をサポートするような立場が一番無難で役目も立ち上がりやすい。そんな彼女は、あの男のような者に狙われてしまえば太刀打ちできないのも同然だった。

そのために毒の染み込ませてある剣を扱ったりと、じわじわと相手を甚振る戦法が得意とされてきていた。だから一人の行動はなるべく避けてやらねばならなかった。

「ネイラ、あの子のことなら、わたくし達に任せなさい」

小刻みに震えるその肩に、優しく手を置いて声を投げかけてみる。

「……………エレロワは、私を待ってる」

「あなた、一人で行く気なのね。でも、そんなの誰が許すんですの  
？」

上層部の四人でも説教されたら返し言葉も無くなるような、マイリーの重い言葉。

案の定、ネイラの声はそこで途切れてしまう。見上げればマイリ

一の真剣な目線と目が合う。同期メンバーながら、その威圧力は半端ではない。

暫く俯いたまま黙っていたが、何かを決したように、ネイラがそっと立ち上がる。

「本当の狙いは、きっと私だから」

長い睫に寄せられたその涙を自ら拭って、そのまま部屋を出て行く。

「待ちなさいネイラっ！」

「……止めないですよ」

「止めるわよ！ そんな状態で、しかも一人で……。あなたが狙いなら、どうしてあなたが赴く必要があるんですの……？」

マイリーが引き止めた瞬間、ネイラの表情が瞬時に強張る。こんなにも怒りを露にしたのは始めてではないだろうかと思うくらいに、その表情からは闇を感じた。

「……何も知らないくせに、口を挟まないですよ……！」

「なっ……！」

「私の事を分かってくれる人なんて、いないんだ。そんなの、分かっているし。……だから一人で行くの。だから、追いかけて来ないで」

切り捨てるように言い放ち、あのマイリーに言葉で打ち勝つ。全て言いたい事は言い切ったらしく、ネイラはそのまま背を向けて非常口の方から出て行くこととした。

当然そんな光景を見せられて、総長として黙ってはられない。  
ウエルトは、歩みを止めない彼女を引き止めようと前に出て立ちは  
だかる。

バチツと視線がぶつかり、ネイラは両脚を肩幅ぐらいに開いた  
まま立ち止まった。しかしどうやら普通の雰囲気ではない。まるで  
今からウエルトに向かって斬りかかってきそうなほどに、”復  
讐”の目付きをしていた。

「お前の事、何もかも知らないわけではない。私達はかけがえの  
ない”仲間”だ。そんな仲間を、見て分かる崖に突き落とすわけに  
はいかない！」

「……その”仲間”が、さっき一人、連れて行かれたんです」

「お前が一人でその責任を負う必要は無い！」

「………なら、言っても無駄、ですか」

ふと落ち着いたような声に乗せた、聞きたくないような言葉。

そして、その右手が既に剣の鏢迫り合いに置かれていたこと。ネ  
イラは、ここで自分を打ち破っても出て行くつもりなんだと、そ  
こで彼女の決心を見抜く。

「私は、何よりも大切な　そんなものを奪われたんです。今の私、  
……手加減、しませんから」

様々な気持ちに心が揺らがされて葛藤しているのだろう。どうし  
ていいか分からず、目の前に立ちただかる者に怒りをぶつけてしま  
う。……そんな行動の先に待つのは、絶対に良いことではない。

ウエルトは大剣を握り締め、その狭い非常用通路の明かりを点け  
る。

暗くて見えなかったネイラの表情が、はっきりと見て取れる。何かに怯え慄くような瞳に、数滴だけ涙が見えた。それが見えただけか、本心からの発言ではなかったのだらうと気付かされる。

「ネイラ……」

「うう、あああー!」

すっかり擦れてしまった声を必死に絞り出して、毒剣を持ったネイラが突っ込んでくる。弱ってしまっていて、しかもこんな気持ちのまま。当然、ネイラが本気で戦えているなど思えていない。大剣を盾にして攻撃を受けるたびに、ネイラの泣きじゃくる声が耳を引っ掻いてくる。

覚束ない呼吸は既に乱れまくっていた。段々とその剣を振る力も弱まってきてしまい、ネイラは息を乱しながら剣を床に落とす。

「はあっ……、はあ、はあ」

ぺたん、とその場に足を折り座り込んでしまう。涙と汗でぐしゃぐしゃになってしまった顔をそっと拭いてやると、ネイラが力無く倒れこんでくる。

「く、うう……、ま、マリナ…… あっ、……ごめんね、ごめん……」  
「マリナ……か」

エレロワの本名だ。そういえばあの男は「マリナ王女」と言っていた。気づくのが少し遅かった。

彼女こそ、真正正銘のバーレンシア王国王女、マリナ王女だ。そしてネイラは、彼女の親友。ネイラの友を思う気持ちが、剣を交えた後になっってはっきりとしてくる。

「……ネイラ」

小さく震えて、そのまま泣き崩れてしまうネイラに、そっと耳打ちをする。

「私もすぐに後を追う。だから、先に行くんだ」

「……え」

「エレロワを、マリナ王女の後をつけるんだ。お前の探知魔術なら、容易い距離だろう」

「ウエルト、さん」

そこで初めて、彼女が元のネイラに戻ってくれたと思った。

口数の少ない、それでいてギルド一の魔術使いで、少々冷酷で……何より仲間思いで。そんなネイラが、闇の中にぼつんと見えた気がした。

「私から説明をつけておく。……引き止めて、悪かったな」

親友と呼べる者が危機に追いやられているというのに、誰が落ち着いて話などしていられるだろうか。それを今になって気付き、ネイラがいつも見せないような表情をしていた理由も付く。

それは親友を守るべき宿命と、母を殺された復讐の掛け合いだった。

\*\*\*\*\*

\*\*\*\*\*

一通りの事情をギルドの全員に知らせ、ネイラが出て行った事を

素直に話す。

あの事態を目の当たりにしていなかったアイリスには、唐突過ぎて理解が回っていないようだった。

「あ、そっか……。アイちゃん、アツフーちゃんの部屋にいたもんね」

「リミレットさん、帰っちゃいましたけど……」

また二つのお下げ髪に戻して白袴から普段着。いつものアイリスだ。

「ウエルト、だったら放つたらかしの出来ないだろ！」

「ああ。しかし大人数では行けないんだ」

「え、何でさ」

恐らくエレロワが連れて行かれたのはバーレンシア王国の領土内。ネイラもそこへ向かう事だろう。

他国への入国という事もあり、過大なる面子で行っても関所で止められてしまつかもしれないのだ。

「目的地は他国領域。なるべく少人数がいい」

「なるほどねえ……。んで、どんな面子がいいのー？」

「そうだな。ネイラの次に探知魔術が優れているコロナを連れて行きたい」

「うん、了解だよ、ウエルトちゃん」

その話し合いで決まったのは、ネイラの後を追うのはウエルトとコロナの二人、ということ。呆然としているアイリスにはなるべく行かせない様にし、後のメンバーには大事にならないように情報を止めてもらう必要がある。

バーレンシア王国とリウニオン国、互いはかつて、戦争で火花を散らしたような敵対関係にある。この問題事のせいで、戦争の火種になってしまいかもしれないのだった。決して大袈裟ではなく、一大事といっても過言ではない。

なにせ、敵国の王女が偽名を装ってこちら側のギルドに入っていたなんて、拉致か何かと勘違いされて戦争を吹っ掛けられてもおかしくはないからだ。

「そうと決まればすぐにでも向かおう」

「うん！ ……あ、ちょっと待ってて！」

よし行こう、と意気込んだ矢先にコロナが部屋へ戻っていった。意気が空回りして、本気でずっこけそうになった。

+ + + + +

「これ、忘れないようにしないと！」

バーレンシア王国へ入国するには、セントガリアル砦を通る必要がある。セントガリアル砦は警備に厳重で、この通行証が無いとリウニオン国の住民でも通る事は出来ないという仕組みになっている。

「ああ、すっかり忘れてたよ。コロナが気付いて良かった」

「うんっ」

セントガリアル砦の通行証も持ち、これで本当に準備完了。

「みー……みゃあ」

「ん？ どうしたの、ミーコ」

と思いきや、コロナのスカートを引っ張るように、猫のミーコがコロナをどこかへ連れて行くこととしている。見たところ、ご飯でも用意しろと訴えているようにも見えた。

「わわわ、ミーコったら、どこ連れてくの〜！」

コロナたちの部屋を後にし、ミーコが引っ張ってきた先は、建物の片隅にある”物置部屋”だった。埃の舞い散るような、手付かずの場所。

「ミーコ、ここに何かあるの？」

「みー！」

「ウェルトちゃん……、ごめん。ちょっと探してみる」

「……ああ」



### 第53話 聖剣インペリアス

綿埃が舞う物置部屋に咳き込みながら、猫のミーコがスカートの裾を引つ張るのに従って、その中を進んでいく。日の光がほとんど届かないような薄暗い部屋で、流石にこの部屋までは掃除の手が回っていないかったのだろう。

こんなにも必死になって引つ張ってくるミーコは、一体何をどうしてほしいのか。

「うう、ミーコったらあ」

この一件が終わったならここもきちんと掃除しよう。ミーコのおかげでそう思われた。

すると、部屋の片隅で止まったかと思うと、今度は何度も「みーみー」と鳴きまくる。

「んんー……？ え、な、何これ」

「みいつ！」

そう、それだ！ と言わんばかりの甲高い鳴き声を上げ、そそくさと部屋を出て行くミーコ。

「これ、もしかして……！」

壁に寄り掛けて置いてあった謎の物体。薄暗くてよく見えなかったが、それが何となく”剣”のような形をしているのが分かった。とにかく物置部屋にこれ以上いるのは流石に苦しいので、さっさと部屋を出た。

出口のすぐそこにウェルトがいて、ささっと被ってしまった綿埃を払ってくれた。小さな背丈を精一杯に伸ばして。

「コロナ、それは？」

「うん……。部屋の奥にあったの」

光の当たる場所へやってきて、やっとその正体が何なのか分かる。

真っ白な胴体にライトブルーの掛かった、まるで晴れた日の空のような色をした　まさしく、一本の”剣”だ。

ゆっくりその鞘から刃を抜いてみる。すると同じ色をした剣本体が、天井光に反射して輝きながらその姿を露にしてい

「この剣は？　本当にこの部屋の奥にあったのか？」

「そうだよ。ミーコが私を引っ張ってたのも、これを見つけさせるためなのかな？」

「一体誰がこんなものを……」

なにやら不思議な雰囲気放了つ剣だ。それは真っ白な刃が、まるで自分の心中を見透かすかのよう。透明感の溢れる色彩が印象的な剣。

+ + +            + + +            + + +

「インペリアス、……そう呼ばれる中型剣だな」

パーフィに問い掛けたところ、あっさり返答されて、少しだけ拍

子抜け。人目の付かないような珍妙さ溢れるものだと思っていたのだが。

「“聖剣”とも呼ばれるものだ」

「どうしてそんなものが、物置部屋の奥なんか？」

聖なる施しを得た剣。具体的にどう凄いのかはさておき、なぜそんな剣が隠すように置かれてあったのだろうか。物置部屋へは何度も足を運んだことがあるが、一度もそんなものを見つけた事は無かった。

「……これは私の推測だが」

「な、なんだ？」

急にパーフィの表情が難しそうになり、そのインペリアスをコロナへ手渡す。

「リミレットだ。あいつが置いていったに違いない」

「えっ！」

「あいつは昔、これを求めていた。コロナとエレナに出会う前まで遡るがな」

リミレットがソルジャーになるきっかけとなった、という。

でも、何故そんなものをここへ置いていく必要がある？ そもそも、……どうやって手に入れた？

とにかくそんな事を詮索している場合ではないので、さっさと支度を済ませて出発する事に。

「その剣はお前が持っていてくれ」  
「うん、分かったよ」

前々の一件にて、コロナの扱っていた武器である双剣は粉々にされてしまっていた。それ以来コロナには武器という武器が無く、発注にも時間が掛かっていたため、一文無しの状態だった。

だから、コロナの扱う第三の剣として 聖剣インペリアスを預ける事にする。これでコロナも、もしもの時に対応できるようになる。

向こうで何があるか分からないし、何より敵対国だ。身の危険が無い確立は皆無に等しい。

「それと、この任務が終わったら、お前のギルドランクを戻してやるうと思っ」

「え、でも私……」

「いいんだ。お前は強いからな」

風に揺れるコロナのツインテールの髪が、ふと目に入る。なんだからこうして横で見るのは久方ぶりではないかと感じるほどに、その揺らめく姿は懐かしかった。

ソルジャーになったばかりの日々の中、弱音を吐かずに精一杯剣を振るっていた、あの時のコロナの姿が脳裏に浮かんでくる。リミレットを含む五人の輪に入ってきた最後の一人ではあったが、すぐに馴染んでいき魔術と剣術の腕前も十分だった。コロナは思えば、あの時一番才能を感じた人物でもあった。

エレナやパーフィは魔術があまり得意ではなく、ウェルトも大剣を操る際に使う腕力活性化の魔術に集中してしまうと他に対応が出来なかった。リミレットは、逆に剣術が苦手だった。

そんな中で特にバランスの取れたスキルを持っていたのが、コロナだった。緩やかな剣さばきの中で発する魔術、味方を支える回復

魔術なども多彩な彼女こそ、五人の要だった。

「なあに、じつと見て？」

優しく微笑むその笑顔も、こんな近くで久しぶりに見た。

真っ白い剣を背負ってホウキに跨る姿を見て、ウエルトも後に付いて地上から足を離す。

\*\*\*\*\*

\*\*\*\*\*

ウエルトとコロナ、二人の影は夕闇の雲を潜り抜け、リウニオン国の最西に位置するセントガリアル皆へ急ぐ。

「ネイラちゃんとエレロワちゃん、無事だといいいね……」

首の横を通り抜けていく冷えた風は髪を揺らし、服の裾を何度も叩くように過ぎていく。そんな涼風のように、コロナの言葉も流れるように耳へ届く。

重い剣を背中に下げ、ホウキに跨り空を飛ぶ少女たち。こんな彼女たちでも、まだまだ一端のソルジャー。共に成長していく、大切な仲間同士。心を通わせた、親友。

「親友……か」

「んー、何か言った？ ウエルトちゃん」

そこまで揺るやかに飛行しているわけではないので、今のような

小声は当然届きにくいわけで。

「いや、何でもない。独り言さ」

「ふうん……？」

親友というのが具体的にどんなものなのかだとか、そんな事はどうでもいい。要は互いをどう思ってるか、接してやっっているのか。それと、思いやる程合い。それではじめて”親友”なんだろう。

ネイラに対して取った態度の自分と、今の思いに耽っている自分を見比べてみた。

コロナと触れ合う事で……、何かに気付く事ができた気がした。

「もう、また見てるう」

「ん、ああ。つ、ついボーっとしてた」

「……………ウエルトちゃんのエッチ」

「なっ」

いきなり何を言い出すんだ、と言おうとした矢先に、自分の目線がある一瞬に集中していた事に気付く。

コロナの履くブーツより上の、スカートから覗く白い両脚。どうやらそれが物凄く気になっていたようで、コロナは恥ずかしそうに脚を曲げる姿勢になった。

「あ、あのなあ……。私はそんな趣味は無いぞ？」

「いつもはロングスカートだから、今日は張り切ってミニスカートにしてみたのに」

と言っても、やはりホウキで空を飛ぶものだから、長さは太ももが隠れる程度まであるのだが。それでも変に恥ずかしくなってしまう

つたらしく、今度は曲げた脚をパタパタと小刻みに跳ねさせる。

「もういい……、先行く」

「えっ、ま、待ってよお！」

あーっ！！ ブーツ落ちちゃった

あああ！」

……何度も脚をそんな風に動かすからだ。と、胸中で突っ込みを入れておく。

溜め息を一つ吐いて、落下する右足のブーツを一生懸命追うコロナを見守る事にした。見事に垂直になりながらハウキを飛行させているのが、あまりに必死そうだったので、つい吹き出しそうになった。

やっとの事で落下するブーツを捕らえ、早くも息を切らしながら戻ってくるコロナ。どうやらそのブーツは海面にまで到達してしまつたようで、ぱたぱた海水が滴っていた。

「買ったばかりなのにっ、えーん」

紐まで濡れているという事は、半分以上は浸水してしまったのだろっ。

縞々模様のソックスの上にそんなびしょびしょの靴を履くわけにもいかないので、コロナはハウキの上で器用にも右のソックスだけ脱いで裸足になった。

仕方なく海水の染み込んだブーツを裸足のまま履き、残った縞々ソックスはハウキの先端部分に掛けた。

「つたく、ドジだな相変わらず」

「ううっ……。右足、じめじめするよう」

「セントガリアルの通行証は濡らしてないだろうな」

「うんっ、それは大丈夫！」

ふと気付けば、夕闇に包まれていた空が暗くなってきていた。  
急いでバーレンシア王国へ向かわなければ。間に合わない頃合に  
なってしまうからでは遅い。大切な仲間のもとへ 風を切って  
加速する。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3596n/>

---

ユメミルツルギ

2011年9月11日05時40分発行